
邪神を宿す男

ミーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神を宿す男

【Nコード】

N1310T

【作者名】

ミーナ

【あらすじ】

彼は人間にして、ありえない魔力をもった存在。母以外からは、愛されず、毎日いやがらせをされるばかり、ある日、彼は、とある理由で殺されるようになる

。だが、死に際、精神世界と呼ばれる場所で、闇の精霊王と出会う。いろんなことがあったが、精霊王と契約をする。そして、精霊王が乗り移ったまま、現実に戻ったところで、兵士に襲われるが、逆に殺す。そして、彼の願いの母親をさがすということを叶え、精霊王は彼の精神世界に戻る。

彼は、前から考えていた旅をするということを母親に話す。母親は笑顔でそれに応え、彼は旅をすることになる。後ろの母親の泣く声を無視して……

シリアス大目ですが、だんだんと、ライトになっていくと思うので、暖かい目で見守ってください。さあ、物語が始まります。あなたは最初の一ページをめくるのです。

第一話、彼の夢（前書き）

今回だけは非常に長いのですが。あとは三千文字ぐらいです。
残酷注意。苦手な方は、ブラウザの戻るボタンを押してください。

第一話、彼の夢

夢をみている。母さんと別かれるときのことだ。

「お母さん？　ねえ、お母さん？」

僕は、血の海に埋もれている人を左右に揺する。

「ああ、私のいとしい子。守れなくてごめんね、来世でまた、会えるといいね」

微笑みながら言うそれを、僕は何を言っているのかわからなかった。だって、まだ子供なんだから。

「おい、早く殺せ！」

「ああ……わかったよ」

ドン！

よくわからない、だって、そうでしょ？　いきなり、僕の胸倉をつかんで、すごい大きい木にたたきつけたんだから。

「こ・ろ・せ、こ・ろ・せ、こ・ろ・せ！」

僕が気絶しようとして、目をつぶろうとしたら、なにか、暖かい火が……火？　え、何で？　火が僕の体を包んでるの？

「そつだ、やれえええ！　いいぞおお！」

「悪いな、父さんをうらまないでくれよ？」

おそらく、近くにいた人たちが僕に、火を放ったんだ。あつい、あついよ、助けてよ、誰か、だれかー！

「まだ、死なないか、仕方ない……」

炎に包まれている中で、僕はみた、男が、なにか、言葉をつむいだのが。

「母なる大地よ、我に力を与え、我の敵を討ち滅ぼさん……ガイアソニック」

あれ？なんでかな、もう何も感じなくなった。なんでだろう？

「しねええええ！化け物！」

もうわけがわからなくなって、僕は目を瞑った。

ドドドド！ ドカーン！

「やった！死んだだろ？これで？……よっしゃああああ！化け物を倒したぞおおおお！」

「すまない……息子よ」

すごいなあ、天国ってこんなところなんだあ、あたりが真っ赤で、目の前には、黒い髪に、黒い目の男の人がいて、地面には、とげとげしい針が見える（でもなぜか、刺さらない）……すごいなあ、天国って、こんなところなんだあ。

「お前は、死んだ、いまこの瞬間、な」

やっぱり死んだんだね、僕は……

「そうだ、お前は死んだ、しかし、身体的な意味ではない」

え？死んだんじゃないの？

「心が死んだ、ただそれだけだ」

「じゃあ、僕はこれからどうなるの？」

「我がお前を喰らってやろっ、くくく」

ああ、そう、いいや、なんでも。

「では、喰らうとするか」

僕は目を閉じなかった。なぜなら、目の前の男の人が怖くなかったから。でも、喰われるのはちょっと怖い。

「む、お前の中に……なにかいるな」

男の人は、確かめるように、僕の目を手で開けてきた。

「……これは……魔眼？　か？　いや、何かを取り付いているな」

僕を見ていない目で、何かを見ている男の人に、僕は、寒気がした。

「かかか、よくわかったな、すごい、と認めてやるよ」

なんでだろう、勝手に口が開く。僕はこんな乱暴にしゃべらないのに。

「……なぜ、お前のようなものが、下等生物に取り付いている」

下等生物？　人の名前かな？　なんか見下しているようにも見えるけど。

「……いや、違うな、俺は、こいつと契約した？　ただそれだけだ」

なぜ疑問系なのかわからないけど、それを聞き、黒い男の人は、僕から距離をとった。

なんで？　食べてよ、もうどうなってもいいんだから。僕なんて……僕なんて、化け物なんだから。

それから、距離をとった、黒い男の人は、僕に黒い、とがったものを投げてきた。

「死ぬがいい、その取り付いているもの、もろとも！」

なぜだろう、体が勝手に動く。

「はん、そんなもの、俺にきくか、よ！」

僕は、勝手に、とがったものを、手で掴み取って、黒いおとこの人に投げ返した。ものすごいスピードで投げられたので、腕が少し痛い。けど、そんなこと考えてる暇はなかった。

「つく、ただの、悪霊ではなさそうだが……この力、悪霊にしては、強すぎる」

精霊？ それって、御伽噺に出てくる、あの、やさしい感じの、おねえさんのことのことかなあ？ お母さんに呼んでもらったあの絵本。なんだったかなあ……

「精霊、ねえ……そんなもの、俺の風上にも置けないな」

「なら、何だというのだ！ 答えて見せろ！」

それをきき、僕の顔がにやけたのが感じた。なぜ、ここで、にやけるの？ 僕にはわからないよ。

「俺は……神、さ、邪神だが、な、……いや性格には、あくm、……あとは自分で考えろ」

「……そうか、それならば、納得がいく、お前が、我の魔術を素手でつかめるのもな」

邪神？ 魔術？ 何のことだろう？ 僕にはわからないよ。あつというまに話が進むので、僕は、それを解釈できなかつた。

「……お前、気に入った。俺に取り込んでやろう、光栄に思え」

取り込む？もしかして、僕の体に？ そんなことしたら、穴が開いちゃうんじゃないの？

「っ！？ 無理やり契約ということか――いいだろう、我がまけたら、お前を……いや、その少年を主と認めよう」

「くく、それでなきゃな、行くぜ！」

僕には、わからない戦いが、それから、続いた。あるときは、魔術？ 対決。またあるときは、近接戦闘。そして、極めつけは、ただの殴り合い。

「はははは！やるな！だが、俺みたいな最強ではないが、な！」

バシユ！

――僕の手のひらからとても鋭利な針が出てきて、それを目の前にいる黒い人に突き刺す。けども、間一髪でかわした。

「――不死と呼ばれる精霊に傷をつけるか――さすがは神。桁違いな強さだ。だが、我も負けるわけにはいかない。――生きること捨てても、お前を殺す！」

「はん、やってみろよ」

黒いおとこの人は、僕に向かって、走りながら何か、言葉を紡いでいるのが見えた。よくわからないけど、あれが、魔術のえいしょうつていうものなのかなあ？

「触媒は、左目、属性は闇、大地に眠る、精霊たちよ、我に力を与えたまえ、敵を封印するための力を、我の右手に宿す！ 封印せよ

！　ダークネスチエプラー！」

「それは、黒いおとこの右手に宿り、鎖が巻かれ、地面から、どす黒い、煙が立ち上り、鎖を大きくし、僕の心臓めがけて、突き出された。あれ？　なぜか、体が動かない。まるで、硬直してしまっただようなかんじ。」

「っ！？　禁術魔術を躊躇なく使うだと！　お前！　頭がおかしいんじゃない……！　ぐふ！？　……ふふふ、無駄だ、いくら封印といっても、せいぜい、10年が限度だ。俺は、また、こいつに宿る。そのときまで、せいぜい、楽しむんだな。くくく、あばよ、闇の精霊王さん、よ」

僕の心臓に、何か鎖みたいなのが、刺さっているのが見える。でも、いたくない、何でだろう？　ときどき、鼓動する僕の心臓に合わせて、鎖が動いているのは感じられるけど。

「はあ、はあ、破壊神とまで呼ばれた我が、封印するのがせいぜいだとはな……さすがは、神、か」

何かに語りかけるような口調で、僕に話しかけてくる。その目は、もう喰らうという目はしていない。

どうして？　なんで、喰らわないの？　化け物なんだから、喰らうてよ……そうしないと、可笑おかしくなりそうだよ。

「おまえは……我の主に適するな。我をここまで追い詰めた神に従えているんだ、それがちがうわけがない――ふう、さて、汝を主と認める。これを受けいるか？」

敵意のない、純粋な目で僕を見つめてくる。やめてよ、そんなんじ

や、僕はっかりがいい思いをするってことじゃないか。そんなのだめだよ。僕は、生まれてきちゃだめだったんだ。だから、善意の目でみないで。

「……………」

「沈黙は了解ととるぞ、いいか？」

え、だめ！　だめなのに、声が、でない、だめなのに。でも、力がほしい。僕を殺そうとした人たちに後悔させる力を……

「我、汝を主とし、ここに、契約を執行する。わが名は、ダスティス。闇の精霊王なり。主を守り、いかなるときも一緒にいることを、約束する……ダール」

- - 刹那、あたりが光に包まれ、僕の体は見えなくなった。- - その光は、まるで、太陽のように明るくて、暖かい。これが、契約だとしても。

光が晴れると、目の前にいた精霊は、もういなくなっていた。僕はこれが全部夢だったんじゃないか、と思いもしたが、心の中に、なにか、いるということを感じて、それが夢じゃないと知ることになった。

そして、現実世界では、僕の体が、何かに操られるように、動き始めた。

闇の精霊王 side

「この死体、どうする？」

「放っておけばいいだろ、そんなもの？」

男が驚くのも無理もないだろう、我が、急に立ち上がったのだから。む、やはり、少しきついな。

「っな！？ 動き出した！ は、はやく、市長をよべえ！」

下等生物が、仲間がいないと何もできないのか……やはり、下等生物だな。

まあ、神に近い天使の管理する私の力が圧倒的なので、べつに下等生物が弱いわけではない。

だが、人間はもういし、非常なことをする……まあ、我が言うことではないがな。

「どうした！ なにがあった！」

しばらくすると、私の前に、間抜けな下等生物が、たくさん出てきた。下等生物を見ていると、へどがでる。殺すか。喰らうのはやめておこう。むかむかしそうだ。

「こ、こいつが、生き返って」

「ちっ、やはり化け物だな、何回も殺すしかないのか？しかたない、おい！兵隊を呼べ！」

へいたい？何だそれは？我に勝てるものなのか？しばらくし、何か金属を羽織った、下等生物（と思われる）が五人ほど出てきた。

「どうした？」

「こいつを、こいつを殺してくれ！早く！被害が出る前に！」

「わかった。化け物は消すのみ、だからな」

化け物か……確かに、主は化け物みたいな魔力を持っているし、邪神も宿している。

だが、それがどうかしたのか？ただそれだけではないか。まあ、我が加わったので、化け物どころではないがな。

「われわれの障害となる化け物は、しねええええ！」

「うおおおおおお！」

「われは求める！敵を殲滅する、雨を！ジャストシャワー！」

ザシュ、ザシュ！　ダウン！

攻撃の衝撃で、あたりが煙に包まれ、我の姿は見えなくなった。……これが下等生物の全力か……

弱すぎるな。我が赤い液体が出てくるが、痛みは感じない。だから、下等生物は弱い。我に、痛みを感じさせないのだからな。

「やった、やったぞ、はははは、これで、俺はほめられる！隊長にほめられるぞ！」

「よっしゃあああ！化け物を倒したんだあああ！」

「くくく、化け物は死あるのみだ！」

下等生物が、よく吼える。やはり、人間は、よわいな。一人では何もできないか……

煙が晴れ、肩についたほこりを我が落としていると、へいたい、とやらが、叫びだした。

「ば、化け物！ また生き返った、お、おい、殺るぞ！」

「「お、おう」「

また、剣を使うだけか……それでは、我は倒せんぞ。我が目を吊り上げながら、へいたいを、見据えていると、へいたいたちが、一瞬目をあわせ、剣を構えだした。

「しねえええええ！ ばけものおおおお！」

「くらいやがれええええ！」

ザシュ！

我の腹に剣が突き刺さり、後ろを貫通した。だが、それがどうした？ 我には、何のこともない。

ただ、赤い液体が流れるだけだ。

「これだけか？」

「「へ？」」

兵隊が呆気にとられているのを見ながら、我は、あたりに濃度の濃い、殺気を撒き散らし、剣を腹から抜いた。それを見て、へいたいは、全員、黄色い液体を撒き散らして、座り込んだ。

「さすがは、下等生物。弱いだけの生物めが、死ぬがいい。ダークネス！」

――それは、蛇の形をした。黒い、物体で、座り込んでいる兵士の一人を貫き。そのまま、右にいる兵士を貫通し、兵士の腹の中をウターンし、左にいる兵士も、貫いた。そして、自分が貫かれたのにも気づかずに、へいたいは、悲鳴を上げる暇さえなく、力尽きた。

……本当に弱い。魔物でもここまで弱くはないぞ。それをほがつりあがるのをかんじながら、額についた血を舐めていると、主から声がかかった。

「ねえ、それより、僕のお母さんを探してよ」と。
うむ、忘れるところであった。主の母君を救うとするか。

我は、主がいると思われる、場所に向かった。向かったが、るのは、下等生物ばかりで、どうにかなってしまいそうだ。

「ばけものおおお！ しねえええ！」

「……ダーミス」

バシュウウ、と兵隊を、闇の獣が地面にたたきつけ、そのまま、兵

士の体を、むさぼり始めた。我は、いつか、ああなるのを恐れているが、いまは、関係ないな。

「ぎゃああああ、や……め……ろ」

弱い、弱すぎる、それになんだ、この下等生物の群れは、吐き気がする。精霊に嘔吐という概念がいねんはないが、主の体なので、本当に吐き気がしてきた。うっ。

「いたぞおお！ころせええええ！」

「いまは貴様らの声など聞きたくない、黙っている、下等生物が！

――バラツシュ！」

――闇の槍が、兵士を突き刺し、返り血が我につく。くく、血はうまいな。さすが、神はいいものを作ったものだ。……またきたか、下等生物が……葬り去ってくれる。

「わ、我、め、目の前の敵を滅ぼすために、ち、力を得る！あ、アピナス！」

専門外だから、わからないが、おそらく、火のオーラをまとうて、身体能力を上げるところか。

しかも、詠唱が必要とは――これだから人間は、下等生物なのだ。

「しねええええええ！」

「耳障りだ、消えろ。ダーム」

――それは、我に突っ込んできている兵士の前に現れ、兵士を包み込んだ。なかで下等生物が暴れているが次期に爆発するだろう。

「や、やめてくれ、たすけ」

バシユウウウ

爆発したときに飛び散った血をまた美味だ。これ以外は下等生物なのだが……さすがに、飽きてきたな。そろそろ、主の母君を探さねば。また怒られてしまう。

しかし、主は、魔力が多いな、魔術を使っても、減る様子がないぞ。これが誰かに見つかるものなら、主は研究対象にされてしまうな。モルモットあとで、注意しなければ。

そして、さらに我は下等生物が作ったと思われる、と思われる……これは、なんだ？黄色い、布に覆われている三角形の、もの、なんだが……まあいいか。先に進むとするか。

我が、布の中に入ると、そこには、男が女に迫っている姿が見えた。……野蛮だな、下等生物も、精霊も……。……さて、あれが主の母

君だということはわかる。

早くどうにかせねばな。……はあ。そこまでして、子をなしたいか、下等生物め。いくらなんでも無防備な者の服を剥ぐか普通……

さて、もう何も思うことはない。おとこを殺して、母君を救うか。

我は、気づかれないように、男の後ろに近寄り、首をあらぬ方向に曲げた。

「ぐああああ！首が！首があああああ！」

「うるさい。すこし、黙っている」

グシャ！

「ぎゃああああああ！」

なぜか、もう、やる気がおきない。それもこれも、うじゃうじゃいた下等生物のせいだ。首の骨が折れ、地面に横たわり、泡を吹いている男の顔を踏み潰し、主の母君の前へと、我は歩いた。

「な、なに？ ……！ み、ミコト？」

さて、主と交代だ。我の感覚を切り（何回やっても慣れない）主の精神世界に戻ると、黒い髪と黒い瞳が、青い色に戻った。

さて、これからどうなることやら。

s i d e o u t

「おかあさん……僕」

僕がその先を言おうとしたら、お母さんが、優しく抱きしめてくれた。ああ、あったかい。なんてあったかいんだ。ずっとこうしていたい。

「いいんだよ、ミコト、もう大丈夫だから。おまえは、化け物なんじゃないんだから」

・・そして、僕は泣いた。涙が枯れるまで。ずっとためていたものを吐き出すように。

そして、お母さんの胸の中で、ずいぶんないたあと、お母さんが隠していた布と近くにあったぼろぼろの服（貧乏なため）を交換して、僕の目をじーっと見てきた。

「お母さん」

「で、これからどうするの？ミコトは？」

僕は少し考えた後、旅にでると、お母さんに満面の笑みでいった。だって、最後は、笑顔でいないとね。

「そう、じゃあ……お別れ、だね」

うん、さびしいけど、決めたことなんだ。これは揺るがない。これは、黒い人と代わっているときにずっと考えていたことだ。

「ひとつお母さんと約束して、ね？」

「うん」

- - それは、人を殺さないということだった。いかなる生物も、だ。破ったら、後でおしおきだよ、と僕の頭をなでながらいうお母さんをみて、決心したはずの心が揺らいだ。でもすぐにはっと、なり、お母さんを見て、約束の言葉を言った。

「じゃあ、こんどは、お母さんの番。神に近い、私たち、二人は、永遠に家族だということを、ここに約束します。お父さんは、死んじやったようだけど、うらまないでね？ 本当に苦渋の決心だったみたいだから」

僕は、うなずいて、それを認めた。- - お父さんだって、僕が普通の子だったら、旅に出て、魔力を減らす方法なんて探さなかったんだし。

「お金とか渡せないでごめんね。貧乏だから」

いや、違うよ、お母さん。僕は大切なものをもらったよ。- - ぬくもりというものをね。

ふるふる、と首をふった僕を見て、最後に微笑んで、村の、入り口までついていってくれた。

「じゃあ、ここで・・・ばいばい、お母さん」
「うん、また、ね」

お母さんを背に、僕は旅をすることにした。・・・後ろで泣いているお母さんを見捨てて・・・

「ミコト？ どうしたの？」

「夢を見ていた。それも昔の・・・」

お袋、元気かな？ …… 戻りたいは戻りたいけど、いまは、家族がいるんだ。お袋には悪いけど。戻るわけには行かない。

「ミコト、うなされてたよ、大丈夫？」

「そうだが、おかあさん、て叫んでたぜ、ふ。ふ。ふ。」

いちいち余計なことを言った、”ニル”には、拳骨を食らわせ、俺は、ベッドみたいな木の上から飛び起きた。

「俺さ・・・また旅に出ようと思う」

突然そんなことを言う俺に、みんなは目を見開いた。

「なんで、突然そんなこというんだよ、ミコト」

「そうよ、わけをきかしてよ」

「うんうん」

わけか……しいて言うなら、いろんな世界を……あれ？ 俺何言っ
たっけ？ なんか、勝手に口が開いたような？

「……………」

「別に、そこまで考えこまなくったって、いいだろ」

？ 何いったんだ？ 俺。……まあ、いいか、忘れるってことは、
そこまでのことだったんだってことだし。さてと、いつの間にか、
食事のときに寝てたから、腹へって仕方ない。食うか。
しばらく、みんなで食べていると、昔のことをみんな思い出したよ
うなので、俺も昔のことを思い出した。

「俺が、お前たちに出会ったのは、もう十年前になるんだな。あの
ときのことは今でも覚えているよ」

第一話、彼の夢（後書き）

はじめまして。作者のミーナと申します。初めての小説なので、おかしいことや、矛盾があるかもしれませんが、感想に書いてくれれば、直しますので、どうぞ、書いてください。また、この世界と同一の世界があつたとしても、別の世界なので、気にしないでください。さて、今回は長いですが、たぶん毎回、この世界について、書くつもりなので、暇なときなどに見てみてください。では、今回は、世界についてです。どうぞ！

この世界について。

この惑星のなは、ミルナスタといい、大まかに八つの大陸に分かれている（村や町など、たくさんあるが、今回は、王都限定です）それぞれ、東西南北に、二つずつ、違う種族が住んでおり、それぞれの、国の名が。

人間族は、ヒュリス（東）

獣人族は、キリ（東）

巨人族は、バーム（西）

吸血鬼族は、ドミス（西）（おそらく地下に住んでいるとされている）

妖精族は、ムール（南）

エルフ族は、ナムダ（南）

魔族は、ダラバス（北）

竜人族は、トリム（北なのだが、どこにあるのかわからない）

とあり、それぞれ、の国では、王がいるのだが、全員、素性がわからないため、なぞめいている。また、ひとつの国には、その国の民^{たみ}しかいないのだが、もし、違う種族がいたら、例外種族はあるが、裏道につれてこられて、奴隷として、捕らえられるか、女なら、無

理やり犯されてしまう。だが、これは、あくまで、悪人がやることなので、善人や、普通の人は、やらない。

覚えなくてもいいので、頭の片隅かたすみにでもおいといてください。
では、また会いましょう。この小説で、誰かが救われますように。

次のあとがきで、種族について説明します。

第二話、彼の思い出？（前書き）

くあらずじく　遠い過去の夢をみた影響か、ミコトは自分がここで拾われてことを思い出した。

第二話、彼の思い出？

あれは、確か、俺が、旅に出て、1週間たったところだったな。あのときは、もう、食べるものがなくて、餓死寸前だったな。

「ああ、もうだめかも。おなかになって、仕方ないよ、これからどうしよう。見渡す限り、森だし。ムールは（きのこ）毒があるかもだし。いったい、どうすれば……」

僕は、お母さんがいる村（シュガット村）をでて、獣人族の国の手前の森で、食料が尽き、さまよっている。しばらく、おなかを鳴らしながら、森をさまよっていると、小さい動物が歩いているのを、かすかに開いた目で捉えた。

「あ、あれは食べれるのかな……いや、だめ。お母さんに殺しはだめだといわれている。これは守らなきゃ」

ドンが遠くに行く姿を見ながら、僕は、地面に座り込み、なにか食べれるものがないか、あさりだした。

でも出るのは、落ち葉や、気持ちわるい虫ばかり。

それにも負けず、しばらく、土を掘っていると、中から、木の根が出てきたので、僕はそれを食べることにした。

「うえ、まずい。でも、食べなきゃ死ぬ。だから、食べなきゃ」

僕は我慢して、木の根を食べつづけたが、しばらくすると、気持ち悪くなって。吐いてしまった。

「う、だめだ、嘔吐しても、胃液しかでないや……はは、いったい

どうしたらいいんだろう」

ここで、死ぬのかなあ……いや、だめ、死ぬわけにはいかないんだ。生きて、生き続けて。お母さんに親孝行するんだ。

……よし！ すこし元気が出てきた……出てきたけど、もう足が言うこときかないや。本当に、このまま死ぬのかなあ？

「ああ、何でだろう。眠くなってきたなあ、このまま、眠ったらどうなるんだろう……もう、だめ、眠く……な……て……き……た」

そのまま、僕は目を閉じて、夜の森の中で、眠りについた。

????? side

私たちは、これから、ドン狩りに出かけようとしているところで、

それぞれ、弓やら、剣やらを準備して、夜の森に出かけようとしていた。

「なあ、毎回聞くんだけどさ……ドンの肉、もう飽きたんだけど」

なによ、私だって、飽きてるわよ。しかたないじゃない。ドンより上の動物なんて、ここにはいないんだから。

ほかに文句は？ と後ろにいる二人をにらむと、首を横にふるふる、と振った。

うん、それでいいのよ。

「あんたは、まだ文句があるのかしら？」

「い、いえ、何でもありませんです。はい」

言うこと聞くこは、えらいわね。やっぱり、それが一番よ。

「さて、行きますか！」

「はい！（おう）」

それから、木の家をでた私たちは、まず、ドンがたくさんいる。通称、ドンの館のへと向かった。ネーミングがおかしいのは気のせい、気のせい。

「はあ、ドンかあ、弱いんだなあ、あいつ。歯ごたえがないって言うか、なんというか。もっと、強い動物いないのかよ？」

「私に聞かないで。それぐらいわかってるから」

私も同じことを思っていたところよ。ドンは、夜行性で、口から牙が二本生えていて、体は分厚い毛に覆われている。なんで臆病なドンに牙が生えてるのは知らないけど。攻撃してこないんじゃ、人の

格好の獲物よね。

「ルリオ姉ちゃん」

「ん？ なに？」

私は、適当に、後ろを振り返ったが、顔が真剣そのものの、ミルを見て、いったん止まった。この顔をするときは、大概危ないことか、重要なことなので、私たちは、その表情をしたら、なにがなんでも、話を聞くことにしている。私たちの間で、風読みと呼んでいる。

「風が、ざわめいてる」

「始まったな、ミルの風読みが」

いつも、ふざけているニルも、今回は、顔つきが真剣になっているのがわかる。

「うん、うん、で、この森に、来訪者が……え？ 子供？ うん、わかった」

相変わらず、風の精霊の加護を受けているミルはすごいわね。私にも、なにか、特技があればいいんだけども。……まあ、ないから、思っているんだけど……

「ルリオ姉ちゃん。この森に、餓死寸前の人間の子供がいるって」

……子供、ねえ、なんで、人間族から離れたこの森に人間がいるのかしら……なぞだわ。それに、こちら辺にすんでいるのは私たちだけ。気配などもしないので、安心して暮らしている。

「人間かぁ……俺たちも、人間……いや、**だけだよ、こちらへ

んにはだれもいないはずなんだけどなあ旅人かな？」

こどもが旅人つてのもどうかと思うけど、まあ、いいわ。いまは、ミルの風読みを信じて探すことにしましょう。

それから、その子供を、捜すことにしたんだけど、なんせ、この森は広いからね。どこにいるかなんて、わかりやしない。だから、しらみつぶしに探すことにした。あるときは、滝の近く。あるときは、大きな木がある近く。また、あるときは、私たちの家の近く。でも、探しても探しても、見つからなかった。

「おい、子供ー、どこだー？」

そんな、大きい声出したら、ドンが逃げるじゃない――まあ、仕方がないことだけでも。いまは、こどもを探すことに集中しましょう。

「ルリオねえちゃん、あそこ」
「ん？」

……なんで、穴がほられた、中に、子供が入ってるのよ。これじゃあ、わからなないじゃない。
それに穴なんかあったかな？ それにしても本当、ミルがいてよかったわ。さすがは、私の妹ね。
どこか、遠くに行ってしまった、ニルは、放っておいて、穴から、子供を救い出すとしますか。

「よいしょ、ん、軽いわね。私の半分もないんじゃない？」
「ルリオねえちゃん、すこし、太って、いるからじ――痛い痛い、ごめんなさい、うそです。うそをつきましたー、ごめんなさい」

それでいいのよ、冗談を言うやつは、お仕置き、あるのみ、なんだから。……おしおき、か。そういえば、二人は知らないけど、お母さんにお仕置きされたっけ……

「あふう、いたいよお、ほっぺが、赤く、じんじんするう」

か、かわいい、なんて、かわいい子なの、抱きしめてあげたくなくなるじゃない。そんなことを思っていた私は、しらずしらずに、ミルを抱きしめていた。

「はあ。またおねえちゃんの悪い癖が出た。うれしいけど、誰かに見られたら――あ、ニルおにいちゃん」

それを聞いた私は、一秒にも満たない、速さで、ミルを放して、迷子と思われる、子供の顔をじつくりと見た。

「お、見つかったか。よかったよかった。俺のほうも、見つけてきたぜ」

ニルの手には、二頭のドンがぶら下がっていた。さすがは、ニルね、これで、今日の食べ物に苦勞する必要はないわね。

「わあ、すごい！すごい！ニルお兄ちゃん、さっすがー」

「へへ、照れるな」

あんたが、照れてもかわいくないわよ、と言いつつ、改めて、迷子の子供を見た。

――たぶんだけど、この色は、ただでさえ珍しい、氷のメルニムスの影響ね。氷炎ひょうえんのような青い髪に、目を瞑こっていて、よくわからないけど、おそらく、青い瞳。そして、身長は、ミルと同じくらいで、

顔立ちは、鼻が小さくて、まるで、御伽噺にでてくる。女の子みたい。風が吹くたびに、青い髪がきらきら光って、まるで、青い魔術石みたい。

ずっと、見ていたいけど、後ろの二人の視線が痛いから、見るのは、やめましょう。

「さ、さあ、家に戻りますことよ！ レッツゴーなのよ！」

口調がおかしいのは、気のせいだと思う。うん、気のせい。

「なんか、変なやつだな。ルリは」

「うん、ミルも同感」

そして、家に戻った、私たちは、迷子の女の子？　と思われる子供を木で作ったベッドに寝かせてあげた。

「ああ、かわいい、食べちゃいたいくらい」

「ルリオねえちゃん、よだれ、よだれ」

ん？ いつの間に出ていたみたいね、これは失敬失敬。ニルは、いま、外で、火を起こして、ドンを丸焼きにしているところだと思う。だから、見られてはいないはず。……たぶん。

「はーやつく、起きないかなん。ぐへへ」

「ルリオねえちゃん、魔女みたい」

魔女？ いえ、違うわね、私は、それよりも怖い、魔剣を操るもの（ディランダル）ね……まあ、魔剣なんて、存在するかわからないけど。所詮御伽噺に出てくる剣だから。

「おい、ドンの丸焼き、できたぞー」

いつの間にか話が脱線していることに恥を覚えつつ、外から、ニルの声が聞こえるのを両耳で聞きなが、ベッドに眠り姫のように眠っているこの子は、まあ、いつかは、起きるだろうから、ここに、寝かせておきましょう。

さあ、お肉、お肉。

s i d e o u t

「うーん」

「（主）」

うん？ ダステイス（旅の途中、名づけた）の声が聞こえる。――
たしか、僕は、森で倒れて、それから……それから？ どうしたんだろう？ よくわからないや。起きればわかるよね、きっと。
そして、いざおきてみると、ハンマーで頭をたたかれた（まあ、そんなことはないと思うけど）ときみたいにながながんして、とてもじゃないけど、立てなかった。

「……たぶん、空腹で、脳も、おかしくなってるんだと思う」

グウウウウ

僕は、なにごとだ、と、無理やり立ち上がり、その音の正体が、僕のおなかの音だと、気づき、だれもないことを確認して、おなかを押さえた。

「おなか減った……外に出てみようかな」

もう歩けるようになった、僕は、すぐに、木のドアをあけて、外に出た。

そして、外に出たとき、一番に目に入ったのが、焚き火のそばに座っている。男の人だった。

「お、目が覚めたか。おーい、ふたりともー、子供が目をさましたぞー」

「！ いまいくー」

「あ、まってー、ルリおねえちゃん」

人間？ だよね、耳も獣の耳じゃないし、尻尾も生えてない……

大丈夫だよな？ おとこの人が呼んだら、すぐさま、水を汲んでいた人たちが、走ってきた。

水がこぼれてるよ、いいのかな？

「はあ、はあ、お、おまたせ」

お待たせって、十秒もたつてないけど。そんなものなのかな？ 僕でも、あんなに早くはしれない。

「はあ、はあ、やっと、追いついた。ルリおねえちゃん、早いよー、ひどいよ」

「あはは、ごめんごめん」

これを、笑って、ごまかすって、いうんだよね？ お母さんの受け

売りだけでも……

「あ、こ、こんにちわ、僕の名前は、ミコトといいます。助けてくださって、ありがとうございます」

あ、噛んじやった、どうしよう。なんか、女の人が、震えてる。怒ってるのかな？ 怒ったときのお母さんに似てる。……でも、お母さんの場合は血管が浮き出て……ぶるぶる、怖い。思い出した抱けども怖い。いまは、笑ったときのお母さんのことを考えよう。そして、そんなことを考えていると、プルプル震えていた女の人は、唐突に僕に抱きついてきた。

「……かわいいいいい！ やっぱかわいいわ！ 最高よ！ エクセレントよ！」

「ルリお姉ちゃんってやつぱり……同性愛者？」

なにか、聞き捨てならないようなことを聞いたような気がしたけど、よくわからないや。

それから、おなががへつてるといったら、僕に、おいしい、お肉を食べさせてくれて、さらに、おいしい、ククス（ココナッツ）ももらった。本当に親切なひとなんだなあ。

第二話、彼の思い出？（後書き）

種族について。

種族は、八つある大陸にそれぞれすんでいるということは説明しました。

今回は、各種族について、ここに詳しく、表記します。

人間族^{ヒューマンス}すべてのステータス（力、魔力、精神力、身体能力）が平均だということが特徴で、メルニムス（これは、生まれたときに、どの魔術の属性かがわかる先天的な力で、これがないと、魔術がつかえないとされている。）の影響で（すべての種族が当てはまるわけではない）髪の色や、目の色が違うのも、特徴です。道具を作ることに長けており、最近では、古代兵器、銃と呼ばれるものまで作っているといわれています。

獣人族^{ビースター}身体能力が突発的に伸びており、背が低いことが特徴。犬、猫の形をした、ものが多く、これは、犬と猫が突然変異を起こしたのではないか、といわれています。獣人族は、魔術が使えないため、魔力と格闘術を合体させた独自の格闘術、アディツシュをうみだし、獣人に広く広めたといわれたといわれます。これは、人間族もまねて、すこし、違う、ものが、広まりました。人間族とは、仲がよいとされていますが、裏では、人間族が、獣人族を奴隷にして、飼っているとうわさもされていますが、これは謎です。魔術は使えません。

巨人族^{トール}背が高く（約三メートル）目がひとつということが特徴です。知能が低く、言葉も片言ですが、代わりに力が強く、土の魔術を使うとされています（すべての巨人族は、茶色の髪と茶色の瞳の色を

している)。ほかに、大きい岩なら、素手で、粉碎することも可能です。繁殖力が高く、三大要求のひとつ、性欲が非常に強く、1年で、千人は、誕生するとされています。ほかに、いつも、棍棒のよくなものを持ち歩いており、生物がいたならば、襲い掛かることがよくあります。人間族、獣人族、ほかの種族とは、仲が悪く、あつたら、最後、戦闘が始まるとまで言われています。

妖精族フェアリス背中に羽をおり、体長が、手のひらサイズということが特徴です。水の魔術が非常に上手で、物を癒すことが得意です。(すべての妖精は、メルニムスが水なので、髪と目は、水色)困っている人がいたら、誰彼かまわず、助けることがモットーで、毎日困っている人を探しているとまでいわれています。よく精霊と間違われますが、精霊は、神に等しい存在で、妖精は、生物の一種に過ぎないのです。この種族は、争いを好まず、誰とも、仲良くすることが生きがいだそうです。

長いので、続きは、次のあとがきに書きます。

食べ物について。

第三話、彼の思い出？（前書き）

くあらずじく 命を助けてくれた、リル、ミル、ニルに恩返しをしたいと思っていたミコトだが、ある秘密を知ってしまい……

第三話、彼の思い出？

僕は、命を助けてくれた人に恩返しをしようと、一週間考えたけど、なにも、浮かんでこなかった。このまま、ここで暮らそうかな……いや、お母さんに親孝行するために、旅をして、成長しなきゃ……。でも、こんな、すみやすい、空間、いくら探しても、ないと思う。本当に、どうしよう……

「ミコト？ おい、ミコト！」

「わ！？ な、なに？ ニルさん？」

それを聞いて、ニルさんは、あきれたように、僕を見てくる。あれ？ なにかおかしいことしたかな？

「なにつて、おまえ、弓の製作中の最中なんだから、ボーっとするなよ。そのジリ（キリ）で怪我したらどうするんだよ」

「あ、そうだね、考え事してたんだ。ごめん」

「ならいいけどよ」と、ニルさんは、自分の手ある弓を削り始めた。僕も、集中しなきゃ。恩返しはいつでもできる。まずは、日常で、恩を返さなきゃ。

それから、一時間の間、僕たち、二人は、弓の作業に没頭した。リルさんと、ミルさんは、三百エト（メートル）先にある川に服を洗濯にいつている。選択は女の仕事だからいいといつもお母さんに言われていたけど、僕は少しでも恩返しをしたい。でも、いまは、弓の製作をしなきゃ。

「んん、ああ！ つかれたあ、ミコト、お前のほうはどうだ？」

よほど疲れたのか、ニルさんは、首やら腕やらをぎぎ鳴らしている。ぼくもあんなことができればかつこいいんだけどなあ。

「いえ、僕は、まだできますけど」

「ん、そうか……」

なんだろう？ 全部を見透かされているような、目で見てくるニルさん。すこし怖い。でも、どこか戸惑っている様子も伺える。

「お前には、さ、俺たちの秘密を……いや、なんでもねえ、気にしないでくれ」

僕は、頭に？ を浮かべて、弓の作業に戻った。――このことが、重大な秘密であつたことを知るのは、先のことになる。

ニル side

むう、ミコトのことを、好いているのは、わかるけど。いつも、ニ

ニコニコ顔をしないお姉ちゃんが、毎日ニコニコするのは、どうかと思っただよ。

これは、たぶん嫉妬と呼ばれるものだとは、思っただけど。このもやもや感、どうにかしないと、爆発しそうだよ。

いま、私たちは、木の家から、三百エト（メートル）先にある川に、ただでさえ少ない服を洗濯に来ているんだけど……お姉ちゃんは、まだ、ニコニコしながら洗濯をしているんだ。これは、嫉妬してもいいと思っただ。うん、私は間違ってないはず。

「ルンルンルン、お洗濯、お洗濯、ルンルンルンルン、ミコトの服をお洗濯、ルンルンルンルン」

はあ、これだよ、これ、毎日毎日、ニコニコニコニコ……いい加減、八つ当たりというものを、したいんだよね。でもあたるものはドンしかない。……だけど、かわいそうでできない。

「はあ」

「ん？ ミル？ どうしたの？ ため息なんてついて」

ため息の原因は、お姉ちゃんんだけど……これは、言っても、どうにかなることじゃないんだよね。
はあ。

「さあつてと、ちゃっちゃと終わらせて、ミコトに会いに行くんだあ！」

- ミコトが男だとわかってても、お姉ちゃんは、顔色一つ変えなかった。まるで、最初からわかってたみたいに。私はそのことがわからずに、一緒に水浴びをしようと思ってしまったことが昨日あった。いまでは、恥ずかしいと思える。

「はあ、さつさと、終わらせて、このもやもやを、なにかで憂さ晴らしないと」

「ん？ なんかいってたー？」

「別に、なんでも」

それに答えが、「そう」だって。おかしいと思わない？ 普通なら、

- 「なにかあったの？ お姉ちゃんにいつてみなさい、ね？」

だったのに！、いまじゃ、「そう」。だよ！ おかしいよ！ 理不尽だよ！

とまあ、心の中で、たっぷり、憂さ晴らしをした私は、自分の分の洗濯が終わったので。お姉ちゃんの方をみた。そこには、洗濯が終わり、立ち上がってるおねえちゃんが見えた。

「さあ、洗濯も終わったし、キュートエネルギーをもらいにいかなきゃ」

- キュートエネルギー。それは、お姉ちゃんにあるかわいいもののエネルギーの事を指す。これが足りなくなると、ブースと呼ばれる、私たちが先祖代々守ってきた乗り物みたいに（この動力は、ビリと呼ばれる、緑色の液体のこと。あと、この乗り物は、いまだこにあるのかわからない）動かなくなる。これが、ゆすつても、蹴つても、殴つても、動かなくなるんだよ。前にこのエネルギーが二日間なかったときなんか（私が、獣人の国に買い物に出かけていたときのこと）二日間、何も食べなくなるほど、衰弱していた。

それから、なくならないように、細心の注意を払って、今まで過ごしてきたんだけど。最近のエネルギー源は、ミコトなんだよねえ。

はあ。…… 幸せが逃げそう。もうやめようかな、ため息。

「ああ、ミスカ（鬱）になりそう…… さて、戻りますか」

……なんで、僕が抱きしめられているんだろう？ 急に走って戻ってきたかと思えば、いきなり、私のエネルギーとか言って、抱きついてきたけど。離そうと思っても、離れないし。なんか、ミルちゃん、怖い顔でこっちを見てくるし、いったい何なんだろう？

「思ってることはよく、わかる。俺も小さいころ、そいつに、抱きつかれたことがあるからな。まあ、おまえも成長すれば、大丈夫だと思うぞ」

「ミルもいずれそうなると思います」

成長かあ……成長したら、どうなるんだろう？ - 僕のお母さんみたいに、きれいになるのかな？ - それとも、あの毛深い、父親みたい……ぶるぶる、違う！ あんなになるわけがないんだ！ キ

レイなお母さんみたいに、なる。……うん、これは絶対事項だと思う。

「ああー、癒されるー」

「さてと、それじゃあ、俺はいつもの行ってくるから」

「……私もいきます」

「あ、私もー、ミコトは、ここにいてね」

前から気になっていたんだけど、いつものって、なんだろう？ 聞いても話してくれないし。気になるなあ。ついていってみよう。これが、僕の運命を変えとも知らずに……

「……我、翼人なり」

「ここに、テレスマを終結する」

「神よ、受け取りたまえ」

僕が、ついていったところは、木の家から、ずいぶん離れたところで、おそらく、1ミト（キロ）はあると思う。そこは、まるで、御伽噺に出てくる神殿で、三角形になっており、そこだけがまるで違う空間みたいに幻想的だった。

物陰から、伺うと、そこには、大きく手を上げて、なにかの光を集めている三人が見えた。

何してるんだろう？ 気になった僕は、さらに、進み、三人の後ろにある、岩陰に身を潜めた。

「さあ、儀式を始める」

「テレズマを触媒に」

「新たな生命を、ここに創造する」

- 刹那、空中に浮かんでいた光が、三人の前で、融合し、透明な人型の物体が、浮かび上がった。

僕は、あまりに神秘的な光景に目を奪われて、注意を怠っていた。それがまずかったのだろう。思わず、踏み出していた足で、小枝を踏んでしまったのだから。

バキ！

「っ！？ 誰！ そこにいるのは！ 光よ、まで！ ミコトだ！ ミコトがいるんだ！」

突然顔が怖くなり、僕に向けて、指先から、光を放とうとしていた、ルリさんを、ニルさんが、前にでて、それをとめた。

「ミコ、ト？ なんで？ どうしてミコトがここにいるのよー！」

「落ち着け、リル、叫んでもいることは変わらない」

「私たちの正体がばれたわね……殺すしか……」

殺す？ 誰を？ もしかして、僕のこと？ なんで？ どうして？
ねえ、どうして？ また、僕を殺そうとするの？ シュガット村
の人たちみたいに？

「っ！？ それは……掟だから仕方ないことだけど……」

「お姉ちゃん！ 知られたんだよ！ 殺さなきゃ、万が一、他人に
知られたらどうするの！」

それを聞いて、黙っていたニルさんが、前にでて、何か言葉を紡ぎ
だした。ああ、やっぱり、みんな、僕のことを殺すんだ。いつもそ
うだ。遊んでいてくれた人も、言葉を教えてくれた人も、仲がよか
った人も、みんな、僕が化け物みたいな魔力があるとすると、僕を
痛めつけてくる。今回も、また、あのときみたいに……

「ル・ル・マ・ダ・ニ・ク・タ・ト……ミコト、許してくれ……リ・
グ・マ・テ・ル……くそ！ 秘密を知らなければ、生きていられた
んだろうけどな、仕方ないよな、大事な弟だと思っていたんだけど
な、しかたねえよな、ちくしょう、俺が、普通の人だったら、お前
と、もつと、なかよくなれたんだけどなあ……許してくれとは言わ
ない。ただ、天国でも、俺たちのことを覚えていてくれ……じゃあ
な、ミコト、さよならだ。ディ・ム・ナル・ガス……古代よりきた
りし、暴輩のマナジリス」

ああ、そんな顔しないでよ。涙を流しながら、僕をみないでよ。死
ぬの？ また、殺されるの？ ……そんなのは、ごめんだ！ 僕……
いや、俺は、生きる！ 生きて、こいつらにわからしてやる。俺
のことを！ 化け物の俺を！

「（いくぞ！ ダステイス！）」

「（御衣）」

シュウウウウ

ダスティス side

「はあ、はあ、くそ、ミコト……また会えるといいな」

くくく、また会えるといいな、か、笑わせてくれるな。殺そうとしたのは、お前だというのに。主を傷つけようとしたことは、万死に値する。貴様は、ここで死ぬがいい。

「ニルおにいちゃん！ 危ない！」

「なにをいって……ごふ、っ！？」

…… かるうじて避けたか、だが、それだけだ。貴様らは、殺す！

「み、ミコト？ なんで？ ニルの魔術を受けて死んだんじゃ？」

「ふん、古代魔術ごときで、死ぬわけがなかるう」

それを聞いて、女は、目を見開く。……そうか、古代魔術のことはエルフか、ほかの珍しい種族だけが知っているから、それを知って

いる我に驚いたのだろう。

「おまえ……ミコトじゃないな、誰だ！」

ふむ、この短時間でしかも、手傷を負っている者が我を見抜くとは……なかなかやるな。だが、それだけだ。

「誰、か……それを聞かれるのは、初めてだな」

「誰だと聞いている！」

耳障りな声だな、消し去ってくれようか。

シュン！

「っな！？ 消えた」

「何を驚いている。我はここだ」

目の前に現れて、顎を持ち上げた我に驚き、やつは、地面に座りこんだ。これは瞬動と呼ばれるものだが、まあ、この世界の生物でつかえるのは、太古の種族だけだ。知るわけがなからう。

「ニルおにいちゃん！」

「ニル！」

さあ、虐殺の始まりだ。くくく。どうしてくれよう？ 血を噴出させるか？ それとも、一本一本指を折るか？ はたまた、首をへし折るか？ ……どれも面白そうだ。やる価値はある。

「（ダステイス！ 殺すな。）」

「（なぜだ？ 主を殺そうとしたのだぞ）」

「（こいつらは家族なんだ。それに、母さんに殺しはだめだといわれているからな）」

むう、主が望むならば、仕方ない。すこし、眠ってもらうとするか。

「暗黒の暗雲よ、ターゲットを、夢の淵へといざないこめ……ダー
ククラウド！」

――それは、三人を瞬く間に包みこみ、あっという間に、まぶたを閉じさせて、眠りに尽かせた。

さすがに、詠唱なしでは、暗黒魔術は、使えないからな。こればかりは仕方ない。

第三話、彼の思い出？（後書き）

種族の説明2

エルフ族 耳がとがっており、長寿なのが特徴で、見た目が、二十台でも、年は、百歳を越えているということもある。古代魔術と呼ばれる魔術とは違う術を使うとされており、また、魔道書と呼ばれる、薬のことや、古代魔術について書かれている本も作っているとされている。ちなみに、エルフ語で書かれており、読むことはできない。あとは、マジックキャンセラーと呼ばれる（後に説明する）魔術を無効化する力を全員持っている争いことは苦手だが、唯一敵対するのは、魔族。髪や瞳は、全員、異なっているが、多いのは、茶色（これは、メルニムスの影響ではない）。

ブラッディイクス
吸血鬼族犬歯が発達し、とがっているのが特徴。その鋭い歯で、生物を吸血するといわれており、人々から、恐れられている種族。弱点は、銀と日の光。めったに、昼間は出歩かないが、真相と呼ばれる吸血鬼族の上位種ならば、出歩くことは可能。弱点も克服されている。敵対する種族は、人間族と獣人族とエルフ族。魔術は、闇と暗黒魔術しかつかえないため、全員黒色の髪と黒色の瞳をしている。（真相は例）

マナラスタ
魔族頭から、悪魔のような、耳を生やし、とがった尾を持つことが特徴といわれている。魔力と知能が非常に高く。かわりに、力が弱い。魔物を生み出しているのは、実はこの魔族で、世界を征服しようとしている。魔物を作るには、生物の心臓ダークマターに札をはり、魔力をこめることで、生み出すことができる。これは、魔族以外にもできることだが、やるものは、なかなかない。あとは、この種族の王。魔王と呼ばれる存在がいるのだが、いまは、存在するかはわからない

い。これに敵対しているとされていたのは、勇者とよばれる者。魔術は、すべて使えるため、髪や瞳のいろはすべてのメルニムスが混ざった、色をしている。

ドラグニス

竜人族もはや、伝説の種族。人間と変わらない姿をしているが、尾が生えているのが特徴とされている。人体実験などをされて、徐々に姿を消していき、もはや、生き残っているのは、百人にもみたないともで言われている。魔術は使うことはできないが。竜化と呼ばれる術を使い、竜の姿になれるとされている。この竜化をすると、遺伝により、炎竜、水竜、土竜、風竜、氷竜、雷竜、光竜、闇竜のどれかになれるとされているが、真実は定かではない。

翼人について。

世界が誕生したときからいたとされる裏の種族。

エルフと同様、古代魔術を使うとされており、光魔術が使える。

一日に一回、テレズマと呼ばれる、空気中にある成分のひとつを集め、何かをしているといわれている。テレズマを集めると、天使と呼ばれる架空生物を召還できることを信じている。それ以外は、すべて謎で、年も特徴も何もかもわからない。本当に謎の種族。

第四話、彼の思い出？（前書き）

くあらずじく 三人を眠らせたミコトはしばらくその場で休んでいたが、やることがないので、食べ物を食べ始めた。

第四話、彼の思い出？

あれから、一時間はたっただろうか。俺は、神殿の前で眠っている三人を見ながら、さっき拾ってきた、ドンの肉を食べていた。

「やっぱりこの肉は、うまいな」

ミトンという、黒い粒みたいなの、すこしからいものをかけると、また、うまいんだ、これが。ピリつときて、舌をうならせる。うん、うまい。

本当は、こんなことしてる場合じゃないんだけど。やることのないからしかたないよな。別にドンを殺したわけではない。そこらへんにいた死んでいるドンを解体して、火であぶっただけだ。

「ああー、食った食った。もう食えない。げふ」

たぶん、体重が、2キロぐらい増えただろう。なんせ、ドンの肉を、三頭分は食ったからな。一頭の体重がやく十キロなのだから十キロ増えるはずだが、なぜか増えない。これは世界の七不思議なのだろうか？

「にしても、こいつら、起きないな。いたずらでもするか」

そこらへんにあった、草をむしりとり（これは殺しでは、断じてない。たぶん）ニルの鼻の穴に突っ込んだ。うわあ。この草、よくみると、黒い小さい虫がたくさんついてるよ。……まあ、いいか。

「……く、やめろ、ミル。鼻をくすぐるな。くしゃみが出そうになる」

夢でも見てんのかな？ もっと突っ込んでみるか。虫が鼻のなかで動いている気がするが、きにしなーいきにしなーい。

「は、は、はつくしゅん！ は！？ ここは、どこだ？」

汚いな、鼻汁を飛ばすなよ。俺の脚についたじゃないか。それを、近くにある石でとり、向こうに投げた後、ニルが寝ぼけた顔で俺を見るのでつつい笑ってしまった。

「……そうだ、たしか、ミコトに……って、ミコト！ 何してるんだ！」

「ん？ 鼻に草を入れてるだけだけど、なにか悪い？」

そんなことより、自分がどうなったかの方を突っ込めよ。……にしても、この虫……よくみると、足がない。……ん？ じゃあどうやって動いてるんだ？ ……なぞだ。

「そうか……鼻に草を……いいわけあるか！ なにをしてるんだ！ お前は！」

「そんな些細なことよりさ、翼人ってなに？」

虫から視線を移した俺の唐突な質問に、ニルは、一瞬呆けた顔をしたあと、顔が真剣になり、俺を見てきた。なんだよ、同姓に見られていい気はしないな。

「お前は……秘密を知っちゃったんだな……お前は、人間にあるまじき力を持っているようだし、説明してもいいんだろうか？」

俺は、聞きたいな。なぜ、俺を殺してまで守らなければいけなかつ

たのか。翼人とやらの秘密を。だけど、なんか、翼人って、名前がかっこいいな。羽でもついているんだろうか？

「……二人が起きてからでもいいか？」

俺が「ああ」と答えると、ニルは、すこし悲しげに、目をつぶった。それから、二十分したとき、二人は、眠そうに目をあけた。

「んー、ああー、よく寝たー……は！？　そういえば、ミコトは……」

「たしか、ミコトに何かされて、意識を失ったような……」

正解。俺が、いや、ダスティスが、眠らせたんだなー、これが。ルリとミルは、目を覚醒させ、黙想していたニルに、どうするの？と声をかけた。

「……ミコトに、俺たち翼人のことを話そうと思う」

俺が見た限りでは、二人は、さして、驚いてはいなかったが、内心はどうなんだろうな。そして、ニル、ルリ、ミルが、俺の前に並んですわり、俺に説明しだした。

「まず、翼人の歴史から、話そうと思う」

それに、二人は、うなずいてそれに答えた。れきしかあ。 - - あんまり記憶力はよくないんだけどなあ。

「翼人の歴史は古く、ミルナスタの星が誕生してからすぐに生まれたとされている。そう、俺たちの爺さんが、話してくれた」

翼人か……ずいぶんと、珍しい種族なんだな。人間はうじゃうじゃいるのに、な。人間の人口は、やく、一億人とされているが、翼人は、百人足らずの少数種族らしい。少ないな。……人間って、どうやって増えるんだろうか？ よくわからないな。あとで聞いてみよう。

「それから、どんどん、種族が生まれ、翼人はそれを見守ってきた。だが、九百年前、種族同士の争いが始まった」

争い……戦争か。俺にはわからないが、人が多く死んだんだろうな。死ぬのは嫌いだ。殺すのも嫌い。だけど、戦争つてものはひとを殺してこそ、戦争となる。そう、よく父さんがいつてたっけ。だから、俺もそれを教訓にしている。

「俺たち、翼人は、その戦争に巻き込まれ、多くの翼人が死んだ。それから、生き残りは、森などに、隠れ住むようになった」

なるほど。森に住んでいるのは、それが理由だったのか……大変なんだな。自称森の民。なんて、呼ばれたりしたんだろうか？

「そして、争いが終わったところには、森などが焼かれ、死に、翼人の生き残りは、もう、俺たち一族しかいなくなっていた」

翼人の生き残りが、もうルリたち三人だけだというのはわかったんだが、肝心の翼人については、まだわからないな。

「そして、ある日、俺たちの爺さんが住んでいた森にある人間の女がやってきたんだ。爺さんは、迷っている女を助けて、村まで送った。そして、その女は、爺さんにたびたび会うようになった。爺さんは、毎日来る女に一目ぼれし、二人は、結ばれて、結婚までした。

女は、爺さんと暮らすため、故郷を捨て、森に住むようになった。そして、月日がたち、二人は契りを交わした。それで、生まれたのが、リルで、次に生まれたのが俺、そして、最後に生まれたのが、ミル、というわけなんだ。俺たちは、人間のハーフなんだよ」

契り？　なんだそれ？　気になった俺はそれをきこうと口を開こうとしたとき、ニルの後ろから、殺気を感じたので、やめることにした。殺気って怖いな。なんか、ぴりぴりする。

「爺さんは、いまから、百年前に死んだ。そのときに、遺言を残したんだ。テレズマを集め、天使を召還しろ、とな」

百年前？……お前ら、今何歳なんだよ。と聞こうとして、また殺気がきそうなのでやめることにした。女って怖い。

「俺たちは、それから、テレズマをこの神殿に集めているんだ。これは、翼人以外に知られたら、まずいことなんだ。ほかの種族の中に、テレズマを悪用してしまう輩がいるかもしれないからな。だが、お前には、なにか特別な力が宿つてるとみた。それが何なのかはわからない。けれど、信じるに値すると思ったから、話したんだ」

そうか……ダステイスのことを言ってるんだな。まあ、これは、特別って言うより、ただの変な精霊だけだな。

一通り話し終えたニルは、立ち上がり、俺の手をとった。今まで黙っていた二人も、立ち上がり、俺を立ち上がらせた。

「お前には、さ、悪いことしちゃったな、代わりに、神殿の中に案内してやるよ」

「ごめんね、ミコト」

「ごめんなさい」

いいんだ、守らなきゃいけない秘密だったんだろ？　なら仕方ないさ。それがお前たちの使命なんだから。それを言葉には出さずに、思うことにして、俺たちは、手をつなぎながら、神殿の扉の前に行き、リルが何か言葉を紡いだ瞬間、扉が開き、俺たちは、中へと入っていった。

「……すごいな」

神殿の中は、通路一面、淡く光る青い石がちりばめられていて、右側には、何かの文字がずーっと、かかれていて、左側には、何かの絵がかかれていた。さらに、奥にある玉座には、翼がかたどられた、文様が彫ってあった。

「ね、ここ、すごいでしょ、私たち、翼人の、宮殿なんだよ」

「いつきても、すごい」

「だな」

宮殿か……俺もこんなところに住みたいな。まあ、住んだら住んだで、大変だろうけど。そういえば、人間なのに、人間の王をみたことないな。……まあ、そんなこと気にしても仕方ないけど。しばらく、このきれいな空間を眺めていると、ニルが奥の玉座に座って、何かのスイッチを押しているのが見えた。

「さあ、いくぞ」

シュウウウウ、ピシャアアアア、ドオオオオオオン！

- 上から降りてきたのは、翼人を象徴する像だった。背中から翼が生えており、虹色の石で作られていて、目は、白をベースに、緑色の薄い色の石でできており、髪は、リルたちと同じ、きらきらした、白色で、上半身の部分は、輝く、銀色の石で作られており、下半身は、同じ、銀色の石でできていた。

まさに、幻想的な、いや、神秘的な、像だった。これを見たら、ほかの像なんて、劣等だと思う。

「これは、俺たちの爺さん、ガルの像なんだ。俺たちが作ったんだぜ。すごいだろ？」

「大変だったよねー」

「私もてつだったよー」

すごいな、人間でも、ここまでの像は作れないだろうな。人間といえば、像なんかつくろうとも考えない……まあ、俺も人間なんだけどな。ダステイスが人間を下等生物と呼ぶ理由がわかった気がする。

「そしてそして、さらにー、ここのスイッチを押すと」

ニルが、玉座の裏にあるスイッチを押すと、こんどは、一回り小さい、像が降りてきた。

- 目は俺と同じ、青で、髪も俺と同じ青、上半身は、女性を象徴する凹凸おうちができており、金色の服を金の石で再現していて、下半身は、緑のの石でできていた。

「これは……ニルの爺さんと結婚した人間のおんなか？」

「正解！ よくわかったね、さすが、ミコト」

「さっすがー」

笑いながらいわれても、な。……なんか当たり前のようになっている俺だけ。これを研究者にみせたらどうなるんだろうか？ ……いや、だめだな。こんなキレイなものを研究者に渡すわけにはいかないな。

そして、しばらく像を見ているとニルが俺の前に来て話し出した。

「さて、もうびっくりするようなことは、ないが、俺たち翼人にまつわる壁画が、さっきの通路に書かれている。みてみな」

俺は、いわれたとおり、さっきの道に戻り、壁を見てみた。

「* * ? + ' ' + ^ * * ' + ^ * | ; p @ : 「 p ¥ 。 「 ¥ p
「 ¥ p 「 。 「 ・ ¥ 1 「 ・ 「 ; ; ; 「

（翼人は皆、敵を憎んではいけない。敵であつても、等しく接することが大事なのだ。だから、翼人は戦争を起こさない。争いもしない。永久に平和な種族であることを願う）

は？ 何だこれ？ 意味がわからないぞ。……たぶん、翼人語でかかれてるんだと思うけど

「ああ、ちがうちがう、反対側の方のやつ」

首をかしげ手いる俺に気づいたのか、ニルがそれをいつてくれた。もつと早くいつてくれよ。

反対側を見ると、翼人と思われる人物が、おそらく、人間に矢で討たれている絵があつた。

さらに、目を進めると、翼人が、人間に、頭にわかをのせた大きな生物をけしかけている絵があつた。

――おそらく、これが天使だな。確証はないけどな。

「すごいだろ？ 昔、争いごとに巻き込まれた翼人は、集めていたテレズマを使い、天使を呼んだとされてるんだぜ」

いつの間にか、俺の隣にいたニルが自慢げにそれを話してくる。なんか、うれしそうだな。

本当は翼人のことをもつとはやくはなしたかったんじゃないか？

……まあ、今考えても仕方ないけど。

「本当に天使を呼んだのかは怪しいところだが、翼人はすごいということはわかった」

悔しいが認める。翼人は人間より優れている。たぶんどの種族よりも。さて、きらきらな目をしているこいつらの自慢でも聞いてやるか。

「だろだろ、翼人はすごいんだぜ」

「やっぱり、翼人は最強ー」

「おー」

自意識過剰って言うんだぞ、それ……まあ、五歳の俺が言うことじ

やないけどな。ダスティスに教わったから、いえることなんだが。

「さて、そろそろ、俺たちの家に戻るか」

「了解！」

「おー」

はあ、こいつらのテンションにはついていけないな。

第四話、彼の思い出？（後書き）

魔術石について。

魔術石とは、砕くことで、その色の属性を発動できるという代物である。

魔力が使えない人でも魔術みたいに使うことができるが、一度使ったただの石に戻ってしまう。この魔術石は、人工ではなく、自然に作られることが多い。たとえば、火の魔術石は、火山など、火があるところに。水の魔術石は、川など、水のあるところに、風の魔術石は、風があるところなどでも。土の魔術石は、地面の中に、闇の魔術石は、暗いところに、光の魔術石は、太陽がよく当たるところにあるとされている。そして、爆裂と氷と雷と暗黒は、人工でしか作れない。普通の石に、各属性の魔術を長時間壊さずに当て続けられれば作れることができるが、壊さずにというのは、非常に難しく。誰でも作れるわけではない。魔術石を作る人のことを、魔法師という。

第五話、彼の思い出？（前書き）

くあらずじく 神殿から、家に戻った、ミコトたちだったが、それ
をずっと観察するものがいて、それを日記に取っていた。

第五話、彼の思い出？

????? side

四月十日、土の日、天気、晴れ。

今日から、翼人について、日記をとろうと思う。翼人は謎が多い種族だ。ここ最近、表舞台に、姿を現してはいない。だが、私は、翼人の生き残りの居場所を見つけた。獣人族の国の手前、人間族所有の森に住んでいることがわかった。これから、見つからないよう、暗黒魔術をつかい、姿を隠しながら、観察することにする。

四月十一日、光の日、天気、曇り。

観察していて、わかったことだが、やつらはどうやら、神殿と呼ばれる場所で、何かをしている。その何かは、わからないが。どうやら、重大なことのようだ。見つからないよう、近づこうとしたが、ロープの罠に引っかかってしまい。ばれそうになったが、近くにドンがいたので、身代わりになってもらった。

四月十二日、闇の日、天気、雨。

翼人の住处まで、ついていくことにした。そこは、質素な、木でできていた家だった。私がすむなら、もっともなものを作るというのに……まあ、仕方ないことだろう。これは、横に追いとくことにする。

四月十三日、火の日、天気、どしゃ降り。

今日は、ここ何年か振っていないどしゃ降りだった。翼人は、どうやら、家から出ないようだ。私も、今日は、帰るとしよう。

四月十四日、水の日、天気、晴天。

翼人が、ドン狩りに出かけるということなので、私もついていくことにした。ドンがたくさん集まっているところを、光の魔術で、一網打尽にし、そのまま、そこで食べることにしたらしい。翼人が残した、ドンの肉は、私が平らげた。

五月十二日、風の日、天気、曇り。

仕事の都合上、しばらく観察をやめるざるを得なかった私は、今日、モブの森に戻ってきた。久しぶりに、見た翼人は、おとこがひげを生やしており、女たちは、少し、やせこけていた。どうやら、ドンを狩り過ぎて、食べるものがなくなっただらしい。ここは、私が、ドンを放つとしよう。

五月十三日、雷の日、天気、晴れ。

今日も、ドンを狩って食べるらしい。私は思うのだが、飽きないのか？ 私なら飽きるのだが。今日のニュースはそれだけではない、どうやら、森に迷い込んだ子供がいるらしい。なんでも、翼人の次女は、風が読めるらしい。私も読むことはできるが、完璧ではない。なにせ、風の精霊なんて、使わないものでな。どうやら、子供は、旅をしてきて、ここで、行き倒れたらしい。まあ、子供だからな。

五月十四日、土の日、天気、曇り。

どうやら、子供の名前は、ミコトというらしい。ミコト……どこかで聞いたことがあるような……まあ、忘れるということは、大事なことはないだろう。ミコトは、まだ五歳だというのだから、驚きだ。私は、そのころ、遊びとおしいたのに、まったく、最近の子供は恐ろしい。

五月十五日、光の日、天気、どしゃ降り。

前のように、今日はどしゃ降りなので、家から出ないらしい。ふう、私も生き抜きに、どこかへ行こうかな。

五月二十一日、雷の日、天気、晴天。

私が森に駆けつけたが、どこにも姿がなかった。どうやら、どこかへ行っているらしい。探すとするか。翼人の神殿にて、姿を確認した。翼人の秘密が子供にばれたらしい。さて、どうなるやら……

そして、私は信じられないものをみた。まさか、あの子供に、精霊が宿っているとは……これは、研究のしがいがある。精霊が宿った子供は、翼人たちを、眠らせて、どこかへ行ってしまった。しばらく待つとしよう。どうやら、子供は、ドンを狩りに行ったらしい。ん？　まてよ、あの子供は、生物を殺してはいけないと言っただったか？……いや、あれは、殺したんじゃない。おちているドンの肉を持ってきたようだ。それならば、殺しにはならないな。

子供がドンの肉を食べている光景を見ながら、私は、****に、連絡を取った。最新の通話道具、ティプス（ブレスレット形携帯電話）を使って。

どうやら、もう翼人には、興味がないらしい。かわりに、あの子供に興味を持ったようだ。

連絡を終え、翼人を起こしている子供を見ながら、妹が作ってくれた焼き菓子、モルン（マーマレード）を食べた。うむ、うまいな。やはりほかの菓子よりこれが別格だ。

さて、余計なことを書いてしまったが、本題に戻るとしよう。翼人が全員おきて、子供に秘密を話した。ここまではいい。だが、神殿を案内するとはどういうことだ？　翼人は、注意深い生物だと聞いているが……まあ、いい、私も中に入るとしよう。もちろん、精霊に気づかれないよう、****製の道具を使い。姿をごまかしてな。これは、精霊にもばれない性能を持っている。デルビス波とよばれる精霊に害なすもののものに扮したマントである。

すごいな、これは。生物が作ったとは思えないな……****に報告するとして。

そして、私は、神殿を出て、****に帰った。

いま、俺は、言葉を失っている。なぜなら、ニルに言われ、川に向かったら、全裸の Ril と Mil が水浴びをしていたのだから。

ニルのやろ。俺をだましがったな……にしても、胸でかいな、Ril は……まあ、Mil は仕方ないとして。二人とも、改めて認識すると、かわいいよな……まあ、子供の俺が思うことじゃないんだろうと思うんだけど、な。すこし気になる。思春期か？

「きゃっ、やめてよ、もー」

「むふふ、よいではないかー、その小さなお胸をもませてけろー」

「これは、スレンダーって言うの！ 女のステータスなんだから」

なんて話をしてるんだ、お前たちは……にしても、隠れながら見て

いる俺って…… すこし変態の気持ちがわかった気がする。……わ
かりたくないがな。

「ミル、か、わiiiiiiiー！ ギューってするー」

「きゃっ お姉ちゃんたら、もう……でもうれしいかも」

「ん？ なんかいっただー？」

それになんでもないと答えるミル……にしてもお前ら、少しは恥じ
らいというものを覚える。見ているこっちがはずかしくなる。

しばらく見ていると、後ろから、肩をたたかれた。ごわごわしたか
んじの。

「ひゃ！？ ……てめえ、ぶち殺す！」

「まあまあ、落ち着きなつて。それよりどうだ？ 子供には刺激が
強かっただろ？」

……確かに、普通の子供なら、鼻血を出してぶっ倒れるだろう。だ
が！ 俺は普通の子供じゃないんだなあ、これが。

「ん？ 何、胸張ってんだ？ それは胸がある女がやること、っ！

？ やばい！ 逃げるミコト！ 早く、ルリたちの方へいけ！」

「？ わかった」

言われた俺は、草むらから飛び出て、ルリたちのほうへと向かった。
それも全速力で。

「くくく、ぷぷぷ、あはははは、あいつ馬鹿だ、正真正銘の馬鹿だ。
本当に信じて行くなんで、ぷぷぷ」

なにかいやな予感がした気がするが、いまは、とにかく、一大事な

ようだから向かわないと。

「きゃあああああ！、なんで、ミコトが？」

「へ、変態！」

……ニルのやろう、だましやがったな！ あとで本当にぶち殺してやる。殺して殺して、煮込んで、スープにして食べてやる。

「間違えました。では！」「ま・ち・な・さ・い！」なんだよ、何か用か？ 俺は忙しいんだ」

二人とも手で秘部を隠してはいるが、肝心の胸がかくせていない。はあ。なんでこんなことに……

ニルのやろう。本当にあとで煮込んでスープにしてやる。

「ミ・コ・トくん……乙女の体を見やがるやつには、鉄槌を！」
「鉄槌を！」

こ、怖い。でも、動けない。やばい、殺られる！ 精神的にも、肉体的にも！

「やめろおおおお！ 悪かった！ 悪かったってええええええ！」

もう最悪だ。なんで、木につるされなきゃいけないんだよ。俺じゃあ降りれないじゃないかよ。しかし、なんでこんな大きな木があるんだよ。どうしようもないでかさだ。

「ぶ。ぶ。ぶ。ミ・コ・トくん、大丈夫？」

と、そこに、ほほを、小動物みたいに膨らませて、にやにやしなが

らニルがでてきたので、俺のはらわたは煮えくり返った。スープに
してやる。スープにしてやる！
くそ、にやけながら俺をおちくりやがって、俺が大人なら、スー
プにできるのに！

「じゃあね、ミ・コ・トくん」

「おい！　いくな！　おい！」

本当に行きやがった、あのやろう！　俺を置いて！　……どうしよ
うか、この状況……　昼間だというのに、木につるされる……　不幸だ。
……　ああ、なんか、木にも、太陽にも、馬鹿にされている気がする。
本当に手前ら全員スープにしてやる。

「ぶぶぶ、あはは、あーっはっはっはっ！」

「な、なによ、突然笑って。おかしくなったんじゃないの？」

いや、ミコトが木につるされて、間拔な顔してると思うと。ぶぶぶ、だ、だめだ、笑いのつぼのスイッチが、くくく、あははは。

「にしても、ミコト、最近おかしくない？ ニルが攻撃したときから、口調が俺になってるし」

「そうそう、私もきになってたんだー」

ああ、たしかに変わったな。最初は気弱そうな、僕っ子だったのに、いまじゃ。ルリのキュートエネルギーの対象にならないほどに、生意気に、なった。俺にしょっちゅう、痛いいたずらをしかけてくるし。

「なんであんなに生意気になったかしら。ねえ、ニル？」

「ああ、でも。それが思春期というものなんじゃないか？」

「そう、なのかしらねえ」

うわ、本当に信じちゃってるよ、思春期なんて、十二歳から始まるのに……ん？ そういえば、ミルは、まだ思春期じゃないな。なんでだ？ ……ああ、そうか、ミルは、成長が遅いから、まだ思春期じゃないのか。

「ミコトは、あれでいいと思うよ、男の子はあれぐらいがちょうどいいもん」

（そうすれば、お姉ちゃんの対象は、私だけに……）

「まあ、そうなのかしらねえ」

本当、だまされやすいよな、この二人。前なんか、ドン肉は一日たつと腐るって言ったら、本当に信じて、しまっておいた肉を全部食べられたっけ。あれはあせった。

「なんか、ミコトが来てから、楽しくなったな。この家族」

「本当ね」

「ミコトには悪いことをしたけど、許してくれたし。本当、変な子だよ」

ああ、そう、だな。ミコトは変なやつだな。突然森に現れて、家族になって……変な力も持ってるし。本当に変なやつだよなあ。あのとき、もし、ミコトが力を使わなかったら。俺は、俺は……大事な家族を殺すところだった。いまでは後悔してるよ。なんであの時、あんなことをしたのか、って。

「……………」

「……………」

「……………」

やっぱり、こんな空気になったか……まあ、仕方ないよな。俺が場を盛り上げないと。

「さあ、そろそろ、ミコトを助けに行くか」

「ええ」

「うん」

side out

「……おそい、遅すぎる！　なんで助けに来ないんだよ！　おかしいんじゃないのか！」

まあ、叫んだところで、解決するわけでもないけどな。……それにしても、もう、二つの月が出てきてる。もう、夜か。……短いもんだな。

「（もういいや、ダステイスに任せるよ。俺は、寝るから。後はよろしくー）」

「（……しかたない主だな）」

シューウウウウ

ダスティス side

「……久しぶりに外に出たな……散歩でもするか」

主には好きにしていいたいわれているから、好きにさせてもらおう。
それから、我はいろんなところに行った。森にある洞窟に、崖、森の奥深く。さらに、大きな石のある広場。

「ふう、ここは落ち着くな。やはり暗くてじめじめしたところは、最適だ。このまま、眠ってしまいたい」

この、ざらざらした硬い岩の上で……ん？ いま動いたような……気のせいかな。

「……………」

こう、何もしないというのも、和む。精霊界で、我は王の一人だったからな。くつろぐ時間がなかったから、こうすることもできなかった……そういえば、主に出会う直前、我は、精霊界で、何をしていたのだろうか？

第五話、彼の思い出？（後書き）

曜日について。

わかりやすいよう、日本を見本にします。

日曜日〓光の日
月曜日〓闇の日
火曜日〓火の日
水曜日〓水の日
木曜日〓風の日
金曜日〓雷の日
土曜日〓土の日

また、月にも、種類があるが、おおまかに分けると、十二種類ある。これは、いつか本編で書くと思うのできながにお待ちください。

精霊界について。

精霊界とは、ミルナスタとは違う次元にある世界のこと、下の階は天国があるといわれているも。ここには、精励と呼ばれる種族が住んでいる。天使とよばれるものが管理している。詳しくはまた違うあとがきで。

第六話、彼の思い出？（前書き）

くあらずじく いつのまにか眠ってしまったダスティスはいつのまにか尊に会うまえのことを夢に見ていた。

第六話、彼の思い出？

「ダステイスさまー、どこですかー」

……ミハエルか……邪魔をしないでくれ。われは、いま、猛烈に眠いのだ……。

我はいま、精霊界の南端にあるアーリナブルの、闇の精霊達が暮らす村の外れの木の上で眠っていた。

それをまたあいつが邪魔をしてきた。……いい加減あきらめてほしいものだ。

「ダステイスさまー、どこーですかー」

……るさいな。なぜ、破壊神と呼ばれた我にかまうのだ。もはや、我を慕うものは少数だというのに。

「ダ・ス・テ・イ・ス・さ・まー」

……黙っててくれないか、静かにしてくれ。もうすこし眠っていたいのだ。

「ダステイスさまあああああああ！ どこにいますかあああああああ！」

っ！？ 耳に響く……わかった。わかったから、それ以上叫ばないでくれ。

しかたなく我は、木の上から、飛び降り、黒く、まがまがしく黒い地面に降り立った。

「あ、ダステイス様あ、みいつけた！」

もうどうでもよくなってきた……。我を見つけたミハエルは、ここに笑いながら我に飛びついてきた。なぜそこで抱きつくのだ。うっとおしい。

「で、何用だ、ミハエル」

「えーとですねえ、大精霊様から、言伝こたへが、あるんです」

- - 大精霊。精霊王よりも早くに精霊界にすんでいる存在で、天使の少ししたにランク付けされており、天使の側近とまで言われている。我我、精霊王でも、姿を見たことはない。何人いるかもわからない。

その大精霊が、我に何のようだ？

「えへへー」

「……いいから、早く言伝とやらを伝えろ。我は忙しいのだ」

「はい、なんでも、あなたさまに、ミルナスタに降り立ち、世界の歪みを直してほしいとのことです」

歪み？ そんなもの、我ではなく、ミルナスタにすんでいる物好きな、各精霊王に任せればいいではないか。なぜ、我なのだ？

顔をしかめて、黙り込んでしまった我に、心配したのかしらないが、我を見上げてきた。そんな顔でみられても、我はおまえを好きになつたりはしない。これは絶対なのだ。だから、我に好意をもたないでもらいたいのだがな。……これを言うと、しばらく泣きそうなのでやめておくことにしよう。

「……大丈夫だ。なんでもない」

「？ そうですか」

――なぜ我に言伝がきたのかはわからないが。久しぶりに、人間を喰らうのもいいかな。くくく。

さて、ゲートを通り、ミルナスタに来たのはいいが。やはり、きついな。デルビス波が充満している。我が精霊界から、防ぐ道具を持つてこなかったのが悪いが……。我が降り立った場所、それは、小さな村だった。

「やはり、この世界は、だめだな。悪意やらなんやらが、充満している。だから来たくなかったのだ」

しばらく、デルビス波に慣れるため、村の端で座っていたが（精霊以外には、私の姿は見えない）下等生物がそこに、黄色い液をかけたので、そいつを喰らってやった。汚らしい。これがなんなのかわからないが、においがきつい。

シュワアアアア

「ふむ、血もいいが、やはり丸ごとのほうがうまいな」

- 喰らわれた生物は、この世界にいなかったことになる。それがこの世界の理だ。だが、例外もいるという。それが悪霊だ。これは死ぬときに、憎しみなどの感情を覚えていると、世界に魂だけ残り、すべての生物には見えないが、【闇場】（デーム）とよばれる空間を作り、そこを巢に、生物を喰らうといわれている。まあ、見たことはないが、前に、大精霊が、悪霊を倒したとかでうわさにはなっていたがな。

「さて、デルビス波にもなれたことだし、あたりの人間を喰らうとするか」

まあ、これは墮精霊がやることなのだが、気に入ってしまったからしかたない。くくく。

天使にばれたら、消滅させられてしまうな。気をつけなくては。見られているのはわかっていいるが、何も言われないので、そのまま、この行為を続けている。ばれなければいいのだ。ばれなければ。

「さて、少しだけ喰らうとするか。カアアアアア！」

シュワアアアア！

うむ、うまい。やはり喰らうのが一番だな。それにしても、喰らわれていることも知らずに、のんきにくらしているのは、傑作けっさくだな。まあ、下等生物だからな。仕方ないか。

「さて、世界の歪みとやらを、確かめに行くか」

- 我は飛んだ。世界を回るために。歪みを見つけるために。

「む、ここか、歪みの原因は……人間族の村か……なにか、いやの予感がするな、急ぐか」

我は、人間族の入り口を通り、村へと入った……む、しかし、醜い下等生物がたくさんいるな。吐き気がする。すこし、見ておくとするか。醜い下等生物の争いを、な。それにしても、魔力を膨大に感じる。

こんな多い魔力を持っているのは生物にはありえないというのに……。誤認か？

「おい、早く殺せ！」

「ああ……わかったよ」

ドン！

「こ・ろ・せ、こ・ろ・せ、こ・ろ・せ！」

あの子供はから、かんじる。ものすごい魔力を。……本来はありえないのだが、稀に【勇者】となる逸材いつざいの力を持ったものがうまれるというが、それなのか？……わからない。だが、あれがゆがみなら、消すしかないな。

「そうだ、やれえええ！ いいぞおお！」

「悪いな、父さんをうらまないでくれよ？」

やはり醜いな。下等生物は、すぐに争いを起こす。精霊は、争いごとが嫌いだというのに。（我みたいな例外もいるがな。）

「まだ、死なないか、仕方ない……」

この反応は……魔術か。……下等生物でも魔術がつかえるのはわかっていたが、気に食わないな。

「母なる大地よ、我に力を与え、我の敵を討ち滅ぼさん……ガイアソニック」

ふむ、中級魔術か。……詠唱なしで魔術をつかえないのは仕方ないが、やはり、不便だな。詠唱というのは。

「しねええええ！ 化け物！」

まったく、騒がしいな。いちいち騒ぐな。下等生物が。ほえるだけならだれでもできる。だから下等生物なのだ。

「やった！死んだだろ？これで？……よっしゃああああ！化け物を

倒したぞおおお！」

「すまない……わが息子よ」

さて、あの子供は三途の川をさまよっていることだろう。消すために、我が、じきじきに喰らってやるとするか。

「……は！？ 我は、夢を、見ていたのか……」

主とは、はじめに、いざこざがあつたな……それに、邪神、か……
- 堕ちた神、禁じられたことをした神がなるとされている、か……
…主は、いつ、邪神とかかわりを持つてしまったのか……。我にはわからないな。……それに、ミハエルには、戻るとは言わなかった。な。まあ、我が心配することではないか。

「ミコトー、どこー」

「おーい、ミコトー、どこだー」

「ミコトー」

ふむ、主の仲間が呼んでいるか……我にも仲間がいれば……いや、何を考えているんだ我は。

我は孤独の精霊王だというのに。

「さて、寝ている主を起こすかな」

side out

さて、リルたちに連れられて、家に戻り、俺はいま、ニルを抹殺計画を企ている最中だ。これが成功すれば、世界が平和になる、はずだ。あんな男がいては、この世界も狂っているな……。とまあ、ダステイスみたいなことを言った俺だが、もちろんニルを殺すわけではない。肉体的ではなく、精神的に殺すのだ。ふふふ、あいつの嫌がる顔が倒しめそうだ。

「ふふふ」

「？ ミコト、どうしたの？ とつぜん笑って、おかしくなったの？ ニルみたいに」

ニルがおかしいのはわかるが、俺はおかしくなったんじゃない。おかしくなりそうなんだ。この違いは誰にもわからないだろうな。

「ミコトー、なんかして遊ぼうよー、まだ子供なんだからさー」

俺はもう五歳だ！ お前はとは違う！ 俺より背が少し高いからって、生意気いうな！

……なんか、むなしいな、一人で突っ込むのつて。はあ。なんで俺は子供なんだ。大人なら、なんでもできるのに。

「それよりもやることがあるからお前とは遊んでる暇はないんだよ。しっしっ、あっちいけ」

「うっわ、生意気、いいもん、ルリお姉ちゃんと遊ぶから！ いこ、お姉ちゃん」「う、うんわかった」

さてと、邪魔者はいなくなかった。いまこそ、ニル殺害計画を実行するときだな。ニルは今、ドンを狩っている最中のはずだ。俺は、帰ってきたニルの前で死んだふりをする。そして、手には遺書を握っている。この遺書には、ニルの所為で死んだと書いてある。そして、それを読んだニルは、罪悪感から、廃人になる。……よし！ 完璧だ。我ながらいいできたな。さて、帰ってきたときが楽しみだ。うふふふふふ。

そして一時間後俺は、ニルが帰ってきたのを見計らって、木でできたドアの影に隠れて、用意した、ドンの血を口に含んだ。まずいけど、仕方ない。ニルを廃人にするためだ。

「ああー、つつかれたー、なんで今日は、ドンが逃げ回るんだよ。疲れたぜ。ん？ ミコトのにおいがする。はーん、隠れて俺を脅かそうとしてるな、甘いぜ！ そんなことに引っかかるかよ！」

いまだ！ 血を吹いて、倒れる。そして、紙を見せびらかせるように、手を動かす！ よし。

がばっと、俺の隠れている、ドアを開けはなつ、ニル。

「あーれー」

ボタン

「……………」

どうだ？ 驚いただろう、俺の完璧な死に方。さあ、罪悪感に包まれる！ さあさあ！

「あー、今日は、ほかにまだ用事があつたんだー、いかなきゃー」

お、おい！ 行くな！ まだ遺書を読んでないだろうが！ いくな
ああああ！

俺の心の叫びむなく、ニルは、どこかへ行ってしまった。くそ、
作戦失敗だな。起き上がるか。
だが、起き上がった瞬間、目の前に見たのは、リルにおんぶされ
たミルだった。

「あ……………」

「きゃああああ！ ミコトー！ 血、血iiiiiiiiiii！」

あー、なんで、こうなるかなあ。ニルに精神的苦痛を与えるつもりが、リルたちに心配をかけるなんて。くそ、ニルのやろう、本当にあとでスープにしてやる。

そのあと、帰ってきたニルに、本当に心配されて、俺は、ミスカ（鬱）予備軍になりそうだった。

第六話、彼の思い出？（後書き）

精霊界での、階級について。

クラスファリト

天使

クラストゥル

大精霊

クラスサミン

精霊王

クラスフォリス

上級精霊

クラスフィル

中級精霊

クラスシック

下級精霊

クラスミック

精霊見習い。

例外

堕天使

堕精霊

次の話では、魔術について、説明します。

第七話、彼の思い出？（前書き）

くあらずじく 家に戻ったミコトだったが、ニルにククスの実を食べちゃったと、いわれ、ミコトはそのお仕置きを考え、考え付いたものが、果てるまで魔術を見してもらったが……

第七話、彼の思い出？

「はあ、はあ、くそ、なんで俺がこんなことをせねばならんのだ。いて、くそー、なんで、木なんか降ってくんだよ。くそ、二ルのやろう。後でぶつ殺してやる」

いま、俺が何をやっているかたいうと、森の奥のさらに奥にある場所で滝に打たれている。

「ははは、そんなこと言わないでえ、ちゃんとやりなさいよお」

なんでおねえ言葉なんだよ。いいかげんに堪忍袋の尾が切れそうだ。魔術なんて、なきやいいのに。

「さあさあ、もっと、真剣になるのですよ!」

バシ!

「いつてえええええ! てんめえ! 殺す! あとで絶対殺す!」

真正面で、しかも、通常の俺にはできない、けどな。寝ているときに殺ることはできる。本当にスープにして喰ってやる。

「さてと、俺はドンでも狩にいつてくるわー」

「まて! おい! こら! おーい!」

あのやろう。本当に行きやがった。俺を置いて。しかも上機嫌で。……なぜこうなったか、思い出してみよう。うんそれがいい。

「あつ、あつ、そこー、ああー、きもちいー」

「お姉ちゃん、ここ？」

「ああー、そこー」

……おまえら、その言葉を誰かが、壁越しに聞いたら、変な解釈されて、変態の印を押されるぞ。

しかも、布一枚で……。まあ、涼しいのはわからないでもない。俺も熱いのは嫌いだ。砂漠にすんでいるやつらなんて信じられないしな。

「あー、なんだ、その、ミコト」

「なんだよ、何か用か？」

ニルは、俺に遠慮気味に、手には果物の皮を持っている。……なに
か、あの皮、見覚えがあるような。

……気のせいかな。

「あー、そのお、えーとお……ごめんなさい！」

は？ なに急に、あやまってんだ？ こいつ、本当に馬鹿になったのか？

「ミコトの、分のさ、ククスの実、食べちゃった。てへ」

てへ、じゃねえよ、そんなことして許されると思ってんのか？ こいつ。

「……………」

「み、ミコトさん？」

ああー、どうしてくれよう、罰を与えるか？ いや、それじゃあ、生ぬるいな……。

そうだ！ 魔術を見してもらうか。くくく、力尽きるまで、な。

そして、ニルにそれを話すと。じゃあ、「ミコトも一緒にやろう！」

とかほざきやがった。

……まあ、ダスティスにまかせっきりつてのも、悪いしな。たまには、俺ががんばってみるか。

素人の俺にできることなんて限られてるけどな。

そして、現在に至る。なぜ、滝なのか、それは、俺が氷属性のメルニムスとか言う、潜在的なものがあるらしい。メルニムスってのは、生まれたときに決まるもので、そのメルニムスの種類を見分けるには、髪と目を見ればわかるらしい。たとえば、赤なら火、水色なら水、茶色なら土、とまあ、これがないと使えないわけで。ニルに聞いてもそれ以外はわからないそうだ。使えないな。で、氷の属性は、水と風の合体なわけで、手っ取り早く、風がびゅうびゅう吹くこの場所と、水があふれる滝を同時に浴びれば、イメージがつかめるんじゃない？ とか言うから、仕方なく、滝を浴びながら、風を感じているわけ。

にしても、それ以外については、教えてくれなかったな。ほかのことも知りたいのに。強い魔術とか、最強の魔術とか、無敵の魔術とか。あと、無敵の魔術とか。

「……ふう、なんか、慣れてきたな。慣れは恐ろしい」

……ああー、なんか、何も考えられなくなってきた。これが、悟りというやつか……

なんか、気持ちよくなってきた。これが、水なんて信じられない。

あー、このまま、すごしていたい。

そして、なにもかも、忘れたいなー。

「おい、ミコトー、できたかー？」

「……………」

「あー、なんか、シスターみたいに、祈りをささげてる格好になっ

ちゃってるよ……。まあ、放っておくか」

そして1時間後。俺の周りには、ニルが投げたドンの骨が散乱していた。……。あのやろう。一人で全部食いやがって。本当にあとでスープにしてやる。

そして、さらに十分ぐらい、滝に打たれていると、ニルが退屈な顔して、俺に話しかけてきたので、すべて、無視していたら、勝手にぶんすか怒り出したので、しょうがない降りるか。と思ったんだが……。

降りられない。なんせ、ずっ滝にうたれてたんだ。体が言うこときかないのは当たり前だ。

よく自分の体を見ると、膝が、赤い。それも、パプチイ(トマト)よりも赤い。……。やば。なんか、なっちゃってるよ。変な風に。

「ニコト？ ……ミ・コ・ト！ おい！ 死ぬな！ 死ぬんじゃない！ ミコト〜」

俺が、膝を見て固まっている様子を見たニルは、俺を何とか助けようと、あーだこーだしていたが、なんせ、体重がかけられない。だから、体重は、ふだんより、俺の体重は重くなっている。いくら力自慢のニルでも俺を引きずることしかできないだろう。……。ほらやっぱり。引っ張って出すことしかできない。

「死ぬなああああ！ ミコトおおおおお！」

ニルが俺を引っ張り出しているときに、俺が目をつぶったので、新だのと勘違いしたんだろうな。

……。死ぬかってんだ。おまえをスープにするまで、俺は死なない。戦争でも、なんでもおこつても、俺は死なない。だから、頭を揺らすな。気持ち悪くなってきた。あー、もうだめ。吐く。

「おえええええ」

「ぎゃーす！ きったねえな！ 俺に向かってかけるな！」

お前が揺さぶったのが悪いんだろ。俺は悪くない。にしても、胃液しか出ない。……肉はどうしたんだよ。肉は。俺の胃には肉が入ってるはずだろ？ ……あー、そうか、そういえば、ここ最近、俺、ククス（ココナッツ）のジュースしか飲んでなかったっけ。なんでか、食欲がわかなかったんだよなあ。

……食べなきゃ死ぬのはわかってるけど。なんか、肉が喰いたくないんだよなあ。……このままじゃあ、栄養失調になるな。……みんなに心配かけるのはよくないな。これから、メシはちゃんと食うか。

「……………」

「……………」

とまあ、そんなことを思っている間に、いつの間にか、俺を陸まで上げたとたん、ニルが俺を見つめてきたので、さらに吐き気が催^{そよめ}してきた。やめろ。そんな目で見るな。吐き気がする。

「…………ミコト……………」

「…………ニル……………」

そして、抱き合う二人！ なんてな。そんな結末になるわけがない。こいつとは、抱き合うことなんて、【一生ないな】

「てめええええ！ 気持ち悪いんだよ！ 死ねえええええええ！」

「おまえこそ！ しねええええええええ！」

バキ！ ボキ！ ドカ！ ダン！ ただの殴り合いになってしまったが、最終的に。負けたのは、体格の違いか知らないが、俺だった。――ちくしょう。また負けた。こいつには、体術じゃ、勝てないな。魔術でも極めなきゃ。

「はあ、はあ、俺の、勝ちだな、へへ」

くそお。やっぱりくやしい。こんなやつに負けるなんて！ 本当に、本当に、まじで、スープにしてやる！

まあ、そんなことしても、なんの解決にもならないんだけどな。……で、なぜか、勝利の余韻よゐんを味わっていたニルが、真剣な目でなにかしゃべろうとしているのを見て。俺は、考えをやめて、ニルに向き直った。

「ふう、さて、一通り遊んだところで、本題にはいる。実は、翼人の資料をあさっていて、出てきたことなんだが……」

ん？ ドンを狩に行ってたんじゃないのか？ なんで、資料？ 紙は貴重だからここにはないって言っただけか？ 矛盾してるぞ、お前。

「……魔術には、属性があることはわかるな？」

俺の考えを無視しやがった。わかってるくせに。俺の思ってることを。……まあ、あとで聞けばいいか。

御伽噺にも出てきたことがあるので、俺にもわかる。確認されているだけで、全部で十一種類あるんだ。

それをニルに言つと、笑顔で、「よかったな、御伽噺を読んで。頭がいいなお前」とか笑顔で言ってきたので、俺は、あわてて、「そんなことない、ただ、好きなだけだ」と返してしまった。くそお。

こんなやつに、照れ隠しで言っちゃった。……まあ、いいか。

「そう、魔術には、火、水、風、土、闇、光、爆裂、氷、雷、暗黒、古代魔術と、ある。だがな、翼人の祖先は、無属性魔術という、魔力消費量が桁違いの魔術があるんだ」

無属性？　なんだそれ？　属性があるから、属性じゃないのか？

お前馬鹿なの？　頭おかしいんじゃないの？　と目で語ったら、ニルが「お前より馬鹿じゃない」とか言いやがったので、「ばーかばーか」と幼稚みたいに、ぽかぽかニルを殴ったら、あっさり、また同じこといわれたので。それ以上は言わなかった。

「資料によると、この魔術は、メルニムスを持っていなくても、誰でも使えるらしい。ただし、翼人と契約しなければ、使うことはできない、と記されていた」

契約？　それって、契りを交わすとかそういうものか？　……うええ。きもちわりいー。

一瞬足りでも考えちゃった。そもそも、男同士でできるのかがなぞだ。

「ん、その顔じゃ、契約のことも知らないようだな。契約とは、互いの魔力をあわせることのことをさすんだ」

んだよ。先に言えよ。へんな解釈しちゃったじゃねえか。……まあ、ニルはそんなことを思ってたと思うけど。なんか、な。そういえば、ダステイスは、俺と契約するときに、俺の魔力に、なにか、魔術を使って、黒いものを入れてたっけな。あんまり、覚えてないけど。あれが契約だったのかな？

「でだ、この魔術は、おそらく、世界でただ一人、お前だけが使えると、俺は考えた」

ん、魔力が桁違いに多い……。たしかに、俺に当てはまるな。この世界にいる種族のどれよりも魔力が多い俺に。

「お前には、強くなってもらいたい。だから、俺と契約を結んでほしい」

契約、か、そんなものは二度とごめんだ、と言いたいとのだが、その真剣な目でみられちゃ、な。結ばらざるをえないじゃないか。俺は、少し考えた後、満面の笑みで、「やってやるよ」と言った。それを聞いた瞬間、ニルは、笑顔になり、俺の手を握ってきた。なんか、ごわごわしてる。……そういえば、父さんもこんなかんじだった。つけ。

「結んでくれるか、俺はうれしいぞ。お前とさらに強い絆を結べるんだからな」

ああ、俺もうれしいさ。死ぬはずだった俺を救ってくれて、さらに、家族にもなってくれて。

……ああこいつらがいないことなんて考えられないな。母さんには悪いけど、俺はここで一生を過ごすつもりだ。

「さてと、俺がリードするから、お前は、自分の中にある魔力を開放してくれ」

開放って、どうやるんだよ？　むすつとした俺をみて、ニルは俺に丁寧に教えてくれた。

なんでも、魔力を開放するには、まず、自分の魔力を知らなければ

いけないらしい。

これができないと、魔術なんて、できないらしい。ま、最初だからむずかしいとか言ってるけど。

簡単だろうな。だって、ダステイスの魔術を使う瞬間を、精神世界で見てたんだし。やり方は大体わかる。そして、俺は、ダステイスの感じとはちがう、青い球体が、心の奥に感じ取れた。

- 俺の見た感じだと、御伽噺でてくる【地球】と呼ばれる星みたいに青く、でかい。とにかくでかい。

あとは、あたりに、青い液体があるが、これは気にしないでいいのか？ それを、ニルに言うと、それは、【カセッテリーション】とよばれる、脳にもある、水と一緒に役割があるらしい。……なるほど、これが、魔力を、守るのか。クッションみたいに。

「これか」

「できたみたいだな。じゃあ、次は、その魔力を、つかむイメージで」

はつきりいつて、無理。こんなでかいもの、つかめるわけがない。いったいどうしろってんだよ。

また、しかめっ面な俺を見たニルは、いつのまにか、出した、光の玉を俺に向けてはなった。

すると、俺の中の魔力がそれに反応して、じょじょに小さくなっていき、最終的には、石ころサイズになった。なんでも、これは、【ユール】と呼ばれる上級者が、初心者に、使う、技で、魔力を掴むのを、助けてくれるらしい。そして俺は、小さくなった魔力を掴んだ。

「そう、それを、上に持ち上げて、取り出すんだ」

あとは、もう簡単だな。小さいから、取り出しやすい。そして、そ

のまま、青い玉を上にと持っていくと、まわりにある【カセツテリーション】が絡み付いてきたので、おもわずびつくりして、玉を落としてしまった。すると、カセツテリーションが俺の魔力をやさしく掴んで、やさしく、下に下ろした。

やるな、【カセツテリーション】。で、また、失敗しないように気をつけて、俺は、ゆつくりと、魔力を取り出した。

「よし、取れたぞ」

「じゃあ、それを解き放つイメージで」

おお、なんか、あふれてくるな。心が光で埋め尽くされるようだ。あれ？　なんか、光があふれすぎて、上に上ってきたぞ。どうするんだよ、これ？

「っ、きた、きた、きたぞ、すごい、すごいぞ、ミコト！　さすがに漏れ出しているな。さあ、次は俺のばんだな。――我、翼人の名の下に、汝と、契約を交わす。いかなるときでも、互いがわかるように。」

……契約執行」

――その瞬間、俺の中に、何かが入ってくる感じがした。芯の根元まで、なにかが、入ってくる。まるで、血の巡りのように。どんどんと、流れ込んできて、最終的には、俺の魔力と、ニルの白い魔力が合わさり、魔力が増えたきがした。

「はあ、はあ、っ、さ、さすがに、ミコトの魔力はすごいな。力が吸い取られたようだ」

まあ、無限にちかいくらいあるからな。

「さて、ミコト、もう使えるようになってるはずだ。あつちの端っこで、発動してみろ」

？ どうやってだよ。詠唱とかわからないぞ。

「？ …… ああ、そうか、おまえ、詠唱の仕方がわからないんだな。ははは、まあ、しかたないな。教えてやるよ」

なんでも、詠唱の完璧はないらしい、詠唱とはすなわち、魔術を発動するための鍵^キで、イメージした魔術を発動するものなので、人それぞれ、詠唱内容が違うので、完璧はないらしい。まあ、【賢者】とよばれる人がこの世界で最強らしいんだけど。それ気にしないで置こう。

「まあ、自分が思うことを言えばいいんだよ。魔術は、詠唱なしでも発動できるが、まあ、それは、またこんど、教えてやるよ。それと、魔力を取り出した瞬間に解き放てよ。そうしないと、魔力が暴発して、最悪、死に至るからな」

「ああ、わかった」

さてと、じゃあ、はじめますか！

「世界よ（輪廻よ）我に答え（俺に答え）ここにある万物を（いり乱す者を）救済し（攪乱し）断罪を（天罰を）与えたまえ（食らわせたまえ）無属性魔術（破魔術）デストロイバースト（デストロイブレイク）！」

シュウウウウウ、ドガガガガ、ドドドドカカカカーン！

…それは、俺が思っていたものと違って、着弾した場所を抉り取

り、その地点から、五十エト（メートル）をクレーターにして、破壊した。あー、これが無属性魔術？ 俺の理想どおりジャン。ウツレシイナー、ははは。はは。……だめだろ。こんな危険な魔術。使う気がしない。

「な！？ ……ばかな、無属性魔術は、破壊ではないはず……。無属性魔術は、無が象徴なはず……。なぜだ？」

俺に聞かれてもなあ、なんか知らないが、俺は、知らないからな。このことが、後に、重大なことだと知らずに、俺は、考え込んでいるニルと一緒に家へと帰った。

第七話、彼の思い出？（後書き）

魔術について。

魔術、それは、未知なる力のことをさす。

ミルナスタが誕生したときから、人間族が使つてたとされる力で、その人間たちのことを、テルスといい、その子孫たちのことを、マルスという。テルスは、人間族の間で、宗教にもなっている。名をその名のとおりに、テルス教。別名、魔術協会とも言つ。後に、表記します。

魔術の説明の続き。

魔力を使うには、魔力と呼ばれる、生まれたときから持っている力と、もうひとつ、メルニムスと呼ばれる、目と髪に色が移る力が必要になる。この両方は、魔術を使える家系ではないと、もってはいない。魔術には種類があり、確認されているのは、十一種類ある。下に表記します。（注意）、下に記されてる魔術使用法は、一部のことです。ほかにも使えます。

火属性（灼熱が象徴で、火をあやつれ、料理を作るときにも使われる）

水属性（癒しが象徴で、水があやつれ、攻撃にも使われる）

風属性（切断が象徴で、風をあやつれ、風車を回すときにも使われる）

土属性（硬質が象徴で、槌をあやつれ、作物を育てるときにも使われる）

闇属性（腐らせるのが象徴で、闇をあやつれ、死体をミイラにする）

ときにも使われる)

光属性(聖正が象徴で、光をあやつれ、闇地と呼ばれる土地を直すときにも使われる)

爆裂属性(火と土の合体魔術で、爆破が象徴で、マグマを操れて、物を壊すこともできる)

氷属性(水と風の合体魔術で、凍結が象徴で、氷を操れて、温度を下げることもできる)

雷属性(光と風の合体魔術で、激音が象徴で、雷を操れて、避雷針を生み出すこともできる)

暗黒属性(闇と火の合体魔術で、姿を消すことができ、敵を眠らせることもできる)

古代魔術(エルフと翼人が使つとされているが、すべてが謎)

第八話、彼の思い出？（前書き）

くあらずじく 無属性魔術を誰にも見られていないと思っていたミ
コトたちだったが、それを見ているものがいて……

第八話、彼の思い出？

????? side

……すばらしい。この言葉に尽きるな。

暇つぶしに、***から戻ってきて、森に入っただと思えば、おくから、膨大な魔術を感じ、走って、森の奥に行ったら、私が見たこともない、魔術を使っていたのだ。すばらしいとしかいい用がないではないか。くくく、***に伝えておくか。あんな魔術見たことがない。これは世紀の大発見だ。

「（……あ、もしもし、実はですね。例の子供が見たこともない魔術を使っただですよ。ええ、はい、そうですか。監視を続ければ、いいですね。はい、わかりました」

やはり、***製のタイプスは便利だな。離れていても連絡が取れるだなんて。さすがは、世界一の宗教だ。私もこういうものを作ってみたものだ。

さて、あの魔術の構成をいじれば、私でも使えるはず。……だが、あの魔術は危険だな。使うのは

私は、先の魔術が発動した瞬間、ひそかに、この目で、分析し、メーク（リヤール（羊）の糞でできた紙）に構成を書き写しておいたのだ。これさえあれば、私でも、くくく、楽しみだ。くくく、ははははは。

はあ。ため息がでる。いくら、無属性魔術を発動しても、破壊しかならないんだから。誰かこの理由を教えてくださいよ。

「……ミコト……その魔術は、もう使わないほうがいい。俺が馬鹿だった。そんな魔術をお前に託してしまったんだからな」
「でも、無属性魔術って、破壊が象徴じゃないんでしょ？　なんで、ミコトが使つと破壊になるのかしら？」
「さあ？」

さあ、って、おまえ……。人事みたいに流すなよ。悲しくなるだろ。
「そしてしばらく考えた後、「じゃあさ、俺は魔術は使えないのか？」というと、すぐに返答が帰ってきた。「いや使える。修行すれば、な。ざつと十年」と。ふざけんなよ。なんでそんなにかかるんだよ。」

おかしいだろ。

黙って、顔をしかめた俺をみて、ニルは、理由を説明してくれた。
なんでも、魔術には、下級魔術、中級魔術、上級魔術の三種類あつ

て、爆裂、氷、雷、暗黒は、上級魔術に当てはまるらしい。で、下級魔術は、約二年。中級魔術は、約五年、そして、上級魔術は約十年、習得するのにかかるらしい。しかも、上級魔術は習得するのが非常に難しく、あきらめる人も多いらしい。人間で、上級魔術を使えるのは、約百人だけらしい。人間の人口が三千万なんだから、これは、確率がひじょーに、低いな。氷属性は、上級魔術なんだから、十年かかるのか……。むず。魔術って。

「まあ、十年間みっちり、俺たちが、ついててやるから、何とかなるだろ。うん。そうに違いない。

「まあ、がんばってね、ミコト」

「応援するよー」

無責任な顔で、肉を食べるこいつらに、俺は壮大にため息をついた。幸せが逃げるぐらい。
はやく、魔術つかいてー。

ニルside

ミコトに魔術を教えて、はや一週間。ミコトは、めきめきと、その才能を開花させていた。俺が言うのもなんだが、ミコトは、魔術の才能が、天才だな。しかも、もう、空気中の温度を下げるところまで、きた。これは、十年なんてもんじゃない。一年で、習得しちゃうかもしれない。これは、魔族でも、ありえないことだろうな。知らないけど。

「ふうーっ、はっ！」

ミコトが手から、小さな氷を生み出して、それを俺に思い切りぶつけてきた。は？ なぜ、俺が標的？

「いて、てめえ、ちゃんとやりやがれ！ この！」

俺は、手から、白い塊を生み出して、それをミコトに思い切りぶん投げた。

しかし、ミコトは、それを、ひよい、と横に移動することかわしやがった。くそお、まぐれか？ まぐれなのか？

「このこのこのこのこのこのこの！」

「ふふふ、甘い、甘いぞ、ニルくん。あたらないじゃないか。コントロールが悪いぞ。ほら、こうやるんだよ」

ヒュン！

「いて、てんめええええ！ もう切れた！ てめえには天誅を食ら

わせてやる！ シャイニングハンマー！」

無詠唱で、光の魔術を発動し、ミコトの上に、ハンマーを出現させて、それを、俺は、思い切り振りかぶった。そのしゅんかん、カン！ と甲高い音がした。俺はなぜそんな音が鳴るのか不思議に思い、ミコトの方をみた。すると、そこには、大きな氷で、ガードしている姿が見えた。

「へへ、ここまで、大きな氷を出せるとは思えなかっただろう。ニルくんさんよ」

すごいな。短時間でもう、そこまで大きな氷をと出せるとは……。やっぱり、ミコトは天才だな。いつか、偉大な魔術師になるだろうな。そして、【英雄】とたたえられるんだろうな。たぶん。……いや、こいつなら、あくどいことをするから（女遊びとか）英雄にはなれないだろうなあ。で、そんなことを一瞬でも思っちまったのが悪かった。前を向いた瞬間、氷が飛んできた。

「てめえ、今本気で投げやがったな！ 死ぬところだったじゃねえかよ！」

まあ、とつさに、光を屈折させて、氷の軌道をずらしたから。だいじょうぶだったけどな。危ない危ない。

「ちっ、はずしたか」

「てめえ、いま、舌打ちしやがったな。それでも家族か！」

俺の言葉に、なぜか、反応して、ミコトの表情が、徐々に、悲しくなってきた。あれ？ おかしいな。こんな簡単にあいつが……

「母さん……まだ、あの村にいるのかな……」

ミコトの意外な表情を見てしまった俺は、横にある氷を思い切り蹴飛ばして、ミコトの前行き、ミコトの頭をなでた。

「ん……。つて、てめえ、なでるな！」

「おっと、いかにもなでてくださいなオーラ出してたから、ついな」

本当は、ミコトがどこかへ行ってしまうんじゃないかという気持ちを持って、行かせたくないという思いから、ミコトの考えを中断させたんだけど。そんなことがわかるはず、ない、か。

「……さーつて、続き、やりますか！」

「おう！ 頼むぜ！ 先生！」

私は、いま、森のはずれに立てた小さな小屋で、研究を続けている。たまに、氷が飛んでくるが、それは気にしないことにしている。

「……難しいな、こんな複雑な構成を考えた翼人には、シュガレット賞を与えたい気分だよ」

シュガレット賞。それは、人間族の研究者で、天才といわれたシュガレットⅡDⅡマクナリスという歴史の偉人の名前からとった賞。私の尊敬する研究者の一人だ。彼のようになりたくて、研究者になったといっても過言ではない。だが、私は彼のようにでは、なく、彼を超える研究者になることが夢だ。まあ、こんなことを思っても神でもない限り、わかるはずはないがな。

「さてと、続きをやるか」

それから、何週間も、私の研究は続き、もう、七月の中盤にまで差し掛かっていた。ん、そろそろ、火廻（夏）か……。妹は元気だろうか？　いつか、会いに行くか。そして、しばらく研究を続けていると、翼人のことが頭によぎったので、研究をいったんやめることにした。

あの子供はいま、魔術の練習をしていると思うが……。まあ、最低、あと十年はかかるだろうな。

あの髪と瞳を見る限り、染めていなければ、氷のメルニムス保持者だろうしな。

私は、こどもと、その仲間が、家にいることを突き止め、家へと向かい、近くの茂みに隠れて、観察することにした。

「氷の竜よ、目の前の敵を喰らい、血肉とせよ！ アイスドラグニス！」

「お、もう、そこまでできるようになったか。やっぱりすごいなミコトは」

――私は驚いた。なぜなら、十年はかかるという上級魔術を一年もたたないうちに、あそこまで、マスターしたのだから。

やつは、われわれ、***の脅威になりつつあるな……。危険な芽は、はやく摘んだほうがいい。だが、やつの成長をみたいという思いもある。さて、どうしたものか……。

「そういえばさ、考えたんだけど。闇と氷の合体魔術って、ないの？」

「うーん、私が知る限りではないわね」

「ミルもしらない」

「俺も」

氷と闇の合体魔術？ …… それは、興味をそそる話だが、そんな魔術は聞いたことがない。

上級魔術を合体するなぞ。ありえない話だ。そもそも、あの子供は、氷のメルニムスしか持ってないはずだ。氷のメルニムスを持っているだけでレアなのに、闇のメルニムスまで持っているなぞありえないな。メルニムスを二つ持っている者は見たことがあるが、上級のメルニムスとさらに通常のメルニムスを持っている種族なぞ、いるはずがない。 - - そう、いるはずがないんだ。

「……そうか」

なぜ、そこで、新しいおもちゃを与えられた子供のような顔をする。いや、子供だったか。すまないな。お前が子供だとは到底思えないのでな。もはや、子供の域を超えている。

「さーってと、もっと力を磨かなきゃな」

ふむ、ずっと見ていてもいいが。研究のほうを進めたいのでな、戻るとするか。

side out

「（む、なにか、そこにいたような気がしたが……動物か……）」
「（ん？　なんか言った？）」
「（いや、なんでもない）」

ダステイスって、時々、わけがわからなくなるよな。それが精霊だ
ってのは、わからないでもないけど。
精霊はみんなわけがわからないのか？　……それだと、なんか、困
るな。ダステイスが増えたように。

「あー、ミコト、腹減ってないか？」
「あ、私、おなか減ったー」
「ミルもー」
「いや、俺はへってない」

うそをついてるわけじゃない。本当に腹が減ってないんだ。しかた
ないだろ。だから、心配な目で見るな。わかってる。俺が無理をし
ないんじゃないかって、思ってることは。……でも、せつかく覚え
たんだ。やらないと損だろ。
そして、俺以外のメンバーは、いつものドンと、ククスの実を捜し
に、森を搜索しにいった。

にしても、毎日毎日、おなじ食料だと、飽きるよな。たまには、高級なものでも食べてみたいもんだ。

「さてと、誰もいないから、今のうちに、と」

ダステイスに変わって、新しい、魔術を生み出すんだ。ふふ、これができれば、みんな驚くだろうな。

シューウウウウ

ダステイス side

氷と闇の合体魔術か……よく考えたものだな主は。しかたない、やってみるか。

む、そういえば、氷の魔術など、使ったことがないし、我は使えない。これでは、できないのではないか？
ほんまっでんとうこれでは本末転倒ではないか。

「（あー、今思ってることはわかるよ。大丈夫だ。俺が心の中で詠唱するから、ダステイスは、普通に、闇の魔術の詠唱をすればいいから）」

むう、できるかどうかはわからないが、やってみるとするか。

「闇よ（氷よ）世界を包み込み（地面を凍らせ）あふれる力を（躍動する力を）終結させて（合体させて）放て（解き放て）ダークシエルダー（アイスシュート）」

「（ダステイス、いまだ、その二つの力を合体させて）」

「（む、わかったやつてみよう）」

地面と空中にある、魔力を、再構築し、我は、そこに、さらに魔力を、主も同じように、魔力をこめ、凍っていた地面と、闇で包み込んでいた空気が元に戻り、最初の状態に戻った。そして、そのあと集めた、氷と闇の魔力を、練り、幾度も練り、魔力がが群青色の球体になった瞬間、我は、魔力を解き放った。

「闇と、氷を合体させ、新たな力をここに生みだす。……ダークアイス」

おお、すごい。すごいぞ。これは。……精霊界でも、これほどに、キレイな光景を見たことがない。

- 群青色のシエルパ（ダイヤモンドダスト）が空中にきらきらと舞う中で、だんだんと、あたりにあるものを凍らせていき、そのあとで、その中だけが、溶けている。- まさに、摩訶不思議な現象が起こった。氷が、中だけ、溶けているのだ。これは、本当に不思議な光景だった。これは、ほかに応用が利きそうだな。炎を凍らして、なかの、セリユ（二酸化炭素）だけを溶かし、その状態を維持

できるかもしれない。そうすれば、溶けた後、純度の高い、群青色の炎が出来上がるかもしれない。ふふ、いろいろと、考えさせるものだ。魔術とは。

s i d e o u t

俺はこの魔術の名を、【構創】（こうそう）となずけて、あたりがすごいことになっているのを怒られるのを覚悟して、俺は、【構創】の使い方について考えていた。何回も使ってみて、わかったことだが、この氷溶は、攻撃用の魔術でないことがわかった。（なぜ、攻撃魔術同士が合体したのに、攻撃用じゃないかはわからなうけど）この魔術の役目はずばり、物を、構成物質から、変えて、新しい、物ができる、だと思ふ。だって、緑色の草を、群青色の、毒が入ってる（自分で食べて確かめた）草にしたんだ。もう少し、改良すれば、不治の病だって、簡単な病気に構築しなおせるかもしれない。そうすれば、多くの人たちが助かる。そうすれば、死なないですむ。だから、俺はこの魔術を医療のために使うこ

とに決めた。

ほかに使うかもしれないが、主に、人を助けるための魔術なんだから、あまり、人体を再構築したり（怪我を直す。けど、命の保障はできない）そんなことはあんまり、やらないようにしたい。これは、決めたことだから、揺るがないだろう。さて、今日から忙しくなるな。がんばるか。

第八話、彼の思い出？（後書き）

さて、こんにちは（こんばんわ）前の話よりずいぶん代わつてると
思いますでしょうが、これ以上は変更はしないと思います（たぶん）
。ミコトが生み出した魔術。みんなの役に立つといいですね。さて
さて、今回は、勝手ながら、説明などは、ありません。申し訳あり
ません、結構、直すので手一杯なので、書く暇がありません。明日
は、次と次の話を直せるとおもうので、楽しみにしてください。

六月二十七日。作者ミーナより。

第九話、彼の厄災日（前書き）

くあらずじく 思い出を思い出したミコトは、ニルにあの時
怒られたことを考えていた。それを話そうと、思い、口に出した瞬
間、悪意あるものが近づいているといわれて……

第九話、彼の厄災日

ああ、懐かしいな。あれからもう十年になるのか……早いもんだ。にしても、ミル以外のやつらは、成長しないな。なんでだ？ まあ、そんなことは置いといて、あの時、ニルに怒られたときは、変な気分だったな。なぜか、うれしい気持ちがあふれたんだからな。ニルに聞いてみるか。

「おい、に「しつ、静かに。何かが来る。しかも悪意に満ちてる。だろ？ ミル」悪意？ 堕精霊かなんかか？」

「ちがう」と、俺の質問に、ミルは首を振った。なんか、みんな、あせってるようにも見えるけど、なんでだ？ そこまで、強いやつなのか？ 俺達がいれば、問題ないんじゃないのか？

「お姉ちゃん、怖いよ」

ミルがリルに抱きつく姿を見て、俺もただ事じゃないと思い。真剣に話を聞くことにした。

「大丈夫、大丈夫だから」

「ミコト、戦闘準備をしろ」

仕方ない、最近手に入れたこの刀を使うときがきたな。俺は、家の奥深くにしまってある漆黒の、刀を取り出した。（これは、まあ、ある商人がおとしたものだ）ニルは、魔力を高め、リルもそれに続き、ミルは、弓を取り出した。

「さあ、戦闘開始だ！」

????? side

今日まで観察してきたが、もう、*****から、抹殺の合図がでた。
すこし、名残惜しいが、魔獣を放つとしよう。私の研究も終わった
ことだし。殺すとするか。

side out

いま俺達の前に現れた悪意ある者。それは、黒く毛深い毛に包まれて、目が赤く光っている狼だった。

なんか、唸ってるな。ミル」はひどくおびえきってるし。リルは、すこし、後ずさってるし、ニルは冷や汗が出てるし。なんで、こんな狼相手にびびってたんだよ。おかしいだろ。魔物だろ？ 魔物ぐらい、倒せるはずだろ？

「なあ、ニル、なんでそんなにびびってるんだよ？」

「お前は、知らないからそんなことがいえるんだ。あいつは、昔、俺達の母さんと父さんを殺した魔獣と呼ばれる、悪魔の飼う手下と呼ばれているんだ。攻撃が効かないし、魔術も効かない。唯一倒せる方法は、無属性魔術だけなんだ。だが、お前が使うと、違うことがおきる。だから、俺達の負けは決定したも同然なんだ」

なんだよそれ、おかしいだろ！ なんであんなに強気だったお前が、腰が引けるんだよ！ あんなやつ。俺が倒してやる！ 絶対に！俺は、ニルたちを守るように前へで、刀を構えた。それをみて、ニルたちは、信じられないものをみた見たいな目で俺を見てきた。そんな顔するなよ。お前達は俺がまもってやるからさあ、そこで、怯えてな！

「はぁ あぁ あぁ あぁ！」

ザシュ！

魔獣を、縦一線に切り捨てて、俺は魔獣から距離をとった。
にしても、硬いな。感触が岩をきってるみたいだったぞ。おかしい
だろ、こんな生物いるのかよ。

ドンのは、少ない気がするが）
（まあ、ドンは、牙以外硬くないから、五倍
というのは、少ない気がするが）

「グルルルル、ガウ！」

「っ！？」

なんだよ、こいつ、半端ない殺気を放ってきやがる。つい、一歩下
がっちゃったじゃないかよ。

下がった瞬間、魔獣は、俺に向かって、一直線に、走ってきた。

おいおい、尋常じゃないスピード、だな、目で追いきれない！

- - まるで、コマ送りみたいに、その光景が流れる中、俺は、刀を
縦に構えて、魔獣の切り裂きをガードした。本来、刀はガードする
ように作られていないが、なぜか、この刀は、半端ない強度がある
ので、それが実現できる。

「っ！ 重いな、いちいち攻撃が、よ！」

魔獣を刀の腹で、弾き飛ばして、俺は、魔獣に突っ込んだ。一瞬で
間をつめたので、魔獣は俺の動きに追いついていない。

「ミコト！ だめだ！ そいつには、攻撃は効かない！」

ああ、わかってるよ、だから、刀に氷をまとわせて攻撃するんだよ。
凍らせれば、死ななくても、封印できるだろ？

無詠唱で（案外簡単にできた）周囲の温度を下げ、刀に、氷結がで

き始めたのを確認して、さらに、走るスピードを上げる。

「くられ！　アイスセイバー！」

ザシュ！　- 岩のように硬い皮膚を持つ、魔獣の硬さを無視して、俺は、刃が折れることを考えずに、突き刺した。そして、突き刺したところから、徐々に、凍っていき、十秒しないうちに、魔獣は、凍りついた。

「疲れたあ、たくつ、なんで、魔獣なんてくるんだ」「ミコト！　危ない！」「へ？」

ザン！

な！？　まだ、動けるのか、なんで、凍らせたはず、なのに、くそ、なんで、だ。

「がはっ！　っ！　この！」

俺は、もうどうにでもなれ、という気持ちで、俺に噛み付いている魔獣に、向けて、刃が欠けている刀を突き刺し、今度は念入りに、魔力をこめ、頭から、完璧に凍らせた。

そして、動かなくなった魔獣をみて、安心したのはわからないが、地面に倒れるようにして、意識を手放した。しまった。さっきやられた、ところから、血があふれていたのか。

ミルside

「ミコト……なんて無茶したの？ ……ミコトが死んだら、私、私は……」

泣き出した私を、やさしくお姉ちゃんが抱きしめてくれた。ありがとう、お姉ちゃん。こんど、お礼返すからね。

「にしても、考えたよな、ミコト。まさか、生きたまま凍らせるなんて。ほら、動かないぜ」

まったく、なんで、氷をたたくかなあ、そんなことして、動き出したらどうするのかな。はあ。緊張感がない人って、どうかと思うよ。

「さて、俺は、翼人の資料をあさってくる。こいつがなんで来たのかはわからないが、ほかに倒す方法があるかもしれないしな」
「がんばってね、お兄ちゃん」

それにおにいちゃんは、「ああ」と言い残して、神殿に向かっていった。お兄ちゃん……。
どうか、ミコトの仇をとれる方法を見つけてね。

安心したのか、私は、お姉ちゃんに抱きしめられたまま、睡魔に襲われて、お姉ちゃんの膝元で、眠ってしまった。やわらかい感触を感じながら。

「うーん、あ、眠っちゃったのか、私は……。あ！ そうだ、ミコトは？」

たぶん家だと思っただけど、なんか、膝があったかいんだよね、なんだろ？ ……み、ミコト？ なんで、私の膝の上で、眠ってるの！ どとどとどとどと、どうして？ ……でも、いやじゃない。なんだろっ、この気持ち……。それによく見ると、幸せそうな顔してる。

その顔を見て、私は、いつの間にか、ミコトの頭をなでていた。し

かたないなあ、まだ、十五歳だもんね、まだ、子供なんだから、

「ミコト……。好きだよ、私、ミコトのことが好き。私ね、ミコトみたいな人、生涯で、いないんじゃないかって、思ってた。でも、ミコトが現れてから、私は、私は……。ミコトのことが好きになっちゃったみたい。どうしてだろうね。最初は、あなたのこと、嫌いだったのに……。だんだん、あミコトと暮らしていたら、好きになっちゃった。どうしてくれるの、ミコト……」

いつからだろう。ミコトが五歳のとき？ それとも、六歳？ 十歳？ でも、いくら私が、ミコトを好きでも、先に、ミコトが死んでしまう。それなら、この気持ちは隠していたほうがいい。ミコト。最後にだけ言うね。

「好きだよ、ミコト」

私は、ミコトとこうして、ゆっくり話すが、最後なんじゃないかって、心のどこかで思ってしまった。だって、あの魔獣が来たんだもん。誰かが、私達を殺そうとしている。そうに違いない。だから、私は、いつの間にか。大粒の涙を流していた。これが最後にならないように、と。そのまま、ミコトの唇に口付けをして、私は、家から、出て、神殿に向かった。たぶん、お兄ちゃんとおねえちゃんがいるはずだから。

side out

「主よ」

「ん？ ダステイスか……。って、なんで、実体化してるんだ？ お前って実体化できたっけ？」

俺はうる覚えになっていたダステイスの姿を、改めてみた。

- - 左目が閉じており、おそらく、ないのだろう、眼球が。そして、百八十ギト（メートル）以上ある背に、美形な、顔立ち。そして、上は、黒い、下着（だろうか？）の上に、マントを羽織っており、下は、ところどころが破けているズボンをはいていた。もしかして、古着か？

「まあ、そのことはいい、実は、いま、主の精神世界にいるのだが……なぜか出られないのだ。なにか結界のようなものがはられていてな。主も出れないはずだ。結界に触ってみるがいい」

俺は、あたりが、まるで地獄のようなところなのを改めて確認しつつ、壁側にある結界に触ってみた。

感触は、まあ、硬いに尽きる。魔獣より少し、硬いぐらいの感触なんだけど。……確かに出られないな。

「ん、確かに出られないな。なんでだ？」

「さあ、我にもわからん」

本当、わけがわからない。ダスティスが実体化してるし、出られないし。

……なんでだー。だれか教えてくれー

第九話、彼の厄災日（後書き）

この世界の服について。

ミルナスタでは、人間は、日本と同じく、下着の上に、服を着るというスタイルになっている。だが、女は、ブラジャーというものがなく、変わりに、布を巻いて、隠している。まさに、現代と昔を合体させたような服になっている。次のあとがきでは、獣人の服についてです。

第十話、破滅の一日前（前書き）

くあらずじく 精神世界からでないミコトのことをしらないリル
たちは、いまだに、神殿内を搜索していたが……

第十話、破滅の一日前

ルリside

「くそ！　なんでないんだ、魔獣の弱点！」

「落ち着きなさい、ニル！」

「お兄ちゃん、がんばって」

私だって、落ち着いているわけじゃない。早く、魔獣の弱点が見つければいいと、心の中で、あせっている。それにしても……。なにか、いやな予感がするわね。はやく、ミコトのところに行かなきゃ。

「お、あつた！　これだ！　えーっと、内容は……。ふざけるなよ、なんで、切り取られてるんだよ！　こんちくしょー！」

なんでよ、なんで、肝心なところだけ、切り取られてるの……。ここ最近、人の気配はなかった。なら、私たちがここに住む前から、切り取られていたということになる……。でも、誰が？　おじい様は、そんなこと言ってなかったし……

しばらく、私たちは、神殿内に、切れ端がないか、隅々まで、探した。玉座の下、壁画の文字の中、像の体、そして、唯一探してなかった、玉座の下にある、隠し階段にさしかかったとき、私たちは、顔を見合わせたあと、階段を下っていった。なんか、あやしいのよねえ。ここ。前から気になってたんだけど、さ。

……まず、感想を言うと、汚い。ボキブ（ゴキブリ）やら、モグ（クモ）やら、さらには、デチュまでが、そこらへんを歩き回ってる。それに、異臭がするし。緊急事態じゃなかったら、来たくないところね。ミルも、鼻を押さえて、目を背けてるし。まあ、成長したっていつても、心はまだ、子供だから仕方ないと思うけど。ニルは、そんなことお構いなしに、害虫を踏み潰しながら、埃^{ほこり}にまみれた机に、息を吹きかけた。

「げほ、げほ、ああー、埃まみれになっちまった。……いや、そんなことより、資料をあさらなければ。」

私たちは、ニルをただ見守ってることしかできなかった。だって、邪魔したらいけない、そんな、空気が流れていたから。（害虫を踏みたくないという気持ちもあるけどね）

「お兄ちゃん……」

「私たちは、見守ることしかできないのよ。だって、ニルしか、このことはからないんだから」

手を胸で、あわせて、ニルを心配しているミルを私は少しきつめに

抱きしめた。なんだか、とても、さびしかったから。あつたかい、ミルを感じながら、いまだに、資料をあさっているニルを見た。

「あ、あ、あつた！ あつたぞ！ ほら、ほら！」

少々はしゃぎみような気がするけど。うれしいんだから仕方ないわよね。私もうれしいし、ミルも、顔を輝かせて、害虫なんて、気にせずに、ニルに向かっていったし、うれしいのは同じよね。私も、ミルの後に続いて、モグ（クモ）の糸を振り払いながら、ニルの元へ向かった。

「さて、なんで、こんなところにあつたのことは、置いていて、説明するな。いいか？」

私たちは、それに、首を縦に振ることで、応答した。

「魔獣には、物理攻撃も、魔術も効かない。だが、やつにも弱点がある。それは、無属性魔術を当てること。だが、俺たちには、それが、できない。さて、どうしたらいいか。それはだな、魔獣の口の中にある目を、つぶせば、いいらしい」

なんで、口の中に目があるのかは、私にもわからない。まあ、それは、気にしないでいいことだから保留。でも、私は、ある疑問を抱いた。それは、どうやって、魔獣の口の中に攻撃するのか。あんな化け物に突っ込む勇氣はないわ。

「お、続きがある。魔獣の口をあけさせる方法は……。方法は……」
「なによ、見せなさい」

がばっと、私は、ニルから奪い取った紙に目を通した。もちろん、

ミルにも見えるように。

私たちが見た、紙には、性的興奮すると、口をあけて、オスの性器を立たせながら、馬乗りになるらしい。……性的興奮……つまり、私たちに脱げ、と、そういつてるのね。この紙は！

ミルもわかったようで、顔を赤らめている。か、かわいい……。ぶるぶる、いや、そんなことを考えてる暇はないわ。これを解決しなきゃ。

「ああー、どうする？ 脱ぐk「死ね！ 変態が！」ぎゃああああ、いってえええ、なにすんだよ！」

ふん、あんたが変なことを先走りそうになるからでしょ。正当防衛よ！……ちよつと違うか……。

まあ、そんなことは、横に置いといて。さて、どうするかよね。

「性的興奮か……やっぱり、脱ぐしk「変態！ しねえええええ！」ふう、危ない、もうその手には乗らないぜ」

ち、真剣白羽鳥で、私の攻撃を受け止めるとは……さすが、ニルね。しばらく、とまっている私たちを見て、ミルは、おどおどしていた。

「あ、喧嘩はだめだよ、ね？ さ、さあ、考えようよ、二人とも」

きゅん、と私の心臓が銃で撃たれたように、飛び上がった。か、かわいい、なんてかわいいの。思わず抱きしめちゃったじゃない。

「ああー、そんなことしてないで考えようぜ」

「うん、私もそえがいいと思う」

そう、よね、こんなことしてないで、早く考えなきゃ。でも、こん

なかわいいもの、手放したくないという気持ちもある。（成長しないなあ。私）

「うーん、いい案が浮かばないわね」

「なーんか、ありそうなんだけどなあ」

「魔術で何かできないか」 「それだ！（それよ！）」 う、うん、わかったから、顔が近いよ、二人とも」

あらあら、いつの間にか、ミルとキスができる距離まで、近づいちゃった。てへ……。

はあ、自分でやってて、はずかしい。まあ、心の中でやったことだから、誰にも気づかれるわけではないんだけども。

「魔術……。風の魔術があれば、傀儡が作れる……。だが、俺たちは、風のメルニムスを持っていない……。どうすれば……」

風か……。ミコトは、氷のメルニムスだし、いったいどうすれば……。ん？ 氷、こおり？ あ、氷は、風と水の合体魔術だから、もしかしたら、風の魔術が使えるかも。

「ミコトなら使えるんじゃない？ 氷のメルニムスなんだから、分解セルスすれば、風と水が使えるんじゃない」

しばらく、私の発言に、ニルは固まっていたが、すこしして、悲しそうに顔を伏せた。ん、なんで、そこで、悲しい顔をするのよ。おかしいでしょ。私がたまにはいいことを言ったんだから、ほめてくれなきゃ。

「だめだ、分解セルスは危険すぎる。あれが万が一失敗すれば、魔力回路が最悪、焼ききれて、廃人になってしまう」

「そうなんだ……」

「残念……」

はあ、ためかあ、やっぱり脱ぐしかないのかなあ、でも、乙女が汚されるってのは、やなんだよね。
好きな人なら別だけど。

「はあ——————」

長いため息をつくわね、ニルは、それじゃあ、幸せが逃げるんじゃない？ 私もため息を尽きたいけど、鼻から手を離すと、においが入ってくるし。心の中でため息をつくしかないか。はあ。

「あーあ、魔術石さえあれば、風の魔術が使えたのに「それだ！（それよ！）」だ、だから、顔が近いってば」（ほかにもあるけど、あれは少ししかつかえないし）

さすがは、私たちの妹。考えることが天才的ね。まあ、私が思い浮かばなかったんだから、私の知能は遺伝されてないと思うけど。はあ、なんで、神は、私に、知能を与えなかったのかしら？ それがあれば、こんなに困らなかったのに。

「さすが、ミルだなー、天才だよー」

「きゃっ、お兄ちゃん、抱き上げないでよー」

「はは、ごめんごめん」

和むわねー、この光景をずっと見ていたいわ……。それにしても、魔術石、か、あの石は、修行するものがいなくなるから、使ってはならんとか言っつてわねえ、おじい様は。そのおかげで、魔術石にできない、魔術が使えるようになったんだけど。

「風の魔術石……。滝の近くにあるかも」
「そうとなったら、行くべし！」
「いこー」

私たちは、十分（全速力で走ったため。本来は、三十分かかる）かけて、滝のところへ、いった。

案の定、そこには、緑に光る風の魔術石がごろごろと落ちていた。うん、念のため、もてるだけ、もっていかなきゃ。

せっせと、小さい魔術石を集めている私とは、裏腹にニルとミルは、とても大きい石を集めていた。な、なんで、あんなでかい石を持っていくのよ。頭おかしいんじゃない？

「ミルはえらいな、魔術石は、小さいと効果が薄いつてことをよくわかってるな。あの、小さい石ばかり、集めてる、馬鹿なお姉ちゃんとかがつて」

「えへへー、えらいんだー、馬鹿のお姉ちゃんとかがつて」

むー、聞こえてるわよ。ニル、ミルー、あとで覚えておきなさい。
お仕置が必要なようだからね。

とまあ、自覚した私は、大きい魔術石を集めることにした。私の頭の二倍ぐらいおおきな魔術石を持つとしたけど、無理があるので、私は、頭ひとつ分ぐらいの魔術石を持つことにした。

「ん、これならもてるわね、軽い軽い、さーって、あっちはどうなってるかなあ？」

私は、魔術石を片手に持ち、後ろを振り返った。そこには、頭の三倍ぐらいの大きな魔術石をニルが一人で持つている姿が見えた。む、どんだけ馬鹿力なのよ。しかも、片手で……。女は不利ね。腕力がないんだもの。（鍛えればいい話だけど、あんまり、やりたくないのよねえ）はあ、仕方ない。もうひとつぐらい、魔術石を持つとうかな。

「さてと、これぐらいでいいだろ、ミコトのところに帰るとするか」

「魔獣なんて、いつ来たってへっちゃらよ！」

「お、お姉ちゃん、本当に来たらどうするのよ」

え？ そのときは、そのときよ！ 成せばなる！ おじい様がよく言っていた言葉だけど、意味はよくわからないわ。（調べればいいだろうけど、あいにく、本なんて、生きてきた中で、見たことない）

side out

「ダスティース……もう、現実世界じゃあ、何時間たったかなあ？」
「おそらく、2時間ぐらいだと思うが。こちらでは、一日が終了してしまっただぐらいだな」

はあ、結界があるとわかってから、出れるところがないか、確かめまくったが、どこにも、なかった。

まさに、時間の無駄！　だな。なんで、結界があるのかは、わからないが、早く俺をだせー！

そのまま、俺たちは、なんか疲れたので、ひとまず眠ることにした。起きたときには、結界がなくなっていることを信じて……

と思ったときもあったよ。だがな、目が覚めても、結果がある。どういうことなんだよ！　ここは牢獄か！　いったいいつになったら出れるんだよ！

「もう、疲れたー、何もしてないのに、疲れるってどういうことだー、うがー」

「主よ……。言いにくいことなのだが」

なんだよ、なにかあるなら言えよ。こっちは、もう、何もすることがなくて、飽きてるところなんだから。暇！

「実は、主の体が動いているのだ」

「は？　なんて、いいましたか？　奥さん？　もう一回いつてくさい」

半信半疑で、ダステイスに聞きなおしたところ、やっぱり、俺の体は、動いているらしい。俺も、ダステイスもここにいるのに。なぜ、俺の体が動いているのか。それは、短時間で、わかった。

「邪神、だな」

「むう、認めたくはないが、どうやら、封印が解けたらしい。信じたくはないが、な」

はあ、なんで、こう、なるの……。ああー、もう、どうでもいいやー。眠よーっと。無責任だけど、きにするミコトさんではないのです。

「主？　主！　寝ている場合ではないのだぞ！　主！」

第十話、破滅の一日前（後書き）

獣人の服装について。

獣人は、人間とは違い、下着は着用しない。ただ、体の上に、服をきるだけ。もちろん、お尻のところには、尻尾をだす穴がある。ただそれだけなのだ。ファッションとかは、関係なくて、男でも、女服を着ることがあるし、女でも、おとこ服を着ることがある。まさに、女と男の服は、一緒といっても過言ではない。

次は、巨人族の服装です。

感想などをおまちしております。

こんにちわ（こんばんわ）作者のミーナです。現在、ここまでは、修正が完了しました。（お、おそい、とかいわないでね）皆さんには、待たせてばかりですが、どうか、見捨てないでください。では、また、いつか会いましょう。

六月二十八日、火曜日。作者ミーナより。

第十一話 破滅の日（前書き）

くあらずじく ミコトの元へと向かうリルたちをよそに、ミコトは、森から出ており、近くの村で、ビル（酒）を飲んでた。そして、殺戮を楽しみ、そのまま、森に入り、ニルたちと、遊び始めて……

第十一話、破滅の日

「かかかか、姉ちゃん、もっとビルをもってこーい」

「はい、今行きまーす」

くつくつく、愉快だなあ、契約主は、結界の中に、封印したし。邪

魔な、精霊王もいない……。

ああ、愉快愉快。^{ゆかい}

「ごく、くむ、ごくごく、ぷはあ！ 最高だな、ビルは」

人類はいいものを作ったもんだ。こんな、うまいものを、作るとは、な。【故郷】では、毎日毎日、したつぱで……。いや、いまはそんなことかかんがえてるひまはないな。ああー、幸せだ。

そういえば、なにか、乗り移ったときに、持ってたな。使ってみるか。（記憶には、父親を殺して、奪ったとあるが、まあ、気にしないで置こう）

「……。神が与えし神器の力を、ここに発動する。役目は、束縛。周りにいる連中を、奴隷にせよ」

……これで、いいのか？ 記憶にあることをやっただけだ……。――

「ご主人様ー、私のことを、抱いてー」

「私もー、おねがいしますう、ご主人様ー」

くくく、さすがは、神器。即効性がある。それにしても、群がるな。こいつらは……。

うざったい、メスどもが。消えろ。

ブシュウウウ！

……脆いな、人間は。突き刺しただけで、息絶える。なぜ、こんな生物が、この世界にいるのだ。

まだ、竜人の方がましだ。あいつらは、うろこで守られてるからな。突き刺しただけでは、死なない。……まあ、俺なら、瞬殺だがな。くくく。

「きゃあああ！だ、だれか」「目障りだ、カスガ」あ、あ、あ、あ、

「

まだしゃべれるのか。体半分を吹き飛ばしたのに。しづとさだけは、害虫なみだな。

ブシュウウウ

さらに、体半分を消し飛ばした、俺は、あたりに散った、腸や、心臓を、【悪魔界】で材料にしようと、亜空間倉庫を出現させて、そこに入れようとしたとき、店の奥から、誰かが、来たので、問答無用に突き刺して、ふき飛ばした。

…… ああ、楽しい。楽しい楽しい楽しい！ 最高だ！ この
 感触！ 病み付きになる！

そして、あたりを血に染めた俺は、そのまま、店の中に入り、手当たり次第に、周りにいるカスどもをなぶり殺しにした。だが、もう、生き残りがいない。……そういえば、森の中に、骨のあるやつらがいたな……。翼人が……。くくく、遊びにいくか。

そして、森の中に入ったが、どこにも、反応がなかった。あ？どこいった？ あいつら。

……考えられるのは、建物内にいるか、暗黒魔術を使った、だろうが、あいつらは、暗黒魔術を使えないはずだ。記憶のとおりならなしばらく、それについて考えていたが、俺の脚に、何かがあたったのを、感じたので、考えを中断した。

「ブヒ、ブヒ、ブヒ！？ ブヒイイイイ！」

あ？なんだ？ こいつ？ ……うまそうだな。久々の肉だ（故郷では、肉なんて、食わせてもらえなかった）味わって、食べることにしよう。くくく。

まずは、丸焼きにして、骨を溶かし、そのまま、食らう。それが一番だ。そして、一目散に逃げようとしている、生物（名前がわからん）を瞬殺した俺は、右手に、火球を生み出し、それを、生物に思い切りぶつけて、闇魔術を使い、骨の髄^{ずい}まで、溶かしたあと、よだ

れが垂れるのを感じながら、かぶりついた。……うまい。この少し
こげた感じがまた……。

- 神は、食わなくても、寝なくても、生きられる。だが、それでは、あまりにも退屈だ。だから時々、この世界に降り立ち、食い物や、睡眠をとる。(と記憶にはある) もちろん、俺みたいに、人は殺しはしない(とおもう) 金も、ちゃんと支払う(とおもう) だが、それじゃあ、つまらない。

だから俺は、生物を殺して、その感触を楽しむ。それが、俺の、生きがいだからだ(ここ最近の趣味)

これを邪魔するようなやつは、俺が皆殺しにする。俺の前にいる、武器を構えた、翼人どもも、な。

いったいどこから来た。……そうか、翼人には、反応がなかったな(いま思い出した)。目の前にいたことも、盲点だった。早く気づいていれば、ばれずにすんだのに。

「ミコト……。おまえ、そこで何をしている。もう大丈夫なのか？」

「ミコト！　なんで、殺したのよ！　お母さんと約束したんでしょ？　私が言える義理じゃないけどさ」

「ミコトは、いままで、殺しなんて一回もしなかった。でも、今のあなたは違う。人の血のにおいがするもの」

あ？　なんだ？　説教か？　……俺様に、説教か。は、笑える。笑えるぜ、おい、神(悪魔)に説教？　は、馬鹿だなこいつら。殺してやろうか？　……くくく、だが、まだ、殺しはしない。

十分楽しんでから、殺す。そして、貪る。むさほくくく、翼人の肉は、どんな味なんだろうな？

人間みたいにならなかったら。あたりを、破壊してやる。くくく。

「何とか言え！　ミコト！」

ああー、うるさいな。まずは、お前から、いたぶるか。確かニル、とかいったか？（封印されている間も、話し声だけは聞こえたのでわかる）

「ほ……よ」

「え？ なに？ なんと言った？」

無防備だなあ。お前ら。安心しきってんっじゃねえよ。家族だから信じてる。とかか？

は、残念だったな。今の俺は、あいつじゃあない。邪神（悪魔）だ。そして、近寄ってきた女が疑問のまなざしで俺を見ているのを見て、笑いつつ。女の目の前で魔術を放った。火属性を、な。

ブオオオオオ！

「っ！？」

お、なかなかやるな。とつさに、後ろに飛んで、直撃を避けたか。だが、今度は、どうかな？

「水よ！ 風よ！ 土よ！ 闇よ！ 光よ！」

「なっ！？ 魔術を、連続で、放つだと！」

あ？ なに驚いてんだ？ 氷のメルニムスを持っているこいつが火を使ったときに、驚けよ。馬鹿か？ こいつ？

俺の放った五属性は、あたりを不規則に飛びながら、翼人たちを、じりじりと、追い詰める。

くくく、さて、ここに、さらに足したら、どうなるかな？

「爆裂よ！ 氷よ！ 雷よ！ 暗黒よ！」

ブワアアア！ キュウウウウ！ ドドドドド！ シュウウウウ！

「っ！？ みんな！ いったん退くぞ！」

「わ、わかった！」

「う、うん」

ほお、この魔術の嵐の中、最適なルートを選んで、逃げたか。人間よりは、頭がいいな。

だが、それだけだ。この追尾製魔術からは逃れられない。――地下に逃げても、地面を挟み取りながら、進むだけだ。海に逃げたら、水を干上がらせて、壊すだけだ。くくく、なにをやっても、逃げられるわけがない。くくく。

ニルside

おかしい。ただいえることはこれだけだ。ミコトが破壊を楽しんでいる。俺たちを標的に。

なぜ、あんなったのか？ 精霊を宿したときのミコトの様子は、少し、無口になったただだった。

それが、どうだ？ いまは、魔術を使って、俺たちを追い詰めてくる。疑問に思うことはたくさんあるが。今は、逃げることを最優先に考えなければいけない。俺が盾になっても、こいつらは、逃がさなければいけない。それが、男の使命だから。

「光の魔獣よ！ 後方のものを排除せよ！ セイントビースト！」

四方八方から飛んでくる、魔術を、俺の光の魔獣が何とか、食い止めたが。

その場しのぎでしかない。上級魔術並の威力なんだ。【中級魔術】では、一分と持たないだろう。

だが、ここは俺が食い止めてみせる。絶対に！

「お前たちは、先に、神殿に行け！ あそこなら、入り口を閉じれば、なんとか、しのげる！」

「でも！ ニルが！ いいから行け！」う、うん、死なないでね。ほらいくよ、ミル」

「お兄ちゃん！ 絶対に、死なないでよ！」

ああ、わかってるよ。こんなところで死ぬわけがないだろう。お兄ちゃんを信じる。

それを言葉では言わず、目で合図して、俺は、さらに光の魔獣を、

魔力が尽きるまで生み出し続けた。

現れては、消え、現れては、消え、と、もはや、完全に、負けているこの状況で、後つかえるのは、生命力^{マナ}を使う、【古代魔術】しかない。

もはや、考えてる暇はない、やるしかない。やらなきゃ殺される。だから、やるんだ。リルたちを守るんだ！

「ダ・ミ・ル・ル・マ・ニ・カ・ル・タ・ミ・ト・オ・タ！ 雷ノ暴風！」

俺の命が、削られているのを感じながら（翼人は不便だ。エルフみたいに、代償なしで使えないんだから）前方に現れた、雷の風を盾に、一歩下がる。あいつは気づいてないだろうが、俺はもう、ぼろぼろだ。身体的な意味ではなく。命^{マナ}が、ぼろぼろなんだ。

っ、もう、リルたちは、行ったかな？ ……くそ、なんで、生命力のぎりぎりまで使わないと、消せないんだ。おかしいだろ。上級魔術じゃないのか……。それに、ミコト……はやく、戻って来い。

お前には、説教を食らわせてやる。なぜ、こんな力を持っているのかを、な

そこで、俺の意識は途切れた。

もう、何もかもが、真っ白になるのを感じながら。

side out

……。俺の魔術を消したか……。古代魔術でも使ったか？　くく、遠慮なく使うとは。

馬鹿なやつめ。生命力をよほどこめないと消せないのにな。今頃、どこかで、気絶、あるいは、死んでいるな。ああ、楽しい。楽しい！　もつと、俺を楽しませろ！　くくく、ははは、あはははは。そのまま、ゆつくりと、十分かけて、歩いた俺は、翼人が倒れているところまでたどり着いた。

「もうすぐ、死ぬな。こいつは……。しかたない。楽しむためにも命を与えてやるか……。くくく、【悪魔の心臓】（悪魔だけに伝わる、対象のものの命を助ける代わりに、人形にするための心臓だ）を、な。くくく」

そして、男の心臓を抉り出し、代わりに、黒く光る球体を入れてやった。するとどうだ。

体が、のけぞり、起き上がったではないか。くくく、さあ、もつと俺を楽しませろ。

そして、最後には、残酷な方法で殺してやる。くくく、ははは、あ
ーっはっはっ！

第十一話、破滅の日（後書き）

巨人族の服装について。

巨人族は、服というものに興味がなく、何もきていないことが多い。（女は恥じらいというものを知らない）たまに、服を着るものがあるが。それは、人間ナドノハーフであることが多い。また、巨人族に合う服がないから、着ていないとも言われている。

次は、妖精族についてです。

感想なども、書いてくれるとうれしいです。では、また。

第十二話、破滅の日2（前書き）

くあらずじく 邪神（悪魔）が宿っているミコトが、ニルと遊ぶ中、
本当のミコトは、精神世界で、孤軍奮闘していた。

第十二話、破滅の日2

俺が起きたとき、ダステイスは、魔術を結界に当て続けていた。だから、俺も、氷魔術を浴びせはじめた。

だが、なにも起きなかった。くそ、どうやっても、壊せない。どうなっているんだよ。

ダステイスも、疲れてるみたいだし。もう、なにをやっても、壊せないのか……

「……主。この結界は、光属性で、できている。ならば、弱点の闇を浴びせ続ければいいと思ったのだが。どうやら、火属性も混ざっているらしい。同時に二つの魔術を当てれば、壊せるかもしれない」

……同時にって、それ、難しいぞ。詠唱も、同じスピードで言わなきゃいけないし。……はつきり言って、無理だ。絶対にできない。俺が保障する。

「その様子だと、同時には、無理なようだな。なにかないものか……」

うーん、なにか、あるはずなんだ。結界を、壊す方法が……。あー、結界を、やわらかくできれば、あとは、簡単なんだけどなあ。……。あ、そういえば、いまのいままで、めんどくさいから、改良を、やめてた、魔術があったつけ。……でもなあ。あれ、やるの、めんどいんだよなあ。……それに、医療以外使わないって、決めたし。

「……主！ あったぞ！ 方法が！ 【構創】を使えばいいのではないか？」

「えー、でもさー、あれ、正直使いたくないんだよなあ」

そんなことを言った俺が馬鹿だった。それを聞いたダステイスは、顔が、ブシュ（トマト）みたいに、赤くなり、俺に、ねちねちと、文句を言ってきた。

「だから、主は、だめなんだ。そんなことだから、強くなれないのだ。だから、下等生物なんだ。だから、馬鹿なんだ。だから、アホなんだ！」

……おい、なんか、時々、暴言が混じってたぞ。いいのか、それで……。俺、主なのに。

はあ。仕方ないな。本当はいやだけど、やるしかないか。

「あー、やるか、ダステイス「心得た！」耳元で、叫ぶな。わかったから」

まあ、出る方法はそれしかないんだし。やるしかないか。……本当はいやだけど。本当はいやだけど。

そして、いやなのに、と、心の中で、何回も愚痴っていると、ダステイスが、また怒りそうなので、いったんやめて、俺は、精神を集中させた。

今回は、互いに姿が見えるから、やりやすいだろう。

さて、まずは、自分の、魔力を感じる。どうも、この魔術のときだけは、これをしないと、成功率が低くなるんだ。だから、省くことはできない。

……やっぱり、青いな。本当に、御伽噺の【地球】に似てる。……あー、さて、ここまでは、いつも成功するんだけど。ここからがな。……昔は、魔術を放った後に、融合させて、やってたが、あれじゃあ、いつまでたっても、上達できない。だから、二年前から、互いに魔術を感じたあと、そのまま、それを、壊さず、取り出し、【魔

術回路】（これは、魔術を使うやつならだれでも使うんだけど、みんな、無意識にやっているから、感じながらやる俺は特別なんだと場所は心臓の横にあると思うんだけど、詳しくは知らない）に持ってきて、そこで、二つの魔力を融合させて、【構創】のメルニムスを作るんだが……。

なんせ、成功率が、〇%なもんで、成功したためしがない。だから、あきらめて、やめてたんだが……。今回は、それじゃあ、だめだよな。なにがなんでも成功しないと。

そして、覚悟を決めた俺は、魔力を取り出して待機してくれた、ダステイスにあとでなんかお礼をあげようと、思いながら、青い魔力を取り出した。そして、ダステイスに、目で合図をした後、あとは、流れ作業のように、魔力を、【魔術回路】に持っていく、先にダステイスが俺の【魔術回路】についているのを、さすがだと思いつたと同時に、俺も解き放ち、二つの魔力を、マグマのようにどろどろにして、鉄を精製するときのような感じで、融合させた。パイン、という効果音のあと、しばらく光で見えなかったが、晴れると、そこには、十年前に見た、群青色の魔力が存在していた。

「やった！ 成功だ！」

「ああ、成功だな」

さて、鑑賞にに浸っている場合じゃあない。早く、結界を構築しなおして、ここから出ないと。

そして、あとは任せたとばかりに、座り込んだダステイスを見ながら、結界の前に行き、久しぶりに、【構創】用に考えた、詠唱を紡いだ

「ふう。……さあ、構築を開始する。まずは、解析。……。……。解析終了。構築を開始する。目的は、強度の変更。構築を開始する。

……。構築終了。強度を、マイナスに変更した。これより、
……ラストオーダー……構築の最終段階に入る。リ・マ・ル・ド・ア・ル・タ。……構築。
発動！」

シュワアアアアア！

この魔術の難点は、構築したあとも、さらに、魔力を込めて、最終
オーダー段階と呼ばれる、構築したものの、元の情報を魔力に刻むことをし
なければいけないことだ。これをやらないと、元に戻すときなどに
情報を覚えていないといけないため、大変だから、取り入れたもの
だ。別に、いまは、これをやらないいんだけど、いつか、結界を張
るときに、これを土台にして作りたいので、やったまでだ。

「よし、あとは、突っ込むだけだな」

ダステイスは、返事を、首を縦に振ることで、答えた。さてと、長
かったような短かったようなここから、やっと出られる。早く外の
空気を吸いたいもんだ。

邪神（悪魔） side

む、俺様の、結界を破ったか……。だが、それだけでは、いけないな。結界の外には、何層にも続く各属性の結界が張ってある。お前たちには敗れないだろうな。なんせ、魔術は、二種類しか使えないんだからな。さて、起き上がった男をどうするかだな。俺の言うこととはなんでも言うこと聞くし。最初は、何をさせようかな。くくく。

「まずは、土を食べろ」

「はい」

男は、地面を掘り、土をむさばるように、食べ始めた。くくく、傑作だな。土を食べる種族なんて、聞いたことがないぞ。まあ、俺が食べさせてるんだけどな。

「さて、次は、逆立ちしながら、飛べ」

「は」

これは、人間には、無理だろう。けどな。翼人なら、できるはずだ。ほらみるちゃんと、できた。腕の筋肉を使って、手に、魔力をまとわせて、飛んだというところだろうな。

次は、何をさせよう……。いいこと思いついた。こいつに、家族を殺させよう。それがいい。

家族に殺されるなら、あいつらも本望だろうしな。くくく。

「逃げた、二人を見つけて、殺せ。そして、そいつらの亡骸^{なきがら}を食べる」

「は、い」

さすがに、拒絶反応がすこしあるな。まあ、支障はないだろう。さて、俺は、ここで、一眠りするか。

起きたころには、亡骸が置いてあるだろうしな。くくく、ああ、この世界は、楽しいな。最高だ。邪神に乗りうつってなって、本当によかった。

side out

リルside

私たちは、いま、神殿の中にいる。ミルと震えながら、抱きしめあっている。なんで、こんなことになったのよ。いったいどうしちゃったのよ。ミコト。

「お姉ちゃん、怖いよー」

「大丈夫、大丈夫だから、すこし寝なさい。いいわね？」
「うん」

ミルはよほど精神的に疲れたのか、あっというまに、寝息をたてて、私の膝の上で、寝てしまった。

まだ、心は子供だもんね。しょうがないわよ。こんなこと、私でも初めてなもの。こんな、怖い夢のようなこと、早く終わるといいんだけど。

すると、私も、睡魔に襲われて、いつのまにか、眠ってしまった。こんな怖いことが、目を覚ましたときに、終わっていると信じて。

私が目を覚ましたのは、そこから、なにか声が聞こえたからだった。
なにかしら？　もしかして、ニル？　私は、眠っているミルを静かに
膝から、おろして、神殿の外にでた。
すると、そこには、土まみれの、ニルがたっていた。

「ニル！　無事だったのね！」
「……………」

ニル？　なにか様子がおかしいと思った私は、ニルの目を見ようと、
顔を近づけた。
するとどうだろう。いきなり、光魔術を無詠唱で放ってきた。
私は、それを、とっさに生み出した光の盾で、ガードした。

「ニル！　どういふことよこれ！」
「……………」

なんで、何も言わないのよ！　あんた、おかしくなったの？　なん
で、いきなり攻撃を仕掛けてくるのよ！　今日はおかしいことだら
けだわ

「ニル、なんでか知らないけど、操られているのね？」
「……………」

操られているなら、話は早い。どこかに、あやつっているキシン（糸）があるはずだわ。

もし、あのミコトが、人形使いじゃないなら。その可能性は低いけど。人形遣いなら、戦いながら、キシン（糸）を切れればいいわ。ニルは、いま、戦えないし。いまとめられるのは、私だけ。

「ニル！ 聞こえてるなら、聞きなさい！ あんたと戦って、もし私がまけたら、あんたが、ミコトをとめるのよ！ わかった？」
「……………」

さて、本当は、戦いたくないけど。しかたない。ニルを助けるためにも。戦わなきゃ！

s i d e o u t

はあ、なんで、見渡す限り、結界なんだよ。しかも、ダステイスがいうには、全部に違う属性が付いているらしい。これじゃあ、敗れないじゃないかよ。邪神のやろう、考えやがったな。

しばらく、黒くなった空間で、ダステイスと考えていると、ある方法をひらめいた。それは、【無属性魔術】を使うこと。（構創は、もう、精神的にきついたため、やらない）だが、俺が使つと、破壊になつちまうんだよね……。って、破壊でいいじゃんか。結界を破壊するには、破壊しかないな。うん。それしかない。決めたら、即行動するべし。

「青い（赤い）星よ、はるか遠くから、こちらに、向かい。我の元へ、たどり着け。東からは、小、西からは、中、南からは、大。そして、北からは、特大！ 無属性魔術（破壊魔術）スターライト！（ブレイスター！）」

シュン、シュン、シュン、シュン！ ドドドドドドドド！

・・それは、黒い空間を一瞬にして、赤く染め、結界を壊しながら、地面に激突し、クレーターを作った。

あちゃあ、すごい威力だな。よほどのとき意外には使いたくないな。

「ため息が出るほど、馬鹿みたいな魔術だな」

「我も、同感だ。一瞬にして、破壊するとは、さすがは、無属性魔術だ」

本当、なんで、俺が使つと、破壊になるんだ？ ニルがいうには、それは、お前がどこかで、破壊を望んでいるからとかいってたけど。それは、ないと思うんだけどなあ。俺は、善人だし。……。

「主よ、我は、戻ってきた邪神を封印するために、ここに残る。だから、主は、元の世界に戻ってくれ」

それって、また、あの、封印魔術を使うってことか？ - 精霊と神だけが使えらるという魔術で、代償が必要な代わりに、神でも封印できてしまうという魔術。代償が必要な分、使える回数は限られており、あまり、使う者はいないとされている。とかいってたな。ダスティスは。

「……わかった。絶対に生き残れよ」
「まかせてくれ」

そして、俺は、元の世界に戻るため、ゲートっぽいところを通り、上に登っていき、光が見えた瞬間、自分の体に戻っていた。なんか、すごいな。これ。便利だな。またやってみたいな。ははは。……もう、二度やりたくない。

第十二話、破滅の日2（後書き）

妖精族の服装について

妖精は、水色の上下が合体した服を着ていることが多い。背中部分には、羽を出すところがある。服にはうるさくて、汚い服を着ている人がいたら、ぐちぐち、その人に文句をいい、脱がすとされている。妖精の服を作るのは、手先が器用な、人間だけである。

第十三話、破滅の日₃（前書き）

邪神の結界を見事、消し去り、ダスティスを置いて、下の世界に戻ったミコト。いっぽう、ニルと戦闘をしているリルは……

第十三話、破滅の日3

リルside

一言で言うと、無理。いつものチャラけたニルじゃないみたいに、強い。戦闘技術はもちろんのこと、魔術を連射してきて、防戦一方状態になってる。どうやって、この状態を覆そうか……。呼びかけても、無言のままだし。かといって、攻撃しても、跳ね返してくるし……。ミコトがいれば……。だめ、ミコトは、いま、別の敵（邪神）と戦っているはず。ここは、私がどうにかしなきゃ。

「求めるは、光！ シャイン！」

私が早口で詠唱した瞬間、虚空から青白い光が生み出され、ニルへと迫っていく。

「……シャイニングミラー」

いつもの陽気な声ではなく、裏返った声で、無詠唱魔術を唱えて、私の魔術を跳ね返してきたので、私は、それを、横に転がることで避ける。……本当にどうしちゃったのよ、ニル。

「地面を抉り取れ、光よ！ シャインデグリ！」

- 光の球体が、土竜うづものように、地面をえぐりながら、ニルに迫る。だが、それを、ニルは、埃でも払うかのように、光の障壁で、ガードする。……こんなことなら、もっと、魔術を勉強しておけばよか

った。あんな障壁があるなんて……

「光の聖獣よ！ 目の前にいる敵を、浄化せよ！ 光の浄化ver
3、8！」

これは、私が、昔、森に迷い込んだとある宗教の人から、習った魔術で、悪霊の類や、悪が満ちているものを完璧とまでは行かないけど浄化できる魔術で、改良を重ねたもの。だから、悪霊なら、一発で、浄化できるはず。どうか、ニルにとどけ！

シュワアアアアア！

- - あたりが光に、包まれて、視界が白一色になる。まるで、太陽を直視してしまったときのような。

目を瞑る瞬間、私は見た。ニルが、私に魔術を放ってくるのを。

「うそ、でしょ、なんで、見えるのよ。ニル」

そこで、私は魔術をもろに受け、意識を手放すのを感じた。ああ、ニル。ごめんね。お姉ちゃんは、何もできなかった。本当にごめんね。ニル。

side out

ザシュ！

……間一髪間に合ったな。しかし、なんで、ニルがリルを殺そうとしたんだ？ まあ、防げたからいいけど。それにしても、十字爪クロススクローを突き刺したつてのに、まだ、意識があるのか。

すこし、ビクビクしてる……。まだ息があるのか。くくく、早く【破壊】せねば。……あれ？ おかしいな。俺が、こんなこと思っは
ずないのに……。邪神の影響、か。そういえば、ダステイスは……
……ダステイス。いままで、ありがとうな。邪神とともに消えてしまっ
たんだろう？ また、いつか会えるといいな。天国でな。

「……悲しんでいる暇はない。今はとにかくニルとリルをどこか安全なところに……。ん？ なんだ？ なにか、俺の道具袋の中になにかはいつてるな……。これは！ 心臓？ ……誰の心臓だ？ 二人の鼓動を確かめてみるか」

なぜ、驚かなかったのかは、おいといて、俺は、二人の胸を音を聞いた。そして、この心臓の持ち主が、ニルのだと知った瞬間。地面をたたいていた。

「なんでだよ！ なんで！ なんで、だ、よ。くそおおお！ あ

いつ！ ニルにこんなことを！」

あたり一面を【破壊】するか。っ！？ 落ち着け、落ち着くんのだ。なぜこんなことを考えていいんだ俺は。それじゃあ、意味がないだろ。

「すー、はー、すー、はー、……よし、落ち着いた。まずは、現状確認だ。俺は、精神世界から戻った。リルは無事。ニルは……。何とか生きている。そして、ミルは……。たぶん神殿の中にいるはずだ。じゃないと、リルが出てくるはずがない。とりあえず、ミルのところへ行かなければ」

そして、二人をおぶい、俺は、神殿に向かった。地面に深い、足跡をつけながら。

いた、ミルだ、眠ってるな。にしても、玉座の前で、寝るか？ 普通……。とりあえず、ミルを起こして、ニルのことを話さないとな。俺は、二人を、背負いながら、ミルの元へと歩いた。にしても、重いな。たぶんニルが重いんだと思うけど……。まさか、リルが重いんじゃない……。ぶるぶる、それを言ったら、あとで、怒られるな。そのまま、二人を横におき、ミルをあの言葉で、起こさせた。

「ルリおねえちゃんが、結婚したぞー」「え！？ な、なに！ お姉ちゃん！ ……ミコト？ ……ミコトー！」

がばつと、抱きつくミル……。うーん、男なら、喜ぶべきなんだけど、あいにく、家族に発情するようじゃ、変態だし……。とりあえず、おろすか。目の前にいるミルの耳にふーっと、息を吹きかけて、はにゃーん、とさせてから、するりと、抜け出して、すんと、そのまま、あくび胡坐をかいた。

「ミル。よく聞け、お前のお兄ちゃんは、いま、心臓がない」「え？ でも、ぴくぴく動いてるよ？」

まあ、そう思うのは仕方ないことだ。だが。

「心臓のところに耳を当ててみる」「？ わかった」

そのまま、魚のようにぴくぴく動いているニルの胸にミルが耳を当てて、しばらくたつと、悲しそうに、胸から、耳を離して、俺のほうを向いてきた。

「ミコト……。お兄ちゃんが、お兄ちゃんが！」

「落ち着け、まずは、ルリを起こすぞ」

泣きそうなミルをひとまず落ち着かせて、ルリの耳にふーっと息をかけた。

「はにゃーん……。って、なにするのよ！」

条件反射で、殴ってくるルルのパンチを片手で受け止めた、ルルを落ち着かせる。この二人、姉妹そろって、耳に弱いのだ。ニルは、急所にパンチすると起きる。まあ、それは、誰でも当てはまるけどな。

そして、ルルに、心臓がないことを説明して、しばらく、三人で、ニルを見ていたが、ミルが耐え切れずに泣き出してしまった。まあ、しかたないな。俺でも悲しいんだから。もう、救う方法がないと思うと。

「ミル……。大丈夫、泣かないで。私が付いてるから」

その言葉を聴いて、さらに、ミルは大きな声を上げて泣き出してしまった。逆効果になったな。

はは……。さて、これからどうしたらいいんだ。ダステイスがいれば、どうにかなったかも知れないのに……。そのときだった。心の中に、何かが突っかかるような、ものが、突然、入ってきたのは。思わず、変な声を出してしまい俺は、ルルに変な目でみられた。そんな目で見えるな。俺もわけがわからないんだから。

「（主……。ただいま戻った）」

「（ダステイス！ おまえ生きてたのか！）」

俺の言葉に、ダステイスは、「もちろんだ」と答えて、自分の身に合ったことを説明してくれた。

なんでも、ダステイスは、邪神と戦い、引き分けになったそうだな。

（精霊が神と引き分けって……）

しかし封印ができなかった。そして、最後までたっていたダステイスは俺の元に戻ろうとしたらしい。

だが、邪神に道ずれにされて、地獄に落ちてしまったらしい。ダステイスは、落ちたそこで、しばらく過ごしていたとき、突然、体が光り、邪神（悪魔が取り付いていたらしい神）とともに、俺の元に戻ってきたらしい。……にしても、地獄って、本当にあったんだな。もしかして、天国もあるのか？

……いけるなら行って見たい……。いや、なにを考えてるんだ俺は。天国ではなく、俺が行くところは、地獄だというのに……。ま、当分死ぬつもりはないけどな。絶対に、百歳まで生きてやる！

「（主、邪神……いや、ミルスカスラダミシュイダーキサウが、話があるそうだな。いやかも知れないが聞いてあげてくれ」

ミルカス、なんだって？　ながいよ、名前が……。まあ、いやじゃない。神の話も聞いてみたいしな。

「（……ミコト、すまない。どうやら、俺は、悪魔と呼ばれる、神に敵対するやつのに操られて、おかしくなっていたらしい。本当に、ごめん！　あとで、ひとつだけ、願いをかなえてやるから！　な、な？　）」

なんか、話してみると、以外にフレンドリーだな。まあ、願いをかなえてくれるなら、許してやらんこともないけどな。

「（じゃあ、お前（いや、悪魔か）が心臓を抜き取った、ニルをどうにかしてくれ）」

「（おう！ 任せてくれ！ じゃあ、俺と交代だな）」

交代、か、ダステイスだけとやると思っていたが、まさか、神とまで、交代するとはな。

ま、邪神だけどな。神の力は、そのまま、あるらしいから、性格には、心が堕ちた神、通称、心堕神しんだしんだな。にしても、名前が長いな。呼ぶときは、ミニルスでいいか。

シューウウウウ

ミニルス side

ニコトと変わった俺は、まず、泣いている女の子と、それを抱き

しめている女の子（俺にとっては、生き物は、みんな子供）に、人間族の東の国（日本）ではやっているという、土下座をして、なんども、頭を地面にこすり付けた。

「は？ なにやってんの？ ミコト？」

「頭でもおかしくなった？」

いつの間にか、泣いていた女の子も俺に向かって、変な目で見てくる。だが、そんなことを気にしてる暇はない。あやまりまくらなければ。そういえば、天使に聞いたけど（神なので、念話できる）俺の親父、キニルスキラスラダミシュイダーキサウは、死んでなかったらしい。どうやら、俺が殺したと思われるのは、影武者だったそうだ。……あとで、親父にも、あやまりまくらなくやな。悪魔のやろう。俺の親父にまで手にかけてようとしやがって。

「ごめんなさい！ 俺は、あなたたちのことを傷つけた、神ですよるしてとまでは、言いませんが、どうか、許してください！」
「あんたねえ、言ってることが矛盾してるわよ。……はあ、もういいわ、許してあげる。だけど、ちゃんと、ニルを、直しなさいよね」「はいです！」

そして、俺は、立ち上がり、ニルと呼ばれる少年の前に立ち、心臓部分をさすって、ミコトの道具部に入っていた心臓を、体内に戻して、【神術】（別名、神の業ともいう）と呼ばれる技を使い、鼓動を始めさせた。それを見ていた二人は、あっけにとられて、呆然としていた。ふふん、それもそうだろう。俺の神術は、虹色に光るんだから。

……ごめんなさい。そんな目で見ないでください。でしゃばりすぎました。心の中で謝ります。
ごめんなさい。

そして、しばらくすると、ニル少年が、脈打ち始めて、がばっと起きだした。

「あれ？ 古代魔術を使っただけで、死んじゃなかったっけ？」

第一声が、それですか……。もっと、いうことがあると思うけどなあ。……はい、すいません。そんな目でまた見ないでください。謝りますから。心の中で。

「ニル！」

「お兄ちゃん！」

ぎゅーっと、ニル少年に抱きつく二人……。うーん、人間によれば、これは、感動、らしいが、俺にはよくわからないな。まあ、いつかわかるだろう。さてと、ミコトと変わるか。

シューウウウウ

side out

第十三話、破滅の日3（後書き）

道具の説明。

十字爪 それは、土魔術で、作れる、日本で言うクローみたいな、形の、武器である。これは、変形することができ、ボタンを押すと手裏剣みたいになり、そのまま、飛び道具としても使える。

地獄について。

地獄とは、すなわち、前世で、閻魔が定める、掟を破ったものがくるところで（下に表記します）、来世は、少ないものから、百年、多いものから、千年間は、いけないとされている。これは、一部分なので、また続きがあります。いつか書くと思うので、待っててくださいいな。

掟

百年、盗みなど、軽い犯罪にまつわるもの。

二百年から、五百年もの強姦など、性的犯罪にまつわるもの。

六百年から、九百年もの殺しなど（自然に踏んで殺してしまったなどはカウントされない）、重犯罪にまつわるもの。

千年 悪魔を召還したりする 禁忌犯罪にまつわるもの。

悪魔とはすなわち、神に対なす力を持ち、地獄の上に位置する悪魔界に住んでいる生物で、とある魔方陣を描き、呪文と魔力があれば、

呼び出せ、代償を払い、願いをかねえらということができる。この方法は、あまり知られていない。

エルフ族の服装について

エルフ族の女が着る服は露出が激しいものを着る癖があり、胸などは、ぎりぎり見えないぐらいのきわどい服を着る。男は、女とは違い、エルフ服と呼ばれる、日本で言う、和服みたいなものを着るとされている。

次のあとがきは……なぞが多い吸血鬼族とそのたなんやらです。

感想などもお待ちしております。ふああ、眠い。明日に備えて、眠るとしよう。

第十四話、あの時のこと（前書き）

くあらずじく 無事、ミニルスの力により、精神が蘇り、生還した
ニル。兄弟とミコトと、抱きしめあい、喜びを分かち合っているな
か。ダステイスと、ミルニスは、心の中で、会話を楽しみ、あのとき
のことを思い出していた。

ダステイスが主役の時は、三人称になりますのであしからず。
あと、神の名前が出てきますが覚えなくていいです。

第十四話、あの時のこと

「（主は、楽しそうだな。笑っている。まるで、何か面白いものを見つけたときみたいに）」

「（そうだな。俺も、あんな時があつたっけな……）」

ミルニスは、どこか遠くを見て、さびしそうな、顔をして、なにかを振りはらうように、ダステイスに話しかけた。

「（そういえば、悪かったな。ダステイス）」

「なにがだ？」 とダステイスが答えて、ミルニスは、すこし、戸惑い気味に、話を進めた。

「（お前に傷をつけてしまったことだよ。悪魔に取り付かれていたとはいえ、悪いことをした）」

本当は覚えていないはずなのだが、天使にすべてを聞いているので知っている。

「（ああ、そういえば、これは、お前に傷つけられたのだな）」

ダステイスは、左目の下にある、縦一線に伸びている、傷を触りながら、何かを思い出すように、上を向き、語り始めた。

「（お前と、あの時、主の精神世界の中では、激しい戦闘をしたな。お前はわからないだろうが、な）」

少し、微笑みながら、それを言う、ダステイスに、ミルニスは、な

んで笑っているのかわからない顔をして、ダスティスの話を静かに聞いている。

「（あの時は、そう。お前が、精神世界に戻ってから、始まったな」

「貴様ああああ！ 許さん！ 許さんぞ！ よくも、戻してくれたな！ この世界に！」

悪魔が取り付いていると知らない、ダスティスは、それを、ごみでも見るような目で、見ながら。

ひそかに、魔力を身にまとっていた。これは、魔術師なら誰でもやることなので、相手側も密かに魔力をまとっている。だが、神とま

で呼ばれる存在は、魔力なんて、必要なく、すべて、【神力】で補うことができる。これは、神のみが知る事実なので、ミルナスタの生物は誰も知らない。

「……また、お前を封印しなければ、主に支障をきたす。我の命尽きても、お前だけは、封印してみせる」

それを聞き、ミルニスは、けらけらと笑いだした。そして、笑いながら、ダステイスを指差し、こう言った。「馬鹿だ、お前」と。ダステイスはそんなことを言われても、気に留めずに、纏う魔力の密度を上げ始めた。

- - 魔力とはすなわち、魔の力と書いて読む。その名のとおり、それ単体でも、力を使うことができ、【身体能力強化】などが、これに値する。そして、これの応用として、【瞬動】と呼ばれる魔力を足に纏い、瞬間移動能力を高める技を使うことができるほかに、魔力を全身に纏うことで、【バリアステル】（バリア）の役割を持つことができる。魔術防御力をあげるほかに、物理攻撃を防げ、さらには、魔術の威力が上がるという、なんとも、使い勝手がいい技なのだ。だが、この技は、一度張ったら、それが破れるまで、ほかの魔術が使えないというデメリットがある。だから、魔術で負けているとき意外は、使うことがあまりない。これは、同じ、魔力か、魔術でしか破ることができない。そして、この二つの技の分類は、魔術のカテゴリーでは、なく、【魔導】（マジカル）と呼ばれる分類になり、この魔導は、魔力が多いほど、密度が高くなり、纏う時間や、性能が上がる。これは、初心者でも使うことが安易なため、初心者用の技とされている。

「……本当に勝つつもりなんだな。馬鹿じゃないのか？ 神にかなう生物なんて、この世界には、いないというのに」

それを聞いてもなお、ダステイスは、目の眼光を弱めるそぶりをしなかった。なぜなら、命に代えても、ミコトを守ると、契約の時に誓ったから。

「本気、か、なら、俺様も、本気を出さなきゃ、失礼に当たるな」

ミニルスは、ダステイスとは、同じ、魔術を使うようだ。 - 魔術が、ダステイスより、勝っている、と、確信しているから。

「さーつてとー、原型がなくなるまで、破壊しますかあ」

ミニルスの陽気な声で、ダステイスと、ミニルスの本気の戦いが、いま、ここに、始まる。

「はあ！」

「ぬん！」

二人の戦いは、まず、肉弾戦から、始まった。若干、ダステイスが押しているようにも見えなくはないが。これは、ミニルスが、わざと、負けているようにみせ、油断させるといふ、作戦なのだ。

「はあ！」

ダステイスの、身体能力が強化された、拳が、ミニルスの、顔面を捕らえる。

「はっ！」

だが、それは、ミニルスが、直前に、足払いすることで、逃れる。そして、倒れそうになった、ダステイスの顔面に、膝蹴り、が直撃

する。

「ぐあああ！　つく！」

まるで、鉄で殴られたような痛みにも耐えながらも、ダステイスは、
【瞬動】で、後ろに下がる。

だが、逃がしてはくれずに、より早いミニルスの瞬動蹴りで、吹き飛ばされてしまう。

「がは！」

「くふ、それが、本気かあ？　弱い、弱すぎるぜ！」

立ち上がるうとした、ダステイスの腹に、ミニルスのかかと落としが炸裂しようとする。

だが、いち早く、気づいたダステイスは、横に転がることで、難を逃れた。

「はあ、はあ」

早くも、息が上がってきた、ダステイスをみて、ミルニスが、赤い地面に逆立ちし、片手で、指をくいくいと曲げて、挑発してくる。それを見た、ダステイスは、自分がなめられていることに気づき、魔力を体から、切り離し。無詠唱魔術を発動した。それでも、なお、ミニルスは、逆立ちしたまま、そこを動かない。そして、ダステイスの魔術が、ミニルスにぶつかり、はじけとんだ。

「な！？　マジックキャンセラーだと……。いや、神ならそれを持つていても、うなずける」

――マジックキャンセラー。それは、その名のとおり、魔術を消し

去る力。これは、エルフ族が、全員持っている。それがゆえに、エルフ族に目をつけ、さらい、解剖するやからが絶えない。エルフ族は、この力を、神から与えられた力だと信じており。いつも、この力を誇りに持っている。そのとおりで、この力は、【神の八柱】が一人、【デルネスマダガスカニメツアカリスナ】（力を作ったとされる神）がなんの力も持っていないエルフ族をかわいそうに思い。与えた力だと、されている。神の八柱とは、ミルナスタを作ったとされる神。【ミルナシテリシアテーピナルド】をはじめ。魔術を作ったとされる神、【デイスティスターミナスラーレスト】に、生物を作ったとされる神【トラビステミスナーレスタノトミガルド】に、知能を作ったとされる神、【ミガニステレミナトーレミスドルド】に感情を作ったとされる神、【ドトミステリシアカーミスドルトン】に愛を作ったとされる神、【ミユリースドルルマティストインラシテイ】に違う世界（精霊界）を作ったとされる神、【キニルスキラスラダミシユイダーキサウ】の八人からなる有名な神たちのことを、勝手に人類が創造して、作ったとされるものの事を指す。

「くつくつく、そう、神なら持っている。いや、性格には、力の神から奪ったのだから。きひひ」

ダステイスは、非常にびっくりした顔をしていることである。なぜなら、神は争わないといわれているためだからである。

「その様子じゃあ、信じてないな？ はっ、仕方ないさ、神は争わない。これは、絶対事項。だがな、俺様が乗り移ったこいつを操り、奪うことはできるんだよなあ、これが」

「乗り移った？」

ダステイスが息を整えながら、疑問に思ったことを問うと、ミニルスは、しまった、という顔をして、黙らせるために、魔術の雨を放

ってきた。

- - 突然、魔術が振ってきたのだ。防げるはずもなく。ダスティスは、それをもろに浴びてしまった。

「ぐあああああ！ 負けてたまるかあああ！」

雨が振り終わると、そこには、なんとか、たっている、ダスティスがいた。

どうやって防いだのか？ それは、【バリアステル】をとっさに展開し、ダメージを和らげ、防いだのである。

「お、生きてるか。しぶといやつだ。あれだけの魔術を浴びて、まだ、いきてるとはねえ……。すこし、甘く見ていたか……」

ミニルスは、素直にそれを絶賛し、次なる、攻撃（遊び）のことを考えていた。ちなみに、神は、毎日が退屈なため、チェスなどをして、遊ぶことがある。

「はあ、はあ、こんなもので、我が倒れると思ったか。はっ、所詮は、邪神だな」

苦し紛れに、挑発を試みたが。案の定、乗るはずもなく。ダスティスの算段は、ばらばらに、終わってしまった。

「…… あーあ、なんか、精霊は強いとか言ってたのに、こんなもんだなんてな。ため息がでるほど弱い。誰だよ、精霊なんて作ったの。世界のお荷物にしかなくてないじゃないかよ」

それを聞いた瞬間、ダスティスの頭に血が上り、我を失ったみたい
に、ミニルスに突っ込んだ。

「きさまああああ！ われわれを侮辱するか！ 貴様は、灰になるまで、殺して殺して殺して殺してやる！ ダークネス！」
「はあ、そうですか。殺してみろよ。俺に攻撃のひとつも当てられないくせに」

さらに拍車をかけ、思惑通りに、それに乗ってしまった、ダスティスは、もう、怒りが立ち上って、何がなんだか、わからなくなったようだ。

「くくく、我を忘れる精霊王……。いい、話題になりそうだな。おもに、悪魔界で」

重大なことを言っているにもかかわらず。頭に血が上っているダスティスには、もう、何も聞こえていない。――まるで、暴走する、オークのように暴れまわっているダスティスをミハエルが見たら、どう思うことだろうか。

「ドリエル様は、俺のことをほめてくれるかな？ 神の一味を一網打尽にできる。方法を見つけたんだからほめてくれるはず。だから、まずは、暴走している精霊王を殺して、デスエナメルを取り出さなきゃ、な」

なぞの物体のことを口走っていることに気づかず、ただただ、主のことだけを考えている悪魔は、いつのまにか、目の前で、なにかを詠唱しているダスティスに気づかず、ただ、主のことを思っていた。

第十四話、あの時のこと（後書き）

結晶について。

デスエナメル それは、精霊や、魔物が死んだときに、生まれる黒いキューブ形の結晶のこと。これは、位が高いほどに、禍々しく、大きな結晶が生まれる。これは、新たな生物を作れる結晶なのだが、いまは、悪魔だけがその製造法を知っている。

吸血鬼族の服装について

吸血鬼族は、赤いものを見ると、冷静になるため。いつも、赤い服を着ているとされている。この赤は、血でつくっているとうわさされているが、定かではない。これは、単なるうわさだと思われるが、真実は、どうなのだろうか？ それは、いまだ、謎が多い、吸血鬼だけが、知ることである。

第十五話、あの時のこと2（前書き）

くあらずじくくあらずじくうまくはめられて、暴走してしまっ
たダステイス。だが、少しは理性が残っているようで、ある声を聞
いた。

第十五話、あの時のこと2

「……へえー、あの悪名高き、闇の精霊王が、暴走してるんだー。
ぷつ、だ、だ、だめ、お腹が痛くなってきた。ぷつ、ふふ、ははは
ははー!」

「……………」

ダステイスは、聞こえているようだが、認めたくないのか、我慢しているようにも見えるが、本当はどうなのであるのか？ 突然、聞こえてきた声に、心躍るものもいれば、パニックになるものもいる。だが、実際は、ダステイスのように、黙り込んでしまうことである。

「ぷぷぷー、お返事はどうしたのかなあ、ダステイスちゃん」

「……………」

馬鹿にされているのにもかかわらず、ダステイスはいたって冷静だった。なぜならば、この声には、聞き覚えがあった。

「この声は、昔、ダステイスが、王になったとき、演説していた、
【天使】の声のものだったからなので、記憶に新しいのだ。」

「普通、天使は、精霊などの前に出ないのが普通なのだが、王就任のときだけ目の前に出るのだ。それが影響しているのいるのも理由のひとつと考えられるであろう。」

「……なんのようだ、【天使】が我に」

「んーとね。あんたが、死にそうなようだから、力を貸してあげようと思ったんだけど……。必要ないみたいね。じゃあねー」

「……………」

念話が切れたことを気にするのが普通なのだが、ダステイスは、違った。ダステイスは、【天使】の名前を記憶から引き出していたのだ。

昔、名前を一度だけ聞いたことがあるダステイスだけからこそ、できることなのだ。

- 通常、ダイアグラム（木の幹をもよ催した階級の表のこと）の上位に値する存在の名を下に値する者が、知るはずがないのだが、ダステイは、あるコネで知っている。

「……うそよ、うそ。びびった?」

「はあ。で、なにようだ?」

目上? のものには、敬語を使うのが常識なのだが、ダステイスは、敬語というものを知らないため（ミコトにはそれなりの敬語っぽいものを使っている）ため口にならざるを得ない。

「んーとね。いま、あんた、神と戦っているんでしょ?

「!?!? そうだが……。それがどうかしたか?」

なぜ、声だけなのに、こちらの様子がわかるのか。それはなぜだが、ダステイスは、すこし、身構えてしまった。そのあと、すぐに直したが。

「あんた。負けるわよ。このままじゃ」

「……だろうな。我は、あんなに差があるとは思わなかった。いまでは、我が愚かだと思っている」

表情がかわってないようにも見えるが、よく見ると、しわが出ているのが見える。

よほど悔しいのであろう。ダステイスは、王になる前から、人一倍、

努力をしてきているので、修行しても、一生勝てない相手がいると知ったから、惨めな気分になっていることであろう。

「そんなあなたに、耳寄り情報よ。私が、じきじきに、力の使い方について、教えてあげる。もちろんただよ」

「……いや、我は【天使】などに頼らない。自分の力でかつて見せる」

「あ、そう。後悔しても知らないわよ」

その、すこし、悲しそうな声に気づかずに、ダスティスは現実に戻った。

「ああ、ドリトル様……。俺に……」

まだ、考えているのか、と、誰かが見たら、そう突っ込むところだが、あいにく、ここには、ダステイスしかない。だから、思う存分、ミニルス（悪魔入）は、考えにふけていた。が、暴走の音がやみ終わったのを、きいて、ミニルスは、はっと、われに返り、ダステイスをみた。

「……もう、暴走しないのか？ 精霊」

さっきまでの顔がうそみたいに、真剣なミニルスは、挑発しつつ、魔力をまとい始めた。それを、魔力をこめた目でみたダステイスは、ミニルスと同じように、魔力を全身にまといはじめた。

「くくく、さーってとー、もう一戦、殺るか」
「……………」

そんなことをまるで、聞こえていないみたいにダステイスは、手に闇の槍を生み出し。投降した。

だが、それをまるで、虫でも見るような目で見ていたミニルスは、そのまま、両手に、火の玉を生み出し、それを、闇の槍にぶつけた。二つの魔術がぶつかったとき、激しい轟音が鳴り響き、あたりを、破壊した。

「は、やるじゃねえかよ。ま、俺ほどじゃないけどな。かかか」
「……神、か。お前のようなふざけた神もいるものなんだな。我得てくるよ」

まるで、見下したような、目で、見るダステイスに、ミニルスのはらわたは煮えくり返っていることだろう。そして、案の定、ミニルスは、怒り、瞬動で、ダステイスの目の前に、移動し、いつ伸ばしたのかわからない、爪で、ダステイスの左目めがけて、振り下ろした。

「ぐっ！？ ああああ！」

条件反射で、わずかに下がったおかげで、直撃は免れたが、左目の下には、縦一腺に伸びる、傷ができていた。そして、ダステイスは迎撃を避け、目の下を押さえながら、瞬動で、後ろに下がった。

「くっくく、逃げるだけかあ？」

「そのつもりはないさ……。闇よ、這え！ ダークネスサーペント！」

黒い液体が、左目から出ているが、そんなことは気にせずに、ダステイスは、闇の蛇をミニルスめがけて、放った。

「そんなちやちな魔術で、俺にかなうと思うか？ 甘いんだよ考えが！」

闇の蛇を、ミニルスは、横になぎ払うことで、それを消し去った。

「甘いのは、お前のほうだ！」

ザシュ！

蛇の後ろに隠れていたダステイスは、ひそかに生み出していた鎖鎌くさりがまを蛇が消滅したと同時に放っていた。これは、ダステイスが得意とする、隠蔽いんぺいを組み合わせた戦術なのだが、実は、これ、ミルナスタではごく一般に使われている戦術なのだ。
なので、ミルスには見極められており、腹に【バリアステル】をまとい、それを防いだ。

「があああああ！ …… なんてな」

そのまま、刺さった鎖鎌を抜き取り、ミルスは、ダステイスの腹に突き刺した。このとき、ダステイスも同じように腹に【バリアステル】を張ったので、衝撃を和らげ、防いだ。

ザシュ！

「ぐあああああ！ …… 冗談だ」

ザシュ！

このまま、何回も同じことが続くと思われたが、先に膝を着いたのは、ミルスの方だった。

「な！？ なんだと、この俺様が、膝を……」

ダステイスは、こうなることを予測して、鎖鎌に、【次元送り】（黒い穴を生み出し、どこか違う次元に飛ばす技）と呼ばれる。精霊と神だけが使える技を、追加しておいたのだ。それに気づいていなかったミルスは、驚愕をあらわにしている。

「力を過信しすぎたな。それだから、邪神なんかになるのだ」

「くそおおおお！ このまま、悪魔界（地獄）なんて、いけるかあああ！ きさまも道ずれにしてやる！ 炎よ！ 水よ！ 風よ！ 土よ！ 闇よ！ 光よ！ 爆裂よ！ 氷よ！ 雷よ！ 暗黒よ！ ははは、しねえええええ！」

ドドドドドドドドドドドドオドドドド！

ミルスの下に現れた穴に落ちる前に、放った、魔術の雨が、無防備なダステイスに、直撃し、そのまま、ダステイスは、地面に倒れふし、息を引き取った。

side out

天使 side

「っ！？ 私の、黒のクリスタルが砕けた……。だから後悔するわよって言ったのに……。はあ。仕方ない。閻魔のところに行くか。あいつを失う分けには行かないし」

「おかーさん、あそぼー」

「- 天使や、精霊でも、契りを交わせば、子供を生むことはできる。だが、制約があり、子供を生んだ後は、子供と決別しなければいけないということがある。これは、精霊や天使の役目をおろそかにさせないよう、神が定めたことなのだが、天使の女は、これを守っていない。」

これは、墮天使になる行為なのだが、この天使の女は、例外とされている。

「だーめ、お母さんは、いくところがあるの。だから、あとで、ね？」

「わかったー」

天使の女は、息子と思われる男をなでた後、何かをつぶやき、扉を出現させ、そのまま、息子を置いて、どこかへ、行ってしまった。息子が、興味をしめして、その扉に入ってしまったことを気づかずに……

side out

第十五話、あの時のこと2（後書き）

魔族の服装について。

魔族は、魔術ローブと呼ばれるものを常時羽織っており（お尻おとところには、尾を出す穴がある）頭には、一回り大きい、帽子をかぶっている。これは、魔力をいつも、強力にするためといわれている。

第十六話、あの時のこと3（前書き）

くあらずじく 悪魔が乗り移ったミニルスと勝負し、相打ちになり。地獄に送られた二人。しかし、送られた先は、地獄とは思えない場所だった。

第十六話、あの時のこと3

「ここは……。地獄、なのだ……。我が思っていたのと少し違うが。まあ、地獄には変わらないであろう」

それもそのはず。人間などが思う地獄とは、鬼が、罪人を攻撃し、そのまま、死ねずに、ずっと苦痛に絶えるというものをイメージしたはずだ。それが、あたりには、花が咲き乱れ、ニコニコ顔の、頭に、触覚をはやした、生物が、罪人に、何か焼印を打っているだけののだから。

まさか、こんなところだとは思っていなかったダステイスは、しばしの間、ぼーっとしていた、が、地面で、なにかうめいている、ものを見つけ、それを、思い切りふんずけた。

「神も地獄に落ちるのだ……。くくく、傑作だ。これは、傑作だな。はははははは」

「てめえ、あとで、殺す、絶対に殺す！」

ダステイスに踏みつけられながら、それをいつては、説得力がないと思うわれるが、そんなことをまるで気にしていない、ダステイスは、しばし、踏みつける感触を味わっていたが、前にいた、列が、いなくなるのにつれて、だんだん、何をしていいのかわからなくなり、ミニルスの頭の上に座った。

「はあ、我は何をしているのだ……。主と、約束したのではないのか？ 絶対に、戻ると」

「は、お前みたいなやつに、約束されても、困るとおm「黙れ、下種が」くそお、本当に、あとで、殺してやるう」

地獄なのだから、死ぬのは、ありえないと思われがちだが、地獄でも、死ぬことはできる。二十四時間後に、生き返るが。これは、地獄でしばらくしていると、体感することなので、いつかダステイスも体感する羽目になるだろう。

「主よ、すまない。代わりに、ずっと、見守って、力をできるだけ貸そう」

地獄から、出れない限り、見守るということはできないのだが、ダステイスは、それがわからないようで、そのまま、奥にいる、触覚受付員？ と目が合い、壮大なため息をついた。

「ドリエル様は、この上の階にいるのに！ きいいいいい！ こじゃあ、神の力が、使えない。いつたい、どうしたら」

ダステイスに座られながらもなお、しゃべれる気力があるのを、ほめてやりたいと、ダステイスは、思ったことだろう。そして、そんなことしてる場合じゃない、と、立ち上がった。

「ああ、重かった。何キロあるんだよ、お前」

「はあ、こんな馬鹿と激しい戦いをしたのだと思うと、ため息がでる」

それを、言われて、かーっと、なり、ミニルスがダステイスに殴りかかるうとした瞬間。いつのまに、ついていたのかわからないが、ミニルスの腕のブレスレットが光だし、騒音を撒き散らした。

ピー！ ピー！ ピー！ ピピピピピピピ！

「うわ！？ な、なんだよ、これ！ とれな、いいいいいい！」

自分の腕を引っ張り、何とかとろうと、孤軍奮闘するも、プレスレットは、とれずに、さらに、騒音を撒き散らし始めた。これは、地獄におちたとき、自動的に腕にはまるもので、名前を【サイガス】という。

これは、違反をしたら、鳴り響くもので、【鬼】と呼ばれる地獄の住人を呼び出す装置なのである。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ！

「うるさいな……。ん？　おい、邪神、後ろ後ろ」

ダステイスが耳を押さえて、鳴り止むのを待っているとき、突如、ミニルスの後ろに黒いゲートが出現した。

「あ？　そんなこと、だまされるか、よ？」

――まったく信じていないミニルスは、後ろに突如^{とつご}出現した、赤いボディに、シマシマパンツ、頭に立派に生えた角の持ち主の、【鬼】が、棍棒をミニルスの脳天めがけて、振りかざした。

「ぎ、ぴゃああああ！」

「……哀れだな」

なぞの、奇声を発しながら、ピンク色の液体を撒き散らし、地面に倒れふして、そのまま、ミニルスは動かなくなった。そして、振りかざした本人は、パンツに入っていた、紙を取り出し、ダステイスに向かって、話し出した。

「地獄条約、その一。罪人同士で、喧嘩をしてはいけない。それを

したものは、罪歴が、百年増える。また、一方的にされそうになったのならば、受けそうになった本人は、セーフとなる。だから、お前は、セーフだ。よかったな。あ、そうそう、ここは、地獄の入り口だから、怖くないけど。中に入ると、恐ろしい目にあうから。んじゃ」

以外にフレンドリーだな、とダステイスがひそかに思ったのは、内緒である。そして、入り口と呼ばれる場所で、ダステイスが、ずーっと、待機していたが。飽きてきたので、受付員に何かを聞こうと、ゲートを潜った瞬間。目にも見えない速さで受付員に焼印を押され、世界が変わり、本当の地獄が姿を現した。

「……………」

世界が変わったところの、地獄の血の池地獄と書かれた、看板の前で、ダステイス八なにかを考えるように、看板を見つめていたとき、あたりを通った、左目を腐らせ、空中を飛んでいる、男が、ダステイスに、話しかけてきた。

「おまえさん、ここは、はじめてかね？　なら、わしが、て、手取り足取り、教えてやってもいいが。あれを出しておくれ」

頭に？を乗せて、後ろを振り返ったダステイスは、そこにいた、小さな、生物を見ると、すぐさま、【妖精族】だと、気づき、そのまゝ、無視して、歩き出した。

「あ、なぜ、そこで、行く！　こら、またんか！　わしがじきじきに教えてやろうとしてやろうと、話しかけたのに！　なぜ、無視するのじゃ！　天罰が下るぞ！」

地獄に落ちたのだから、すでに天罰は下ってると思うが、そんなことには、気づいていない、妖精だった。

「……なんだ？　我は忙しいのだ。手短に頼む」

「はあ、はあ、ぜえ、ぜえ、こ、この罰当たりめが。……ふう、さつき話したと思うが。この地獄について、教えてやろうと思つてな」

何がなんだか、わからないダステイスにとっては、重大だと思えることだが、自分より下の生物に、上から目線に教えられるのが、気

に食わないのか。そのまま、一本道を、歩き出してしまった。

「まてええええ！ この、糞ガキがああああ！ わしをなめるなああああ！」

そのとき、妖精の、腕のブレスレットが、騒音を撒き散らして、光りだした。ピピっ！ ピピピピピピピピピピ！

「あわ、あわわわわ、た、頼む！ 鬼が来たときには、これが誤作動だといってくれ！ わしがなんでも、ただで教えてやるから！」
「ふっ、それならば、いいだろう」

直後、妖精の後ろに、こんどは、青いボディで、角が二本の鬼が現れ、妖精に棍棒を振りかざそうとした。だが、約束は守る主義のダスティスは、鬼の棍棒を、手で、ガードして、事情を話し出した。
【鬼】は、わかったのか知らないが、そのまま、虚空に消えた。妖精は、安心したのか、尻をつき、そのまま、ダスティスに向き直った。

「助かったよ。ありがとう。……では、早速、この世界について、説明しようとするか」

「ああ、頼む」

そして、二人は、近くにいた、【鬼】に、血の池地獄に叩き落されて（これは、鬼の仕事）口の中に広がる鉄くさい味と、においを感じながら、二人は、ほかの罪人を無視して、中央に泳いで移動した。

「ここは、地獄という。これはわかるだろう？」

ダスティスは、うなづくことで、それに答え、ほかの罪人が、奇声

を上げて、沈んだのを見ながら、【妖精族】の話を真剣に聞きはじめた。

「おぬしも通ったと思うが、この世界に、入り口と呼ばれる場所があつてな。……あそこでは、幸せだった……。おっと、すまないな。聞き流してくれ。……さて、地獄。別名、【悪魔界の底】とも呼ばれるな。その理由は、悪魔がこの上の階に住んでいるからなんじやが。まあ、そんなことはいい。まずは、ここについて話すとするかのう。まず、ここは、地獄の地下五階じゃな。地獄には、一階から地下五階まである。罪歴が少なくなるほど、上の階に、いけるのじや。上の階は、いいぞお。楽になるからな。主に、地獄のアトラクションが、な。ん？ 地獄のアトラクションとは、そのままのおりじやよ。罪人に罰を与えるアトラクションじゃ。さて、ここまではいいかのう？」

「ああ」

初めてにもかかわらず、血の池をもつ、満喫しだしているダスティスに、苦笑しつつ、妖精は、さらに、話を進めだした。

「次は、このアトラクションについて、説明するかのう。……まず、わしらが浸かっているここは、血の池地獄。通称、最初の、アトラクションじゃな。皆、ここに最初に放り込まれるから、そういうわれておるんじやよ。ふふ、わしも最初は、……。おっと、すまんすまん。まあ、地下五階には、アトラクションは、全部で、五種類あるんじやな。たぶんおぬしが次に行くのは……。あれじゃ」

妖精が指差した方向には、針がたくさん刺さった、山があつた。
- 人間が、針に刺さるということは、通常ミルナスタでは、ない。
だが、闇医者と呼ばれる医者が針治療と呼ばれる治療で、針を刺すことはある。

これは、痛みや、病気になっている患部に刺すことで一時的に、痛みや、病気が治るといことなのだが、どこの国でも、やったり、受けたら、最悪死刑になることが多い。

理由は、ハマと呼ばれる、魔性の薬と同じ効果なのが原因なのだが、実は、この薬と、針治療には、共通点がある。

それは、どちらも、一度使うと、効果が切れたら、とてつもない痛みが襲ってくる副作用があるということ。なので、針治療を使うのは、重罪とされている。

「あれは……。針山地獄といったところか」

「おお、正解じゃ。よくわかったのう。おぬし、ミルナスタで、地獄の資料でも読んだか？ ……なに、違うか。ならば、説明のしがいがあるのう。ほっほっほ。針山地獄は、刺さると痛いぞ。なんとか、痛くないところを探すんじゃな。さて、おぬしが三番目に行くのは……。ここからは、見えないが、獄炎くえん潜りと呼ばれるアトラクションじゃ。その名のとおり、灼熱の炎のリングを潜るんじゃ。

ま、あれは、潜ったら最後、焼ける痛みが襲うから。気をつけるんじゃわしも、あそこで、いい思いでは、ないのう……。さて、獄炎潜りの次は、水攻め壺じゃな。これもここからは見えない。これは、わかるじやろう？ 水の入った壺に、無理やり押し込まれるんじや。息ができないから。苦しいぞ。ほっほっほ。さて、最後のアトラクションだが。おそらく、これが、一番つらいじやろうな。なんせ、生きたまま、体を、切り刻まれるんじやからな。ほれ、あれじゃ」

妖精が指差した方向。そこには、全自動の、動く剣が、罪人を切り刻んでいる光景があった。――これも、ミルナスタでは、通常ないが。死刑などで使うことがある。理由は、簡単に殺せるからなどということなのだが、現在は、あまりに残酷なため、廃止にされている。

「……あれごとき、我に苦痛を与えられるわけがない」

「ん？ 何かいったか？」

「いや、なんでもない」

そのまま、しばらく、妖精は、ダステイスを見た後、目を閉じて、なにか考え始めた。それを、ダステイスは、何も言わずに、黙って見るだけで、なにも言わなかった。これが、地獄での最後の会話だと知らずに。

第十六話、あの時のこと3（後書き）

さあ、最後の、絶滅したといわれている、竜人についてです。

竜人は、人間と同じく、服は着る。だが、竜人は、ぼろぼろになった服しか着ない。なぜなら、竜と同じ鱗のような感じがする、服だから。

さて、ここまで見てくださったみなさん。ありがとうございます。
さて、実は、震災の影響で、三日間、家を空けなければいけません。
読者様にはご迷惑をかけますがどうか、見捨てないでください。
…ではまた！

第十七話、あの時のこと4（前書き）

くあらずじく　なぞの妖精から、地獄の知識を得たダステイス。もう十分だ、と思っていたのだが、妖精はそんなことお構いなしに、話を進めだした。

第十七話、あの時のこと4

「でじゃ、わしがさっきほしがっていたのは、【罪金】と呼ばれる、血でできた、お金じゃよ。お・か・ね。む、そんなものないと思っているな？　ならば、自分の背中を触ってみるんじゃない」

そう、言われて、ダステイスは、半信半疑で、背中を触ってみた。すると、そこには、少し盛り上がった部分があるではないか。ダステイスは、服の中に手を入れ、そこから、赤い物体を取り出した。――それは、血でできているのが当たり前のように、赤く染まっており、触ってみると、手に血がついてしまった。ダステイスは、それをあろうつことか、舐めて、血だとわかったようだ。妖精は、驚いていたが、「まあ、こんなやつもおるじゃおう」と、納得してしまった。

「ふむ、確かに血の味がする……。しかし、これはどうやって使うのだ？」

待つてましたとばかりに、妖精は、目をきらきらさせて、ダステイスの手元から、罪金を奪い、それを、ダステイスのスポンにぶら下がっている袋に入れて、紐を閉じた。ダステイスは、その行為に、？　をうかべていたが、妖精があまりにもきらきらしているので、聞き出せなかった。

「それはのお、ここでは使えんのじゃよ、罪金は、一階のみで使えるのじゃ」

「それだと、入り口なのだから、無理ではないか？」

妖精は、指を顔の前に持ってきて、ちっちつちと、指を横にふった。

老人がポーズしてもかわいく見えないと思われがちだが、じつは、【妖精族】の老人は、周りからは、かわいいの愛称で慕われている。これは、年をとっても、かわいく見える【妖精族】の特徴なのだ。だが、精霊は、年齢など関係ないので（長寿のため）【妖精族】の老人を中年ぐらいに見ていた。

「大丈夫じゃ。年に一回ある血肉殺戮大会で、優勝すれば、入り口にいける。そうすれば！ 罪金を払って、ビル（酒）も飲み放題だし！ 肉も食い放題なのじゃ！ わかるか少年？ この罪金は、ためてこそ、力が発揮するのじゃ！ だから、それは、大事にするがよい」

妖精の顔が間近にあるのを待った気にせず、ダステイスは、袋から罪金を取り出して、それを点に掲げた。――明かりは、天井から少し漏れる光だけ。それでも、ダステイスは、わずかにある光をうまく使い、罪金を輝かせた。

「きれいだな」

「ん？ なにかいったか？」

妖精は、血の池地獄を泳ぎながら、ダステイスをみてそういった。そして、それに答えるように、罪金を、袋にしまって、ダステイスは、顔を、血の池にうずめた。

「（主は、いまごろ……どうしているかな？ ちゃんと、家族と過ごせているかな……。我は、いったいどうすれば……。誰か、教えてくれ」

ところかわつて、ここは、屋上と呼ばれる場所にある閻魔室。
ここには、現在、警備員と、全自動昆虫形ロボットがいるはずなの
だが、それらは、いま、粉々にされていて、見るも無残な、姿にな
っていた。

「で、あんたは、これを受けるの？ 受けないの？」
「……ふっ」

粉々になったものを密かに見ながらもらしたのは、笑い声を短くし
たような、声だった。
それを聞いて、女は、額に血管を浮かばせて、閻魔が座っているい

すに、魔術を放った。

ドオオオオン！

それをひらりとよけて、そのまま、虚空から、いすを取り出して、それに座りながら、閻魔は、女をなだめるように、声をかけた。

「まあまあ、落ち着きなさいって、あなたはどうか、切れやすいようですね。ほら、カルシウムを取りなさい」

閻魔が、虚空から取り出したのは、とても小さい小魚の日干しだった。そして、それを女の口に思い切りぶん投げ、それは、見事口に入り、女を咳き込ませた。まさに、神業であった。

「げげげ、てめえ、わ；；「p」。「¥p」；¥；「！」

なにを言っているのかはわからないが、どうやら、相当頭にきているようだ。その証拠に血管があちこちに、浮かび上がっている。

それを見た閻魔は、さらに虚空から小魚の日干しを二つ取り出し、また、女の口にぶん投げた。

――それは、虹のように、アーチみたいに、弧を描き、女の口に見事入った。

「やった、やりました！ 入りました！ すごい、すごいですよ、やはり私は、最強だ。ふふふふ、はははは」

ナルシストも加減が過ぎると、ただの馬鹿になるのであるが、閻魔は、それがわからないようで、いすから転げ落ちて、まだ笑っていた。

「……遊びはここまでにして……。んぐ、うまい、これ……本題に入らせてもらっよ」

小魚の日干しをぽりぽり、食べながら、女は、転げ落ちている閻魔に、真剣に、話した。それを、無視するのは、失礼に当たるのかは、わからないが、閻魔も、顔が真剣になり、いすに座りなおした。

「話というのは、簡単だ。地獄に落ちた、二人を、生き返らせてほしい」

「……それは、禁忌に値するんだけど、わかっているのかな？」

「もちろんだ」と答えて、閻魔は、虚空から、なにか書類を取り出し、さらに、羽がついた、ペンも取り出して、女の前に浮かび上がらせて、停止させた。

「理由にはならないだろうけど、落ちた二人は、神と精霊なんだ」

それを当たり前のように、聞き、閻魔は、ため息をついて、【天使】に話しかけた。

「だからって、地獄から生き返らせる理由にはならないだろう？」

「ぐっ……。それはそうだが……」

確信を突かれ、女は、次の言葉が出てこないほどに、あせっていた。
- -そして、女は、閻魔に、土下座をして（どこで習ったかは知らないが）頼み込んだ。

「頼む！ このとおりだ！」

「……君には負けたよ。ただね、私は、もはや、閻魔から、吊り

おとされるみなんだ。これが最後の仕事なんだよ。これだけじゃあ、物足りないな」

閻魔は、なにか考えるように、顎に手を当てて、目をつぶった。しばらくして、なにかを思いついたようで、目を開き、女にその内容を話した。

「君の息子を、預からせてもらえないかな？」

「そ、それは……。わかった。仕方ない。引き受けよう。あとで、送り出す」

しかし、その必要は、ないとばかりに、閻魔は、書類にサインを書き、やたら長い帽子を脱いで、どこかへ行ってしまった。

これが、わかるのは、【天使の】女が【精霊界】に戻って、やっとわかったことであつた。

そして、ところ代わり、ここは、ダステイスがいる、地獄。

「ぴよ！ お、おぬし、か、体が、光っておるぞ！ ま、まさか、なぞが多いといわれている、地下六階に落とされるのか？」

「……それも、いい、か、我が一番に、そこへいけるのであればな」

- 地下六階。それは、一部の【鬼】にしか知られていない、なぞが多い、階。うわさでは、人体を改造して、【天使】を作っているとうわさされているが、それは、定かではない。それを知るのは、閻魔か、または、ここに、何千年という鬼だけである。

そして、光が絶頂に達したとき、ダステイスは、一瞬にして、消え去り、妖精の記憶から、ダステイスのことは、跡形もなく、消え去った。

これは、死人が、ミルナスタに転生するとき、または、生き返るときに起こる現象に似ているが、正確には、そうではない。 - 記憶喪失を思い出せばわかるだろう。あれは、記憶は忘れるが、何かの拍子で、記憶がよみがえるのだ。この現象は、まさに、それなのである。

「はっ!？」

「ん？」

ダステイスとミニルス（おまけ）は、無事、ミコトの精神世界に戻ったようだ。

- - ミニルスについていた、悪魔も、消えているし、おそらく、悪魔界に戻った。あるいは、地獄にいるかの、どちらかである。それはよしとして、ダステイスは、ミニルスから、距離をとり、魔術を放った。

しかし、本当の神なので、力の使い方はわかる。そんな攻撃は効かずに、胡散ぐさんしてしまった。そして、ダステイスは、ミニルスの目が、邪悪なものから、優しい目に戻っているのを発見し、ミニルスに近づいた。そして、互いに、事情を説明しあい、事なきを得た。これは、ミコトが、魔獣と戦っている間に起きた出来事である。

そして、ここは、なぞの場所。ここには、ある、少女が、すんでいる。少女は、啓碧^{けいへき}****年から、啓碧****年間、ずっと、同じ夢を見ている。なぜ、こんなにも夢を見ているのか。それは、化せられた運命を果たすためである。

「っ！？ はあ、はあ。……いやな夢を見た。まさか、精霊が死ぬなんて……。……ん、やつぱり……。ミコトは、この世界には、いないのね……。明日も、あさっても、風廻り（かぜめぐ）（春）火廻り（ひめぐ）（夏）も、土廻り（どめぐ）（秋）も、氷廻り（ひょうめぐ）（冬）も、ミコトはいない。……なんで、こうなったのかなあ。……あの日に戻りたいよ。ミコト」

そして、少女は、それを言い残し、また、眠りに尽いた。

第十七話、あの時のこと4（後書き）

罪金と、善金について

本編では書かれていないが、地獄と同じように、天国にも、お金があるのだ。

まずは、善金について、説明しよう。

善金は、天国に行ったときに、必ず5枚もらえる。そして、五階（四階、三階、二階、一階とある）から、始まるのだが、地獄とは違い、一回に行かなくても、その階で、使うことができる。たとえば、トウリス（アイスクリーム）は、善金一枚で、ドンドルエス（マッサージ）は善金二枚なのだ。格階によって、値段は違うが、みな、善金を使っうのは、同じことである。

さて、善金について大まかに説明したが、最初にもらうほかに、どうやって、手に入れるのか？ それは、働くか、年に一回ある、大会でもらうことができるのだ。天国の住人は、現在一万人なのだが、この大会には、半分の五千人は参加する。それは、優勝すれば、善金千枚と、一生遊んで暮らせる善金を手にいれるチャンスのためである。

次のあとがきは、罪金についてです。

P S 三日間といったのに、四日近くたってしまいました。まことに申し訳ありません。これからは、精進しますので、なにとぞ、よろしく願います。

この話まで、改変が終了しました。今回は、新しく出た、季節のこ

とや、年のことや、なぞの少女のことなどを追加いたしました。皆様には待たせてばかりですが、なにとぞよろしくいたします。

七月二日。作者、ミーナより。

では、また会いましょう。

作者は、感想、評価をお待ちしております。

第十八話、つかの間の平和（前書き）

くあらずじく　ダステイスと、ミニルスは、ミコトの精神世界で、仲良く、語り合っていた。いっぽう、抱きしめあっていたミコトたちは、満足したのか、家に帰ることにした。だが、それを見ているものが、何者かに、連絡を取っていて……

第十八話、つかの間の平和

……ああ、いいな。やっぱ、家族って……。なんだか、こう、心が温かくなるというか、なんというか……。とにかく、家族はいい。絶対に、失いたくない。そのためなら、悪魔にだって、魂を売ってやるさ。

とまあ、そんなことを、俺は、家への帰り道で、思っていたんだけどな……。やっぱりなしだなし。こんなことになるなら、家族なんていらなかったぜ。

「だ・か・ら、なんで、魔術石がないのよ!」

「知るか! 俺に聞くなよ!」

「ふ、ふたりとも、おちついても」あんたは黙ってなさい(ろ)!」
はい、すいませんでした」

なんで、こんなことになってるんだよ。あいつら、魔術石とかがどうとかっていつてるけど、そんなもの、森のどこかにごろごろ落ちてるだろ? ひろいに行けばいいものを。あ、こっち来た。

「ミコトは、知らない?」

「い、いえ、しりませんですよ、すいません」

怖、怖! おまえ、怖いよ。なんで、後ろに般若が見えるんだよ。どこかの鬼婆かよ……。ふう、ニルのところに戻ったか。ふう、怖かった。ぶるぶる。

しばらく、ボーっとしていたが、二人が気になって、俺は、二人を盗み見ることにした。

「じゃあ、私たちに裸になれって言うのかしら? あんな犬っころ

の前で？」

「そうはいってないだろ？ だけどよ、もう、それしよ」「私は平気だよ！ だから、だから、喧嘩しないで！」……ごめん。悪かった。少し頭冷やしてくる」

それに続いて、リルも、どこかへ行ってしまった。ここにいるのは、もう、俺と、ミルだけ。

だけでも、俺たちは、彼氏、彼女の関係じゃあ、ない。そんな、空気には、ならない……。はずだったんだが、なんでかなあ？ そんな空気が流れちゃってるんだよなあ。

「ミル？」

「……私ね。お姉ちゃんと、お兄ちゃんが戦っているとき、なにもしてできなかった。……私は無力だったんだ。ミコトみたいに強くないし。リルおねえちゃんみたいに、魔術が得意でもない。どうしたらいいのかなあ？ ここで、のんびりとすごしても、いつかは、魔獣が来るかもしれない。そしたら、私はまた、逃げなきゃいけないのかなあ？」

「ミル……。違う。お前は弱くなんかない。それは、俺たちは強いかもしれない。でもな、おまえには、やれることがあるんだよ。後方支援だってできるし、敵をおびき出すことだってできる。な？ できることがいっぱいあるだろ？ だから、泣くな。強くなれ。そうすれば、誰だって、お前のことを認めてくれるさ」

なんか、すらすらと、言葉が出てくる……。なんでだろうな、ミルの考えてることが手に取るようにわかる。これは、……信頼できる仲間だけに発生するという、【メーガスの系】というやつかな。

俺が知る中では、これ、二人の場合、片方しか、相手のことがわからないんだよなあ。まあ、今回は、俺になった、ということ。それでいいか。

「ミコト……。わかった。がんばってみるよ。私なりにできることを……。うん、きめた！ 魔術石を集めてくる！」

あーあ、さっきまでの空気が一変、仲のいい夫婦みたいな空気になった。つちやったよ……。さて、俺も手伝いに行くか。ミルだけだと、たいへんだろっしな。

はあ、やっちゃった。なんで、リルと喧嘩になっちゃったんだ？
どれもこれも、石のせいじゃか。

……そうだ、石が悪いんだ。そうにちがいない。だから俺は悪くない……。だからさー、ドンを見つけては、惨殺さんさつするのやめてくれな
いかなあ？ あたる相手がいないのはわかるけど、ドンに向けるの
は、かわいそうだとは思わないかね？ 君

「くそー、いらいらするー、あ、ドン！ 死にさらせ！ 天空より
来る、星よ！ シャインスター！」

「ブヒ？ ブヒイイイイイ！？」

ドドドドドドドドドドドドドドド！

あーあ、やっちゃったよ、こいつ。いくらなんでも、無抵抗なドン
に、魔術を使うか？ 弱いものいじめだよ。これ。

「んー、すつきりー。……なによ、その目は」
「いや、なんでもない」

俺がちらちら見ていたのがついにばれたか。悪かったから、そうに
らむな。蛇ににらまれたようで、金縛りにあいそうなんだから。だ、
だからさ、殺気をこめて、こっちを見るのやめてくれよ。本当に怖
いよ。俺が、おまえだったら、弟に殺気はこめないとおもうぜ。

まあ、口に出したら、殺されそうだから、思っていることは言わな
いけどな。

「はあ、それにしても、誰が盗んだのかしら？ あの大きさの魔術
石を運ぶには、風の魔術師がいなければいけないけど。魔術を使っ

た痕跡はなかった。だとしたら、ほかには、暗黒魔術だけ……。
これは、さすがに、ないわね。だって、使える人は、王都にしかないもの」

「だよなあ、俺もそこが気になって仕方ない」

と、道なき道を歩いて、たどり着いた石の上で、雑談してるわけだが……。寒いな、おい。なんで、こんなに寒いんだよ。気温が－（マイナス）に達してるんじゃないのか？

「寒いわね。もつとこっちなさいよ。あつたかいから」

「おう、わかった」

そして、リルの隣に移動して、互いに横つ腹？ をくつつけて、暖めあふ。しかし、これをミコトに見られたら、なにか勘違いされそうだな。でも、悪くはない、かな？ こんな美人の姉がいるんだから。悪い気はしないだろ。

- 俺は、改めて、リルの容姿を見てみた。俺たちと、同じ、白く長い髪に、白目。そして、顔のパーツが、天から与えられたように、そろっており、華奢な色白な体だけど、どこか安心感がある。細長い手足は、まるで、女神みたいになっっている。……どっちかって言うと、キレイ形かな？ ミルは、かわいい系だし。二人とも、瓜二つだから、それぐらいしか変わりがないな。それに、二人が町に出かけたら、絶対、ナンパされるだろうな。まあ、それはそれで、そいつをぶん殴るけど。

「……………」

「……………」

き、気まずい。なんだよ、この空気は。リルは、私が悪かったって、謝っているけど……。ん？ なんでリルのことがわかるんだ？ あ

あ、そうか、これは、「メーガスの糸」か。

いまごろ、発動したのかよ……。ん？ ちよつと待て。じゃあ、いままでは、互いを信賴してなかったというわけか？ あの事件によって、俺たちは、絆を深めた、というわけか。ミコトの方も、どっちかが、発動してるんだろっな。

「リルは、さ、結婚したいとか思わないのか？」

「！？ な、なにを唐突に言うのよ。ば、馬鹿じゃないの？ 私となんか結婚したら、先に相手が死んじゃうじゃない。それはいやよ。孤独には耐えられない。だから、このままでいいの」

孤独、か……。ミコトも、いつか、死んでしまっただろっな。そして、俺たちは、さびしくなる。

……ミコトに翼人になってもらう……。いや、だめだ。そんなことをしたら、あいつが死ねなくなる。

いや、正しくは、寿命が伸びる、かな。それでも、ミコトを翼人にするのはだめだ。それはだめなんだ。

幸い、俺たちは、純血の翼人じゃない。だから、ほかの種族を翼人にすることはできない。爺さんなら、できただらうけどな。

「ニル？」

「ん？ なんだ？」

「いや、なにか、考え込んでたから」

……俺も考える癖ができたかな？ ま、それは今はいいか。今は、この時は、楽しまなきゃな。

次にいつ、魔獣が来るかわからないんだから。

次、来たら、跡形もなくぶっ壊してやる。隅々までな。ま、できやしないけど。

????? side

「はい、ええ、もういいでしょう。あの少年以外は、殺しで。はい、ええ、そうですね。翼人は皆抹殺すべきですね。はい、明日には、兵士が来るのですね？ はい、わかりました。え？ あの少年をうまく、逃がせて？ ああ、はい、そうですね。わかりました。任して下さい。私の闇の魔術にかかれば、操ることもたやすいかと。ええ、昔から、かけ続けてきたのです。今回も、うまくいくでしょう。はい、では、また」

ピッ

ふう……、明日には、この森は、戦場になるな。推測でしかないが、おそらくは、そうだろう。

それにしても、あの少年に、ずっと魔術をかけ続けてきたが。この前やっと、旅に出るということをくちに出させられたな……。【先天的】ななにかが、あの少年にはある。ということかな？

……それにしても、私も年だな。もう、息が切れてきた。魔術を使うだけで、こんなにもなるとは……。私も現役引退かな？

「念のため、【身体能力強化】の【魔道】をかけておくか。ふっ！」

私の体を、黒いオーラが包み込み、筋力をアップする。ん、この感じは、なれないな。まるで、何かの液体に入れられたみたいな感じだ。まあ、慣れるしかないのだな。

そして、私は、翼人たちの家の近くに暗黒魔術で、隠れながら、向かった。これが、見納めだろう。名残惜しいが、な。

第十八話、つかの間の平和（後書き）

今日は、二話連続投降です。遅れたぶんを取り返すのです。

さて、今回、罪金についてですね。

罪金のことは、おおまか、本編で書かれているので、教えることは少ないのですが、まあ、それでもいいでしょう。では、どうぞ。

罪金は、一階で使用できるとわかりました。では、罪金をなくしたらどうなるのでしょうか？ それは、自分の血を変わりに鬼に渡して、なくした分もらえるのです。しかし、ここで問題が発生します。それは、なくした額を偽って、もらうということです。でも、それをする、罪人全員についているプレスレットが認識して、罪歴を百年増やしてしまうのです。これでは、いくら罪金をもらっても、一階にたどり着くことはできませんね？ つまり、無駄！ なのです。

次は、二つの世界について、もっと詳しく書きます。

では、また！

作者は、感想、評価をお待ちしております。

第十九話、最後の日（前書き）

くあらずじく あれから、戻ってきたニルとリルとともに、夕食をとったミコト。だが、そのあと、操られるように、ミコトは、深夜、森を抜け出して……

第十九話、最後の日

うー、眠い。眠い眠い眠い。あー、なんで、俺は、こんなところにいるんだ？ 確かに、寝たはずなのに。どうしてだ？ ……まあ、考えても仕方ない。そこらへんを少しぶらぶらするか。

そして、俺は、まだ目覚めきつてない目で、あたりを見渡し、遠くに明かりがついていることに気がついた。

うし、あそこに行けば、なんかある気がする。旅の参考にでも……。ん？ 旅？ ……俺は何を思ったんだ？ 旅？ そんなもの、行くわけがないだろ？ 俺は自由気ままに、この森で一生を過ごすんだ。だから、旅なんて行かない。これは、絶対だ……。なのに、なぜか旅に出たいという気持ちが高ぶって、なんか、どこかへ行きたいという衝動に駆られる……。ああー、なんか、このまま、なにもかもが、どうでもいい気がしてきた。まずは、あの村に行って、それから……。それから？ なにをするんだ？ ……わからない。俺はいたい何がしたいんだ？ そう思っているのに、足が勝手にあるきだす。

そして、俺はとうとう、あの村についてしまっていた。そのまま、自然に足が動いて、近くにあった宿屋に入ってしまった。

「いらっしやーい。おや？ ここでは見ない顔だね。旅人かい？」
「ああ」

だめだ。泊まっちゃだめだ。なにか泊まっちゃいけない気がするんだ。だから、お金を払おうとするな。ん？ 俺は、お金なんて持っていない。だから、泊まれない。……。そうだ、泊まれないはずだ。だから、ひとまず安心だな。

「……………」

「ん？　もしかして、お金がないのかい？　……大丈夫。チャリテ
イベントを今日限りやっているから、お金はただでいいよ」

だめだだめだだめだ！　泊まるな俺！　やめろ！　鍵をもらうな！
やめろおおおお！

だが、俺の抵抗むなしく、俺は、鍵をもらい、足が勝手に動いて、
二階へと上がり、一〇五号室の扉を開けて、倒れるように、ベット
に倒れこみ、そのまま、激しい睡魔が襲ってきて、俺は、それに負
けて、眠りについてしまった。

?????side

ミルネリア教本部。それが、私たちが所属する世界で、名が知られている宗教の本部。働いているものを含め、亜人種も入れて、全部で、三十万人。

いつもは、静かなのに、今日は違った。神殿騎士第一部隊と第二部隊、それに第三部隊まで、ホールに集められて、作戦会議をしている。

それは、私も例外ではなく。第三部隊なので、ここ、ホールに来ていた。

「で、あるからして、本日は、疫病が発生されたとした、森に行き、その森に住んでいる、異端者を排除し、平和をもたらす。それが、今回の作戦である。なにか質問は？」

あいかわらず、能面みたいな表情で、話すなあ、あの人は。……本当に人間なのかしら？

あ、私の前にいた、いかにも、鍛えてますみたいな、マッチョの人が手を上げた。

それに、秘書っぽいひと？　が、丁寧な声色で、「どうぞ」といった。

「はい。質問なんです。疫病とおっしゃいましたが、具体的に、名前を教ええもらっていいですか？」

うわゝ、話してるときに、筋肉がぴくぴくしてるゝ、きんもー。どっただけ鍛えてるのよ。

……吐き気がする。

「ふむ、名前、か……。正式名は、【アブトリス】だな。資料に書いてある。ほら、見てみる」

ええー、そこで、投げますか、隊長さん！ 場違いにもほどがあるでしょ！ あ、ほら、マッチョさんも、わたわたして、取れなかったじゃない。

「え、ええ、ちゃんと書いていますね。ありがとうございます」

そして、隊長さんは、手を頭の上に持つてきて、構えだした。んなにやってるんだろう？ もしかして、とんちでも思いついた？

「……ほら、早く。早く投げなさい」

「え、え？ は、はい、わかりました」

マッチョさんが、書類の紙束を弧を描くようになげて、それを、隊長さんは、うまくキャッチして、それを、虚空にしまった……ん？ 虚空？ 隊長さん、いまそれ、どこにしまったんですかー？

と、いいそうになった、私は、のどに詰まらして、それを飲み込んだ。ふう、危ない危ない。それをしたら、首だ、首。あぶないあぶない。

そして、それをごまかすように、咳き込み、隊長さんの方を向いて、話を集中して、聞いた。

そして、隊長さんから、話をすべて聞き終え、三時間かけて、私たち、第三部隊と第二部隊は、森の手前まで来ていた。
なぜ、第一部隊がいなかったのか？ それは、いつ、本部に敵が来てもいいようにと、本部に残った。

まあ、第一部隊がいなくても、大丈夫だと思うけどね。

「隊長ー、森の中に、生命反応がありません」

「そんなの、わかってるわよ！」

変なことを言ってきた部下には、げんこつ拳骨を落としてつと。……実は私、第三部隊の隊長なんだよねー、ま、誰に言っても、信じてくれない

けど。なぜなら、私は、幼児体型だから！

……ん、なんか、自分で思っ、恥ずかしいわ。

「さてと、じゃあ、第二部隊に続いて、森に入るわよ。みんな、準備はいい？」

「……イエッサー！」

うん、いい返事ね。この子たちは、なにがなんでも、守らなきゃね。

「さあ、オペレーション、スタート！」

そして、森の中に入った私たちは、少し進んだ先で、信じられないものをみた。

- - それは、白い悪魔のような三人組が、第二部隊を意図も簡単に、吹き飛ばして、魔術を叩き込んでいる光景だった。

「た、隊長。僕らは、どうすればいいんでしょうか？ 隊長？」

「はっ！？ え、ええ、まず、四人一組になりなさい。そして、ばらばらの方向に散らばり、四方八方から、魔術を叩き込みなさい。私は、上級魔術を詠唱するから。あんたたちに、まかせたわよ」

私が言い切った瞬間。こちらに、一筋の閃光が走った。

私は、それを、目をつぶらずに、見ていた。そして、攻撃が終わった瞬間。私も、あちらに向けて、閃光を放った。

シュン！

しかし、それが、敵にぶつかろうとした瞬間、消え去った。

「うそ、でしょ？ どうやって、あの音速の閃光を消したのよ！」

私は、おもわず、それを口に出していた。だって、しかたないじゃない。魔術を消し去る【魔術障壁】（マジックペクター）の発動は、感じなかったし。魔術の発動も感知しなかった。ならば、あと、考えられるのは、【マジックキャンセラー】ただけだけど。これは、エルフでもない限り、もってないはず。

だとしたら、なにが起こったの？

side out

ああ、ここは……夢の中、かな？ ニルとリルとミルが見える。あ、それに、俺もいる。楽しそうだなー。あ、なにか、矢が飛んできた。それが、弧を描いて、ニルの元に向かって……。ニル！ 避ける！ だが、俺の思いはむなく、矢は、ニルの腹を突き刺した。くそ。なんで、俺は何もしないんだよ！

気づいてただろ！ なんで！ どうして！ ……そして、俺が、そのまま、虚空から、刀を取り出して、近くにいた、ミルを切り裂いた。！？ なにを、やっているんだ、お前は！ 俺だろ！ なんで、こんなことをするんだ！ やめろ！ やめて、くれ。……そして、

俺は、そのまま、リルを切り裂き、どこかへ行ってしまった。……みんな。……ごめん。なんだか、おかしくなっちゃった。こんな俺を、お前らは……

いや、違う。これは、夢だ。夢なんだ。あれは、本当のことじゃない。悪夢だ。だから、三人は、無事だ。でもって、一緒に遊んで。ご飯を食べて、寝て、また明日がくるんだ。そして、明日も、来週も、翌年も、みんな、過ごすんだ。――家族なんだから、それが当たり前だ。だけど、なんだか、とてもいやな予感がするんだ。こう、胸の中から、何かが消えて、そこに穴が開いたみたいだ。そんな感じが、するんだ。……無事、だよな？ 死なない、よな？ 大丈夫、だよな？ ああ、会いたい。今すぐ、みんなに会いたい。でも、目が開けられない。ああ、だめだ。何も考えられない。ああ、みんな、ごめんよ。

????? side

今日で、もう、夢をみて、一週間がたった。夢は、もう、リルたちが、敵と戦うところまできていた。

……もう少しで、夢が覚める。そして、また、新たな、夢を見始める。残酷な道か、それとも、ハッピーエンドの道かを選ぶのは、夢しだいだ。そして、私は、どちらかの道を進まなければならない。

……本当に、あの日に戻りたい。ミコトたちと、一緒に旅していたころに……。でも、私は、【魔女】

化せられた運命がある。それを終わらせない限り、あの日には戻れない。だから、早く、あれを、完成させないと。【擬似エンジン】を……。そして、また、私は、睡魔に襲われ、眠りにつき、夢を見始めた。

ハッピーエンドの道を進むことを願いながら。

side out

第十九話、最後の日（後書き）

魔術障壁について。

魔術障壁とは、自分の目の前に、見えない障壁を生み出して、魔術を目の前で消し去るという、マジックキャンセラーの亜種で、魔道的一种。これを使えるものは、エルフだけなのだが、それは、定かではない。これは、一見便利のように見えるが、魔力をとんでもなく使うので、連続使用はできない。まさに、一発限りの砲弾なのだ。

前の続きについて。

精霊界は、丸い球体の星（地球をイメージしてほしい）悪魔界は四角い星（キューブをイメージしてほしい）できており、半分に分かれている。そして、この二つの星を横一線に半分にした、下が、天国と、地獄なのである。

まずは、上の精霊界と悪魔界について説明する。

（注）長いので、精霊界は今回。悪魔界は次の次の回です。

精霊界には、ミルナスタと同じく、世界が存在する。各属性の精霊が住まう、四種類である。下に表記する。

東には、仲のよい、二つの精霊。火の精霊と、土の精霊が住む、【ニューリアス】

西には、火の精霊と中が悪い、水属性と、土の精霊が苦手な、風の精霊がすむ、【トーシラウ】

南には、何者にも、敵対する闇の精霊と、何者とも、仲がよい、光の精霊がすむ、【アーリナルブ】

そして、北には、上級精霊の、氷と雷の精霊がすむ、【ミーズ】

とある。

そして、この四つの世界の各精霊王だが、現在、ミルナスタに移住しており、実質、王は現在、存在しない。なぜ、王は、ミルナスタに移住したのか？ それは、この世界にない、豊富な自然をどうか、精霊界に持ち込めないか、と思つてのことである。また、この世界には、【デルビス波】存在しない。そして、精霊界の管理人は、天使と呼ばれる個体なのである。

次は、本編に書かれていない、天国についてです。

第二十話、最後の日2（前書き）

くあらずじく 突如、森にやってきた騎士たち。それを撃退すべく、リル、ニル、ミルは、森の入り口で、騎士たちを撃退していた。そして、撤退していったのだが、そのあと、おびただしい数の、魔獣が来て……

第二十話、最後の日2

ニルside

「はあ、はあ、つく、魔力がもうない。次こられたら、終わりだ」

これは、まじだ。ふざけてなんかはいない。本当に、次こられたら、肉弾戦しかない。二人は、戦闘技術は、ないし。魔力もそこがつきそう。今のうちに、休憩しなければ。隠蔽【魔術障壁】なんか使えんじゃなかった。あんな、魔力を食うやつだったのかよ。……爺さんの古文書、当てにならないな。

「二人とも！ とりあえず、家へ戻るぞ！」

「ええ」

「わかった」

ミコト……。いったい、どこいったんだよ。お前がいなきゃ、話にならないだろうが。

だから、早く戻って来い。ミコト。

そして、とりあえず、家へ戻った俺たちは、まず、魔獣用に、風の魔術石をこれでもか、と思えるほどに、用意した。そして、俺は、神殿に行き。【禁断の書】を持つてくることにした。

- - これは、悪魔を呼ぶための、本で、魔方阵の書き方や、契約のことが書いてある。

……爺さんには、絶対に使うなといわれていたが、仕方ない。使うしかないんだ。

だが、ピンチにならなければ、使うつもりはない。ミコトがくるまで、なんとか、持ちこたえるんだ。

そして、敵を倒した後、また、みんなで、遊んで、飯を食べて、寝るんだ。だけど……。もう、何もかもが、終わるような気がしてならない。なにか、いやな予感がするんだ。でも、俺たちは、負けない。どんなことがあっても、生き残るんだ！

「お、お兄ちゃん、あ、あれ」

「ん？ なんだ？」

「うそ、でしょ」

俺たちが、後ろを振り返り、見たもの。それは、おびただしい数の黒い物体が、空を飛んでいた光景だった。――あれは……。翼、か？ それにしても、あの容姿からすると……。魔獣、だな。おそろく、飛空形魔獣だろう。確信はないが。

「くっ、二人とも、絶対に、生き残るぞ！」

「くっくっ、うん！」「くっく」

side out

????? side

騎士どもが不甲斐ないので、仕方なく、私は、ミルネリア教に連絡を取り、飛空形魔獣を、一〇〇〇匹用意するように、言った。多いよ
うな気がするが、相手は、翼人だ。何をしでかすかわからない。念
のためだ。

「それにしても、あの少年にかけた魔術は、効いているようだな。
……さて、ここは、戦場になる。私も、森を抜けるか」

まあ、森に残っている騎士たちは、放っておいてもいいだろう。 -
- いくらでも、代わりはいるのだから、な。くくく。……さて、森
を出た後は、闇魔術を使って、観察するか。翼人の最後を、な。

s i d e o u t

私たち、第三部隊は、翼人の攻撃を受け、撤退をせざるを得なかった。これは、想定外だった

まさか、二つの部隊が、やられるなんて……。悔しい。でも、第一部隊がきて、なんとか、倒してくれるだろう。そう思っていたときだった。東から、鳥が羽ばたくような、音が聞こえてきたのは。

「た、隊長、あ、あれは、何ですか？ 僕には、黒い生物がたくさんこっちに向かってきてるように見えるんですけど」

「……大丈夫。私もそう見えるわ。あなたは、間違っではない」

そう、これは幻覚などではない。れっきとした、ありのままの光景。

……あの方向から、きた、ということは、本部が、放ったの？ ……

……だとしたら……。私たちが所属していた宗教には、裏がある。

そう、とらえていいわね。……いま、思い出したけど、あれは、昔、お母さんが、読んでくれた絵本（イースの勇者）に書いてあった、生物。【魔獣】ね。確証はないけど……（だって、翼なんて、生えてなかったもの） - 魔獣は、不死身で、弱点がないといわれているけど……。必ず、なにか、秘密があるはずだわ。……でも、私たちに、何もできない。本部に戻るしか……

「隊長！」

「！？ な、なに？」

「早く、戻りましょう！ 僕らも、餌食になっちゃいます！」

……やっぱり、それしかないのかな？ 本当に、何もできないのか

な？ …… 私には、何もできない。逃げるしか……。方法は……。
- 私が悩んでいるうちに、魔獣は、どんどん、こっちに迫ってきている。しまった。あーだこーだ、悩んでないで、生きる道を選ばなきゃ。みんなの命を預かっているんだから。

「ふーっ、…… 第三部隊。本部へと、帰還します！ 全員撤退！」
「イエッサー！」

悔しいけど、私にできることは、ない。できるとしたら、みんなを無事に帰すことだけ。それしか、ない。

side out

竜騎士 side

俺は、通りすがりの、竜騎士なんだが……。なんだ？ これは？
気持ち悪い、生物がうようよ、目の前を飛んでいる。はつきり言う
て、気持ち悪い。気持ち悪いから、ルークに焼き払ってもらおう。

「ルーク！ 目の前の生物たちを焼き払え！」

「リヨウカイ」（キュイ）

ブオオオオオオオオ！

俺は、生まれたときから、ある、能力がある。それは、竜と、会話
できるという、なんとも、少女っぽい、能力だが、俺はこれを気に
入ってる。なんせ、会話相手に困らないからな。別に、さびしいわ
けじゃあないけどな。（ただ、周りの連中が遠ざかるから……）さ
て、気持ち悪い生物は、死んだかな？

…… あー、やばい、やばいやばいやばい！ なんか、燃えたところ
から、再生してる！ しかも、こっち来た！ やばい！ にげなき
や。

「る、ルーク！ 全速力で逃げろおおおお！」

「ワカリマシタゴシユジン」（キュイキュイ）

- 俺が乗っている飛竜は、世界で、百匹しかいない、風竜。だか
ら、トップスピードは、音速の一步手前ぐらいで、飛ぶことができ
る。だから、逃げられる。そう思ったんだがな。…… ありえんだろ
おおお！ なんて、あいつら、ルークと同じスピードで、飛んでん

だよ！ ルークも、冷や汗かはわらないをだして、こっちをくりくりした目で、
見てくるじゃねえか！ ああ、もう！ かわいいな！ こいつ！
……いや、今は、こんなことを考えてる暇はなかったな。仕方ねえ。
魔術使うか。

「風よ！ 我と竜を押して、加速せよ！ エアーダッシュ！」

ブオオオオオオオオ！

クツ、やばいな、やはり、きつい。ルークには秘密にしてるけど、
魔術なんて俺は使えない。
でも、モドキはつかえる。あることをすればな。

「ぎゃあああああ！ いたいいたいいたい！ 空気
が！ いたいいたい！」

「ゴシユジン……バカ？」（キュキュキイ……キュキュ？）

うつせえ、こんなことになるなんて知らなかったんだよ！ まあ、
音速で飛んでいるときには、風が、鉄のように感じるというのは、
学校で習ったけど……。忘れてたんだよ！ なんか、文句あるか！
ギラツと、歯茎はぐきを出しながら、顔が変な顔になってるのを気にせず
に、俺は、ルークをにらんだ。……やめてくれ、そんな目で見るな。
惨めになってくるだろ……

そして、魔獣を振り切ったと思ったルークは、急停止した。

- - 当然、俺は、前にのめりかかるわけで……

バコン！

「いってえええええ！ てめえ、鱗が硬すぎんだよ！ 血、出てき
たじゃねえか！」

「ソレハ、ボクガツヨイアカシ」(キュキュ、キュキュキュ、キュキュキュ)

はあ、でも、こんなかわいい顔を見ると、ついつい、許しちゃうんだよなあ。あとで、肉でもあげるか。

……ドンの肉がいいな。あれは、うまかった。ルークも気に入るだろう。さてと、ここいらで休むか。

?????side

新たな、登場人物が、登場した。――まるで、【イースの勇者】のような展開だ。……ミコトはイース勇者になることを、嫌がってい

たけど、私は、いいと思った。あの時は、そう。私が、ミコトに恋をしていたころ。あの日は、まさに、晴天そのものだった。……ミコトは、あの日、唐突に王から、【魔王】を倒すように言われた。そして、ミコトは、【イースの勇者】にならざるを得なかった。でも、ミコトは、やりたくなかったんだろう。あんなにいやがつていたんだから。……ああ、あの日に戻りたい。戻りたいよ。ミコト。

第二十話、最後の日2（後書き）

天国について。

前回、天国は、球体の星の下に位置すると説明した。今回は、その天国について、詳しく説明します。

天国とは、前世で、いい行いをした人が行くところで（生物なら、全部当てはまる）人を殺したりしたら、いけない。（自然に虫を殺したのは、ノーカウント）この世界も、地獄同様、ランク別に階が分かれている。下を見てほしい。

- 一階 次期精霊（ここで、一〇〇〇年過ぐす）
- 二階 役得善人党（ここで、五百年過ぐす）
- 三階 偽善党（同様に、二百年すぐす）
- 四階 少子善人党（百年過ぐす）
- 五階 入り口（始めてくるものは、皆ここに行く）

とある。

各階には、極楽の世界が広がっており、一年に一回、善金を支払うことで、その階で、過ごせる。（払えなくなると、下の階に落とされる。）また、この世界で、悪事を働くと、即、転移術で、地獄に落とされる。なので、悪事を働くものは、非常に稀^{まれ}

次は、悪魔界ですね。

第二十一話、最後の日3（前書き）

くあらずじく 到着するや否や、圧倒的な力で、瞬く間に、森をやりはらった、魔獣に、ニルたち三人は、恐怖を覚えた。だが、そんなことを思っている間に、火の手は迫り……

第二十一話、最後の日3

リルside

……ああ、私たちの森が……。許さない！絶対に、許さない！
殺してやる！ 跡形もなく！

「おい！ リル！ どこへ行くんだ！」

「決まってるでしょ！ あいつらを倒すのよ！」

ニルの制止の声を振り切り、私は、魔獣たちが、いる、場所に、向かって、走った。

……わかってる。私が行ったって、何もできない。……でも、悔しいじゃない。私たちの森を燃やしたやつらに、なんにもできないなんて。

そして、私は、走り続けて、ようやく、魔獣がたむろしている森の外にたどり着いた。

「お前たちなんか、お前たちなんか……。死ねばいいのよ！ ド・ル・マ・ト・ギ・ス・マ・ア・ミ・ス！ アトミックフレア！」

- 私は、古代魔術を、力みながら、唱えた。（生命力が減ることなんてきにしない）そして、私の手から飛び出た、小さい太陽みたいな、球体が、空中に、害虫のように、たくさんいる、ところへ、突っ込み、そこで、爆発した。

ドドドドーン！

竜騎士 side

気持ち悪い軍団から、逃げ切った俺は、ルークを近くにあった洞窟に置いて、燃え盛っている森を見ていた。……ひでえことするな、おい。なんで、こんな、残酷なことができるんだよ。俺だって、できないぞ。こんなこと。……俺には関係ない、か。……放っておいて、逃げるということも考えたが、やめた。なぜなら、森の近くで、女が、気持ち悪いやつらに魔術で、殺されそうになつてたんだから。ああ、もう！　ここで、見捨てたら、男じゃないぜ！

「ルーク！　いくぞ！」

「ワカリマシタ」（キュイキイ）

さーってとー、いつちやるか。

俺は、がけから、飛び降り、洞窟にいるルークが俺をつまぐ、背中に乗せて、そのまま、低空飛行で飛び、女が、いるところに、猛スピードで、突進するように、向かった。
間に合え、間に合え！

そして、女に魔術が当たる瞬間、うまく、女を俺が、掴み、そのまま、高上し、魔術モドキをかけて、獣人族の国のほうに、飛んだ。

「ぎゃあ ああああ！
いてえ えええええ！」

「ヤッパリ、ゴシュジンは、バカ」
（キュイキュイキュイ）

う、うるせいやい。そんなこと、何度も言われなくてもわかつてるさ。……でもな。これをやらないと、気持ち悪いやつらに追いつかれんだよな。……それは避けたいし。なにより、死にたくないもんね。

俺は、まともに、風の抵抗を受けているが、俺の膝で、気絶？ している女は、抵抗を受けていない。まあ、そうするように、置いたんだけど、な。これは、誰も俺が計算したと思ってないだろう。そして、五分もかからないで、俺たちは、獣人の国の上空へと、たどり着いた。……この国にくるのは、久しぶりだな……。懐かしいな。おっと、女が落ちるまえに、着陸着陸つと。

…… やっぱり、【メーガスの糸】でつながっているから（ルークが感じ取れる方）俺の思っていることは、全部わかるんだな。さてと、これから、どうするかなあ。とりあえず、宿に、女を運んで、そのまま、俺も寝るか。

Side out

ミルside

お姉ちゃんは、魔獣の群れに、跡形もなく、殺された、と、戻ってきたお兄ちゃんから聞かされた瞬間、目から、大粒の涙が、ぽろぽろ、流れ出した。どうして？　なんで、お姉ちゃんが？

「うええええん。ひっぐ、ひぐ。お姉ちゃん……。なんで、先に死んじゃうのよ。ルリおねえちゃああん。うわああああん！」
「……………」

私が泣いている間、お兄ちゃんは、ずっと黙っていた。 - お兄ちゃんも悲しいはずなのに、なんで？　でも、かすかに泣きながらお兄ちゃんを見ると、俯きながら、泣いてるのが、見えた。

……「お兄ちゃんも悲しいなら、泣きなよ」と、泣き声で、言うとお兄ちゃんは、涙を指で拭いて、「いや、お兄ちゃんは、強いから泣かないよ」と言った。……お兄ちゃん……。私がいる前では、泣かないつもりなんだね？……。でも、絶対、お兄ちゃんは、心の中で、泣いてるはずなんだ。だから、そっとしておこう。

そして、しばらく私が泣いていると、草陰から、黒い狼がやってきた。お兄ちゃんは、それを見て、優しかった顔を一变。何かにあたるように、顔を怒らせながら、魔術を無詠唱で放ち、狼を吹き飛ばした。私は、泣くのをやめて、自分も戦う準備をして、狼、いや、魔獣に魔術を放った。

しかし、魔獣は、すぐさま、起き上がり、口から、黒い液体を私たちめがけて、放ってきた。

「っ！？ ミル！ 危ない！」
「え？」

シューウウウウ！

「ぐああああああ！」

お兄ちゃん？ ……うそ、腕が、無くなってる。……たぶんだけど、あの液体は、闇の魔術が混じっていたと思う。だから、お兄ちゃんの腕は、溶けてなくなった。

「お兄ちゃん！ 大丈夫？」
「あ、ああ、大丈夫だ」

お兄ちゃんは、無理をしている。私にも、それがわかった。だって、肩からしたから、黒い波紋が上ってきて、どんどん、肩から、下が溶けてきてるんだから。

「お兄ちゃん！ 肩が！」
「あ、ああ、わかつてる。ふん！」

……それしか、ないよね。肩を切り離すしか。ないよね……私のた

めに、庇ったから、こんなことに……私が、魔獣を倒さなきゃ。そのためなら。なんでもする。

「おい！ ミル！ 何をしてるんだ！」

「何って、服を脱いで、裸になって、魔獣をひきつけるためだよ」

もう、それしかないんだ。不死身の魔獣をひきつけて、お兄ちゃんを逃がすには……

そして、全裸になった私は、魔獣の前にいき、座り込んだ。

それを見ていた、魔獣は、興奮したのか、息が荒い。そして、後ろのほうから、黒い棒を出してきた。

うっ、あれが、男にある……。でも、我慢しなきゃ。そうすれば、お兄ちゃんを逃がせる。

「ミル！」

「い、いいから、お兄ちゃんは逃げて！」

「だめだ！ お前を置いて、逃げるわけにはいかな」

- 私の上に気がついたのだろう。お兄ちゃんは、言葉を詰まらせて、苦虫を噛み潰したような顔をした。私の目は、いま、ぎらぎらと、燃える炎のように、真剣な目になっていだろう。それは、まだ、生きるということを見失ってないから。だから、私は、なんにも言わない。お兄ちゃんが、私の思っていることを、感じ取れたから。

「わかった。必ず、あとで、向かいに来るからな。それまで、抵抗するんだぞ」

「大丈夫！ 任せて！」

本当は、怖くて、仕方がない。いまから、魔獣に襲われると思うと、死んだほうがまだとも思う。

でも、お兄ちゃんが無事なら。それでもいいし、私が死んでもいい。
お兄ちゃんのためなら……

side out

ここは……。どこだろう。……暗い。とにかく暗い。何も見えない。
何も聞こえない。ただ、目の前にいる、全身が赤い人影が見える。
？　なんで、こんなところに……。俺は気になり、赤い人に声をか
けた。
だが、俺の声が聞こえないのか、赤い人は、どんどん、遠ざかって
いく。

「まて！ まってくれ！」

俺の必死さが伝わったのか、赤い人……いや、よく見ると、人間だ。それも、男か女かわからない容姿をしている。

「……ようやく会えたな」

「へ？」とアホ丸出しな声を出してしまった俺になにを言うまでもなく、赤い人は、俺の手を掴み、俺の眼球を抜き取った。へ？

「ぐあ」

声もろくに出せず、なされるがままに、俺の眼球を取った赤い人は、その眼球を消し去り、また、俺の手をとり、今度は、俺の眼球がない、方の目をこじ開けて、吸い込まれるように、入っていった。

- - 激しい痛みが襲いつてきて俺は、黒い空間で一人、悶絶して、痛みが引くのを待った。

そして、少したったころだったか。俺がないはずの眼球を触ると、そこには、眼球がちゃんとあった。

疑問に思ったが、何もできないので、俺は、黒い空間で、ボーっとしていた。なにが起こったのか？

それをずっと考えていたら、急に睡魔に襲われ、俺は意識を手放した。

第二十一話、最後の日3（後書き）

悪魔界について。

ここは、精霊界ともミルナスタとも違う次元にある世界の上半分。ここには、悪魔と呼ばれる、魔法陣を描き、契約し、代償をささげることで、なんでもひとつ、願いをかなえてくれる生物がミルナスタと同じ人口ぐらい、すんでいる。この生物の頂点に君臨する王は、神にも匹敵する力を持っているとされているが、それは、誰も知らない。（下にランク別の表を書きます）

ランクG 魔獣

ランクF 下級悪魔

ランクE 中級悪魔

ランクD 上級悪魔

ランクC 伯爵悪魔

ランクB 貴族悪魔

ランクA 大王悪魔

ランクS 悪魔王

現悪魔王は、三代目で、長き渡る平和を覆し、【暴的政治】（暴力

で、何もかも、解決する政治のこ）をはじめて、導入した、王でもある。そして、今の王になってから、ミルナスタに魔獣を送っているとされている。

さて、ここまで、見てくれた皆さんには、感謝を。……実は、皆さんに、私が、書く時間帯を教えておこうと思ひまして、下に書いておきますので、見てみてください。

毎日たぶん午後、八時から、十二時の間。

そして、たまに、午後一時から、三時の間で、二話投降することもあります。

さて、もうすぐ、この小説の〇章が終わります。そして、ここからが、この小説のスタートです。どうぞ、よろしく願ひします。

P S

現在、ここまで修正が終わりました。あともう少しで終了すると思ひますので、どうぞ、よろしく願ひします。

七月三日、作者ミーナより

第二十二話、最後の日4（前書き）

くあらずじく ミルを置いて、右腕を失ったニルは、森を出るために、炎をよけながら、着実と、入り口まで向かった。だが、途中、大きな魔物に襲われて……

第二十二話、最後の日4

ニル i d e

「ガアアアアア！」

「っ！？ 光よ！」

ドオオン！

……なんだよ、こいつは！ いくらなんでもでかすぎだろ！ 容姿は、ドンを四倍、いや、五倍にしたぐらいの大きさ……。それより、ミルは……。まだ、生体反応はある。大丈夫だ。……だが、いつまでもあそこにいさせてはいけない。早く、助けをよばなきゃ。それには、まず、この魔物を倒さないと。

- 煙が晴れると、魔物が、俺に突進してくる。それを、俺は、目の前に、光の壁を張ることで、防ぐ。だが、魔物の力が強すぎて、一分もしない間に、ヒビが入り、あっという間に、破られた。

「ちっ、敵を破滅に導く、光よ。敵を打ち滅ぼせ！ ライジシューター！」

- 俺の左手から、小さな光がぽつと、現れ、そのまま、でかい石ぐらいになり、魔物の前に行き、はじけた。

パン！

さて、効いたかな？ ……だめ、か。ぴんぴんしてる。……やばいな、俺は、右手がない分、ハンデになる。……それに、魔力は、も

う、コップいっぱいぐらいしかない。……それに、右腕から、血があふれるほど、たれてる……。早くしないと、命が危ういな。

- -しばらく、目をぱちぱちして（先ほどの光がまだ抜け切つてない）目を回復した魔物は、茶色かった、皮膚を血のように赤化^{せうか}させて、鼻息が荒くなっていた。……怒ったか。ちょうどいい、怒れば、攻撃がワンパターンになる。チャンスだ。

「光よ、大蛇になり、敵を貫け！ デイボルトドリス！」

- -それは、詠唱の内容どおりに、現れた光の粒が、大蛇の形になり、怒っている魔物に突っ込み、貫通した。

「ギガアアアア！」

「やった！」

だが、甘かった。勝利を確信して、浮かれていた俺の近くの茂みから、あの魔物の子供みたいなやつが、何十体と出てきたのだから。やばい。もう、戦う気力なんかないのに。なんで、出てくるんだよ。あんなにたくさん。

もう、ここまでなのか？ ……いや、だめだ。まだ、俺は、ミルを救っていない。まだ、人生の半分も生きていない。まだ、なにもしていない。……だから、俺は、生きるんだ。そして、みんなと一緒に、また、遊ぶんだ！ そのためなら、悪魔にだって……ん？ 悪魔？ ……そうだ。悪魔召還が、あった。……やるしかない。……まずは、魔方阵を書かなければ。

- -俺は、親に群がっている子供に見つからないように、一步下がりを、自分の親指を噛み、血を出して、地面に、本を見ながら、書き始めた。

まずは、円を描き、その円の真ん中に、星を書いて、その端に、神

に対する、不満を、【古代語】（爺さんに習った）で書く。で、さらに、円を大きい円の外に描き、現代語で、呪文を書く。そして、最後に、血を一トル（ニデシリットル）たらし、……そのあとが、詠唱か……。しかたない。小声で言うか。

「おお、神に復習するために、力がほしい。そのためなら、我は、対価をささげる。さあ、出て来い。神に対なすものよ」

- 刹那、魔方陣がまがまがしく、光りだし、すぐさま、魔方陣が消えて、代わりに、大きな穴ができた。そして、そのどこまでも続くような穴から、背中にデイスティス（コウモリ）みたいな、翼を生やし、魔族のような、尾。そして何よりも、頭にある、巨大な角が、どの生物より、優れている証だった。

「……我を召還したのは、汝か？」

「……………」

やば、い。息が詰ま、る。なん、だ、この、覇気、は。まる、で、ドム（ウサギ）が蛇ににらまれたとき、のようだ。固まりながらも、なんとか、伏せていた顔を上げると、そこには、人間と変わらない顔の悪魔と目が合った。

「もう一度問う。我を召還したのは、汝か？」

「あ、ああ。そうだ」

怖い。怖い怖い怖い。やばい。こいつはやばい。神と対なすもののわけがわかる。これは、本当にやばい。逆らったら、殺される。いや、消される。

「ふむ……。で、望みはなんだ？」

そうだな。こいつなら、魔獣でも、なんでも、消してくれそうだな。やった！これで、解決する。

- 俺は、それを口にしようと思った瞬間、悪魔に驚掴みにされ、宙ぶらりんの状態になった。
な、なんだよ。なにか悪いことしたか？

「……我ほどのものを召還したものが、すごいと思っていたが……。これは、期待はずれだな。願いをかなえるでもない。抹消する」「な！？」

- 俺は、抵抗した。だが、驚掴みにされているので、足と手をばたばたさせることしかできなかった。

くそ。こんなところで終わるのか？ まだ、やることがあるというのに。ここで、死ぬのか？

……そんなのは、いやだ！ 絶対に生きてみせる！

「光の獣よ！ 這え！」

「……ふむ、抵抗するか……。ならば、押さえつけるまでだ」

なんとか、悪魔の手から逃れ、魔術を放ち、逃げようとしたが、なぜか、体が、動かない。

金縛りにあつたように、動かない。口は動くのに、足が言うこときかない。や、やばい。こんどこそ、消される！

「我を召還したことを、後悔するんだな」

「うわあああああああ！」

side out

「ん……ここは……どこだ？」

あつれえ？ 俺は、確か、森にいたはずなんだが…… なにも覚えてない。なんでだ？

気になった俺は、ダステイスとミニルスに心の中で、声をかけた。だが、応答がない。おかしいと思い、大音量で、叫んだ。するとどうだろう、勝手に、入れ替わり、動き出してしまった。

シュウウウウ

ミニルス side

「……こいつは、やばいな。本当にやばい。……魔獣、いや、悪魔がこの世界に召還された。それも、【伯爵クラス】の」

ダステイスは、この気配に怯えて、ふさぎこんでしまったし。ミコトは、なにも覚えていない……。なら、俺が、がんばらなきゃ、ミコトの大事なものが消える。ミコトには、悪いが、【神術】を使わせてもらう。

- - すぐさま、神の術のひとつ、空間移動を使い、悪魔がいると思われる場所に向かった俺は、そこで、ミコトの家族が、消されている光景を見てしまった。

- - 俺の目から、涙が漏れる。たぶん、染み付いた、思い出が、ミコトが、泣いているんだと思う。

そりゃあ、そうだよな。家族を殺されたんだもん。そりゃあ、泣

くさ。誰だつてそうだ。俺も例外じゃない。……ミコトの家族を殺した、お前は、許されないな。神の名の下に、消す！

そして、こちらに気づいた悪魔が、不適に笑い、俺に向かって、ニル（だっけか？）がつけていた、ペンダントを、ムシュ（マッハ）を超える速度で、投げてきた。だが、俺は、それをほこりでも払うかのように、キャッチして、道具袋にしまい、【神の目】のひとつ、【デュリアの目】で、【伯爵悪】をにらんだ。（寿命が減るが、仕方ない。あとで、謝るから許してくれ）その目に気がついた、【伯爵悪魔】は、なにか、考えていたが、そんなこと関係ない。消すだけだ。さあて、^{アクセラレーター}一方的な虐殺の始まりだ！

side out

ああ、魔獣が私に覆いかぶさる。そして、その下劣なものを私に突っ込もうとしている。

……抵抗しなきゃ。でも、抵抗した、私を、小さな足で押さえつける。でも、うまく、足をけて、立ち上がり、魔獣から、距離をとる。逃げた私を、魔獣は、警戒心むき出しな目で見て、口から、なにか、白い息を吐き出した。……これは、冷気？ ……私を動けなくして、犯そうとする戦法ね。

でも、私だって、負けない。お兄ちゃんたちには、内緒にしてたけど。私には、お兄ちゃんより、翼人の血が多く入っている。だから、翼を具現させて、本当の翼人の力が発揮できる。でも、これ、十分しかもたないんだよね。その間に、魔獣をどうにか倒さないと、負けてしまう。

……どうにかして倒さなきゃ。 - -そして、私は、血のたぎりを感じながら、力を込めて、背中から、純白の翼を生やし、少し、変に感じる、空中にとび、上にいる魔獣に見つからないよう、注意しながら、森の中を飛んだ。それを追いかけるように、ついてくる魔獣を見据えながら、私は、家へと向かった。風の魔術石を、いや、今の私なら、風の魔術が使えるから、必要ないけど、念のために、ね。

第二十二話、最後の日4（後書き）

遅れてしまい、申し訳ありません。さて、今回は、神の目のことについて、書きたいと思います。

神の目、それは、神の王が持っていると言われる目で、自分を強化するのはもちろん、魔術の威力をあげたり、摩訶不思議なことができる目まで、ある。その数七種類。（下に書きます）これは、神のみが知っていることなので、ほかの生物には、普通の目にしか見えな

い。

第一の目、デイリア（万物解析眼）。これは、万物すべての見たものを分析し（筋肉の動く瞬間までも）次の行動がわかるという目。神には、黄色の目に見えている。

第二の目、ガス（火事場眼）これは、生物なら誰でも、ピンチの時に発動する、火事場の馬鹿力を常時、発動できる目。神には、赤色に見えている。

第三の目、ミュリス（幻影眼）これは、見たものを、幻影の世界に落とし、精神的な、ダメージを与える目。神には、紫に見えている。

第四の目、ツール（魔術追加眼）これは、自分で、オリジナルの魔術を作れる目。属性同士を合わせたものしか作れない。神には、青色に見えている。

第五の目、ヌール（停止眼）これは、見たものの動きを、任意の時間、とめることができる目。神には、白色に見えている。

第六の目、アール（創造眼）これは、生物以外なら、なんでも、創造できる目。神には、黒色に見えている。

第七の目、デューク（死神眼）これは、死神と呼ばれる、死んだときに迎えに来るといわれている者に変化する目。神には、群青色に見えている。

とあるが、どの目も、同時に使うことができず、また、神力と呼ばれる魔力に近いものを、多く消費するため、なんども使えるわけではない。（神は通常、神力を蓄える癖があるので、結構、使える回数が多い）また、この目は、ほかの生物に、劣化した、状態で、渡すことができるが、それには、強い、信頼関係でないと、渡すことができない。（失敗すると、最悪、死に至る）

と、一見便利のように思えるが、実は、この目は、使ったびに、多く寿命を減らすため、不老不死の神以外が使うとなると、早く死ぬ。なので、神は、あまり、生物に力は貸さない。例外もいる）

さて、この小説もお気に入り登録が増えてきたので、近々、プロフイルを書くかと思っています。別に見なくても支障はありませんが、結構重要なことが書かれているかもしれないので、ぜひ見ることをお勧めします。

では、また会いましょう。

第二十三話、最後の日5（前書き）

くあらずじく　ニルがこの世から消え去ったことを知らないミルは、まだ、魔獣と死の鬼ごっこをしている最中だった。家へ行こうとすると、瞬動で待ち伏せされていて、もはや、スタミナが切れたほうが、尽きる状態になっていた。

第二十三話、最後の日5

うーん。空にいる限り、大丈夫だけど。これじゃあ何の解決にもならない。それに、家には、大切なものがたくさんある。炎の手が迫る前に、持ち出さないと。でも、私有家へ近づくと、そこには、また、【瞬動】で、移動した魔獣がいる。さっきから、この状態が、十分も続いている。いつ、魔力が尽きるか、わからない。早く、どうにかしないと。でも、私の思いとは裏腹に、火の手は、どんどんと、迫り、もう、家から、十エト（十メートル）のところまで、きていた。

どうしよう。本当にどうしよう……。魔術で、魔獣を追い払う？……これしかない。これしか、思いつく方法がない。なら、やるしかない！――私は、家から、少し離れて、翼人の象徴の風の魔術を使うために、残り少ない魔力を、中から、取り出して、詠唱を始めた。

「右からは、熱風。左からは、寒風。そして、目の前に、真空の風！ 吹き飛べ！ トリプルウィンディ！」

――その詠唱のとおり、右からは、遠くからでもわかるほどに熱い風が吹き。少し遅れて、左から、氷のようにつめたい風が吹き。さらに目の前に、渦を巻きながら風が凝縮されて、当たったら、そこがへこむほどの威力を持つ風が生み出され。三つの風が円を描きながら、周り。薄紫色になりながら、合体し。そのまま、家の近くにいた、魔獣にぶつかり、暴発した。

ギューイイイイイイイン！ ガガガガガガガガガガガガ！

すごい。これが、風の魔術……。初めて使ったけど、どうにかでき

た。……光の魔術は、浄化に使われることが多いから、威力が低め
だけど。攻撃用の魔術は、やっぱり違う。あの不死身の魔獣が切り
刻まれて、肉片になってる。……でも、しばらくしたら、生き返る
んだよね、あれ。……今のうちに、家に行こう。

家へと向かった私は、まず、木を上っていき、私の部屋へと向かっ
た。

「……なんだか、何年も家を離れていたような感じがする……。へんだなあ。今日までいたのに……」

しばらく、家のおいや、感触を確かめていた私は、すこした後、「はっ!」となって、大事なものを探し出した。

「うーん、確かここに……あ、あった!」

- 私 が 棚 から 取り 出した もの。 それは、 家族 (ミコト も 含めて) の 絵。 これは、 ミコト が 五歳 の とき、 私 が 書 いた 絵。 けっ っ っ、 自信 ある んだ よね。 …… この ころ は、 平和 その もの で、 楽し かった なあ……。 ミコト が 小 さ くて か わい くて。 お兄 ちゃん も どこ か、 幼 かった し。 お姉 ちゃん も そ う。 …… ドン も い っ ぱ い いた し、 食 べ 物 に 困ら な かった。 そして な に よ り、 襲 っ て く る も の が い な かった。 …… それ より も、 早く 服 を 着 な い と。

私は、棚の横にある服をかけてあるところからただでさえ少ない服を取り出し、とりだした布を胸の部分と、下半身に巻いて、その上に白い下着と、白い短パンを着て、首に、お兄ちゃんからもらった魔力強化のネックレスをぶら下げて、床においてある絵を、片手に家を飛び出した。

まだ、復活はしてない。今なら、森を出れるかも。
そう、思ったのもつかの間、肉片だった、魔獣が、ぴくぴくと動き出して、合体し、原型に戻ってしまった。

「……逃げなきゃ。どこか、人がいる場所に」

そう決断した私の反応は、早かった。背中に翼を生やして、空を飛び、上空に舞い上がった。

だけでも、――この時、私は、判断を誤った。なぜなら、上空にたくさんいた魔獣のことを忘れていたから。

それに気づいたときは、もう遅かった。すぐに見つかって、攻撃を仕掛けられてしまった。

「っ!？」

いつせいに爪やら、尾やら、タツクル。なかには、火炎を吐いてくる魔獣までいた。

- 私は、逃げた。その攻撃から。速度を上げて上げて上げて、上げまくり。風の抵抗を受けながらも、なんとか、逃げて、もう大丈夫だと思ったところとまり、後ろを振り向いた。するとどうだろう。

すべての魔獣が私の後ろをついてくるではないか。私は、この時、恐怖を覚えた。だってそうでしょ？ その険悪な顔をたくさん見てしまったのだから。私は、恐怖で足がすくみ、動けなくなってしまった。

「……ガアアアアア！」
「ひっ!？」

- 私が動けなくなってしまったのを感じ取ったのだろう。全部の魔物が私に飛び掛り、爪で体を引き裂き、火炎を放ち、尾の攻撃で骨を砕いてきた。あまりの痛さに気絶しようとしたが、そこにさらに痛みがプラスされ、気絶すらできなかった。そのまま、魔獣は、私の両足を掴み、地面へとたたきつけた。

「きゃあああああ！」

- 猛スピードで、地面へと落下する感じは、まるで、夢で、がけから落ちてしまったときにビクツとなる感じだった。……ああ、もう、感触がない……。痛みも、恐怖も、何もかもが、感じなくなっていました。

ごめんね。みんな。私はもう、だめみたい。いままで、ありがとう。先に逝きます。さようなら。

グシャ!!!!!!

s i d e o u t

ニル s i d e

ここは、どこだろう？ …… わからない。何もかもわからない。
年齢も、好きなものも、何もかもわからない。でも、名前と知識
はある。どうして、こんなところにいるんだ？ なにか、大事なこ
とを忘れている気がする。なんだろう？ …… あ、誰かが来る。隠
れないと。

俺が隠れた場所は、黒い世界にあった、樽の中だった。

「ここか、新たな悪魔の逸材いつせいが落ちた場所は」
「はい、ここだと思います。ひひっ」

悪魔？　なんだそれは？　逸材？　もしかして、俺のことかな？
あ、こつちにくる。気配を消さなきゃ……。あれ？　気配って、どうやって消すんだ？　……羅術。ん？　いま、なにか、勝手に思ってたきがするんだが、なぜだ？　……羅術……　羅術？　……そうだ、羅術だ、それを使え。……羅術か……。使いかたが、わからない。……なあに、簡単だ。思え。自分の思ったことを。……思う。……そうか、思えばいいのか。よし。

【透明になれ】

シュン！

「おや？　ここにいたと思ったんだが、なにもいないな。なにかの間違いか」

「どうやら、逸材の報告は間違いだったようですね、ひひっ」

たぶんだけど、逸材は俺だと思う。これは、推測でしかないが、どうやら、前の俺が別世界でここに送られた。そして、ここに来た。たぶんここは、悪魔界か、地獄、いや、悪魔界だな。この世界は。俺の体から、角と尾が生えてるんだから、それがなによりの証拠だろう。……行つたか。さて、これから、どうするかな。

――樽からでた俺は、まず、この世界を見回ることにした。右腕がないのを気にしながら。

光がいつさいない、この世界。なのに、俺は、光があるように見える。たぶん、悪魔は夜行性なんだろう。

見渡す限り、悪魔と思われるものや、狼みたいな生物が、いた。こ
こは、おそらく、どこかの国、だろうか？ はるか向こうには、黒
い城が見えるな。そうとなると、ここは、王が住む国か。……それ
よりも、さっきから気になっていたが、みんなひどくおびえている
な。……あいつが、その元凶、か。

- 俺が見たもの。それは、太りに太った悪魔と思われるやつが、
周りにいるやつを殴ったりけったりしていることだった。

……あいつは、えらい役職についているやつだな。そうじゃなきゃ、
殴られてるやつが、反撃しないわけがない。しかたない、ここは、
一肌脱ぐか。

それを決めた俺は、太った男の後ろに近づき、思い切り、股間を蹴
り上げた。

いきなり衝撃が襲ったのだから、ただではすまない。電気が走った
かのように、飛び上がり

飛び上がりすぎだろ。デブなら、そこそこにしておけよ。そして、
男は、地面にたたきつけられたあと、ぴくぴくと動かなくなった。
ま、ばれなきゃいいだろ。さて、次は何をしよう？

s i o d e o u t

第二十三話、最後の日5（後書き）

羅術について。羅術とは、悪魔でただ一人、悪魔王が持っていると言われる技で。思ったことを実現できるという、神をも超える力。だが、弱点があり。自分が思ったことが、誰かに、ばれると、そのことが一生思えなくなり、使えなくなるのだ。だから、悪魔王は、むやみにこれを使ってはいいない。

ちなみに、悪魔が全員持っているのは、霧術といい。すべての魔獣を操れるほか、すべての魔術が使える、さらには、すべての能力がアップし、さらにさらに、対神の体になれる。だが、これにも弱点があり、一度使うと、一週間使えないというのが難点。

お気に入り登録が増えてうれしいです。……でも、感想がゼロ件で……。どうなんでしょう？ だれか、書いてくださいな。
では、また会いましょう。

第二十四話、最後の日6（前書き）

くあらすじく 伯爵悪魔としばらくにらみ合いをしていたミールス。
だが、そこに、なにかが落ちてきて……

第二十四話、最後の日6

ミルス side

…… ああー、なんか、落ちてきた。条件反射で、キャッチしちゃったよ……。ん？ よく見ると、ミコトの家族の一人の……。ミル、だったかな？ …… あいつらがやったのか……。皆殺し決定だな。逃げた、魔物もあわせて。

- 傷ついたミルを水魔術で、治療したあとに、近くにあった木の陰にやさしく置いた俺は、何も言わない悪魔を見据えながら、風魔術で、空に舞い上がり、うっとうしい魔獣の後ろへと飛んだ。

…… しかし、多いな。まるで、岩の下にいる、虫みたいだ。…… めんどくさいから、消すか。

- 【神力】と呼ばれる、神だけが持っている特別な力を身にまとい。ようやく俺の存在に気づいた魔獣に懇親こんしんの力を込めた、蹴りを食らわせた後、すぐさま、手から衝撃波を出して、粉々に砕いた後、沸いてくる魔獣めがけて、大音量で叫んだ。「くたばれ！」ってな。そしたら、すべての魔獣があつという間に、吹き飛んで、粉々になり、地面にぼとぼと落ちていった。

…… 汚い雨だな。吐き気がする。

- この世界の住人は知らないだろうが、魔獣は、【神力】か、【無属性魔術】でしか倒せない。

魔獣とは、生物を喰らい。成長する生き物。そして、悪魔によって作られた生物。魔獣には、心臓も、内臓も、肺も、腸さえない。なら、どうやって動いているのか？ それは、【デスエナメル】で、動いている。これは、精霊が死んだときに結晶となって、現れるものだが、実は、神も死んだときにこれができるし、魔物も見えないだけで、ちゃんと、デスエナメルが出る。（確率は低いかな）それ

に、悪魔だって、デスエナメルがでる。――特別な、生き物なら、誰でも、これは、出る。

……俺は見たことはないがな。……悪魔め、どこからこんなにデスエナメルを手に入れたんだ？

……世界中の魔物を殺したって、せいぜい、千個しか集まらないはずだ。……だとしたら、作っている？

……いや、デスエナメルが作れるわけがない。あんなものを量産できるなら、いまごろ、この世界も、悪魔の支配化に置かれているはずだ。……考えるのはやめよう。いまは、伯爵悪魔を倒さなければ。

そして、俺は、風の魔術を弱めて、地面に下りたった。

「よう。待たせたな」

「……貴様、なに者だ？ あの数 of 魔獣を一瞬で消し去るとは……」

はっ。まだ、気づかないのか？ こいつ？ ……悪魔にも馬鹿がいるんだな。【初代悪魔王】みたいな、化け物じゃない分。楽でいいけどな。……それにしても、あいつ。魔力が底なしだな。それだけは、素直に驚いてる。魔力が底なし。ということは、魔術を乱射してくる可能性がある。ミコトも底なしだが、早くしないと、森が焼け死んで、二度と機能しなくなる。ミコトのためにも、早く消さないとな。

そんなことを思っていたら、俺の神の目が、次の動きを捉えた。……闇の魔術か。……なら、こっちは光だな。

「闇の波動よ、目の目の敵を吹き飛ばせ」

「……光の鼓動よ、目の目の敵を握りつぶせ」

――二つの異なる魔術が俺の目の前でぶつかり、甲高い（かんだかい）音を撒き散らしながら、光が徐々に押し始めた。……やはり、

さつきから思っていたが、こいつ。弱い。ろくに魔術の威力も高くないし。性能も、ごみくず以下だ。たぶん。こいつは、なにかのコネで、伯爵に成り上がったんだろうな。所詮は、中級悪魔クラスなみな悪魔だな。

そして、押していた光が絶頂に達したとき、向こうが動いた。

……近接攻撃か。……まあ、それぐらいしか、勝てるほうほうがないと、悟ったんだろうな。本能的に。

「貴様は、いったい、なにもの、なんだ！」

「はっ。そんなこと、自分で考えろ、よ！」

悪魔の下段蹴りをジャンプで避けて、空中で宙返りをし、かかと落としをくらわせようとする。だが、甘くはないのか、それを角で、挟み込み、足を取られる。だが、俺も甘くはない。足をねじり、回転することで、角をへし折る。

「ぐああああ！ きさまああああ！ 私の角おおおお！」

悪魔の角は、頑丈そのもので、マグマに入れたって、溶けないし、大剣で折ろうとしてもはじき返される。だけどな。【神力】を込めた足でたやすく折れるんだよなあ。これが。

「はっ！」

「ぐああああ！」

怒りで暴走気味の、悪魔の腹に思い切り、ハツケイを食らわせ、そのまま、腹を押さえた悪魔の脳天に、思い切り、神力を込めた足で、横から蹴り、もう一本の角を折る。……だめだな、こいつ。本当に弱すぎる。気配だけは大きいが、やはりというか、なんというか。……カスだな。

「わ、私のつ、角がああああ……っ……！」

「どうした、ええ？　なんか、言ってみろよ。命乞いとかさ？」

顔を地面に思い切りたたきつけた俺は、すこし、怒りを覚えながらやつに話しかける。なぜか、ミコトの体が、切れてるんだよなあ。

まあ、仕方ないけどさ。

「て……くね」

「あ？　なんていったんだ？　もう一度言え」

バコ！

さらに踏みつけている足に力を入れ、軽いクレーターができた地面を見ながら、それを言った。

すると、地面の中から、なにか聞こえる。ん？ よく聞こえないな。少し力を弱めるか。

すると、悪魔はすぐさま顔を上げて、涙でぐしゃぐしゃになった顔で言った。「ころしてくれ」と。

……誰が殺すか。お前には、死より怖いものを見せてやるんだから。殺すわけがないだろ。

[illegible]

「黙れ」

いいかげん、うっとおしくなったので、俺は、神の目の二つ目。【
 ガース】に目を切り替えた。

そして、悪魔に幻術をかけた。すると、刹那、視界がゆれたと思う
 と、すぐさま、赤く光る月がある世界に俺と、あいつは、落ちた。

- - ここは、月黄泉つくよみの世界と呼ばれる場所で。神の中で、悪事を働いたものを幻術でつれてくる場所なんだけど。俺は、精神的苦痛を与えるため、あいつをここに連れてきた。

いま、その世界の俺と悪魔は、仮死状態になっている。しばらく放っておいても大丈夫だが、あまり、長くは、だめだ。……さあて、やりますか。

「いま、ここは俺の思ったことが現実になる世界だ。たとえば、ほ

ら、後ろを見てみる」

「……ひっ!？」

悪魔の後ろにいたもの。それは、万を超える魔獣軍団だった。お前らの所有物なんだから、本望^{ほんもつ}だろ? 操り方は知っているんだからな。

「ひっ!? い、言うこと聞けよ! なんで、効かないんだよ!」

霧術^{むじゆつ}を使っているんだろうけど、この魔獣は俺が作った幻影だから、意味がない。

そんなことも知らずに、今にも襲い掛かろうとしている魔獣に言葉を書け続けている光景はなんとも、いえない感情が芽生えそうだ。Sとか、Sとか、Sとか。……さて、そろそろ、次のものを出すか。

「はあ、はあ。なんだったんだいったい」

「次は、お前に恐怖というものを植え付けてやるよ」

- 次の俺が生み出したもの。それは、初代悪魔王。【リユークII AII スタールス】だった。

伯爵悪魔よりも一回りも二回りも大きい竜の鱗のような鋼の皮膚。竜の尾を何倍も何十倍も大きくしたような尾。そして、さらには、人間十人分ぐらいの巨大な角。そしてなにより、ものすごく大きな剣を背負っているのが、印象だろうか。……何年ぶりだろうか。こいつを見たのは……。こいつには、散々なことをされたな。神界に大災害をもたらしたり。すべての生物を、ミルナスタから消し去ったり。さらにひどいのは、神をたくさん惨殺したことか……。あいかわらず、でかいな。俺の親父でさえ、これの半分以下なのに。はあ。いまでも思うよ。なんで、こいつを倒せたんだろうか? ……それは、偶然がいくつにも重なり、奇跡が何回も起こったからでき

たことなんだろう。……いや、あれは、偶然なんかじゃない。俺は見たんだ。悪魔王が、おいつめられたとき、目が後悔そのものだったことが。たぶん、罪悪感を感じて、神の攻撃をすべて、まともに受けたんだろう。……こいつが、もっと早くそれに気づいていれば、悪魔と神は、仲良くできたかもしれないのに……。いや、いまは、苦痛を与えるだけを間が用。ミコトのためにも。

「ひっ！？　り、リユークさま！　おお、こんなところにいたのですね。いまの王は、もう、ひどくてひどくて。あなた様が生きていると皆が知れば、いまの王を引きずり落とせるかも知れません。さあ、行きましょう。私とともに？」

ザシュ！

・ ・ 悪魔王リユークは、その言葉を聴いてないようで、ただ、目の前にいるものを、その巨大な剣で、なぎ払った。もちろん、そんなことをすれば、ただでは済まず、伯爵悪魔は、胴体を縦に二つに分けて、そのまま、右と、左に倒れた。

「あ、ああ、あ、あ」

「……………」

もう、いいか。ずいぶん痛めつけたし。そろそろ、元の世界に戻るのでしょうか。そして、赤く光る月を見ながら、俺は、言葉をつむいで、この世界を後にした。

「あああああああああ！ はあ、はあ。ひっ！？ やめて
くださいやめてくださいやめてくださいやめてください
！」

「黙れ」

ズドオオオオン！

また、座り込んで言葉を永遠に続けている悪魔の頭にかかと落とし
を食らわせ、大きなクレーターを作り、悪魔の耳元に思いついたこ
とをささやいた。すると、悪魔は立ち上がり、黒いゲートを生み出
し、去っていった。なにをささやいたか。それは、まだ、誰もし
らないことだ。

……ミコト。これでいいよな？ もう、大丈夫だから、すこし、眠

れ。そうすれば、楽になるから。

俺は、精神世界で、ずっと放心状態だった、ミコトと変わり、そのまゝ、倒れるように眠りについた。

side out

第二十四話、最後の日6（後書き）

さあ、ゼロ章もあと二、三話でクライマックスです。ここまで、見てくれた人には感謝感謝です。

さて、今回は、悪魔王についてです。

悪魔王 リューク・ディール・スタールス。それは、百年前、悪魔界を支配していた、別名、厄再の王で、このころ、初めて、神と対抗する力を持ったとされる。王は、それから、数年かけて、脈々と力をつけていき。いまから、五十年前、彼は、神すらも超える力を手にしていた。なぜ、神は今まで、黙っていたのか？ それは、王が、数年間姿を消していたからである。どこにいったのかもわからずに、なにもできなかったが、五十年前突然現れた王に、神たちは、なすすべがなく。神界とよばれる神がすむ世界が襲われてしまう。これを、【終従の戦い】と呼ぶ。破壊されて、姿かたちが変形し、神界は、星型の形から、ゆがんだ、二等辺三角形みたいな形になってしまった。それをまずいと思ったのか、神たちは、力をあわせ、悪魔王とたたくことにした。

次に続く。

第二十六話、さらば、豊かな森よ（前書き）

くあらずじく　すべてが終わった。魔獣も、悪魔も、何もかもがミルナスタから、消え去った。だが、失った代償は多く。ニコトが目を覚ましたときには、もう、森は灰になっていた。だが、失ったものはまだあった。

第二十六話、さらば、豊かな森よ

……ここは。……森の中か？ ……う、焦げ臭い。ん？ 焦げ臭い？

「はっ！？ はあ、はあ。い、いやな夢を見たよう気がする。……
な！？ うそ、だろ。森が。俺たちの森が！ くそ、いったいだれ
が……。ああ、そうか。魔獣の仕業か……。ゆるさねえ。絶対ゆる
ねえ。……っ。……！ がは！」

急に気持ち悪くなったと思った瞬間、俺の口から、赤い液体が飛び
散った。

うそだろ。俺は、こんな病気なんてもってな……。ああ、そうか。
また、ミニルスが俺の体を使っただな……。だとすると、魔獣を
消し去ったのは、ミニルスが？ ……なにか、お礼を言わないとな
それから、精神世界にいるミニルスに声をかけた。だが、返答がな
い。いったいどうした？ いつもなら、即答なのに。気になった俺
は、最近覚えた精神世界をのぞく術を使って、見た。すると、そこ
には、ダステイスとミニルスがなにかを真剣な表情で、話し込んで
いるのが見えた。口論にも見えなくはないけど。たぶん大切なこと
を話しているんだろうな。よし、聞いてみよう。

「あ……じ……だ……ぶ……か？」

「……い……も……あ……に……な」

うん？ うまく聞き取れない。言葉が途切れ途切れにしか聞こえ
ない。なにか、重大なこともかもしれないのに。

「！？ ……ま！」

「お……け。あ……し……と……た……こ……て……た」

急にミルスの胸倉を掴んだかと思えば、害虫を噛み潰したような顔をして、胸倉から手をはなす。

うーん、やっぱり、わからないな。何を言っているんだか。はあ。

……いや、そんなことよりも、あれを聞き出さなくては。

そして、覗きの目？　をやめて、焦げ臭い森のおいを嗅ぎながら、俺は、精神世界に大音量で、叫んだ。すると、気づいてくれたのか、声が返ってきた。「ちよつとまってくれ」と。

……早くしてくれ。じゃないと、この怒りが消えてしまつて、なかったことになつてしまふ。それはだめだ。

……

……

まだか？　なんか、こっちのほうがいらいらしてくるな。……はあ。
やっとか。さてと、聞き出すかな。

それから、俺は、ミルスが知っている限りのことを聞いた。

- 魔獣が襲来したこと。 - 悪魔が召還されたこと。 - そして、何より、耳を疑ったのが、ニルが死んだということ。

だって、ありえないだろ？　害虫並みのしぶとさが自慢のあいつが、死ぬなんて。それも一瞬で。

……ニルは強い。魔術なしなら、俺でも負けるほどに。……なのに、あいつは、死んだ。

ミルスは悪魔だから仕方ないといったが。あいつなら、悪魔にだって引き分けぐらいにはできるはずだ。それなのになぜ？　……ミ

ルスは、ニルが右腕を失ったのも原因だといったが、あいつなら、ハンデがあつても、勇敢に戦うはずだ。すこし評価し過ぎかも知れないが、あいつは、強い。

だから、死なない。どこかで、生きているはずだ。たとえば、違う次元の世界とか。

だって、かけらひとつ、ないで、消えたんだ。それが何よりの証拠だ。……あらためて、思う。

ニルは生きている。それは間違いないはずなんだ。

……あとは、リルだが……どうも、この付近には気配がないらしい。だれもリルの姿を見ていないから、わからないが、あいつだって、どこかで、生きているはずだ。だから、俺は、認めない。死んだなんてことを。

……ミルは、俺の後ろの氣にいるらしい。どうも、ミルは重症だったらしい。それも、脳が傷ついたほどに。……ミニルスに「直せないのか？」と聞いてみたが。どうも、体の重要部分までは、直せないらしい。神なのに、だ。……本当に、今日は厄災日だな。俺にとっても、みんなにとっても……

- -そして、俺は、ミルのところに行こうとしたとき、違和感を感じた。においが、唐突に消えたのだ。

俺は、味覚を失っていた。だから、次に無くなるところを考えてなかった。俺は、しばらく、嗅いだりしてみたが、やはり、なにもにおわなかった。……まあ嗅覚なんてなくても生きられるからいいけど。

そのまま、嗅覚がない鼻を持つて、木の裏に行き、そこに死んだように眠るミルの額を、やさしく触った。……よかった。生きてる。ミニルスを信じていないわけじゃないけど、これは、自分が納得するために行った行動だ。

「ミル……。ごめんな。俺が、もっと早く駆けつければ、こんなことにならなかったのかもしれないのに」

- - なんて、俺は、宿屋に泊まっていたのだろうか？　それが、疑問に思っただけ。ミルは、誰かが俺に闇魔術をかけたんだろ？　って、聞いていたが、どうも、納得がいかない。だって、俺の体には、ちがう魔力がついていなかった。たぶんだけど、俺をも超える魔術師がかけて、魔力を隠蔽したんだと思うけど。可能性は低い。だって、俺の敵になるやつなんて、俺の故郷の村、【シュガツト】にいた、やつらぐらいだから。……考えても仕方ないな。とりあえず、この森から出よう。そして、休めるところに行くんだ。……ん、俺が泊まっていた宿にするか。あそこなら、ただでとまれるし。

そして、俺は、羽のように軽い、ミルを背負い、この森を出て、村につながる道を歩き始めた。もう、深夜4時を回っている。いい加減、俺も眠い。早く宿屋に行こう。

ニルside

いま、俺の前には、ぺたんと地面に頭をこすり付けて、お礼をなんどもなんども、いつている悪魔人(て、よんでもいいのか?)がいる。ことの発展はこうだ。デブ悪魔を気絶させて、術を解き、生み出したロープで縛っていたら、後ろから、声がかかった。俺は後ろを振り返ろうとして、気づいた。俺は、気づかれないように術をかけたんじゃないのか、とだが、俺の思いとは裏腹に、悪魔人は、そんなこと、微塵みじんにも思っていないようで、素直に、お礼を言ってきた。……そして、お礼をなんとも言っている人たちに、俺は、「もういい、顔を上げる」と言った。すると、涙を流し始めて、俺の手を握り、「ありがとう、ありがとう」といつてきた。

本当にわけがわからない。俺はただ、暴力を振るっているやつが許せないだけだ。

だから、痛めつけた。もう、しないように、と。……なのに、こいつらは、まだ、お礼を言い続けている。子供の前で。教育上よろしくないよな。こういうのは。……仕方ない。なにか、食い物でももらって、探検でも再開するか。

そして、食べ物(ミギユという、黒くてつやつやした丸いやつ)をもらった俺は、それを爪で、引き裂いて、とろとろした、オレンジ色の液体を吸って、食べながら、あるいていると、ある看板に目が行った。

→ 悪魔城

悪魔城か……なんか、わくわくするな。行ってみるか。もちろん、姿を隠して、な。

一言で言うと、黒い。壁の色も黒一色だし、廊下も黒。家具は、何もかもが黒。奥にある階段も、黒だし、壁に飾ってある絵も黒色。……悪魔は、黒が大好きなんだな。俺は、落ち着かないが……。

よし、俺がみた光景を心に刻んでおこう。

入り口は、黒いドア。床の面積は、たぶん、四十シュ（四十畳）ぐらいだと思う。もっとあるかもしれない。入り口の近くには、黒い花瓶に、黒い絵画。そして、さらには、竜の尾みたいな標本が机の上においてある。そして、床の先、六エト（六メートル）の左右には、螺旋階段みたいな、黒い階段があつて。たぶん上の階に続いているんだと思う。……でもさ。なんで、誰もいないんだ？ 上にいるのかな？

そして、上の階に、息を潜めながら、向かうと、たどり着いたのは、黒くながーい廊下の入り口だった。ながつ。と思つてしまうほどに長い廊下が、右と左にあつた。上にも道があるけど、なんか、関係なさうだからパス

どっちに行つてもいいけど、なんか、右から、大きな気配がする。こっちに行くか。

右の廊下を通り、しばらく、進んでいくと、まがまがしく光る部屋があつた。

興味本位で、中に入っていくと、中には、小さなつぼが玉座のまえにおいてあつた。

ん？ なんだ？ これ？ しばらく中を覗いてみたり、振つてみたり、落としてみたりすると、部屋が開く音が聞こえた。いつきに血の気が引いて、つぼを落としてしまい、しまった、と思つていると、入ってきた影から、声が聞こえた。「そこにいるのはだれだ」と。

「い、いやー、迷つてしまいましたね。はい」

「……お前は、……ふむ、余のつぼを触つてどうにもないとは……。貴様、なにものだ？」

何者って、見ればわかるだろ？ あ、そうか、術で見えないのか。といておくか。

そして、術を解いて、扉の前にいる影をみた。全身が黒く、角と、目が赤く光っており、手には、なにか、首みたいなものを持つていた。はつきり言うのと、怖いです。なんなんだよ、こいつは！ おかしいだろ！ なんで、首持ってたんだよ！ お前はどこかの暗殺者^{キラー}か！ …… まあ、心の中で叫んでも仕方ない。本音を言うか。

「実は、かくかくしかじかで」

「……む、そうか、お前が次期悪魔王の逸材か」

え？ なにいつてんデスカ？ この人？ 悪魔王？ なにそれ？

俺は、ただの悪魔だろ？ 魔獣以下でも、悪魔王以上でもない、ただの悪魔デスヨ？

「お前がなにを思っているのかはわかる。余も納得がいけない。なぜ、余では、だめなのか？ 住人が反対するから、新しい、逸材を召還したのだが…。どうやら、なにか、手違いがあつたらしい。…貴様は、ここで、消されるがいい」

おいおい、冗談じゃないぞ。こんなところで、戦闘かよ。どうかしてるぜ！

だが、俺の思いむなしく、黒い悪魔は、黒い球体を投げてきた。ひいー、こええええ。なんだよ、これ、避けなかったら、後ろの壁みたいに溶けてたぞ。怖！

「ふむ、今の動きは、中級悪魔でもできるな……。なら、これはどうだ？」

次に、俺の足元に、黒い穴が開き、そこから、黒い手がわんさかと俺を掴もうとしてきた。

気持ちわる！ 気持ちわる！ 思わず二回思ったじゃないか。……きも。

俺は、その手を、なんか、思わず、目から出た、ビームで、消し炭にして、後ろに下がった。

「ほう、今は、上級悪魔が出せる、【消滅の目】か……まあ、ここまででは、予想通りだ。さて、次はどうかかな？」

そうなんですか。……消滅の目ねえ。……なんか、応用できそうだな。あとで、考えとこ。……いまは、まず、なんか、黒い人の口から出てる、黒い炎をどうにかしないと。

「ブアアアア！」

「ぎゃー、何すんだてめえ！」

ちょっと熱かったじゃないかよ！ やけどしたらどうすんだ！

「……まさか、伯爵悪魔が持つ、【豪鉄の皮膚】を持っているとは……これは予想外だな。ならば、次で終わりにして見せよう」

あーあ、なんか、スイッチはいっちゃったみたい。今度は、体の大きさが、ただでさえでかいのに、その倍、いや、三倍ぐらい大きくなって、天井壊しちゃったよ。あーあ、俺知らないからな。

「コレデオワリダナ、粉碎！ 玉砕！ 大破壊！」

――床を踏みつけて、破壊して、どこから取り出したかはわからな

いけど、巨大な剣で、俺めがけて、振り下ろして、床にクレーター作って、最後には、巨大なプレスで、攻撃ですか……。馬鹿じゃないの？ お前？ 自分の城、壊してどうすんだか。俺はすべての攻撃を、全属性の【バリアステル】でガードしたからいいけどさ。……少しヒビが入ったじゃねえかよ。てめえ。本気で俺を殺すきかよ。……なら、今度はこっちからだな。

【窒息死しろ】

「ぐっ、ぐあ、っ！？ ……！」

黒い悪魔は、小さくなり、壊れた床でもがき始めた。苦しいんなら、やめるか

「はあ、はあ。馬鹿な、【羅術】だと！ 貴様は……。負けた、余の負けだ。殺せ」

「ころさねえよ。殺したら、天国いけないだろ？」

「……ぷっ、ふふふ、はははははははは！」

なんだよ、気持ち悪いな。急に笑うなよ。

「面白い。実に面白い！ 貴様なら、いい悪魔王になれるだろうな。

……さあ、玉座に座るのだ」

「？ おう」

言われるがままになぜか壊れていない玉座に座ると、脳にありえないほどの情報がパンクしそうなほどに入り込んできた。

「ぐ、あ、あ、くっ！？」

「それを取り越えれば、余のように、記憶を失い、完璧な王になれ

るだろう。だから、我慢するのだ」

記憶が、消える、だと？ それじゃあ、俺の人格もかわり、つ……！

「ぐああああああああああ……！！！！！！」

side out

第〇章完、第一章に続く。

第二十六話、さらば、豊かな森よ（後書き）

いやー、終わりましたね、○章。長かったような短いような……まあ、終わって何よりです。次の一章ですが、プロフィールを作ってから、にします。お待たせするかもしれませんが、どうぞ、気長にお待ちください。なお、今回のあとがきは、悪魔の能力についてです。

下に表記します。

下級悪魔 魔術強化（霧術）

中級悪魔 絶対スピード（霧術）

上級悪魔 消滅の目（霧術）

伯爵悪魔 豪鉄の皮膚（霧術）

大王悪魔 真実の目（霧術）

悪魔王 羅術（霧術）

では、次にまた会いましょう

プロフィール（前書き）

作ってみましたプロフィール。どうぞ、楽しんでくださいな。

プロフィール

最主要人物¹

名前、ミコト＝ロールス

種族、人間

年齢、十五歳

身長、一エト（メートル）六十七ルト（センチ）

体重、六十八ミト（キロ）

容姿、上の中

メルニムス、氷（青）

髪の色、青を、すこし、薄めたような色の肩まである、ショートヘア。瞳、氷の魔術石のように、輝く、群青色に近い、瞳。

好きなもの、母親、ドンの肉、食べ物全般、家族、ダステイス、ミルス？ 特技、長距離走を息が切れずに走れること。

嫌いなもの、殺し、痛み、野菜。苦手なもの、女の涙。

プロフィール

シュガット村で、生まれた。最初は、村人も、快く喜んでいたが、

人間にはありえない量の魔力があることで、母とともに、五歳まで、家で、引きこもるようになる。だが、あるひ、旅から帰ってきた父にそれを気づかれ、五歳のとき、殺されるようになる。

性格は、リルたちの中では、ムードメーカーで、毎日、ミルとともに遊んだりしている光景がよく伺える。自身の魔力にコンプレックスを抱いているが、みんなには、気にするなといわれている。それと、女に間違われる容姿をしているので、それも悩みどころ。

名前、ダステイス

年齢、?????

種族、精霊

身長、ミコトと同じぐらい？

体重、?????

容姿、上の下

メルニムス、闇（黒）と思われる。

髪の色、混沌を象徴するような、漆黒の黒い、髪を、竜尾のように、後ろで束ねている長髪。瞳、見られたら、すべてを見通されているように思う、黒い瞳。

好きなもの、ミコト、特技、特になし

嫌いなもの、ほかの精霊。苦手なもの特になし

プロフィール

自身の前世の記憶を持っているとても珍しい精霊。生まれたときから、次期闇の精霊王になることが決定していて、五年前、精霊王になった。だが、荒れるに荒れていて、破壊神とまで呼ばれるほどの存在になった。それが原因で、ほかの精霊は近づかなかったが、唯一、ミハエルという、下級精霊には慕われている。ダステイスも、いやではないようだ。

名前、リル＝ダース

年齢、?????

種族、翼人

身長、一エト（メートル）五十九ルト（センチ）

体重、なぜか、ばらばらにされている。

容姿、上の上

スリーサイズ、これもなぜか、ばらばら

メルニムス、光（白）

髪の色、ニル、ミルとともに、白く長い長髪。瞳、白が濃くなったような、色の瞳で、三人とも、同じ色。

好きなもの、ドンの肉、家族、森。特技、息を長くとめることができること。

嫌いなもの、森を壊すもの、神殿の横にある、変な像、水。苦手なもの、泣き顔のミル。

プロフィール

三人の長女。狩りを多くこなす。リルが生まれたのは、啓碧千六百けいへき年（啓碧ひとつで、日本のようにたくさんはない）で、生まれたときには、背中に小さな翼があつたが、成長するとともに、なくなつてしまった。現在は啓碧二千年なのだから、少なくとも、四百年は生きているとされる。非常に面倒見がいい姉なのだが、かわいいものに目がない。それが玉に傷。すれ違ったときに、男が十人中、十人振り返るほどにきれい（かわいい系ではない）なのだが、人前には出ないので、もったいないと、ニルに散々言われている。

名前、ニルⅡダース

年齢、?????

種族、翼人

身長、一エト（メートル）、七十八ルト（センチ）

体重、七十六ミト（キロ）

容姿、中の上

メルニムス、光（白）

髪の色、リルとミルと一緒に白い長髪（ワンポイントで、髪は、光の魔術で、少し、黒が混じっているようにしている）瞳、上に書いたので、省くが、白色。

好きなもの、ドン肉、森、食べ物全般。特技、上級魔術まで使えること（まだ使われてはいないが）

嫌いなもの、ムール（きのこ）苦いもの。苦手なもの、くさいにおい。

プロフィール

三人家族の長男。一家の食べ物や、力仕事を受け持つことが多い。生まれたのは、啓碧千六百六年で、父のことを、幼少時代から、爺さんよ呼んでいたが、怒られたので、直した。（いまは、爺さんだ）慎重な性格で、何事も、驚かずに見極めることが多い。だが、女ことになる、と、あせりだす。（たとえば、リルとミルのガールズトーク）

名前、ミル＝ダース

年齢、?????

種族、翼人

身長、一エト（メートル）五十二ルト（センチ）

体重、なにかで、打ち抜かれている。

容姿、上の下

スリーサイズ、これも打ち抜かれている

メルニムス、光（白）

髪の色、二人と同じく、長い長髪を後ろで、ツインテールにしている。瞳、やはり、三人と同じく、濃い白。

好きなもの、家族（中でもミコト？）森、ドン肉、ムール（きのこ）特技、弓

嫌いなもの、虫全般、おなかかなること。苦手なもの、剣術。

プロフィール

三人家族の次女。雑用や、料理を行うことが多い。生まれた年は、啓暦千六百十年で、両親のことをよく覚えていない。成長が遅く、百年たっても、リルとニルの半分ぐらいしか成長しなかった。（中でも、胸）幼少のころは、何事にも、わたたと、落ち着いていなかったが、今では、比較的、慎重に物事を進めることができる。ミルは、純潔の翼人なのだが、それを知るものは誰もいない。

プロフィール（後書き）

また、変更するかもしれませんが、とりあえず、これで行きます。
おかしところや、書いてほしいことなど、感想に書いてくれば、
書き足しますので。どうぞ、（、・ω・、）ノよろしくです。
では、また会いましょう。

プロフィール二（前書き）

さて、今回は、○章の中盤で出てきた人のプロフィールです。

プロフィール二

主要人物2

名前、ディリアスⅡセントメル

年齢、五十八歳

種族、人間

身長、一エト（メートル）六十三ルト（センチ）

体重、六十七ミト（キロ）

容姿、中の中

メルニムス、闇、暗黒（黒）

髪の色、ダステイスよりも、少し、薄い色の髪で、眉毛にかかるぐらいの前髪で、後ろは、首の中間ぐらいまである。瞳、これもやはり、ダステイスよりも薄い、色の黒。

好きなもの、人が苦しむところ、研究。特技、隠蔽任務。

嫌いなもの、自分の思い通りにいかないこと、研究の邪魔をするもの。苦手なもの、最高教主^{トップリス}

プロフィール

ミルネリア教という世界最大の宗教団体に所属する、研究員。仕事熱心で、評価も高く、仕事の成功率は九十パーセントを超えとも言われている。自分では、世紀の天才と呼んでいるが、研究の途中に、魔力が暴走してしまう癖があるので、天才とは言いがたい。彼には、実の息子がいるのだが、幼少のころに捨ててしまっているのだ、どこにいるかは、わからない。また、彼には、天性的な力があり、名を、魔術構築という。これは、一度見た魔術を分析し、それをコピーできるかわりに、魔力消費が倍になる力である。彼は、これを、なんども、使い、現在は、千種類以上の魔術を持っているとされる。

名前、 ミニルススキカスラダミシユイダーキサウ

種族？ 邪神

年齢、 ????

身長、 一エト（メートル）八十ルト（センチ） 自由に変えられる。

体重、 七十一ミト（キロ） 自由に変えられる。

容姿、 上の上 自由に変えられる

メルニムス、 全属性（銀色）

髪の色、 ミルナスタには、まずない、銀色の、短髪。瞳、髪の色と同様に、輝く銀色の瞳。

好きなもの、食うこと、飲むこと、遊ぶこと。特技、全知全能。

嫌いなもの、親父、ほかの神、悪魔。

プロフィール

八柱神の一人、違う次元（精霊界）を管理する神、キニルスキカスラダミシュイダーキサウの息子。

千歳のとき、とある、禁忌を破り、邪神となる。そのときに目をつけられ、下級悪魔に、あつという間に、のつとられてしまう。

普段は、どこかやさしい雰囲気なのだが、スイッチが入ると、荒れる。これは、昔、おちこぼれの子とされていたときに、周りの子供に、いじられないよう、性格を変えていたのが、影響している。

ミコトには、どこか、兄弟のような思いを抱いている。ダステイスとは、とても仲がいい。

プロフィール二（後書き）

……はあ。お気に入りが増えるんだけど、感想が……。
次は、終盤に登場した人物です。（すこし多いかも）

プロフィール三（前書き）

今回は、○章終盤で出てきた人たちのプロフィールです。

プロフィール三

主要人物三

名前、デウリムⅡミユース

年齢、二十一歳

種族、人間

身長、一エト（メートル）六十五ルト（センチ）

体重、彼女以外だれも知らない。

スリーサイズ、貧乳なのは確かだが、ほかは、わからない。

容姿、上の下

メルニムス、火（赤）

髪の色、サラマンダーのように、少し薄めのピンクに近い赤で、肩までのばしている。瞳、燃えるような赤色の日本で言うルビーのように光る瞳。

好きなもの、部下、第一部隊隊長さん。特技、声を三十秒出し続けること。

嫌いなもの、足がいっぱいある虫、すっぱいもの、苦手なもの、第二部隊の隊長さん。

プロフィール

ミルネリア教の、神殿第三部隊の隊長を務めている。彼女が隊長に任命されたのは、一年前となり、まだまだ、未熟だが、剣術だけは、お手の物。第一部隊の戦士ぐらいと自分で思っているが、実は、第一部隊の戦士は、自分の五倍以上の魔物を瞬殺できるので、遠く及ばない。部下のことを第一に思っており、自分が命を懸けてでも、守ると、強い思いを抱いている。彼女は、魔術が苦手で、中級魔術までしか使えないが、どうも気にしてないようだ。

名前、ドレル＝トリス

年齢、?????

種族、竜人族

身長、一エト（メートル）八十ルト（センチ）

体重、七十六ミト（キロ）

メルニムス、魔術を使えない？　ため、ない。

髪の色、竜人族特有の金色の髪で、前髪を丁寧に切りそろえてあり、短髪。瞳、黄金色に光るきらきらした瞳。

好きなもの、ルーク、空、竜、特技、竜ならなんでも乗りこせるところ。

嫌いなもの、地面、魔族、研究者、苦手なもの、草アレルギーがあるため

プロフィール

竜人のわずかな生き残りの一人。人間で言う五歳のとき、竜人の村トリムから抜け出し、生き残った。母と父は、研究者に解剖されて他界。彼は、このことから、研究者をひどく憎むようになる。（研究服を着ている人がいたら竜化して、殺すほど）竜人ということを、誰にも行つてはいけなないと生前の母に言われたことから、とある魔術師にこのことの記憶だけ消してある。現在は、ミルネリア教に敵対する宗教、ガゼット教に竜騎士として働いている。（彼は知らないが、竜を操れたちしゃべれるのは、竜人なれ誰でもできる）相棒ルークとともに、毎日、散歩することが日課となっている。

プロフィール三（後書き）

さて、短いですねW 次回は、その他の人たちです。（気になった人もいるでしょうから。）

プロフィール四（前書き）

さて、今回は、その他の皆さん？ を紹介いたします。

プロフィール四

他人物一

名前、ディリア

年齢、?????

種族？ 天使

身長、一エト（メートル）六十二ルト（センチ）

体重、なぜか、見れない。

スリーサイズ、?????

容姿、上の上

メルニムス、光（白）風（緑）水（水色）

髪の色、風のメルニムスが濃いせいか、緑が目立っているが、白と、水色の色も混じっている、腰までのばした長髪。瞳、三色が混じった非常に摩訶不思議な色合いの瞳。

好きなもの、精霊、息子、特技、精霊に言うことを聞かせられること（中には例外もいるが）

嫌いなもの、広い部屋、悪魔、堕精霊、神、苦手なもの、閻魔。

プロフィール

精霊界という世界の頂点に君臨する天使。実の息子を持つており、一児の母でもある。父親は、前天使だったが、とある制約を破り、墮天使となり、ミルナスタのどこかへ落とされている。精霊城と呼ばれる城に住んでいるが、本人は、広いところが嫌いなので、精霊界のどこかへ、家を持っている。彼女は、天使という役柄だが、違う顔もある。それは、精霊王管理というもの。本来は、神が行うことなのだが、その役職についていた神が墮ちたということなので、代わりにやっている。精霊城にある、各精霊を象徴する玉で、生存状態にあるか、危険に陥^{おちい}っているかを見分けることができる。

名前、デューク

年齢。三万五千歳

種族？ 閻魔

身長、二エト（メートル）三ルト（センチ）

体重、七十三キロ

容姿、上の中

メルニムス、空間（空色）

髪の色、とても貴重で、珍しい、空間のメルニムスを持っているた

め、空色の髪を短髪に切りそろえている。瞳、見ているだけで、取り込まれそうな、空色の瞳。

好きなもの、カルシウム、ビタミン、鉄分、e t c。特技、空間倉庫にしまつてある小魚の数を覚えていること。

嫌いなもの、すぐ骨が折れる人（カルシウムが少ないため）、短気な人（カルシウムが少ないため）苦手なもの、蛇、悪魔。

プロフィール

悪魔界の下に位置する地獄の管理人なのだが、仕事が多く、やることがないため、ちよくちよく罪人と遊んでいる。普段は、ふざけている感じな彼だが、仕事となると、一切手を抜かない、まじめな顔つきになる。閻魔という職柄が、よく、罪人に恨まれることがあるが、それは、その性格で、皆を納得させている。ちなみに、カルシウムが大好きで、毎日小魚を百匹は食べている。最近は、天使から譲り受けた、子と遊んでいる姿がちらほら見える。

第〇章、プロフィール完。第一章、プロフィールに続く。

プロフィール四（後書き）

さて、やっとこさ〇章のプロフィールも終わりました。見てくれた方には感謝を、そして、お気に入りに入れた人たちには、なにかお礼を、といきたいところですが、あいにく、貧乏なため、なにもあげられませんW 代わりとしては何ですが、書いてほしい話などを教えてくれれば取り入れますので、どうぞ、感想に書いてくださいます。では、また次でお会いしましょう。

第二十七話、誰も何も失わない世界（前書き）

くあらずじく あれから一日がたち、それぞれが起きだすとき、悪魔界では……

性格が変わっていますが、そこは前の話を見てくれればわかります。

第二十七話、誰も何も失わない世界

ニルside

「ニル様。今宵は、悪魔王就任おめでとうございます」
「……誰だ、お前は」

ふむ、なぜか、記憶がごつそりと抜けている気がする。それも大事なことが全部。……悪魔王？ なんのことだ？ そんなもの、私は知らない。……それよりも、ここはなんとも気持ちが悪い部屋だな。荒れるに荒れているし、なにより、私が嫌いな黒色を使っている。……私が悪魔王ならば、変更するのも可能なのだろうか？ それならば、すぐにでも変更するべきだな。

「……お前の名は知らないが、私は気分が悪い。この部屋を変えろ」
「はっ、お任せあれ」

……そう返事をした瞬間私の座っているところから、徐々に、白へと、染まっていき十秒しないうちに、部屋全体が、純白へと変貌し、壊れたところもすべて直っていた。

……ふむ、悪くはないな。なかなかいいセンスをしている。こいつの名ぐらいは聞いてもいいだろうな。……む、なぜか、顔色が悪いな。どうしたのだ？

私の考えが読めたのか、黒い悪魔は、私にこう語りかけてきた。「白は苦手なもので」と。

……まあ、わからなくはない……仕方ない、この部屋半分を漆黒に染めるか……

【部屋の半分を漆黒にしろ】

- 刹那、私の玉座の右半分が、あっという間に、漆黒に染まり、黒い悪魔は、ばつが悪そうに右へ移動した。

…… 知らず知らずに、なにか能力を使ってしまったが、これはいつたい？

顎に手をあて、考えている私の考えもまたもや、悟ったのか、黒い悪魔は、黒い部分から、移動せずに、説明を話し始めた。

…… なるほど。【羅術】というのか。…… それも悪魔王にだけある特別な力、か。…… この力は嫌いだな。なんでも思い通りにしてしまおう。それではつまらない。私は、自分の力で、それを実現したい。…… だから、この力は封印だな。

【いかなる羅術も封印せん】

「な!？」

「なにをそんなに驚いている? 別におかしくはないだろう」

「それは……。そうですが……。でも!」

お前は、力がないと困るのか? 別に、悪魔なら、十分力があるではないか。羅術がなくても、なんでもできるはずだ。

そして、しばらく、私の目を見ていた黒い悪魔は、あきらめたように、ため息を吹き始めた。

…… なぜか、このため息を見ると、懐かしく思える。…… まるで、私がため息を普段から尽いていたように……

しばらく、記憶を探していたが、知識しか出てこなため、あきらめることにした。まあ、いつか思い出すだろう。それまで、普通に過ごせばいいだろう。

そして、黒と白の部屋……。白黒で私は、黒い悪魔から、いろいろと説明を受けた。
なんでも、この世界の前悪魔王は、黒の部屋に座っている、黒い悪魔だったらしい。

そのことはさほど驚かなかった。なぜなら、【羅術】を先ほど、目の前で使ったのだから。まあ、そんなことはどうでもいい。

次に彼の名前を聞いてみた。彼の名を、ミューク。悪魔語で、“漆黒の悪魔”という意味らしい。そんなことを聞いていて、私は少し疑問に思っていたことがあった。それは、私の名前の意味のこと。ミュークに聞いてみたところ、“王を宿すもの”という意味らしい。よくわからない意味だが、これは、おいておくことにしよう。考えても仕方ない。

「で、私は、なにをすればいいのだ？ 王ならば、やることがたくさんあるだろう？」

「はい。実は、政治と、軍隊の設立と、税金のこと、条例の設計、さらに、ニル様には、毎日、【デスエナメル】という結晶を集めていただきます」

【デスエナメル】、か……。殺しは避けたいところだが、それはできないのだろう。王は、それが仕事だというのだからな。私も王の身、仕事は遂行せねばならない。

「……もうほかにはないのか？」

「いえ、実は……」

「もったいぶらないで、話したらどうだ？」 と少しきつめにいうと、すぐに返答が帰ってきた。「神と戦うこと」と。……神か……。悪魔と対なすもの。全知全能の存在。……これが私の知識にあること。

悪魔と神は、絶対的な存在。そうあるが、私はそうは思わない。私は、ミルナスタにいる人類が神よりも、悪魔よりも優れていると思える。確かに、神や、悪魔は、絶対的な力をもっている。……だけでも、神も、悪魔も、働くということや、発明をしたりはできないすべて、力で何もかも解決してしまう。しかし、人類には、もっとすごい力がある。”愛”というものが。……私も、こういうことには興味がない。けども、それができたらいいと思う。これは、本心だ。……とまあ、いろいろ考えたわけだが、私は、神と戦うことに決めた。世界を牛耳っている神を倒し、全員が、”なにも失わない、平和な世界”を作りたい。もちろん、神も、入れてだ。そして、その世界で、協力して、支えあったりして、新たな、歴史を刻む。そのためには、まず、神を説得しなければいけない。もちろん、話で、解決するとは思っていない。代々、神と悪魔は対立していた。だから、すぐには、仲良くできない。だけど、いつかは、仲良くできるはずだ。そのためなら、私の命でもささげよう。だから、まず、この世界を平和にしないといけない。順序はこつこつと。まずは、この世界を見回ることにしよう。そして、悪いところを直す。それが、まず私に化せられた、指名だ。

「……そんなことを。……神と悪魔は仲良くなんかできない。だから、争っているというのに……。やはり、あなたが王は間違っていた……」

「ん？ なにか言ったか？」

「いえ、なんでもないです」

？ なにかはなしがあるなら言えればいいのに。変なやつだな。……さて、これから忙しくなる。覚悟しないとな

side out

リルside

「お姉ちゃん、助けて！」

「リルう、たすけてくれえ」

「リル！」

いやだ、いやだ、聞きたくない。もう、私を頼らないでよ。お願いだから。だから、そんなに、きつく、私の足を掴まないで。いたい、いたいよ。

- 私に逃げた、三人から、姉の役目というものから。

「リルう、逃げるのかあ」

「おねえちゃん、ひどいよー」

「裏切り者」

やだ、やだ。もう、そんな目で私を見ないで。お願いだから、私を楽にさせて。お姉ちゃんを自由にして。それでも、私の足に込められている力が強まり、爪が突き刺さり、赤い液体がこれでもか、というほどにあふれてきた。痛い。痛いよ。やめてよ。もう、お願いだから。

「逃げるのか……そうなのか……ならお前を殺すしかないようだな」
「一緒に死のうよ。お姉ちゃん。きつと、あの世は楽しいよ」

「楽になろう」

「きゃあああああああ……！！！！！！！！」

「うわああああああ！ はあ、はあ。……夢、か。いつたい、なんでこんな夢を……。ん？ 見たことない部屋。ここはいつたい」

私は、部屋をしばらく見渡してから、あることに気がついた。それは、ミコトも、ニルも、ミルも、誰もいないこと。

「は！？ そういえば、私は、魔獣の群に……。え？ 魔獣？ ……ああ！ 森が！ みんなが！ ……行かなきゃ。こんなところにいるわけにはいかない。どうしてこんなところにいるのかはわからないけど」

そして、私は、急いで、ベットから立ち上がろうとしたときに、誰かに思い切り、腕を引っ張られたのを感じた。なに？……に、人間？それも知らない男。……なんで手を引っ張られたのかはわからないけど。いまは、急がなきゃ。だから、離してよ。

「落ち着けよ。なに急いでんだよ」

「は、離してください！急がないと、森が、みんなが！」

懸命けんめいなんとか腕を振り払おうと、力を込めてみたが、まるで、角で挟まれたときみたいに、びくともしない。急がなきゃいけないのに、もう！

「光よ！」

バシユ！

「うお！？てめえ、何しやがる！」

「離さないから、やったまでです！では！」

なにか、後ろから聞こえた気がしたが、気にしなかった。ただ、いまは、急いで、森に向かわないと。それが、私を急がせた理由だった。

そして、宿屋と思われる建物から出て、私は、走り続けた。道もわからずに、ただ、ただ、走り続けた。周りから、耳と尻尾を生やした人たちから、変な目で見られているのもきにせずに、ただ、走り続けた。だけど、走っても走っても、知らない場所ばかり。私は、三十分もしないうちに、だんだん、スタミナがつき、しまいには、転んでしまった。

「っ！」

「おいおい、ありゃあ」

「ええ、かわいそうね」

「誰か助けてやれよ」

「でも、人間でしょ？ 誰も助けないわよ」

周りから、変な声が聞こえる。そして、私を、見下して、害虫のように見ている人と目が合った瞬間、私は、その人に殴られた。ハンマーでたたかれたような痛みを肌で感じながら、私は、何が起こったのか、わからずに、ただ、痛みをこらえて立ち上がった。だけど、立ち上がった瞬間、腹に、変な感触を覚えた。それがなんなのか、わからないで、私は、突然、吐血した。

「がは、っ、なによ、なにすんのよ！」

「は？ お前ら、人間に、俺の娘が、奴隷にされたからだよ！」
「ぐっああ」

なぜか、怒っている人に思い切り腹を蹴飛ばされ、吹き飛ばされた先で、私は、声がかすれる悲鳴しか出せなかった。痛い。久しぶりの痛みだ。

「おいおい、やりすぎだろ、いくら、人間だからって」お前は黙ってる！」なんだよ、せっかく注意してやったのに」

早く、早くしないと、森が、みんなが。……あ、また、けりが私のおなかに。

「がっ！」

ごろごろと、地面を転がり、私は、数エト（メートル）先で、また吐血をして、意識を失いかけた。

だけど、森のことが気がかりな私は、それが理由で、意識を失わなかった。そして、さらに、男が、私のそばに来た瞬間、なにか地鳴りがして、風が吹いてきた。竜のような咆哮を撒き散らしながら。

第二十七話、誰も何も失わない世界（後書き）

さて、今回で、一章突入です！ 皆さんおかげさまで、ここまでいけました。ありがとうございます。すいませんが、今回は説明は省かせもらいます。その代わりに、次回、多めに紹介いたしますので。

第二十八話、就任（前書き）

くあらずじく 獣人から一方的な、暴力を受けていたリル。次の手が迫るといふときに、竜にまたがった見覚えがある男が来て……

第二十八話、就任

ド
レ
ル
s
i
d
e

あー、なんか、逃げた女を追っかけてきたら、これだし。まったく、なんで俺には厄介ごとがたくさん降りかかるんだよ。めんどくせえ。……まあ、ここで見捨てたら、せつかく助けた意味が無くなるな。……しかたない。ここは一肌脱ぐか。

「な、なんだお前は！　なんか用か！」

まったく、獣人は、人間を見ると、すぐ興奮する。……まるで盛り
のついた犬だな。……さてと、どうするかなあ。

しばらく、ルークの上で、解決策を考えていた俺だが。まったく
いって、何も浮かばなかったので、半場あきらめたように、ルーク
から、飛び降りて、獣人の前に降り立った。すると、いままで、さ
んざん興奮していた男が、俺の顔を見るや否や、おびえて、失禁し
だした。……はあ。そりゃあ、魔族の【魔王】みたいな顔だけど
う。いくらなんでも、そこまで、おびえられるとな、泣けてくるよ。
そのまま、またのあたりが黄色くなっている男の前に一歩近づくと、
男が下がり、また近づくと、下がった。……なんか、舐められてい
るようで、むかつくな。ここは一発、なにか派手なことを……。そ
うだ。ルークに、思い切り叫んでもらおう。うし、これが、いい。
さて、竜と念話する回線を探してつと……。よし、準備完了。やれ、
ルーク。

「……ブォアアアアアアアアアア！！！」
「ひっ！？」

「きゃああああ！」

助けた女も、まき沿いになっている気がするが、気にしない。だって、それが俺のポリシーだから。

……なんか、自意識過剰のきがするが、俺が気にすることではないな。さて、そろそろやめさせないと、俺の耳が……

実は、竜の咆哮は主の俺にも効くんだよなあ。……これが。……それに、魔術を使えばいいんだろうけど、あいにく、俺は、魔術が使えない。……正確に言うと、普通の魔術が使えない。これは、思い出せないが、なにかの理由があつてだろう。……ルークは知らないだろうけど、俺が、きもちわるい生物から逃げるときに使った、魔術モドキ、実は、俺の体内にある【死菌】と呼ばれる有害な菌を増やすことで使っている。……まあ、まだ、魔術モドキはつかえるから、いいけど、あと十回も使ったら、確実に死ぬな、俺。

……なんで、俺には、魔力がないんだろうか？ ……考えても仕方がない。いまは、俺の隣で、荒い息をしている、女……。名前は知らないが、とにかくこいつを運ばなきゃな。にしても軽い。羽のように軽い。

何ミト（キロ）あるんだ？

そして、ルークの咆哮を抑えさせて、女を抱きかかえたとき、俺は、獣人の抵抗がないことに気づいた。なぜだか知らないが、まあ、襲ってこないなら、やりやすい。

「あの男の人、あの人間の女を食べるきよ」

「そうね、絶対そうに違いないわ。人間に同情するわ」

なんか、いろいろ、聞こえてくるが、無視だ無視。いまは、こいつを休ませないとな。

そして、さつき泊まっていた宿についた俺は、受付を通り過ぎ、一〇三号室の部屋の鍵を開けて、中に入り、吐血しているこいつをベツトに寝かした。すると、落ち着いたのかしらないが、寝息が聞こえてきた。……なんでこいつがこんな目にあったのかは知らないが、いまは休むことにしよう。俺も疲れた。

そして、女の隣で、眠ろうとしたとき、あることに気がついた。こいつ、服がぼろぼろで、肌や胸がちらちら見えるのだ。気になつてしかたない。そこで、俺は、気にならないよう、魔術で動いているランプの明かりを消し、カーテンを閉めた。これでゆっくりと寝ら

れる。そう思ったのもつかの間、こんどは、女が、悪夢でも見たかのように、うなされだせたのだ。うるさいったら仕方ない。なんの夢を見ているのかは知らないが、俺の大事な睡眠を邪魔しないでくれ……。まあ、あのとき、助けなければ、楽になれたんだから、俺が言う義理はないけどな……

そして、悪夢を見ている女に同情したのかは知らないが、俺はいつの間にか、こいつの手を握っていた。……これは決して自身の感情で動いたことではない。勝手に体が動いたんだ。だから、これは俺がやったことではない。決して……

「ん、いつの間にか、眠っちまったか……。あ？　なんか、上に乗っかっているような……。　なんか、肌色の色がみえるような……」

……　なんか、やわらかいものが俺の腹に当たってる。……　胸のようなものが。……　あ、そういえば、隣にいた女がいない。と、いうことはだ。上に乗っているのは、あの女で、俺の腹に当たっているものは、女の胸、というわけだ……。　って、納得するなよ俺。……　まあ、あれから、女の悪夢がどうなったのかは知らないが、いまは、ゆっくりと息をしている。いい夢でも見ているんだろうか？　……　そろそろおきるか。

そして、おきようと、体を起こした瞬間、抱きついていてる女が目を開けてしまった。しまった。この状態をみれば、俺が襲って、無理やり、抱きしめているように見えなくもない。やばい、逃げなければ。

「……………」

「……………」

まだ、目が覚めきつてないのか、女は、俺の顔を見つめたまま、なにか考え始めて、そのあと、こうもらした。「ミコト、おつきくなったね」と……。　ミコト？　聞いたことがない名前だ。そもそも、名前の意味がおかしい。【世界を救うもの】なんて、いまだきつけないぞ。勇者じゃないんだし。名前フェチもどきの俺がいうのもなんだけどな。

……　とにかく、だ。今は、誤解しているようだし、これをチャンスと見ていいだろう。このまま、部屋から、できれば、なかったことに……

と、思ったのも、つかの間、女が目を覚醒させて、顔を一瞬で真っ赤にしたと思った瞬間、ピキッ、と空気が割れたと思えるような空

気になり、抱きついていた手の力を込めて、突き刺さるような痛みを感じれるほどに突き刺したあと、俺の大事なところを、思い切り蹴ってきた。

「いっ
てえ
えええ
えええ
えええ！」

「あんたが悪いんだからね」

しばらく、痛みで、悶絶していると、女は、なにかを思い出したかのようにあわて始めて、また、昨日のように、走りだそうとした。もちろん、昨日の二の舞にならないよう、女の手を掴み、ベットにひっこめく要領で押し倒した。もちろん、興奮はしていない。これは注意をするための行為だ。逃げられないよう、両腕を押さえつけて。

「……なにをするのよ。私は急がなきゃいけないの。だから離して」
「だめだ。昨日のようになりたいのか？」

それを言った後、抵抗する力が徐々に弱まり始めて、女は、目に涙を浮かべ始めた。

「私は、森に、びんなを、ひぐ、だすけなぎやいげないの。だから離してよ!」

「それでも、お前を行かせるわけにはいかない」

「そんな……」

「なにをあきらめてんだ？ 誰も行かないとは行っていないだろ？」

すると、みるみるうちに、顔がよくなり、女にはありえないほどの力で、俺の手を振りほどき、こういった。「それなら早く行く！ぐずぐずするな！」横暴なやつだな。……まあ、あの森がどうなったのかは、俺も気になるから、行くか。

そして、俺たちは、すぐに支度をし、外で待たせてあるルークに、またがり、すぐさま、森へと出発した。

s i d e o u t

デイリアス s i d e

「今日をもって、デイリアスの功績を認め、セカンドイール三大特務官に任命する！
！なお、前セカンドイールの一人、シユールスは黒服精鋭部隊の隊長に任命する！」

くくく、ようやく、ようやく、私の夢へと第一歩近づいた。翼人は逃がしてしまったが、それは、私以外誰も知らない。黙っていればわからないだろう。今は、とにかく、セカンドイールになれたことを喜ばなくてはな。くくく。

「くそつ。ディリアスのやろう。俺の座を奪いやがって……。いつか、後悔することになるだろう。ひひひ」

ふつ、後悔するのはお前のほうだが……。聞こえてないと思っ
ているのだろうが、甘いな。私の闇の包囲網からは逃れられない。最^ト
高^ツ教主であつても、な。くくく。

「さて、次に、第三部隊を隊長を突如除隊したデウリムだが、現在、行方不明となっている。だれか、気づいたものがいれば、手を上げてほしい」

第三部隊か……。私には関係ないな。そろそろ、私は、帰るとしよう。もう用は済んだ。

「……ないか。……残念だが、第三部隊の隊長がいないのであれば、しばらくは、第二部隊と第一部隊に仕事を任せることにする。以上。解散」

side out

第二十八話、就任（後書き）

さて、今回は、ミルネリア教の階級についてです。下に書きますのでよければ見てみてくださいな。

トップリス
最高教主

セカンドイール
三大特務官

ナイリス
近衛騎士隊

シユアー
神殿騎士隊

シスタ
黒服精鋭部隊

巡回シスター（ディーネ）

以上。

なお、今回はこれだけです、次回に、詳しく説明すると思いますので。
では、また会いましょう。

第二十九話、初めての魔物（前書き）

くあらずじく ルークにまたがり、しばらく、空のたびをしながら、森へ向かっていたリルとドレル、しかし、突然、目の前に魔物が現れて……

第二十九話、初めての魔物

リルside

「なんなのよ！ もう！」

「……魔物のお出ましたな」

突然急停止したかと思えば、魔物？ ……見たことはないけど、魔獣よりは弱いんでしょう？ なら、さっさと終わらせて、森へ行かないと。

「お、おい、何してるんだお前は」

「？ 立っただけだけど、それがなにか？」

「なにかっっておまえ、あぶねえだろ、座れ」

……なによ、その上から視線は……。私を舐めてもらっちゃ困るわね。魔物ぐらい、なんとかなるわよ。だから邪魔しないでほしいわね。

そして、凍結防止マスクをかぶっている（息が苦しいから、時々、はずしてる）男（名前はまだ知らないけど、まあ、困らないわよ）の注意を無視して、ルース（だったような）の上でバランスを取りながら、顔が邪魔で見えない魔物のことをイメージしながら、ルースの頭の部分に移動して、どんな魔物が見てみる。すると、そこには、足がたくさんあって、羽が背中に四枚ついていて、手は鎌状になっている緑色の虫がいた……。虫？ パラサイト？ ……やだ！ やっぱり、戻ろう。うんそれがいい。

だけでも、後ろに下がろうとしたとき、運が悪かったのかは知らないが、つまずいて、ルースから、落ちそうになってしまった。

でも、男が、とっさに、私の腕を掴んでくれたので、難を逃れた。

ふう、あぶないあぶない、お礼を言わないとね。

「ありがと」しつ、静かに。何かが来る」え？」

なによ、せつかくお礼を言おうと思ったのに。……これじゃあ、謝り損ね。……それにしても、あのふざけた感じの男が、真剣な顔になるのは、ギャップを感じるわね。……あれ？　なんか、ものすごい、羽音が聞こえてきたんだけど。？　なに？

気になって仕方がないので、また、落ちないように座りながら、手とお尻を使って、ルースの前に行くと、五十エト（メートル）先に、なんか、緑色の、おぞましい、物体が……

「きゃあ「静かにしろ」は、はい」

むう、今は言うこと聞くしかないわね。私より、男のほうが、魔物に詳しそうだし。任せることにしよう。うん。それがいい。

でも、気になって仕方がない私は、男に、魔物の名前と、特徴を聞いてみた。念のためよ、念のため。

すると、少し、思い出すようなそぶりをしたあと、男は、私に話してくれた。

なんでも、名前は、”ギリードウ”って言う名前らしい。昆虫種の魔物で、普段は一匹で行動するらしいんだけど、繁殖期はんしよくきになると、非常に少ないメスを探すため、協力して探すらしい。

でも見つけたとたん、仲間同士で、戦いあい、勝者が、メスのところへいけるらしい。

と、いうことはだ。目の前にいるのは、メスで、向こうにいるのは、全部オスだというわけだ。

……え？　だめじゃないの？　逃げなきゃ、巻き込まれるよ？　どうして、逃げないのかしら？

それを言おうと、話し終わった男を見ると、男は、苦虫を噛み潰し

たかのような顔をして、向こうにいる、”ギリードウオス”のオスたちを見ていた。

「ねえ、逃げないの？」

「……だめだ。今逃げたら、目の前にいるメスが超音波を出して、オスたちを呼んでしまう。そうしたら、いくら早いルークでも、粘^{ねん}液^{えき}をかけられて動きを止められてしまう」

それを吐かれる前に、逃げればいいんじゃないの？　と思った私は、それを男に話した。すると、まるでそんなことを考えていなかったかのように、ポカーンとした顔をしだした。もしかして、こいつ、馬鹿？　……でも言わないようにしよう。傷ついたら、私が悪いみたいになるから。

「よし！　いくぞ、ルーク！」

「マカセテ（キュウ）」

なんか、かわいいわね、竜の鳴き声。まるで、赤ちゃんみたい。でも、男は、まるで言葉をわかっているみたいに、逃げるときの算段を竜に話してるけど、本当に言葉がわかるのかな？

まあ、考えてもわかることじゃないけど、気になるわね。聞いてみよう。

で、聞いてみたらみたで、竜の言葉がわかるのは、普通だと言い放ちやがったんだよね、こいつ。

……やっぱり馬鹿だわ。こいつ。だって、普通^{すじがね}の人が、竜の話してることなんて、わかるはずないじゃない。筋金入りの馬鹿だわ。

「さて、行くか。全速力で」

「ええ、行きましょう」

でも、そのあと、男は黙ってしまい、なにかを言おうと口を開いたり、あけたりしただけ。うっとおしかったから、私はそれを見ないようにして、前を向いた。なにか、横から、「あーあ」とか聞こえるけど、気にしないわ。なんか、顔を隠してるけど、きにしないきにしない。今は、前だけ向いていればいいのよ。

そして、ルーク（間違えてた）が口から、白い息を吐き出した後、尻尾をセンサー代わりに横に振ったり、上に振ったりしながら、風を読み（たぶん）人間が走るときみたいに、助走？ みたいに、大きな足で、空気をキックして、目の前にいる”ギリードウ”を吹き飛ばしながら、向こうにいるオスたちに突っ込んだ。え？ なんで突っ込むのよ。

それを男に聞くと、森はあっち方向にあるらしい。なるほど、だから突っ込むのか。

よくわかりました。だからさ、この速度何とかしてくださいよ！ 早すぎでしょ！ 顔中が痛い、空気がいたい。だから、さっき、何か言おうとしたのね。……男は、顔をガードしてるし。……仕方ない。光の盾でも作りますか。

「何者も、通さない、万能の盾よ、ここに召還する……デリムスシルド！」

……それを唱えた瞬間、私の前方だけに、ミクロの風も通さない白い盾が現れた。男は我慢すればいいのよ。罰よ、罰。だまってた、ね。

男は、前方にある盾をみたあと、私をうらやましそうに見てきたので、「あんたもやれば？」と人が見たらむかつく顔で、いつてやると、案の定、私に飛び掛ってきたので、急所を蹴り上げると、おとなしくなった。男は不便よねえ。女に生まれてよかったわ。

で、しばらく、”ギリドゥ”の群の中を通っていた私は、ある異変に気がついた。

――すべてのギリドゥが動かないで、ぴたっと、止まっていたのだ。はるか向こうにいるメスも（私は視力がいいため見える）動かずに、なにかに敬礼するように鎌状の腕を触覚のある頭につけていた。

それを見ていた男は、痛みをこらえて、私に耳打ちしてきた。「クインがくる」と。……クインねえ。まさか、王女さまでも来るのかな？ ……だとしたらやばくない？ ……そして、そんな事を思っていたとき、前方に明らかに気配が違う黒いギリドゥが見えた。

「お、おつきくない？ あれ」

「あ、ああ、俺も始めてみたが、あんなにでかいとは……」

どどど、どうしよう。私たちを無視してくれないかな？ ……ですよねえ、無視なんてしませんよねえ。……ものすごいスピードで突っ込んできたし……。ルークって、火、吐けないのかしら？ それがあれば、何とかかなりそうなんだけど。

が、男に聞いたところ、ルークは風竜なので、風の混じった火しか吐けないらしい。……ぶっちゃけそれでもいいんじゃない？ ……。そう思ったとき、前方には、すでにもう、クインがいた。

「るー、ルーク、なんとかしてくれ！」

「イイケドアドデオニクチョウダイネ（キュッキュウキュッキュッキュ）

「ああ、わかった。わかったから、頼む」

なにをルークが言っているのはわからないけど、何かを要求しているのだということはわかった。

私も、すこしなれてきたかも。

- -そして、ルークがなにをするのか見ていたら、突然ルークが宙返りして、尻尾をクイーンにぶつけた。いきなり宙返りしたので、落ちそうになったけど、がんばってこらえた。

- -そして、ルークが元の体制に戻ったので、前方にいるクイーンを見てみると、体には無数の切り傷ができていた。（中には、緑色の肉が見えているところもあった）なにをしたのかはわからないけど。これで、クイーンが弱ったはずなので、とどめにと、ルークが白いブレスを放ち、クイーンの羽が切れて、落下していった。

す、すごいわね。”飛竜”っていうものは。ここまで強いものだったなんて。意外だね。

だって、竜は、神聖な生き物で、魔物のドラゴン以外は、戦闘力を持たないって、おじい様が言ってたのに、まるで違うんだからそう思うわよ。

「さて、これで、”ギリードウ”たちもかなわないと思って、逃げ出すはずだから、安心して森にいけるな」

「そうね……」

私の曇った顔に気づいたのか、男は、ルークに何かを言った。すると、見る見るうちに、ルークが飛んでいるときに吐いたブレスが、塊になり、そのあと、弾けて、きらきらした雨が降ってきた。

「うわああ。すごい。すごいよ、これ！」

「喜んでもらえて何よりだよ」

な、なによ、急に紳士っぽくなって……。調子が狂うじゃないの。
- -そして、しばらくその雨を浴びていると、もう、暗い気持ちだったかんじが吹き飛んでいつの間にか、私は笑っていた。いまは、すべてを忘れていたい。そう思いながら……

s i d e o u t

最高教主 s i d e

「教主様。これをお願いします」

「……………」

「教主様？」

ん、いつの間にか、寝ていたか……。そういえば、今日は、大事な仕事があるはずだったかな。

……いまは、泣きそうな目をしているこいつの書類にサインしなけ

ればな。

「ほら」

「あ、ありがとうございます！　では！」

かわいいやつだな。……さて、たまりにたまっている仕事をしなければな。

そして机の上にたまっている書類を片付け初めて、一時間ぐらいしたころだったか。いつもの発作が始まり、私は、それにいつものように負けて、意識を失った。

これは、私の中で、永玖えいくのさまよと呼んでいる。なぜか、いつも勝てないのだ。

天才とまで言われた私でも。

side out

????? side

「……あー、なんか、指がいたい。……んだこれ、書類のサイン書

きすぎだろ。どんだけ、仕事熱心なんだか。……さて、今日も、俺のかわいいかわいい、魔獣を調教にしに行くか」

んで、俺はいつものように、虚空から、赤い服を取り出し、白い服を脱いで、それに着替えた。

これやらないと、興奮しちまうからな。興奮したら、姉貴あねぎのこの建物を壊しちまうからな。気をつけねえと。……しかし、趣味の悪い部屋だな。人形だらけじゃねえか。……まあ、魔獣なんて、ものに興味を持った俺がいうことじゃねえけど。……にしても、姉貴はいつ俺のことに気がついてくれるんだか。……早く気がつかないと、魔獣を世界に放つぞ。きひひ、裏の役員どもにも気がつかない姉貴は本当にかわいそうなやつだよ。くくく、さてとお、魔獣に調教するかぁ。俺と裏の役人以外の生物をみたら、食い殺すように、な。くくく。

side out

第二十九話、初めての魔物（後書き）

さて、今回は、前回書いたとおり、ミルネリア教の階級についてです。一個ずつ、書きます。今回は、最高教主から。では、どうぞ。

最高教主（トップリス）は、ミルネリア教を作った、テルス人の末裔しかなることができないとされている。主な仕事は、部下からの書類のサインや、ミルネリア教内の約束などを考えている。現在は、六代目なのだが、先代の教主たちは皆、三年後に、不可解な、死に方で死んでいる。一代目は、太陽を見た瞬間溶けて死に、二代目は、ドロス（大根）食べた瞬間、死に、三代目は、白いものを見た瞬間死に、四代目は、光の魔術を使った瞬間死に、さらに一番不可解なのが、五代目。これは、自分の名前を呼ばれた瞬間死んだのだ。全員に共通するのは、光や、光の意味する名前など、光属性の色など、すべてが、光に関係しているのだが、偶然なのかは、誰も知らない。

さて、次は、三大特務官（セカンドイール）です。

第三十話、森へ再び（前書き）

くあらずじく　キレイな結晶を長い間見ていた二人と一匹。そろそろ、行かないといけないので、森へと向かったが……

第三十話、森へ再び

ドレル side

あー、そろそろ、森、だな。……たぶんだけど、あの森は、もう、
跡形もなく、灰になってるだろうな。……かわいそうだが、同情は
しない。それを乗り越えてこそ、人間は強くなれるんだ。
だから、ちゃんと見て、覚悟を決めるんだな。……俺が言えた義理
じゃないけどな。

「……そろそろだな」

「……そうね」

……そんな顔するなよ。さびしいのはわかるが、俺には何もできな
い。知り合いなら別だけど、俺たちは、赤の他人だ。森にいったら
別れることになる。そこからは、もう、自由だ。仲間を探してもい
いし、どこかで小さな村を作ったりもできる。……だけどな。俺の
性格上、こんなにも、さびしい顔をしているやつを放ってはおけな
い。

- 俺の手が勝手に、女の手に向かい、その小さくやわらかい手を握
る。

嫌がつてはいない。むしろ、ありがとうといいそうな様子だ。……
俺も孤独だからな。わかるよ。

お前の気持ちは。……さて、このまま、ずっと手を握っていたいと
ころだが、前方に、灰色の森が見えてきたので、いったん離れた。

「……！！……やっぱり。森は、焼けてしまったのね……」
「ああ、そうだな……」

悲しんでいる様子はなかった。むしろ、最初からわかっていたみたいだった。

強いな。お前は。……俺には、一部の記憶がない。なぜだかわからないが、そのことが怖い。

……お前みたいになりたいよ、俺は。

しばらく、灰になった森を見ていた俺と女は、森から出てきた影を見た瞬間、動き出した。

生き残りでもいたか、あるいわ、魔物か……

女は、空中にもかかわらず、ルークから飛び降りて、その影を追って、どこかへ行ってしまった。

おいおい、危ないから、俺に許可取れよ……はあ。さて、女を追いかけるか。

ルークに追いかけるように言った俺は、背中で、あいつが置いていった、ペンダントを見ながら、昔を思い出してみた。

俺が、生まれたところ、すんでいたところ、家族、友達、何もかもが覚えていない。なぜ、こんなところにいるのかもわからない。ただいえることは、俺が、一文無しだということだ。
これから、どうしよう。そう思った俺は、怪しい館やかたから外に出て、通りを歩き始めた。

周りには、浮浪者がたくさんいて、きみが悪かった。途中、声もかけられたりしたが、すべて、無視して、俺は、ここがどこなのかわからずに、ただただ、通りを歩いた。

「……………」

途中、俺は、ある看板に目を留めた。「ここは、キリの王都」

……キリか。……獣人族の国か……。獣人は見たことがないが、やさしそうな響きだ。

……さて、ここが獣人族の国の王都だということはわかった。だが、食うものも飲むものもない。

いつかは力尽きて、倒れるだろう。……それを防ぐにはまず、金が要る。……盗むか。

それを決めた後の行動は早かった。すぐさま、人が多い通りに出て、金を持っていそうな、獣人に目をつけて、スリをはじめた。最初は戸惑った。が、やらなきゃ死ぬ。だから、俺は、スリをした。

……スリに成功した俺は、その金が入った道具袋の金を一枚取り出して、近くにある露店で、串焼きを買った。

……一口食べた瞬間、俺の舌が喜んだかのような錯覚に襲われ、俺

は、その串焼きを味わいながら、ほおばった。

「……………のどが乾いたな。……………ククスジュースか。……………買ってみるか」

道具袋から、金色の金（金の価値なんてわからない）を取り出して、それを、露店に持っていくと、ひどくびっくりされた。……………なんでそこでびっくりするんだ？……………適当に店主と話をしていくうちに金のことがよくわかった。なんでも、いま俺が持っている金色の金は、裕福な家庭しかもっていない、金らしい。一般人が持っているのは、せいぜい、半金貨まで。……………だからびっくりされたのか。

なるほど。店主にお礼を言いつつ、道具袋から銅色の金を、二枚取り出して（半分のやつ）店主にわたし、ククスのジュースを近くのベンチで飲んだ。

- - 口の中いっぱい広がる滑らかな、ククスの果汁。少しすると、また、味が変わり、今度は、ククスの果肉が口いっぱい広がった。……………うまい。こんなうまい飲み物始めて飲んだ。

しばらく、ククスのジュースを味わいながら、ベンチで一休みしていると、ある騒ぎが起きた。

空から、竜が降ってきたのだ。周りの人たちは、ひどくおびえ、落ちてきた竜を助けもしない。

なぜ、助けないのか疑問に思ったが、すぐにそれがわかった。竜が暴れだしたのだ。

これでは、助ける暇もない。だから、みんなは、竜を見てみぬ振りをしていたのか……………

「キュウウウウウウウウウ！ キシャアアアアア！」

「……………よしよし、落ち着け。まず、怒っている理由を話してみる」

周りから驚異の目で見られているが、気にしない。俺は、わが道をいく。

ことばがわかるはずもないのに、竜に言葉をかけると、竜はその濃い緑色の目で俺を見て、そのあと、興奮して、暴れていた尻尾を抑えて、俺に擦り寄ってきた。

「キュウキュウ」

「よしよし、落ち着いたか。よかったな」

しばらく、擦り寄ってきた竜をなでながら、竜が壊した地面を見ていると、竜が、急に苦しみだした。

俺はあわてて、竜の背中をさすってやった。すると、竜の肛門から、小さな、竜の頭が出てきた。

俺は、それで悟った。こいつは、暴れてたんじゃない。苦しかったんだ。だから、痛みをこらえるために、なにかを掴みかけたんだ。だが、掴むものがないため、仕方なく、尻尾を使って、地面や物を壊して、掴むものを作りたかったんだ。……みんなもそれがわかれば、協力したかもな。はは。

……もう少しだ。もう少しで、ミニ竜の体が全部出る。もう少しだ。がんばれ。

そして、一時間たったころだったか、ミニ竜の体がすべて、出てきた。ふう。よかった。

なんとか、事なきを得たな。

「ありがとう同胞よ。助かりました。お礼を言います」（キュキュキュキュキュ、キュキュキュキュウ）

「よかったな。でもお礼はいらない。気持ちだけでいいさ」

本当によかったな。……ん？　まてよ。なんで俺はこいつの言っていることがわかるんだ？

……なぞだ。でも、そんなこと、あとでいいか。今はこいつとの会話を楽しむことにしよう。

そして、早一時間後。親竜は、唐突に息絶えた。周りにいたやつに話を聞いたところ、どうやら、竜が出産するときは、命をかけるらしい。これは、生まれてきた竜が、あまりにも弱いため、生命力を与えないと、すぐに死んでしまうかららしい。だから、親竜は生まれてきた竜に生命力をすべて分け与えて、子供を助けるらしい。……なるほどな。そういうわけなのか。……人間と違って、竜は大変なんだな。

しばらくして、俺たちがいるところに、黒い修道服をきたシスター（とおもわれる）がやってきて、周りに連中から、事情を聞き、最後に俺のところによってきた。

「あなた様が、この親竜と話をしていたという人ですか？」

「ああ、そうだ」

俺の答えに少し考えた後、シスターは、俺にある提案を持ちかけてきた。なんでも、このミニ竜の操縦士となり、シスターが所属するの宗教の竜騎士になつてもらいたいらしい。……竜騎士か。……やつてみたいのは山々なんだが、俺は、盗みを働いたしなあ。宗教なんかに入れるわけがないだろ。

そのことをシスターに話すと、「なら、一年間、私たちが管理する罰を反省する部屋で過ごした後、竜騎士になるのはどうですか？」と返ってきた。……まあ、それでもいいか。

そして、俺は、それを受け入れて、一年間、宗教の中にある部屋で過ごした。結構、快適だった。

そして、俺は、今日、この宗教。”ガゼット教”所属の竜騎士となつた。あの時のミニ竜は、一年間で成竜の手前の、”清清竜”まで成長した。これは、早いようで、遅い。なんでも、竜は通常、一年で”成竜”まで成長するらしい。（なので、子供の竜は珍しく、価値が高い）だから、あのときの竜、ルーク（俺がなずけた）は、竜の間では落ちこぼらしい。でも、俺はそんなこと気にしなかった。だって、小さいころから一緒にすごしたほうが、仲良くなるだろ。そして、俺は、さまざまの仕事をこなすうちに、”ガゼット教”最強の竜騎士と呼ばれるようになった。なにが最強なんだかわからないが、ここまでいけたのは、ルークがいたからだ。本当にありがとう。ルーク。

で、ある日、俺は、見回り中に気持ち悪い軍団を見つけ、興味本位で以下づいたんだっけな。……そこでであったのが、あいつだったわけだ。……さて、そろそろ、あいつに追いついただろう。起きるか。

「あー、なんか、殺されそうになってね？ あいつ」

「ソウダネ。アノヒト、マモノニオソワレテルネ」（キューキュキュ キュキュキュ キュイキュウキュキュ）

なんで、あいつは、ここまで、殺されそうになる回数が多いんだ？
悪いことでもしたのか？ あいつ。……めんどくさいけど、助けないわけには行かないし。助けるとするか。めんどくさいけど……。

side out

???? side

今日はうれしいことがあった。なくしてたと思ったミコトとみんなの写真が出てきた。

ああ、よかった。これではさびしくない。本当によかった。でも、悲しいこともあった。私の家に、魔物が襲来した。……家はぼろぼろにされちゃったけど、大事なものは、全部、空間倉庫に運んだから大丈夫だった。本当にこれだけは、死守しないと。

でも、ここ三年、魔物なんて、こなかった。なぜ、今になって、来たのか？ それだけが、心残り。

さて、今日もまた、夢をみよう。ハッピーエンドに向かう夢を……

side out

第三十話、森へ再び（後書き）

いやー、久しぶりです。作者のミーナです。今日を持って、続きを開始します。待たせた皆さん申し訳ありません。さて、今回は、皆さん忘れているかも知れませんが、セカンドイール三大特務官についてです。ではどうぞ♪

三大特務官。その名の通り、三人いる特務をこなす人たちの事を指す。

セカンドイールの二人は、歴代の中で、一度もかわっていない。なぜか？

それは、二人ともエルフだからだ。エルフは長寿のため、千年は生きる。なので、二人ともミルネリア教が誕生してから、かわっていない。あと一人は、何回も代わり、現在、あらたな、人物がそこに位置した。このセカンドイールの役目は、特務と呼ばれる任務をこなすこと。特務は大まかに分けて二つあり、魔物討伐と、潜入捜査のふたつがある。魔物討伐は、用兵などに任せればいいのだが、あいにく、悪意が強い魔物には勝てないため、浄化の技を持つセカンドイールがこれを行う。

潜入捜査は、あくどい貴族や、裏がある王の下に潜入し、その悪事を暴くことである。ほかに、裏の仕事などが、一人にあるが、これは、あまり知られていない。（最大教主にも）

第三十一話、迅速の魔物？（前書き）

くあらずじく ドレルが昔のことを思い出しているとき、リルは、森から飛び出た影を追って、近くの村の近くまで来ていた。そしてしばらく村を歩いていると、突然、影が襲ってきて……

第三十一話、迅速の魔物？

リルside

……男は着いてこないわね。まあ、それでもいいんだけどね。赤の他人なんだし。……それにしても、影を見失ってしまった。……馬鹿ね、私。なにか、あの影がみんなのことを知っているかもしれないなんておもっちゃったりして。はは、は……。みんな……。大丈夫だよ？ 生きてるよね？ どこかにいるよね？ ……まずは私がつかりしなきゃ。まずは、村の人に森のことや、生き残りがいないか、聞き込みね。……影は気になるけど、いまは、みんなのことを知るのがさき。

そして、私は村に入り、辺りにいた人に、聞き込みを開始した。

- - ある人は、魔獣のことを、神の天罰といっていたり。

- - ある人は、純白の翼をまとった女神を見たとか。

- - ある人は、ものすごい魔力を、森から感じたとか。

そして、最後の人に聞いたところ、あの森には、生き残りがいなかったらしい。（村の兵士が調べたそうだ）……そんなはずはない。ミコトたちが、死ぬなんてことは……。だって、だって、みんなは、強いんだもの。負けるはずがないわ。

……うん、そうよ。負けるはずがない。たぶん、どこかで、のうとうと生きているんだ。

そうに違いない。……だから、私は、みんなを探すたびに出る。遠く、長い、旅になるだろうけど、私はめげない。

そう決めた私の次の行動は、まず、この村にみんなのうち誰かが来たのかを調べることだった。

私は、宿屋や、酒場などを、手当たり次第に訪問した。すると、一軒の宿屋に、三時間前、青い髪の少年と、その少年に背負われてい

る白い髪の少女が旅立ったらしい。

……ミコトと、ミルね。……よかった。本当によかった。生きててくれて。

よし、二人が生きているということは、ニルもどこかで生きているはず。だから、まずは、二人と合流して、そのあと、ニルを探すたびにでる。……でも私。……筋金入りの方向音痴なのよねえ。

自分で認めるのも恥ずかしいけど。……さて、次は、あの影が気になるわね。何者なのかしら？

魔物じゃなきゃいいんだけど。

そして、私は見失ったところ。村の近くの通りに向かった。

「いないわね。……どこにいったのかしら？」

きよろきよろと、あたりを見渡して、影を探す。けれども、どこにも姿はない。あるのは、看板の影だけ。……本当にどこにいるのかしら？

まだ見ていないところがないか、再度あたりを見渡してみた。

- - 右には、村の入り口が。

- - 左には、森へ続く、坂道が。

- - 前方には、果てしない地平線が。

- - そして、後ろには、闇に包まれた道が。

ん？ おつかしいなあ。さっきは、後ろ明るかったのに。……なぜ？

気になった私は、近くに落ちていた小枝を拾い、弧を描くように、小枝を闇の空間？ に投げてみた。

すると、落ちた小枝の下からうねうねと、見覚えのある影が出てきた。

チャンス！ 今のうちに、光の魔術で、拘束しよう。

「天から降りし、光よ、ピギアアアア！」っ！？ なにこいつ。

詠唱を邪魔してきた。それも、分裂して」

……詠唱ができないんじや魔術がつかえない（無詠唱はできない）。
……やばいわね。これじゃあ、一方的に、攻撃されてしまう。ひとまず逃げなきゃ。

だが、私は、甘かった。逃げようと背を向けた瞬間、背中になにかぬめぬめした液体をかけられてしまった。

うええ。気持ち悪い。これ。触ると、手にくっつくし、引っ張って

も、取れない。

……やばい。やばいよー。取れないー。……しかも、足にまで、かけられた。……動けない。

このままじゃ、影に食われるうー

「きゃあ！」

ズテン、と足についた液体をとろうとしたときに、オーバーリアクション気味に、派手に転んでしまった私は、背中になにか、重いものが乗っかってくるのを感じた。あつれえ。おつかしいなあ。私はお母さんじゃありませんよー。だから、おりてくださーい。お願いしますー。

なんとか、背中についている影を振り払おうと、背中に手を回した瞬間、私は、地面にたたきつけられた。

「え？」

いきなりたたきつけられたので、呼吸がままらなくて、私は、一瞬、酸欠状態に陥った。^{おちい}

空気がほしい。酸素がほしい。そう、思ったのは、初めてのことだった。

息が苦しい。誰か、助けて。

そう思った瞬間、また、私は、ある男のことがよぎった。……なんでも、あいつのことなんか思い出すのよ、私。……あんなやつに助けられるなら、死んだほうがましよ。

だけど、心のどこかでは、助けてほしいという願いもあった。

そして、気を失いかけたとき、私は、獣人の国で聞いた、咆哮と、翼が羽ばたく音を聞いた。

s i d e o u t

ドレル s i d e

ったく。なんで、今回も死にそうになってんだよ、あいつは。……
運がなさ過ぎる。

……まあ、放っておくわけにもいかないし、助けるか。……しっかし、何の魔物に襲われてんだ？ あいつは？

俺は、視力がいい目（ルークは、竜の目とかいつてるけど、そんなはずがない）で、ルークの上から、女の上に覆いかぶさっている影を見た。

あー、あれは、”デビウススライム”か。……ランクはC。……す

べてが、有害物質の液体でできていて、動いているものを見かけると、ぬめぬめした液体をかけて、獲物を捕らえて、のしかかり、肺を圧迫して、敵を圧殺するという。主に、灰があるところにすんでおり、繁殖期になると、分裂して、それが、また分裂して、どんどん増えていくという、中級者向けの魔物だな。……あいつ。こんな低レベルの魔物にやられてんのかよ。まあ、SSランクの俺が言ったらかわいそうだけど。

はあ。めんどくさいけど、早くしないと、女が死んでしまうから、助けないと。めんどくさいけど。

……今日は久々に、ルークなしでやってみるか。たまには腕をならしとかなないと、なまっちまうからな。

そして、ルークから飛び降りて、女の目の前に降りた俺は、ルークの腕にくくりつけてある大剣を取り、”デビウスすらいむ”に切りかかった。

だが、当然、液体なので聞くはずもない。……なんてな。俺の大剣には、【アマリア】の火バージョンがついてる。だから、液体なんか、すぐに蒸発させることができる。

ブシャアアアア！

うまく、女に当たらないよう、角度をずらしながら、なんどもきりつけて、きりつけて、きりつけまくったあとに、気絶してる女をルークの背中に投げて、周りにいた分裂”デビウススライム”に向かって、入りだした。

「はっ！」

逃げる”デビウススライム”を手で掴み、黒い体の中にある緑色の心臓を突き刺し、絶命させた後、すぐそばで、くねくねしていた、

”デビウススライム”をアップパーカットの要領で、切り上げ、蒸発させた後、もう、二エト（メートル）ぐらい先まで逃げてた”デビウススライム”に向かって、大剣を投降して、”デビウススライム”が蒸発したのを確認した後、俺は、大剣についている【アマリア】に呼びかけ、向こうからこちらに呼んだ後、ルークの背中に乗り、来た大剣の柄を掴み、ルークの腕に巻きつけた後、俺は、気絶してる女を見ながら、また、空の旅へ、向かった。

side out

?????side

今日もいいことがあった。ミコトの夢を見れたの。とてもうれしかった。でも、ミコトは、【悪魔】に殺されてしまった。……ハッピーエンドがよかったのに。……なんでバッドエンドなんだろう。

……でも、ミコトのことが見えたからうれしかった。……もう少し。もう少しで、【擬似エンシメント】が完成する。そうしたら、魔物が消えて、この廃墟と化した世界が変わる。新しい生命が生まれて、いつか、いろんな種族が誕生する。そうしたら、私は、また、魔物が現れるまで、眠って、次また、世界が廃墟と化したら、【擬似エンシメント】を作って、魔物を消し去る。そして、また、生命が誕生する。そして、また……。うえ。ミコトお。やだよお。もう、やりたくないよお。こんなこともうやだよお。ミコト……。会いたいよお。

side out

第三十一話、迅速の魔物？（後書き）

すみません。忙しいので、あとがきは、今回なしとさせてもらいます。

本当にすみません。

第三十二話、遺跡（前書き）

くあらずじく デビウススライムを倒し、空へむかったドレルと気絶しているリルだったが、急に雨が降ってきて、雨宿りすることになり、山の洞窟に向かったが、そこには洞窟などなくて……

第三十二話、遺跡

ドレル side

あー、冷たい。雨なんて久しぶりだな。……二年前から振ってなかったな、そういえば。

……雨、か。……雨にはいい思い出がないな。……まあ、雨が悪いわけじゃないから責めるわけにはいかないな。……それにしても、こいつ、起きないな。……よく雨の中で寝れるな。俺だったら、すぐに起きるのに。にしても、ちよつと大降りになってきたな。近くで雨宿りできるところはないか……。

お、あつたあつた。……山の洞窟か。……まあ、魔物がいなけりや、いけるだろ。さて、ルーク。急いでくれ。――竜との念話回線をつなぎ、それを伝えた瞬間、ルークの翼が大きく開かれ（普段飛んでるときは小さく開いてる）そのまま、ものすごいスピードで、急降下して（ものすごく顔が痛い）山の土や、木々をなぎ倒しながら（……俺は悪くない）山の地面へと降り立った。

あー、なんだここ？ 空から見たときは確かに洞窟だったのに、こりゃあ、なんだ？ 神殿？

……いや、神殿にしては、小さすぎるし……。あ、そうか、【遺跡】か。……風の魔術（認識障害）で、守られてるし、【遺跡】だな、これは。

……まあ、雨宿りができれば、どこでもいいんだけどな。

そして、【遺跡】に入ったとたん、俺の背中に背負っている女が目覚めました。……今頃起きたのか。

……変なやつだ。起きたとき、女は、ここがどこかわからないでい

たようなので「【遺跡】の中だ」

と説明すると、女はまだ完全に開いていない目で俺を見ながら「【遺跡】ってなに？」と聞いてきた。

……おい、いまだき【遺跡】を知らないのかよ、常識だぞこれ。……まあ、俺もつい最近知ったんだけどな。

教えて教えてと、うるさいので、すこし、説明することにした。はあ。なんで俺が教えなければならないんだ。

「【遺跡】ってというのは……。てめえ、まじめに聞け」

なんで、また眠ろうとするんだこいつ。むかつく。俺が怒っているというのを近くの岩を壊すことで（あーあ、こわしちゃったよ、ま、いっか）知らしめたので、女はちゃんと聞くようになった。

「【遺跡】はな、ずばり、ダンジョンだ」

「ダン、ジョン？ なにそれ？」

あー、こいつ、馬鹿だ。本当に馬鹿だ。ダンジョンも知らないのかよ、馬鹿め。

「はやくおしえろー」と女が急かすので、俺はつい、【ガゼット教】にしか知られていない、ことを話してしまった。

「ダンジョンというのは、【階段】とよばれる、不思議な転移装置が、各階にあり、それにたどり着くことで次の階にいけるというものなんだが、ここにたどり着くには、魔物を倒して、道を切り開かないといけない。そのかわりに、いろんな役立つ道具が落ちている。ダンジョンは、最下層と呼ばれる最終地点の階がある。ここには、

【不死の薬】や、【エクスカリバー】、【勇者の防具】そして、【神具】とよばれるものが落ちているとされている。が、ここにたどり着いたものは誰一人いない。その理由は、五年に一回どこかに出

現するダンジョンなので、見つけるものはあまりいない、ということもあるが、最下層に存在する魔物は、非常に強く、達人でも、瞬殺されてしまうほど。なので、ここにたどり着くものはいるが、皆魔物に殺されてしまう。だが、百年前、例外がいた。それは、【勇者】とよばれる存在。【勇者】は、勇敢にも、最下層の魔物をすべて、倒し、【エクスカリバー】や、【勇者の防具】を手にしたとされている。だが、【勇者】が去った後、また、最下層の魔物は復活し、さらに強くなった。そして、【魔王】を倒した【勇者】がまた挑んだとき、こんどは、勇者が、殺されてしまった。なので、ダンジョンには、いまだに、【勇者】の亡骸と装備一式が存在する。あと、ダンジョンは、五年に一回しか出現しないといったが、実は、まだほk「はい、そこまで！」なんだ、もついいのか」

長々と説明した気がするが、気のせいだ。俺は手短かに説明したはずだ。なのに、女は、頭を抱えている。……おかしいな。そこまで、考えるほどのことを説明しなかったはずなのに。

「で、結局、【遺跡】って、なんなの？」

「だから、ダンジョンだ」

「……………」

「……そんな目で見るな。俺だって、原理はわからん。ただひとついえることは、ここが、ダンジョンに挑戦するものたちの練習場だということだな」

……せつかく説明しやったのに、「ふーん、そう」かよ。はあ。ミスカ（鬱）になりそうだ。

さて、そろそろ、雨がやんだらうから、外に出るか。……だから、壁に書かれた文字を読むな。

お前わかるのか？ と、いいたいところだが、あまりにも真剣だったため、俺は、読み終わることを待つことにした。

「ここに、【勇者の遺物】を、……かすれて読めないわ。いかなるものも、持ち出すことを禁止する。シュガレットⅡDⅡマクリス」
「なにを読んだか知らないが、早くしろ。ルークが待ちくたびれてる」

……最後のほうにでてきた名前。シュガレットⅡDⅡマクリス。聞き覚えがあるんだが、思い出せないな。たしか、”シュガレット”賞がなんやかんやらだったきがするんだが。まあ、忘れるということとは、重要なことじゃないってことだろ。いまは、思い出さなくてもいいか。

そして、なにか考えている女の手をつかみ、【遺跡】からでて、近くで、草を食っていた、ルークに、またがり、ルークは、すこし、ねずみ色の雲がちらほらみえる空に向かって、飛んだ。

side out

デイリアス side

今日は、人間族の王都にある【元老院】と呼ばれる、裏の王に、最高^{トップ}教主とともに、会いに行った。途中、最高教主が、荒れだして、大変なことになったが、それは気にしないことにする。

さて、四時間かけて、王都にたどりついたのはいいが、肝心のトップリスが行方不明になった。

^{ナイトス}近衛騎士隊によると、とつぜん、姿を消したらしい。……まったく、世話がかかるトップだな。仕方ない、私の闇の包囲網を使って、見つけることにするか。

だが、私が魔術を発動したとき、なにか違和感があった。最高級主にかけていた魔術がはじけとんだのだ。甘かった。何者かが、それに気づき、解除したのだろう。……私の魔術を解除するとは。よほどの魔術師なのだろう。……仕方ない、しらみつぶしに、ナイトスとともに、探すことにするか。

一時間かけて、王都を隅々まで探したが（裏道まで）トップリスの姿はなかった。

痕跡も、なにもない。……まずいな。このことがばれたら、私は、^{セカンド}三大特務官から引き摺り下ろされてしまう。なんとかせねば。そのときだった。ナイトスの一人が、傷を負って、帰ってきたのは。ナイトスの男は、重い防具をしているのだが、その、真ん中から、斜めにかけて、爪で引き裂かれたかのような、傷ができていた。……ふむ、この傷から見ると、【人間族】の東方の国。【

日本】で、生み出された武器。”刀”とよばれるものによって切られた傷であろうな。私も、家にひとつ持っているが、あれは、使う機会がない。一度、木を切ってみたが、剣のほうが使いやすかった。”居合”（いあい）という技を使えば、強いものだろうが、あれは、難しい。なんせ、鞘^{さや}から刀をすばやく抜き放つのだ。難しいに決まっている。……おっと、脱線してしまった。

さて、この傷をつけた者がトップリスと一緒に行動しているということがわかる。おそらく、身分を隠して、一緒にいるのだろうが……。む、いい考えが浮かんだ。くくく。待っているトップリス。必ずお前を連れ戻す。くくく。

side out

さあ、解き放て、私を解き放て、そして、破壊するのだ。何もかもすべてを！ さあ、解き放て。

さあ、さあ！ 早く解き放つのだ。そうすれば、お前も私も気持ちよくなれる。そして、にくい神と、悪魔を殺すのだ。さあ、早く解き放て。さあ、はやく、開放しろ。はやくするのだ。くくく。っ！
？ 貴様！ 邪魔をするな！ やめろおおお！ …… はじめましてかしら？ あなたは、右の眼球にすでに魔が乗り移っています。それだけでは破壊しか生まない。……私の力を貸しましょう。少々痛いですが我慢してください。では、いきます。

なぜだろう。さつきから、夢ばかりみるきがする。また、俺の眼球を取るのか……。いい加減にしてくれ。だが、俺の思いむなく、白い女は、俺の左の眼球を抜き取り、そこに吸い込まれるようにはいっていった。

「ぐあ」

前と同じように、痛みで声ができずに、そのまま、しばらく悶絶し、黒い空間で、痛みが引くの待った。そして、十分ぐらい過ぎたころだったか、痛みは消え、黒い空間に光がさしてきた。

っ。明るいな。でも、暖かい。さつきのことなんか、全部忘れるくらい暖かった。

俺は、その光に導かれるように、上へ上がっていき、最終的に、光がいっぱいになったとき、俺は、目が覚めた。

「……夢、か。夢であってほしい。……」

すべて、なにもかもが、全部夢であったほしいと願いながら、横に

寝ているミルをみる。

ああ、ミル。まだ目が覚めないのか。俺は、ミルに早く目が覚めてほしい。記憶を失っていても、自我がなくても、おきてほしい。そして、二人を探そう。だから、目を覚ましてくれ。頼む。

だが、俺の思っていることは、実現しない。ただ、外から鳥のさえずりが聞こえるだけ。

「……いつか、目を覚ましたときで良いから、俺に話しかけてくれ。そうすれば、俺も救われる。……ミル。俺はな、ミルが俺に好きっていったとき、本当は、すこし、おきてたんだ。……今では後悔してるよ。なんであるとき、告白を素直に受け入れられなかったのか。……今では、答えが返せるよ。俺も、お前が好きだ。て、いつてもいまはわからないだろうけどな。はは。……さて、元気を出して、今日も旅に出るか。な？……太陽をいっぱい浴びさせて、月の光を浴びて、また、楽しくやろうな。そのためには、くよくよしてられないな。前向きに考えるんだ。さて、今日はどこに行こうか」

俺は、逃げたかったんだ。ミルが目を覚まさないことから。……でも、思い続けていれば、いつか、目を覚ましてくれる。そのためなら、俺は、きついことだって、受け入れる。ミルのためなら……

「さて、今日も元気にいきますk。っ！？ごふ。がはっ。！？」

やっぱり、これは直んないか。はは。……我慢するしかないな。耐えて耐えて耐えまくって、ミルが目を覚ましたときに笑顔でいられるよう、がんばるんだ。……さて、この血を拭いて、ミルを背負って、二人を探そう。

第三十二話、遺跡（後書き）

今回は、前回でてきたアマリアについて説明したいと思います。

アマリア。それは、ミルナスタ全土で、いま話題の、武器にはめることで、武器の性能や、精霊の力（例、火の精霊ならば、火属性が常につく）をつけれることができたり。使うもののメルニムスにあわせて、武器に魔術を纏わせたりすることができる、球体の水晶のことである。ちなみに、武器に魔術を纏うことは、アマリアなしでもできるのだが、上級者でも、難しいことなので、アマリアはとも優れているのである。一般に出回っているのは、銀でできたものなのだが、貴族や、王族には、アダマンと呼ばれるミルナスタで一番硬い鉱石できている。性能は一緒なのだが、一般のアマリアは、すぐに壊れてしまうので、アダマンでできたアマリアはとても高価なのである。

次は……。なにか説明します。

第三十三話、長刀をもつ人間（前書き）

くあらずじく 行方をくらませた最高教主。^{トップリス}その途中、近衛騎士に連れ去られようとしたとき、男か女かわからない人が彼女を助け、そのまま、彼女はお礼をするために、女か男かわからない、人についていくことになったが……

第三十三話、長刀をもつ人間

最高教主 side

- もういやだ。そう思ったのは、いつからだったか。あれは、そう、私が最高教主^{トップリス}になって、まだもないころ。……あのころ、私は毎日、書類やら、仕事やらで、忙しかった。だが、私は、仕事が好きだ。だから、耐えられた。だが、あの事件から、私は、なんにもかもがいやになった。

そう、あの、いまいい、私の二重人格の女がでてきてから……。

あの日、私は、仕事に取り組んでおり、書類印を押していた。そのときは、まだ、あの女が出てきていなかった。そう。あのときまでは……。

私はあの日をよく覚えている。こんこんというドアをたく音にいつのまにか眠っていた私は、目を覚ました。「失礼します」という、やや低めな声色の知らない男が入ってきた。私は、知らない男が入ってきたのを確認しつつ、机に散らばった書類を集めていた。そう、ここまではまだよかった。

だが、書類を固唾毛終わった瞬間、みはらかっていたのか、男が急に、私の腕を鋭利なナイフで突き刺してきた。もちろん、抵抗しようと思えばできたかもしれない。だが、あまりにも突然だったのだ。だれが反応できるだろうか？　そして、ナイフが貫通し、血があふれるほど出てくる手を見て、私は、初めて、恐怖を覚えた。だが、男はそんなことお構いなしに、私の顎を掴み、耳元で、こう、ささやいた。「実験に協力してくれないか」と。私は、恐怖で、んあいがなんだかわからなかったのだろう。

反射的に、私は、うなずいてしまっていた。それを見て、満足した

のか、男は、懷から、紫色の液体が入ったビンを取り出した。私はそのとき、なぜ、使用人が来ないのか、なぜ、近衛騎士隊がいないのか、などを考えていた。しばらくして、男は、笑みを浮かべ、ビンのフタをとり、私に口をあけるよう指示してきた。もちろん、いやだったさ。だが、そんなこと思っても、いつ、殺されるかわからないこの状況で、そんなこと言えるわけがなかった。男は、私が口をあけた瞬間、その、紫色の液体を私の口の中に容赦なく入れてきた。すぐさま、はっ、となり、その液体を出そうと、口を開いた瞬間、右手を押さえていた左手に痛みが走った。なぜなら、私の左手には、右手と同じように、ナイフが刺さっていたのだ。本当に痛かった。もう、らくにくれとまで、あの時は思っただ。だが、そんなことできない私は、苦い味がする紫色の液体を覚悟を決めて、飲んだ。すると、私の体に焼けるような痛みが走った。男は、それを見て、表情を変えなかったが、私が、ありえない力で、刺さっていたナイフをへし折り、そのまま、男の首にかぶりついた瞬間、表情が一変。極楽に行ったときみたいに、突然笑みをう浮かべ、「成功だああああ！」と、叫びだした。私はもう、自我がなかっただろう。

その鋭利な爪で、男を串刺しにした後、私は、突然、狂ったように笑い出したと、私の【使い魔】のフェコルがこのあと伝えてくれた。

このあと、私が発見されたとき、私の部屋はめちやくちゃで、私の足元には、男の死体が、ばらばらにされて、落ちていたという。それからだった。私の人生が狂いだしたのは。このなぞのことから一年、二年と過ぎす間に、私は、ある症状がおき始めた。それは、“二重人格”という、いまだき珍しい、症状だった。

私は、二年間の間、それが起こるまで、あることを調べていた。それは、【吸血鬼族】という、種族のこと。あれからわかったことだが、どうやら、私は、【吸血鬼族】になっただけらしい。それも、【真

相」と呼ばれる、上位種の。――なぜ、人間だった私が、”吸血鬼”の真相になったのか？ それはたぶん、あの紫色の液体の影響だろうと私は思った。しかも、私の自慢だった、雷のメルニムスが影響した、黄色い短い髪と、黄色い瞳は、漆黒の竜尾のような髪になり、瞳は、どす黒いときよく言われるほどの黒い、瞳になってしまっていた。私は、そのときから、あまり、しゃべらなくなった。もちろん、【使い魔】にも。”二重人格”と”吸血鬼”この関係性はわからない。だが、ただひとついえるのは、私が、もう、普通の人間じゃなくなったこと。……それに、”二重人格”に支配された後、私に対する扱いが、周りからひどくなった。あるときは、恐怖から、無視されたり。あるときは、寝首をかかられたり（もちろん、反撃した）あるときは、女王様とか言われたりと。私の知らないところで、いろんなことが出回った。私はあるとき、ここから逃げよう。そう思った。が、逃げるチャンスがない。

毎日、仕事ばかりしていた、あるとき、セカンドイルに就任したデイリアスとともに、【元老院】に急に呼び出された。私は神よありがとう。と思いながら、デイリアスと、近衛騎士隊とともに、王都へと向かった。

私は、トイレに行くと少し怒りながら（今までの鬱憤^{ふさみ}を晴らすために）王都とは反対側の道へと、走りだした。”吸血鬼”になったせいか、私の身体能力は劇的に飛躍した。なので、周りにいる人を無視して、さんと太陽が照らす道を、飛竜もビクリなスピードで走り出した。

が、うまくいくはずもなく、途中で、飛竜に乗って、追いかけてきた一人の近衛騎士に捕まり、連れ戻されそうになった。おかしい。確かにデイリアスが私にかけた魔術は反射魔術（私が生み出したオリジナルの魔術で、闇と雷の合体魔術。本来なら、これはできないはずなのだが、私の頭の中には、ある魔道書があるためできるのだ）で、跳ね返したはずだが……。まぐれか。……たまにいる、強運の

持ち主か。

もちろん、罪悪感から、私は、近衛騎士を殺すことができずに、ただ、抵抗することしかできなかった。だけでも、私が飛竜の背中に乗せられようとしたとき、ある耳障りな音とともに、男か女かわからない声色の声が聞こえてきた。「一闪！」と。その意味がわからないまま、私は、飛竜に乗ったまま、覚悟を決めた。もう、あきらめるしかない、と。だが、女神は私に味方したようで、突如現れた残撃は、私と飛竜を避けて、近衛騎士の防具を斜め一線に切り裂いた。

シュン！

音があまりしなかったため、近衛騎士は、何事もなかったように、飛竜に乗った。だが、しばらくした後、近衛騎士の様子がおかしくなり、苦しみだしたかとおもうと、近衛騎士は、胸を押さえて、飛竜から落下した。だが、しばらくした後、起き上がり、どこかに走り出してしまった。

私は意味がわからなかった。突然現れた残撃が近衛騎士を切り裂いたのだ。それも、音もなしに。

本当に意味がわからない。ただいえることは、少し前に聞いた「一闪！」という、声の持ち主が放ったということ。誰かはわからないけど、お礼を言わなければな。が、姿が見えない。あきらめようと飛竜を操り、上空に行こうとした瞬間、声がかかった。「大丈夫、ですか？」と。

私は、飛竜をとめて、声の持ち主の方を向いた。すると、そこには非常に長い（私の身長の倍ぐらい。三メートルをゆうに超える）剣？ いや、刀を持った、私と同じ、黒い髪を後ろでひとつに束ねて、私と同じ、黒い瞳をもった、男か女かわからない、人がいた。

「大丈夫、ですか？」

また聞いてきたので、私は、「ああ」と答えることで、それに返した。

「さっきのやつ、ひとは、おまえ、あなたを、つれさろつとしていたみたいだ」ですが、知り合い、ですか？」

なんとも、まあ、礼儀正しいのか、正しくないのか、わからないやつだな、こいつ。それに、その長い刀。どうやって、しまうんだ？町に出たら、怖がられるとおもつが。

「いや、知り合いではない、な。私を無理やり連れ去ろうとしたんだ」

「そう、ですか。……では、安全なところへいく、きますか。ついて、きてください」

まあ、お礼を言うまでは、ついて行こう。ずいぶん、怪しいやつだが……。

そして、私たちは、五時間かけて、近くの国へとたどり着いた。すこしばかり、歩きすぎな気がするが、疲れていないので、まあ、よしとしよう。それに、この人は、汗ひとつかいていないしな。

そして、国の門にいた、警備兵に顔パス（この人が主に）で通ったあと、この人……。いいづらい。

ここは、女と断定して、彼女と呼ぶことにしよう。名前は、あとできけばいい。彼女の後について行き、ある、宿屋に着いた。外には、看板がないが、どうやら、宿屋らしい。客は……。あまりいいな。どうやら、常連客しかここには泊まれないらしい。なので、私は泊まれないと思ったのだが、違った。彼女が、受付に説明をして、私を泊まれるようにしてくれたらしい。なんとも嬉しいことだ。あとで、お礼をたくさんしないとな。

そして、ぴかぴかの鍵を手に、部屋へ行こうとしたときだった。宿屋に大勢の男が来たのは。

「センゴクはいるか！」

「頼む！ 来てくれ！ 魔物が大量に来たんだ！」

魔物？ なぜ？ この国には、結界が張られていないのか？ ずいぶん、無防備な国だな。あとで、書類にか、いや、私はもう、最高教主ではない（たぶん）だから、ほかの人に任せよう。

そして、彼女は、しばらく、目をつぶり、なにかを考えるようなそぶりを見せ、十秒ぐらいたったとき、彼女が目を開き、ため息混じりに、「わかった。案内してくれ」と男たちについていった。

あまりに、びっくりしたため、彼女の名前はセンゴクだということを一瞬忘れたが、すぐに、思い出し、私もセンゴクについていった。

「ピシャアアア！」

「グオオオオオ！」

「シャアアアア！」

……。なぜ、こうも、巨大な魔物ばかり、いるのかは、なぞだが。どれもこれも、Aランク以上の魔物だな。……私も倒せなくはないが、同時にかかられては勝てるかわからないな。なのに、センゴクは、腰に無防備にさらしている刀を鞘から抜き、剣の持ち方みたいに正面に構え、先ほど聞いた「一閃！」という、魔術の詠唱みたいな言葉を発し、そのまま、魔物に向かって、走り出した。その速度、残像が見えるほど。……おかしい。人間にあそこまでの速さはいくら修行してもできないはずだ。竜人ならありえないこともないが、彼らは【竜化】しないと、本来の力を出せない。

……センゴクは、【勇者の逸材】なのかもな。確信はないが。勇者なら、あれぐらいできてとうぜんだろう。もし、なんの力もない者があんなスピードで走ったり、切りつけたりしているのならば、”化け物”だな。

side out

第三十三話、長刀をもつ人間（後書き）

使い魔について。

使い魔とは、一般に、雑用や力発揮したり、主の目となるようになる生物のことで、使い魔をもつには、契約しなければいけない。また、位がたかい生物ほど、契約するのが難しいとされている。

使い魔が死ぬと、その主も死ぬので、注意が必要。

使い魔の元は、市場などに、飼育されていることが多く、自然界にもいるにはいるが、契約するのが難しい。なので、一般には、買うことがおおい。

また、使い魔契約のほかに、魔物と契約する邪道の方法があるが、これは、やると、最悪、死刑なので、あまり好まれていない。

さて、暑くなってきましたね。最近。作者も、節電のため、扇風機を横において、書いています。おそらく、今年は、熱中症で死ぬ人が多いでしょうね。皆さんも気をつけてください。こまめな水分を取って、この夏を乗り切ろう！

第三十四話、ギルド（前書き）

くあらずじく 結界を破り、侵入してきた魔物たち。それを撃退すべく、センゴクは、一人で魔物に挑んだ。そして、圧倒的な力で、魔物を瞬殺した。

第三十四話、ギルド

愕然^{がくぜん}という言葉しか浮かんでこない。魔物を一瞬で、切断し、そのまま、魔物の心臓を突き刺したのだ。すごいとしか言いようがない。やはり、センゴクは【勇者の逸材】だな。確信はないが。そして、返り血を浴びているセンゴクは、そんなことを気にした様子はなく、長刀についた血を布でふき取ったあと、私のほうを見て、その愕然としている顔に苦笑しつつ、私の前に歩いてきた。

――コツコツ、という、鉄の靴の音が聞こえる。これは、人間族の東方の国。【日本】という国特有の、“シェイダー”という靴だということ、資料で見た気がする。戦闘のため、改良された靴には、鉄のほかに、摩擦で熱をおこし、そのまま、火を生み出すことも可能だと、資料に乗っていた気がする。……おっと、脱線してしまった。気をつけねば。

そして、私の目の前に来た、センゴクは、私のはっ、となった顔を見て、すこし、含み笑いを浮かべた後、私の手を取り、そのまま、センゴクは、私の手を取りながら、どこかへ歩き出した。

？ マークを浮かべながら、しばらく歩いていた私とセンゴクは、もう、話題の的だった。

周りから聞こえるのは、「あれが、センゴクか」「SSSランクの傭兵……」「隣にいるのは、彼女かしら？」などという、ことだったが、センゴクは「いつものことだ、気にするな」と、最初であったところとは違い、私と似たしゃべり方をするので、かぶってるという、言葉を口にしようとしたが、やめた。

同類がいるのだからいいのではないか。これから、仲良くできそう
だ。

そして、周りのひそひそ話を聞きながら、私たちがついたのは、すごく大きい、建物の前だった。

「センゴク。ここはなんだ？」

「……知らないのか。まあ、教えてやる。ここはだな。」ギルド”という場所だ」

「！ ギルド！ センゴク！ 早くいこう！ 早く！」

前々から、ギルドには興味があつた。なぜなら、そこには、数々の魔物の図鑑や、いろんな、資料。さらに、魔物の標本があるのだ。これは、興味をそえられることだ。

急にテンションを上げた私のことを、数秒、目をぱちくりした後、
「ああ、いこう」と、返事を返したので、私のテンションはもう、最高潮に達していた。

そして、興奮が治まらないまま、”ギルド”に入り、まず、私が目にしたものは、”ブルードラゴン”という、上位に位置する生物の標本だった。

- - その、エメラルドのような、緑色の瞳に、サファイアに様な、青い体。そして、なにより、目を引かれたのが、その、手に持つている剣だった。- - ドラゴンは、通常、武器を持たない。だが、上位に位置するものなどは、武器を操ることができる。と、資料に書いてあった（たぶん）

「すごい！ すごいぞ！ センゴク！ ほら！ ほら！」

「落ち着け、周りに迷惑だろ」

「あ」

「ははは、姉ちゃん。”ギルド”は始めてか？ なら、そこにいるセンゴクに教えてもらいなよ」

私に話かけてきたのは、つるつるが目立つ、ハゲだった。なので、ハゲはスルーしつつ、私は。センゴクに”ギルド”について、聞い

た。ハゲが、無視されたので、切れてたが、気にしない。

- ギルドとは、依頼人^{クライアント}という、依頼を頼む人がクエストという、任務を貼ったり、”ギルド”から、魔物討伐などを貼ったりする掲示板があり、皆、そこに集まり、依頼を受け、報酬を受け取る場所なんだよ、と教えてくれたので、記憶の引き出しにしまいつつ、続きを聞いた。

ほかに、酒場や、武器屋、防具屋、アイテム屋などが管理しており、傭兵という、魔物討伐専門の役職に就ければ、ただで利用できるらしい（もちろん一部だけ）。そこまで、聞いたとき、ギルドの受付の奥から、いかにも偉そうな、服を着て、”ギルドマスター”という、ワッペンをつけた人が来たので、センゴクが「またあとで、説明する」といい、”ギルドマスター”とともに、奥に行ってしまった。

けれど、センゴクがいなくても、見学だけはできるので、私は、”ギルド”の本棚にある、魔物図鑑を見ることにした。（本棚の前に傭兵以外読むの禁止、と、注意書きが書かれていたが気にしない）

昆虫種、獣類種、鳥類種、海獣種、人型種、魚類種、液体種、植物種、恐竜種、と、ペラペラめくっていくうちに、私の好きなドラゴン種のページにたどり着いた。

- ドラゴン種は、非常に、温厚で、産卵期以外には、ほとんど被害を及ぼしません。なので、ドラゴン種は魔物ですが、神聖な生き物として登録してあります。ドラゴン種は、【竜人族】の生まれ変わりといわれていますが、本当は、魔族が生み出した魔物なのです。そこは要注意。

……なんだか、重要なことが書いてあるが、私が覚えていいんだろ
うか？ ……まあ、いいか、減るもんじゃないし。さて、”イエロ
ードラゴン”と、”ブラックドラゴン”は……。お、あったあった。
……ふむ、やはり、私が知っていることと同じことしか書いていな

いな。なにか、私の闇属性と雷属性の手掛かりがあるかもしれないのに……。まあ、いまは、闇属性と、反射魔術しか使えないから、官益ないだろうが。気にならないっていわれても、気になると答えるだろう。……さて、もうそろそろ、センゴクが帰ってくるだろう。椅子に座って待つとするか。

センゴク side

「やはり、生き残りはいませんでしたか」

「すまないのお。もうちょっと早ければ、助けれたかもしれんが」

駄目、か。……そうだと、うすうす、気づいていた。あの日、【魔獣】はすべて倒したが、悪魔だけは倒せなかった。転移術で逃げられた私以外は、殺されたであろう……。みんな。すまない。私ももうすぐ寿命だ。すぐそちらに行く。

「……まあ、全滅したとは限らん」

「！ まさか……。いや、ありえないことはない。だが、どうやって……」

そうか。【空間魔術】か。あれならば、わが種族に使えるものが、一人いたな。だが、なぜ、姿を表せない。我々は戦闘民族だ。だから、戦うということはしなければ、暴走し、体が暴走してしまう。あのときの私みたいに……。

「……あまり、自分を責めるでない。仕方なかったことなんじゃろ？」

「ええ、そうです」

「ならば、まず、仲間を集めて、君たちの生き残りを探せばいい」

仲間、か……。あの少女なら……。いや、危険にさらすわけにはいかない。ここはひとまず、傭兵団でも作るか否か……。だが、傭兵団を作ったとしても、皆、私の力を過信して、戦うということはないだろう。それでは、元も子もない。傭兵は戦うことが仕事なのだ。さぼるようでは、傭兵として生きていけない。……さて、どうしたものか……。

しばらく、考えたが、やはり、方法がなかった。”ギルドマスター”には悪いが、私一人で、探すことにしよう。それには、まず、こ

の、愛刀、村雨をもう少し、改良せねば。私が本気を出したら、一瞬で壊れてしまう。それだけは、避けねば。……防具も変えるか。この装備では、いざというとき、致命傷を負いかねない。オリハルコンの【アマリア】と、オリハルコンの防具をそろえねば。

だが、持ち金がもうない。オリハルコン一式装備を整えるには、最低でも、白金貨百枚（十億）が必要だ。それを手っ取り早く集めるには、SSSランクのクエストを五回ほど、やらねば。

さて、忙しくなるぞ。毎日、SSSを狩るんだ。いつ死ぬかわからない。準備を整えるか。

そして、”ギルドマスター”の部屋を後にし、椅子の上で、よだれを垂らして寝ている少女のところを向かった私は、少女の肩を揺らして、すこし乱暴だが、起こした。

「へ？ ……ああ、センゴクか。終わったのか？」

「ああ、終わった。で、君に伝えたいことがある。今日から、クエストに出かけるから、君とは今日でお別れだ。ギルドの説明は、マネージャーから説明を聞いてくれ」

私が表情を変えず、立ち去ろうとしていることを見ても、少女は、顔色一つ変えなかった。

なにか企んでいるようにも見えるが、邪魔はしないだろう。

さて、まずは、”デッドスカルネクロマンサー”から倒すか。確か、掲示板には、迷いの森の奥深くにいますという、張り紙があつたはずだ。

そして、少女が企み笑いをしているのを見据えながら、私は掲示板に向かって歩きだした。

掲示板から、張り紙を取り、場所だけを確認した後、受付に持っていき、受付印を押してもらった後、”ギルド”の出口から出た。

次は、【騎獣】だな。少々値が張るが、買えないことはない。一匹でいいだろう。操縦したことはあるから、操縦士はいらない。そして、”ギルドから少し離れたところの、騎獣屋に少々急ぎめで向かった。

「いらっしやーい。今日は何をお求めで？」

「騎獣を一頭頼む」

「後ろの姉ちゃんもそれでいいかい？」

！？　なんだと、私の背後に、気づかれないようきただと？　おかしいな。神経はいつも研ぎ澄ましているから、背後にだれか来たら、わかるはずなのだが。……よほどの達人か、仙人でない限り、私の後ろに立つことは不可能なはずだが、いったい……！　なぜ、この少女がいる。魔術か？　……私は使えないからじゃないが、おそらく、影をわたってきたのだろくな。危険だというのに。ついてくるつもりか？　……少し脅しをかけてみるか。

私は、騎獣が逃げるほどの、濃厚な殺気を込めて、少女を見た。だが、少女は真剣そのものの表情で、めげずに、私を見てきた。

「……それが、君の覚悟か……。いいだろう。命の保証はできないが、ついてきたまえ」

「！　ありがとう。死なないよう頑張る」

まあ、死なせないがな。命を懸けてでも、守って見せる。

今日はもう遅いため、騎獣を買った後、少女の防具や武器（何も持っていないかった）を買ったため、明日に備えて、眠ることにした。

s i d o u t

?????side

今日、【擬似エンシエント】が完成した。完成した瞬間、うれしい気持ちとともに、また、これが続くのか、という、悲しい気持ちもこみあげてきた。でも、これが、【魔女】の役目。だから、私は、これ続ける。いつか、だれかが、助けてくれるまで……。しばらく、悲しみに浸っていたが、早くしないと、リミットが過ぎてしまうので、私は、【擬似エンシエント】を私の体の中から、解き放ち、家の屋根を貫通し、空から、白い雨が降ってきた。……いつみてもキレイ。……ミコトと一緒に見たかったなあ。……でも、ミコトはもういない。でも、いつか、誰かが、私を救ってくれる。それまでは、ずっと魔物を消していこう。

そして、雨が止んだ瞬間、あふれていた魔物は消え、世界は、果てしない荒野になった。

そして、私も、倒れるように眠りににつき、意識を手放した。夢がハッピーエンドだということを願って。

第三十四話、ギルド（後書き）

こんにちは（こんばんは）作者のミーナです。え？ わかってるって？

いいじゃないですか、たまには。……はい、すいません。

さて、今回は、本編で出てきた騎獣について説明します。（ギルドは、また本編で出ると思います）では、どうぞ。

騎獣。それは、昔、とある騎士が乗っていたという獣のこと。現代になってからも受け継がれ、一般でも買えるような、騎獣となつてミルナスタに広まつた。

騎獣は、乗れる生物ならなんでも、騎獣にできることができるが、ユニコーンなど、神聖な生き物は、王族しか乗ることができない。騎獣は、一頭でも、乗れるが、より安定した旅を楽しむため、二頭かつて、さらに、馬車をかい、騎獣に走ってもらうというスタイルが今人気になっている。ちなみに、騎獣一頭の値段は、店にもよるが、銀貨十枚（一万円）から、金貨十枚（百万円）までとなっている。

さて、なぜか、主人公が空気になっているきがするけど、気にしません。

あ、ちゃんと、あとに、たくさん出てきますので心配しないでくださいね。

じゃあ、また会いましょう。

第三十五話、なぞの少年（前書き）

くあらずじく センゴクがギルドをでたあと、最高教主は、どうすればいいのかわからないでいた。だが、ある男の助言で、最高教主は、傭兵になることを決めた

第三十五話、なぞの少年

センゴク……。お前にはまだ、借りを返していない。なのに、お前は行ってしまった。

……私はこれから、どうすればいいのだ？ このまま、ミルネリア教に戻っても、また、前みたいなの、反応をされるだろう。……それはもういやだ。私は自由がほしい。何者にもじゃまされない自由が……。……旅に出ようか、それとも、このまま、ここで傭兵になるうか……。センゴク……。私はどうしたらいいのだ……

しばらく、考えていたが、何も浮かばないので、私は、もう、なにもする気が起きなかった。

そのときだった。先ほどのハゲが私に声をかけてきたのは。

「お嬢ちゃん、センゴクに会いたいなら、傭兵になって、傭兵団を作って、センゴクに会えばいい。

俺も一度、センゴクを傭兵団に誘おうとしたが、断られてな。だが、君なら、できるさ。センゴクは、君を気に入ってたみたいだし。俺が受付に行つとくから、君はあとで、本契約をすればいいよ」

……なんて優しいんだ。このハゲは。……ハゲというのも失礼にあたるな。これからは、男の中の男と呼ぶことにしよう。

「……わかった。すまないが、頼む。私は、センゴクを追う」
「おう、がんばれよ。嬢ちゃん」

本当にいいやつだな。お前は。ミルネリア教にも、こういうやつがいればいいのに……。まあ、私に優しく接してくれるのは、いたが、

あれも、私が二重人格になった時から、私を、罵倒してきた。
……いまは、そのことを考えないでおう。とにかく、セングクを
追わねば。

ギルドを出た私は、手っ取り早く、闇の魔術を使い、オーラが濃い、
影を探し、そこに、闇の魔術で、転移した。

「いらっしやーい。今日は何をお求めで？」

都合よく、私は、センゴクが、”騎獣”を買うところの時に来たよ
うだ。

「騎獣を一頭頼む」

「後ろの姉ちゃんもそれでいいかい？」

それを聞いたとたん、センゴクはびくつとなり、後ろを向き、信じ
られないものを見たような目で、私を見てきた。……なぜ、そこで
そんなにびくつりするのだ？ ……まあ、いきなり後ろに立たれた
ら、びくつりするのは当たり前だが、そんなに、びくつりするもの
なのか？ 影が後ろにあるのだから、それと、同じようにも思える
が……。違うのか？

そして、しばらくして、私は恐ろしいほどの殺気をセンゴクから感
じ取った。

怖い怖い怖い怖い怖い。でも、ここを乗り切らなければ、私はセン
ゴクについていけそうにない。

だから、我慢だ。……でも、敵意はない感じだな。瞳の奥からは、
優しい感じがする。

たぶん、私を試しているのだろう。そうでなければ、こんなにも優
しい目をするわけがない。

「……それが、君の覚悟か……。いいだろう。命の保証はできない
が、ついてきたまえ」

「！ ありがとう。死なないよう頑張る」

やった！ 認めた！ あのセンゴクが！ うれしい、本当にうれし
い。このうれしさを誰かに分け与えたいぐらいうれしい。これで、
センゴクとともに、旅？ ができる。

だが、すぐにはいかずに、私たちはまず、宿屋に泊り、明日に備

えることにした。

あさ目が覚めると、部屋（二人部屋）に、センゴクがいなかった。
ん？ どこに行ったんだ？ まさか、私をまたおいて、どこかに行
ったんじゃない……。焦りからか、私は、髪がぼさぼさなのにもかかわ
らず、宿屋を走り回った。そして、しばらく走っていると、センゴ
クのものと思われる服と、長刀が置いてある、部屋の前にたどり着
いた。息を整えつつ、私は、その扉を開け放った。

「あ……」

「……なんだ、君か。すまない、今は、行水の途中なんだ。用があるなら後にしてくれ」

ボタン

…… センゴクって、男だったのか……。確かに、男のような感じがしていたが、まさか男とは……。

そ、それに、お、男の裸を見てしまった。……きれいだったな。センゴク。女にも勝る白い肌が特徴だった。それに、後ろで結んでいた髪を、私みたいに、腰まであるスタイルになっていて、母様の面影が少しあった（髪の色は違うが）。本当に、女でも通用する用紙だな。

しばらく、行水と呼ばれる（日本の儀式か？）行為をしているセンゴクを待っていると、後ろから、肩をたたかれた。

「へ？」

「こんにちは。あなたが、センゴクさんの恋人ですね。すこしお話があります」

「え？ え？」

されるがまま、手を引っ張られ、隣の部屋に連れ込まれた私は、すこし不機嫌になりながらも、少年の顔を見た。

「実は、あなたにお伝えしておかなければと思ひまして」
「？」

その内容は、私が思うものより、重大なことだった。

センゴクの生まれは、人間族の国の東方にある、【日本】ということ

ころだそうだ。そして、【日本】に生まれたセンゴクには、ある力があつた。それは、【黒炎】と呼ばれる、古代【セントール人】が戦うときに使う、炎だそうだ。昔【セントール人】は、世界に確認されているだけでも、十人に満たなかつたらしい（今は、三人に満たないかもしれないらしい）古代から、【サーズ】（現代の石油）と呼ばれる、資源を守ってきた【セントール人】の家系に生まれたセンゴクは、皆から、期待され、そのまま、十年の時が過ぎた。だが、皆から期待されたセンゴクは、あるとき姿を消す。皆がセンゴクを忘れかけていたとき、突然、【セントール人】十人連れて【日本】に戻ってきたらしい。

そこで、疑問に思ったのだが、なぜ、この少年は、センゴクの過去を知っているのだろうか？
気になって、それを少年に聞いてみると、「今度説明します」と軽くあしらわれてしまった。

「で、その続きですが……。おっと、もう、センゴクさんが部屋から出てきたようですね。続きはまた今度。【星渡り】の時にでも説明いたします。では」

シュン！

……消えた。それも、気配を残さず。……センゴクは気づいているだろうか？ ……いや、行水に集中していただろうから、気づいていないか……。さて、このことは後にして、センゴクのもとに向かう。

ちょうど、あちらも着替え終わったらしく、私があると、「どこに
いったんだ？ 気配がなかったが」……へ？ 気配がない？ そ
んなはずはない。私はちゃんと気配を出していたはず。

……ああ、そうか、あの少年。風の魔術師か（髪と瞳が緑色だった
し）。なら、気配を消すことだってできるはずだ。センゴクもそれ
で気づいていないのか……。センゴクには、悪いが、さっきあった
ことは、しばらく秘密にしておこう。いつか、話す時が来たら話そ
う。

第三十五話、なぞの少年（後書き）

さて、今回は、日本で一般的に使っているお風呂についてです。

この世界に風呂という概念がいねんは存在しない。なぜならば、清めの水という、アイテム店で売られている白い液体を使い、汚れを落とすことができるためである。清めの水は、とある山の滝から流れている。清めの水の値段は、銅貨十枚（百円）と手ごろなので、一般でも買うことができる。

第三十六話、蘇るSSSランクの魔物（前書き）

くあらずじく SSSランクの魔物、デッドスカルネクロマンサー
を倒すべく、センゴクと、最高教主は、騎獣を操り、隣の町の近く
の洞窟に向かうが、そこには、すでに倒された魔物が存在していて
……

第三十六話、蘇るSSSランクの魔物

セングク side

なぜか、よそよそしい、彼女（名前は聞いていないな、そういえば）とともに、一頭の、騎獣、に乗り、隣町（ミットナーだったかな？）の近くの洞窟に向かう（彼女は手続きを済ませたようだ）のだが、なんせ、一頭しかないのだ、あまり、スピードが出ない。人間が走るスピードより少し早いスピードで、しばらく、道を走っていると、彼女がもぞもぞしはじめたので、「どうした？」と聞くと、「……我慢ができない」と返してきたので、私は、彼女が、トイレに行きたいのだと、気づき、いったん、騎獣を止め、彼女が近くの草むらに行き、用を足すのを待った。……終わったか。……それにしても、女は不便だな。トイレに時間がかかる。私もよく女に間違われるが、トイレには困らない。……私は男だからな。さて、彼女が後ろに乗ったことだし、出発するでしょう。

だが、今度は、私がトイレに行きたくなったので、彼女を道において、私は、近くの草むらで用を足すことにした。……やはり、男は楽だな。すぐに終わる。そういえば、昔は、今みたいに、トイレをするところがなかったな……。まあ、今、私は、昔のように用を足しているがな。さて、用を足し終わった私は、騎獣のもとに向かい、何か考えている彼女を見ながら、私も騎獣に乗り、手綱を引っ張った。「キヒーン」という騎獣の鳴き声とともに、走りだした。

……おかしい。魔物の気配がしない。なぜだ……。私は、気になりながら、前方にある洞窟をにらむ。
む、あそこに落ちている物体は……。……誰かが、先に、魔物を倒したのか。……いったい誰が。

「……………」

私が、洞窟を見つめたまま、何か考え込んでいるのを見たからだろう。後ろにいる彼女は、私の肩を時々揺らす。だが、集中して考えている私には、それが、気にならない。彼女には悪いが、少し考えさせてもらおう。

「おい、おいつたら……。おい！ センゴク！」

「なんだ？ 私は今少し集中している邪魔をしないでほしい」

それを言うと、洪々といった感じで、彼女は、おとなしくなった。
ふむ、聞きわがりがいいな。

いいことだ。

さて、考えを戻そう。SSSランクの魔物を、貼り紙を見たあと（今日貼られたと言っていた）私より早く倒した。……。あの町に、SSランクの傭兵は、私しかいなかったはずだ。……。だとしたら、私より下のランクのものが倒したことになる。……。いったい誰が。

「センゴク、早くしろー」

「あ、ああ、そうだな。行くでしょう」

まだ、彼女は、魔物が死んでいることに気づいていない。だとしたら、このまま行くべきか、それとも、引き返すか……。前者を選ぶとしよう。彼女はまだ、魔物のことをよく知らないだろう。

ならば、彼女には、傭兵には、不具合などが生じることを教えてあげなければな。

そして、そのまま、騎獣を操り、私たちは、洞窟へと向かった。

「なんだ、これは……」それが、洞窟についた彼女の第一声だった。
……まあ、そう言ってしまうのは仕方ない。私だって、先に魔物が倒されていることなど初めてだからな。

「なぜ、魔物が死んでいるのだセンゴク」

「……先に誰かが倒したんだろうな。……この傷から見ると、剣で殺されたようだ。それも、達人級の技で」

「そうか……」と、彼女は、しばらく魔物を見ながら、黙り込んでしまった。さて、証明部位は残っているから、持ち帰りたいところだが、あいにく私は、そのようなこと、する気がない。

なぜなら、他人が殺した魔物から証明部位を取ると、私の耳についているピアス型の受信機が、ギルドにそのことを知らせてしまう。そのようなことがギルドに伝わると、傭兵の職業をはく奪されるのはもちろん、罰則金として、金貨十枚（百万円）を支払うか、牢屋に入れられてしまう。そんな愚かなことはしない。私はSSSランクの傭兵。規律をきちんと守る。だから、魔物を触らないでくれ。

「ふむふむ、これが魔物か。ずいぶん硬いんだな。鉄みたいだ」

「ああ！ やめろ！ 人が殺した魔物に触るな！」

「わ、わかったから。そんなに、私の腕をつかむな。……ん？ 人が殺した魔物といったな。なぜ、触ってはいけないのだ？」

「……魔物は通常。殺されてから二十四時間以内に灰となって消える。だが、その消えない時間に触り続けると、触ったものが”魔物化”してしまう。だから、触ってはいけないのだ」と説明すると、真剣に聞いて、わかってくれたのか、魔物から離れて、おびえた小動物のように私のもとに来た。

……そう、怯えなくてもいい。一分間触らなければ、”魔物化”することはない。と、説明してやると、落ち着いたのか、彼女は、私のもとから離れ、魔物をにらみ始めた。……今度は睨んでどうするつもりだ？ と聞き出したい衝動に駆られたが、やめることにした。

「なんか、拍子抜けだ。せっかく魔物と戦えると思ったのに。はあ」

「そう、落ち込むな。また、今度戦えばいい。だから、今回はかえるぞ」ちよつと待て。あの魔物。立ち上がったぞ。どういうことだ？」

「へ？」

変な声が出てしまったのは仕方ない。死んだ魔物が立つなどという不可解なことはありえないのだから。だが、私が死んでいた魔物のところを見ると、そこには、ゆらゆらと、立ち上がっている”デスドスカルネクロマンサー”の姿があった。半信半疑で見てみたが、どうやら本当に立ち上がっている。

……おかしい。魔物が生き返るなど聞いたことがない。……なぜだ。

「センゴク！ 危ない！」

「！？ 一刀抜閃！」

ザシュ！　ズシャアアア！

反射的に、腰にぶら下げている刀を抜き放ったが、どうやら、正しかったらしい。

- 襲いかかってきた”デッドスカルネクロマンサー”の体には、私の刀の傷ができていたが、倒れたと思った瞬間、また、ゆらゆらと立ち上がり、近くにいた彼女に襲いかかった。

「！？　ブラッディサーベル！」

ザシュウウウ！

- 彼女の爪が伸び、”デッドスカルネクロマンサー”を突き刺したかと思った瞬間、”デッドスカルネクロマンサー”はその鋭利な爪をすんでのところで止めていた。

「っ。　離せ、このっ」

「だめだ！　そいつの体に触るな！」

「え？」

ズシャアアアア！

しまった。私のミスだ。こいつの、特性をもう少し早く思い出していれば……。

「せ、センゴク。助けてくれ」

彼女は、”デッドスカルネクロマンサー”の”特性、”捕縛”により、体の中に取り込まれてしまった。

……SSSランクの魔物には、みな、”特性”と呼ばれる力がある。これは、体に触ることによって発動する。だから、武器などを使わないと、”特性”が発動してしまう。もう少し早く気づいていれば、こんなことにならなかったのに……。声だけは聞こえるので、彼女の様子はわかる。……リミットは、三分といったところか。……待っていてくれ。今助ける。

第三十六話、蘇るSSSランクの魔物（後書き）

さて、今回は、トイレについてです。日本ではごく一般にあるトイレ。

実は、ミルナスタにもトイレがあります（三角形の小さな建物）。ですが、化学が発展していないこの世界では、水を流すということができません。ですが、トイレにおいてある水の魔術石を砕くことで流すことができます。紙は貴重なため、メーク（動物のフンの使った紙）を使います。このトイレは、全世界に設置されています。

第三十七話、黒炎（前書き）

くあらずじく　蘇ったSSSランクの魔物の特性で体内にとらわれた最高教主を助けるべく、センゴクは刀を振るい、助けようとしたのだが……

第三十七話、黒炎

センゴク side

「二刀八閃！」

鞘から抜刀した刀で、目にもとまらぬ速さで切りつけたあと、そのまま、八回、切り付け、”デッドスカルネクロマンサー”を刀の腹で吹き飛ばし、距離を取った私は、そのまま、三閃を繰り出した。しかし、何事もなかったかのように立ち上がった”デッドスカルネクロマンサー”を見て、ため息をつきつつ、私は次の行動を考えた。もはや、刀で倒せる生物の域を超えている。こいつは、倒したことがないが、まさか、ここまで強かったとは……。不覚。

声も出さずに、ゆらゆらと、こちらに向かってくる”デッドスカルネクルマンサー”に、効かぬとわかっていても、残撃を飛ばした私は、タイムリミットがもう残り少ないということに気が付いた（彼女の生命反応が弱まっている）。

急がねば。……仕方ない。この力は使いたくなかったのだが、仕方あるまい。【セントール人】の力を今ここに発動する。

「ふっ。は、あ、あ、あ、【黒炎】！」

ブオオオオオオオオオ！！

私の内から出た黒い炎により、体は包まれ、数秒もしないうちに、私の体には、燃え盛る黒い炎が纏わりついた。

……この力は、誰にでも勝ててしまう。だから、これまでつかってこなかった。……だが、もはや、そんなことを思っている暇はない。早く、彼女を助けねば。

まず、私は、自らの体にまわりついている【黒炎】をすこし、刀に移した。

すると、銀色の刀は、漆黒に染まり、その刃には、黒い波紋が浮かび上がった。

……裏村雨、か。……あまり使いたくはないのだがな。これは、切ったものを瞬時に燃やし尽くしてしまう、“妖刀”のようなものだ。……やはり妖気が纏わりついているな。気に食わない。

私の村雨がこんな風になるのは。……だが、今は緊急時、くどいようだが、やるしかない。

「……、裏村雨流、一の型。黒点晴！」

本来は、刀を素早く振動させることで、風を起こし、小さな竜巻を起こす技なのだが、裏村雨流だと、全く違う技になる。刀を上下に振ることで、風を起こすまでは似ているが、次が違う。

風を、操り、鎌鼬かまいたちのように、敵にぶつける。当たったら最後、全身の肉が切り刻まれ、骨も砕かれる。

鎌鼬を受けた”デッドスカルネクロマンサー”は、肉がはがれ、中にある骨を粉々に砕き、そのまま、倒れこみ、中にいる彼女を出した。

私は、気絶している彼女を素早く背中に乗せ、また生き返りそうな”デッドスカルネクロマンサー”を見据えながら、騎獣に乗り、そのまま、洞窟を後にした。もちろん、【黒炎】を消して。

村に戻ったのはいいが、彼女はまだ、気絶しているので、ギルドに行くのをあきらめ、とりあえず、宿屋で休むことにした。

「ふう。ここはやはり落ち着く。何というか、安心できる」

このまま、ここで、ずっと暮らしてみたいものだ。……だが、それはできない。私は、同胞を探さねばならないのだ。【あのときの約束】に誓って。

しばらく、じっとしていたが、つまらなくなったので、私は、外に出ることにした。

「やはり、活気がいいな。この村は」

店の店員の呼び込みや、酒場から聞こえる、うるさい声。どれも、楽しそうに聞こえる。

……ふふ。いいな。やはり。平和というものは。私は戦争に参加したことがあるが、あれは地獄だった。人が死んでも、お構いなしに続く戦争。今は、冷戦状態だが、いつ、始まるかわからない。

そのとき、私はまた、戦争に参加するのだろうか？ ……いや、いまは考えないでおこう。

今は、平和を満喫しなければな。

しばらく村をぶらぶら歩いていると、知らない道に来てしまっていた。おかしいな。確かにふつうの道を歩いていたはずなのだが。…

…まあ、たまにはいいか。知らない道を歩くというのも。

「ん？ あれは……。店か？」

前方に小さな小さな店があったので、私は気になり入ることにした。

からんからん、という今は珍しい、古風な音が鳴るベルを気にせず、中を見渡すと、刀やら剣やら、槍、などと、いろんな武器があるということに気が付いた。さらには、防具まである。

……武器と防具を扱っている店など聞いたことがない。なのに、この店は、二つそろっている。

……珍しいな。少し、見てみるとするか。

「ほう。私の持っている刀に似ているな、この刀」

「そりゃあ、そうじゃろう。この刀は、お前さんが持っている刀を作った職人の物じゃからな」

「！？」

気配を断ち、私の後ろに立つとは……。このご老人できる。思わず身構えてしまった私を見て、ご老人は、「ほっほっほ」と笑いながら、私の腰にある刀を抜いた。

「ふむ……。こりゃあ、いかん。刀が溶けているの。……おぬし、マグマにでも着けたか？」

「いや。それは……」

【黒炎】の影響だ、と、いうわけにもいかず、黙り込んでしまった私は、ご老人が持っている私の刀の先端を見た。……確かに溶けているな。今まで気づかなかった。……ご老人は、職人なのだろうか？

「ほっほっほ。なあに、儼に任せてくれれば、この刀を直してやるぞい。あと、【アマリア】もつけてやろう」

「……もちろん金かかるのだろう？」

あたりまえのことだ。金を払わずに、直してもらえるはずがない。どんな善人だったとしてもだ。

だが、このご老人は違った。私が道具袋から金を取り出そうとしたとき「いや、金はいらん。ただし、この店の常連となってもらう」と、そんなことを言ってきた。私は、間抜けな顔をしているだろう。この世に、金を払わずに買える場所があつたことに驚いているから。

そして、ご老人の言うとおり、私は、金を支払わずに、刀を強化してもらつた（ご老人にとつて、直すのは簡単なようだ）

三時間ぐらいして（彼女は起きているだろうか？）ご老人が奥から帰ってきたので、私は、仮眠をやめ（立って寝ていた）ご老人に「直ったか？」と聞いた。それを聞いたご老人は、にやりと笑い、「直ったぞい」と私に返してきた。

その手に握られている村雨をご老人は私に見せてきた。

- 前はなかつた穴が柄つかにできており、そこには、黒色の球体が埋め込まれていた。

……あれが【アマリア】か。ずいぶんと、小さいのだな。

だが、性能は十分だと、ご老人が言うので、私は、納得し、村雨を握ってみた。

前と同じ、少し硬めの柄。【アマリア】がある分、少し握りずらいが、問題ない。振ってみると、前と同じ音がしたので、切れ味は変わってないようだ。

「大丈夫じゃ。前と同じ刀だからのう」

「その通りのようだ。礼を言う。ありがとう」

「いやいや、いいんじゃないよ。おぬしが最初の常連じゃ。例などいら

ん

そのあと、少し雑談したあと、私は、彼女のことが気になったので、戻ることにした。

side out

最高教主 side

なぜ、ここに寝ているのかわからない。それ以前に、SSSランクの魔物と戦った記憶がない。

……センゴクはどこだ？ また、私を置いて行ったのか？ ……や

だ。一人は嫌だ。

また、あの時のことを思い出してしまう。もう、たくさんだ。もう、思い出したくない。

だから、一人にしないでくれ。センゴク……。早く戻ってきてくれ。

だが、待っても待っても、センゴクは帰ってこなかった。一日が経過しても……

s i d e o u t

第三十七話、黒炎（後書き）

今回は……。本編で気になることなどは出てきてないので、あとがきはなしですねW 次回また会いましょう。

第三十八話、獣人の少女（前書き）

くあらずじく　ミルを背負い、二人を探すために、果てしない旅を
始めたミコト。だが、獣人族の国の手前で襲われて……

第三十八話、獣人の少女

「あつー。暑い暑い暑い！　なんだこの暑さは！　馬鹿じゃねえのか太陽！　……独り言って、むなしいな。ははは。……しっかし暑い。ミルを背負っているから余計暑いんだろうけど、全部太陽が悪い。太陽なんてなければいいのに……。あ、太陽がないと、植物が育たないか。はは、は……」

一人って、こんなにもさみしいものなのか。……話し相手がほしい。……さて、もう少しでどこかに着くだろう（たぶん）。そろそろ、走るか。

だが、何時間走っても、見えるのは果てしない道。さらに走っても、見えるのは果てしない道。

……道間違えたか？　昔から、”シュガット村”の近くの森でいつも迷うから、方向音痴とか言われてたが、まさか、この年になって、迷子とは……。うつつ。俺が悪いんじゃない。道が悪いんだ。そう、道が……。まあ、責任を押し付けても何の解決にならないし、右に行ってみるか。

うーん。右は、変な森への道だったから、左かな？

あつれえ？　左は洞窟への道だったぞあ。おつかしいなあ。三分の一の確率でどこかに着くのに、三分の二はずした。……俺って、運が悪いな。そりゃあ、弓を百発放つても、的の真ん中に当たらないし、ドン肉についていた虫に当たったりしたことはあつたが、まさか、ここまで、運がないとは……。

不幸だ。……さて、残す道は、前のみ。後ろには行かない。（戻りたくないし）

しばらく前の道を歩いていると、なにか、遠くに建物が密集している場所が見えてきた。

やった。やったぞ。町だ。町が見える！ やっほーい。これは急がないと失礼だろう。

「ミル。もうすこしだからな。もう少しで、町に着ける。そしたら、ふかふかのベッドで寝ような」

「……………」

やっぱり起きてない、か。仕方ないか。脳にダメージがあるんだ。そうやすやすと起きれるわけじゃないか。

さて、ミルを持ち直したところで、出発だ！ ……！？ 上！

ドオオオオオン！

えー。なんですか？ 新手の盗賊ですか？ ……邪魔すんな！ 俺は早く寝たいんだ！

突如、上から降ってきた巨漢の男は、攻撃が外れたことがよほど悔しかったのか、その闘志に満ちた目で俺を見てきた。怖いデスネー
あなた、きちんと教育受けました？

「よく避けたな。この俺の攻撃を」

ナニカイツテルヨコノヒト。怖いよ……。さて、遊ぶのはもうやめよう。真剣にならないとな。

あの攻撃から見ると、こいつは、格闘家か……。相性が悪いな。

- 魔術師は、魔術を使う際、詠唱が必要だ。だから、それを中断させてしまったら元も子もない。

……無詠唱魔術は使えるけど、あれは、詠唱ありに比べて、威力が

低いからな！

こんな奴に効かないだろう。……だとしたら、近接戦闘か……。だけど、俺はあんまり近接戦闘が得意じゃない。魔術ばかり鍛えてたからな。戦闘技術は磨いてない。

「どうした？ かかってこいよ」

「……ああ、わかってるさ。氷よ！」

いつも普段から魔物に使っている無詠唱魔術なので、威力はわかってる。せいぜい、小動物を倒すことぐらいしかできない。

コツン、と巨漢の男にあたった俺の魔術は、その圧倒的な闘気から逃げるかのように、地面に落ちた後、消え去った。

……やべ。逃げよう。相性が悪い。勝てる気がしない。ここで負けるなんていやだね。

それにミルを背負っては、戦えない。

「……逃げるのか？ ……ふざけるな！ 戦え！ お前を倒して、捕獲した後、デュリアス様に褒めてもらうんだ！ だから逃がさん！」

ふざけるな！ といいたいののはこっちだ。まったく。突然襲ってきたくせに、なんてやつだ。

俺は、巨漢の男がこっちに走ってくるのを確認しつつ、ミルを背負って、空气中にダイヤモンドダストを作り（もちろん、詠唱した）、それに乗って（案外できるもんだ。初めてなのに）、奴から逃げた。

「逃がすかああああ！」

「おいおい、うそだろ。なんてジャンプ力だ「捕えた！」っ！？」

離せ、この！」

しまった。捕まった時のことを考えてなかった。……落ちる、落ちる！

「がはっ」

とつさに、ミルを守るように背を地面に向けてよかった。ミルは無事だ。

……あんのやろう。たたき落としゃがって。ぶつとばしてやる！
といたいたいところだが、俺はあいつに勝てない。……ダスティスなら勝てるかもしれないが、あいにく、いま、あいつは精神世界で寝てる。起こしてまで頼む必要はないと思う。……でも頼まなきゃ、やられるな。

……仕方ない。起こすか。

だが、その必要はないとばかりに、大男は突然、吹き飛んだ。

「は？」

「大丈夫？　なんか、あいつに襲われてたけど。……あのやろう。
健気な乙女けなけに何をさらすか。死んで償え！　火劉穿かりゆうせん！」

え、ええ？　なにこの子。突然現れたかと思えば、大男に向かって、火を放ったぞ。

……おかしい。魔術の発動を感知しなかった。どうなってんだ？

- - あの子が放った火は、地面をはいずりながら、大男に突っ込み爆発した。

「……………」

「あれ？　どうしたの？　どこか痛いのか？」

……魔術ではない。だとしたら、【神術】？ ……いや、【神術】は神しか使えないはずだ。
だとしたらなんだ？

「おーい。おーいったらー。おーい」

「へ？」

「あ、気づいた」

さつきから気になってたんだが、この子、耳と尻尾がある。 ……獣人か。案外かわいいんだな。

……触りたい。その耳と尻尾を触りたい。うう、さわらせてえけど、触ったらなんか蹴られそうだし、やめとくか。

「……大丈夫、安心して。私があなただを守るから」

なんか、勘違いしてないか？ この子。さつき、健気な乙女とか言ってたきがするし。

まじで、勘違いされてるような気が……。しばらく見詰めあうこと数分。動き出したのは、俺でも獣人の子でもなく、倒れたと思われた巨漢の男だった。

「てめえらああああ！ ゆるさん、ゆるさんぞおおお！」

どずどず、と大きな足音を立てて、走ってくる巨漢の男を見て、獣人の子は、ため息をつき、なにかの構えを取った後、そのまま巨漢の男に突っ込んだ。

だめだ！ いくな！ という声を出そうとした俺だが、その言葉が出ず、のどに詰まらせた後、あわてて、前を向いた。すごい。互角以上にあの子がたたかってる。あ、男を足払いで倒した。すげえ。かかと落としを食らわせた。

「ふん。でかいだけねあんた」

「ぐ、あ。く、そ、おおお「黙りなさい」ぎびや！」

うわー、首が変な方向に曲がってる。痛そー。俺だったら、死んでるな。

そのあとは、獣人の子が、男を、警備員に渡し、解決した。あー、なんか、俺活躍できなかった気がする。……まあ、助かったということでもいいか。ミルも無事だし。さあて、旅の続きをするか。……だからさ、ついてこないでくれるかな。獣人の子。

獣人の少女 side

あれから、私は、助けた女の子についていつてる。だって、危ないじゃない。女のこひとり、あ、二人か、で旅をするのは。私が守らなきゃ。お父様にも困っている人がいたら助けなさいって言ってたし。……それにしても、あの子が背負ってる子、”どこかで見た” ような……。まあ、覚えてないということは大事なことじゃないということね。

「ねえ。君の名前はなんて言うの？」

「……ミコト」

少し嫌がっているような気もするけど、気のせいね。うん、気のせい。

「ミコトかあ。いい名前だね。あ、私はメルファっていうの。気軽にメルって呼んでね」

「……勝手についてきたくせに」

「え？　なんか言った？」

「いや、なんでもない」

なんか、気になるけど。まあいいわ。さて、楽しい旅になりそうね。うふふ。

でも、気になることが一つある。なんか、この子には、嫌な感じといい感じがする。これがなんなのかは、わからないけどいつかわかる時が来ると思う。それまでは、この子についていこう。

さて、速足で私から逃げてるあの子を追いかけないと。

side out

????? side

「ここもだめね。肝心なことが書いてない」

ここは、とある王立図書館。でも、”魔獣”についてのことの重要なことが書いていない。

……ここもダメだとすると、次は、巨人族の国か……。でもあそこには、横暴な巨人族が住んでるのよねえ。まあ、避けながら行けばいいか。さあて、ここにはもう用がないわね。出ますとしますか。

side out

第三十八話、獣人の少女（後書き）

今回から、魔物について、一つずつ、載せていきたいと思います。さて、今回は、ずいぶん前に出た、ギリードウについてです。

名前、ギリードウ

性別、オス、メス。

種類、昆虫種

ランク、E

説明

手には鎌を持ち、頭には触角があり、背中には透明な羽がある。全体的に、緑色をしているため、昆虫種として見分けやすい。空中に飛んでいることが多く、初心者森（各国に一つある）によく出現することが多いが、まれに、メスを追いかけて、遠くに行くこともある。メスが少なかったため、オスは、メスを探すため、協力して、探す、見つけた後は、殺し合いでメスを誰が取るか決める。ランクはEのため、傭兵でないと、倒すことは難しい。

第三十九話、キリ（前書き）

くあらずじく　なぜか付いてくるメルファのことを無視して、獣人族の国、キリまで来たミコト。だが、お腹が減っても、お金がないわけで……

第三十九話、キリ

はあ。なんなんだこの子は。やたらと、元気だし、俺に何回も話しかけてくるし。それに、俺の髪をいじるし。……うざい。でも、そんなことを助けてもらった俺の口からは言えないし。

はあ。ずっとついてくるつもりなのか？ ……仲間なんていらなのに。

「ねえ、ミコトは何歳なの？」

「……十五」

質問されたら答えないといけない、俺のルールにより、年を答えてしまったが、これでいいのか？

誰か教えてくれ。

俺が答えたあと、知りたくもないのに、この子の年齢を聞かされた（……メルファって呼んだほうがいいか）メルファは俺より一つ上の、十六歳らしい。なんでも、獣人族の生活に飽きて、旅をしてるらしい。その途中で、見つけたのが、俺と巨漢の男なわけで、正義感からか、わからないが、助けようと思っただけ。……お礼ぐらいは言わないとな。でも、なんかむず痒いし、もう少し後でいいか。

「ねえ、ミコトって、種族はなあに？」

「わかるだろう。人間だ」

「一樣、聞いてみたんだけど、やっぱりそうよね」 あははは」

メルファのペースにはついていけない気がする。俺もテンションは高めな方だけど、他人とは別だ。

しばらく、一方的に喋りかけてくるメルファをウザイと思いながら、歩き続けていくと、すぐに、獣人の国、”キリ”が見えてきた。

「え？ ミコト。」キリ」に行くの？ ……まあ、いいわ。私が案内してあげる」

ない胸を張られてもなあ。……まあ、案内してくれるなら、あおれはそれで助からから案内してもらうか。

「たのむ」と言い、メルファに先頭に歩いてもらって、獣人族の国^{キリ}に入ると、まず目に入ったのが、少し向こうにある、でかい太鼓だった。……祭りでもやってるのか？

周りを見ると、獣人や人間やらが、どんちゃんさわぎしていたり、店の店員が客を呼び込んだりと、まさに祭りそのものだった。

メルファに、何かやってるのか？ と聞くと、「今日は、火廻り（夏）の最初の日だから祭りをやってるのよ」と、それがあたりまえみたいに、答えてくれた。

ふーん。火廻りか。もう、七月に入ったんだなあ。あ、だから暑いのか。なるほど。

森にいたときは木々や、葉で、太陽が隠れてたから、氷廻り（冬）以外は、あんまりわからなかったな。外に出たから、季節を感じてるわけか。

「ミコト？ 行くわよ」

「へ？ ……ああ」

さて、ここに二人がいらないか、さがすか。もちろん、背中であまりつづけているミルも一緒に。

メルファ side

懐かしいわね。“キリ”から旅立って、もう二年かあ。長かったよ
うな短かったような。

……でもまあ。悪くはなかったわね。いろいろと学んだし、きよろ
きよろして何かを探しているミコトにも会えたし。うーん。無責任
な大人がいないこの瞬間は、さいこー。自由ってさいこー。

……んう。でも“キリ”に來てもやることないし、当分は、ミコト
に付いていこうかな。

そうすれば、楽しいこともあるだろうし。うふふ。

「ここには……。いない。あっちにも……。いない。むう。どこか
の宿屋にいるのか？ ……行ってみるか」

ちよつとー私のことを忘れてませんか？　もしもーし。……あーあ、行っちゃったよ。

仕方ないわね、もう。子供なんだから。……少しだけ、親の気持ち
が分かった気がする。

こんなに気持ちいい感じのことを、お父様やお母様も思っていたの
かな？　……なんだか、会いたくなって来ちゃった。ミコトには、
悪いけど、ここでお別れね。結構楽しかったわ。いつかまた逢いま
しょう。

そして、ミコトから背を向け（そういえば、あの女の子。まだ一度
も起きてないわね）私の家へと向かった。

ん。変わってないわね。二年前と変わらない。まあ、それが一番だろうけどね。

さて、家に入ったけど、問題が発生した。誰もいない。……どこ行ったのかしら？ 祭りにでもsなんかしてるのかな？ ……なら、終わるまで、ここで休んでよーっと。

はわあ。ふかふかー。やっぱり本当のベッドはいいわー。宿屋のベッドは硬いものしかなかったし。ふわーとした感触を、ずっと味わっていたかったけど、なんだか眠たくなってきたので、ゆっくりと目を閉じ、眠ることにした。

……これは、夢？ ……私が生まれてきたときのことだ。昔のことはよく覚えてないから、見るのもいいかも。

「おめでとうございます。立派な女の子ですよ」

「！ あなた！」

「うん。ミーナさん」

「……やっただー！」「……」

……ハイタッチするのはわかるけど、そのまま、キスって……。どこまで、愛し合っているのやら。私には到底できないわね。あれ？ おかしいな。私が泣いていない。赤ちゃんはなくのが普通なのに。看護師？ も気づいたのか、顔を悪くし、お母様とお父様にそれを知らせた。

すると、いままで、笑顔だった二人は、それを聞いたとたん、この世の終わりにみたいな顔になり、看護師にすぎりよった。

「どうにかできないのか？」

「頼みます。命でも捧げますから。どうか、メルファを助けて！」

「……方法はひとつだけあります」

そのあとの看護婦の続きはこうだった。「水の上級魔術師様に頼めば、なんとか」と。

……そんなに私のことを。大事にしてくれるなんて……。嬉しい。そのあと、お父様とお母様は、お金ならいくらでもある。だから頼む、と何度も頼み込んだ。すると、看護婦は、「わかりました」とそれを言い残して、どこかへ行ってしまった。

「大丈夫だろうか？」

「大丈夫。魔術師様がなんとかしてくれるはずだわ」

けれど、看護婦が戻ったときには、すでに、私は、息もしていなかった。それを見た看護婦は、「もうおしまいです」と言い、悲しんだ。お父様とお母様も、悲しみ、私の手を握りながら、大粒の涙を流した。だが、私は死んだわけではなかったのだ。このあと、魔術師が私の家にたどり着き、私を見ると、「大丈夫。生きているよ」と言い。お父様とお母様を絶望の淵から救った。

どうやら、私は、生まれつきの病氣らしい。それも、赤ん坊の時だけに発病する、珍しい病。

魔術師が言うには、【泣權症】（なごんしょう）という病氣だそう。治す方法は、水の魔術しかないらしい。もしこれを直さないと、二十四時間以内に、死に至るらしい。

え？ もし、魔術師が居なかったら、私は死んでたということ？

…… お父様、お母様。

ありがとう。魔術師が私の手を握り、なにかつぶやいたあと、私の体は徐々に青く光っていき、最後には、まばゆい光が当たりを包み込み、皆の目をつぶらせた。

「おぎゃあ。おぎゃあ」

「！メル」

「よかった。泣いてくれた。ははっ、やったぞおお！」

こうして、私は生まれたのね……。あとで、お父様とお母様にお礼を言わないと。

ん、なんか、周りが騒がしい。なんだろう？

目を開けると、誰かと目があつた。なにか見たことがあるような……。

「おきた？ メル」

「お母様……。お久しぶりです」

お母様帰ってきたのね。……だとすると、お父様も……。あ、いた。階段のところで、誰かと話してる。これは、立ち上がらないと。

「メル？ どうしたの？ せっかく久しぶりに会えたんだから、もう少し、喋りましようよ。ねえ、あなた」

「え？ んぐ！？」

なに？　なによ、どうなっているのよ。たしかにお父様は、階段のところにいたのになんで、後ろにいるのよ。……そんなことより、なんで、口を押さえるのよ！　ねえ！

だけど、私の抵抗むなく、本来、気弱なはずのお父様によって、口を長くふさがれたので、息ができず、意識を手放してしまった。

s i d e o u t

第三十九話、キリ（後書き）

さて、今回は、本編ででてきた季節のことと、魔物を一種類載せます。

あ、前説明してませんでしたけど、魔物の種類は均等にやっていきます。

まずは昆虫種からです。

この世界では、日本と同じく季節がある。名前は違えど、名前が違っただけで日本と同じです。下に表記します。

春⇨風廻り

夏⇨火廻り

秋⇨土廻り

冬⇨氷廻り

です。

次は魔物について

名前、ギリードウクイーン

種類、昆虫種

性別、メス

ランク、B

説明。

ギリドゥたちを生んだ母親的な存在。だが、家族という概念はなく、平気で、見捨てることが多い。ギリドゥたちが多く殺されると、反応し、巢から出て、殺した人を殺すとされている。容姿はギリドゥたちと変わらないが、大きさだけが桁違いに大きい。（ギリドゥたちの四倍）

第四十話、奴隸（前書き）

くあらずじく　メルファが連れ去られたことを知らない、ミコトは、ミルを背負いながら、未だに、二人を探していた。

第四十話、奴隸

ああ、くそ！　いない、いない！　なんで居ないんだ！　……まあ、これは、俺の気持ち、そとにだしたことだが、本当に声に出して叫びたい。ゆるされるなら、裏道ではなく、本通りで叫びたい。……叫んでも、二人が見つかるわけでもないし、ミルも起きることもない。……わかってる。

、そう思わずにはられないだろ？　……さて、裏通りに来たのはいいが、ここにずっといるのもなあ。……ほら、来たよ、破落戸共くわくちどもが。……はあ。仕事でも探して、金でも貯めろよ。一文無しの俺に何かこようですか？

「へへっ、上玉が二人も」

「どしたの？　迷ったの？　なら、俺たちにその胸を揉ませてくれれば、案内してあげらったくぐえ」

本当に、働けよお前たち。なんで、男を誘うんだか。……ゲイか？　……せめて、百合にしとけよ。あ、百合は、女どうしか、ははは、これは失敬失敬。

顎を殴られた破落戸は、そのまま、中に少し浮き（すごいな。そんなに飛べるのか）後ろにいた、リーダー格みたいな、奴にぶつかり、気絶した。まあ、いきなりだしな。無理もない。

当然、仲間をやられた、破落戸どもは、怒り狂うわけで。奇声をあげながら、突っ込んでくる、破落戸たちを見て、俺は、ため息をつき、前方に、氷の盾を、密かに生みだし（最近知ったことだが、詠唱は、事前にやっておけば、任意の時間帯にそれを発動できる。破落戸にあつたとき、既に詠唱してたので、いま、発動した。これを人間族の間で、事前詠唱ことまひりうしやうという）前方に張った。当然、盾に阻まれ、ぶつかるわけで……。

「いってえええええ！」

「頭かしらー なんか、ぶつかるんですけどぉー」

「でも、これ、触ると、案外胸の感触に近いような」

逆効果だったか？ 喜ばしてどうすんだか俺。……さて、俺を襲った償いを支払わせてやる。

くくく、まずは、手を切り落とし、足を折り、最後に、耳と目を潰す。くくく、楽しい楽しい、狩りの始まりだ。くっくっく。

「もう、もう、やめてくれ。お願いだから、これ以上、仲間を痛め

つけるのは、やめてくれ」

「はあ？ やだね。俺はまだ、満足していない。次は、お前だ」
「ひっ！？」

う、ぐ。なん、だ、どうしたんだ俺。やめろ、殺すな。やめろ。…
…あ、耳を削ぎ落とそうと、刀を取り出した。…やめろ！ 殺すな！ やめろおおおおおおおおおおおお！！

「ぐつ、まだ、支配権はあいつにあるのか。くくく、だが、次はない。次は、俺が支配権を握る。
くくく、待っている。ミコト」

支配権？ なんだそれ？ ……ぐ！？ 右目が、熱い。焼けるように熱い。なんだこれは？
前みた夢のときと同じような痛みだ。くつ。痛い、焼け、る。ぐああああ！

「はあ、はあ。くつ、なんだったんだ。さっきのは。ん？ 血？
右目から流れている血を、手でさわり、本当に俺のかどうか確かめる。…俺の、だな。それも右目からあふれるみたいに出てくる。
やばい、な。このままじゃ、出血死してしまう。なんとかしないとあ、そうだ、この布で。

ビリッ

右袖を引き裂いて、その布を、右目に、眼帯のように巻く。よし、これでしばらく大丈夫だろう。

…あとは、こいつらをどうにかしないと。…警備員に渡すか。事情を話せば、分かってくれるだろう。

「了解であります。君は、正当防衛でやったのですね？　ならば、あなたは悪くありませんです」

「そうか。まあ、それが妥当だろうな」

本当は、捕まらないか、冷や汗を流しながら、心臓をバクバクさせているんだけど、これは、俺だけの秘密だ。……ん、そういえば、ミルの服についている血も拭かないとな。

そして、破落戸どもを警備員にわたし、近くでかった、色を戻す薬（たしか、ミュールだっけか？）を使い、ミルの服をきれいにした

あと、まだ、旅立つには早いので、そこらへんをぶらぶらすることにした。

「ミル、見てみな。すごいお祭り騒ぎだぞ」
「……………」

やっぱ、ダメか。……………いつか、目を覚ましてくれるんだろうけど、さ。早くミルと話したいんだよな。やっぱ、好きな人とは話したいよなあ。……………まあ、気長に待てばいいか。
さて、次はどこ行こうかな？

メルファ side

ん、ここは……。

チャリ

ん？ チャリ？　なんで、金属音が……。！　なによ、ここ。檻^{おり}じゃないのよ！

どうしてこんなところにいるのよ！　首には、首輪^{かせ}、手には枷、足には、重い鉛がついた、拘束具。……まさに、奴隷ね。……って、なに納得しようとしてるのよ私！　この状況をちゃんと認識しろ。でも、頭で認識しようとしても、体が言うこと聞かない。なにか、うずうずして、気持ち悪い。

吐息が荒いし、体中が熱い。全身を焼かれたような熱さみたい。檻の外からは、私を売ろうとしている男の声が聞こえる。

……このまま、私、売られちゃうのかな？　いやだよ、私はまだ、人生の五分の一も生きていないのに。

……本当のお父様とお母様に会いたい。（私をここに連れてきたのは、たぶん、騙すのが得意な、獣人でも多く存在している狼族だと思う）いやだよお、誰か、誰か、助けて！

「お、活きがいいなこの娘」

「へい、盗りたて新鮮ですからね。今日中がオススメですよ。媚薬も飲ませましたから」

「ほう、夜のお供に一匹か……。いいだろう。いくらだ？」

「へい、金貨十枚（百万円）です」

何を言っているのかわからなくなってきた。たぶん、男が飲ませた媚薬のせいだと思う。

……もう、終わり、ね。いままで、自由でいたから、もういいかな。
お父様、お母様。

いままで迷惑かけてごめんなさい。いつか、いつか、親孝行をしますから、それまで待ってください。さようなら。

第四十話、奴隷（後書き）

さて、なんか、シリアスですねw。今日は、昆虫種の魔物、第四回目です。では、どうぞ。

名前、サークレッティ

種族、昆虫種

性別、オス

ランク、D

説明

ミルナスタの洞窟によく出現する魔物で、夜行性。体は、日本のモグラのような体だが、頭には、昆虫の証の触覚付いている。長く洞窟に住んでいたためか、目が退化しているが、超音波を駆使して、獲物や、障害物を認識する。

第四十一話、脱走？（前書き）

くあらずじく　旅の仕度をするために、いろいろと、道具を揃えていたミコト。

だが資金が尽き、お金が落ちていないか探していると、その途中、見覚えのある獣人の少女を発見した。

第四十一話、脱走？

うーん。金がもう残り少ない。働くか……。いや、働き方なんて知らないし、俺にできるはずがないな。はは。……どこかに、金でも落ちてるといいんだが。……んん？ あれは……。

銀貨だ！ 銀貨がある！ ラッキ！ 裏道通つていてよかった。ありがとう神様。（ミニルス？）ありがとう女神さま。遠慮なしにいただきます。

だが、銀貨を拾おうとしたとき、前方から足音が聞こえてきたので俺は、反射的に、建物の影へと、身を潜めた。

そーっと、伺うと、暗くてよく見えないが、どうやら、男が女の首にあるなにかを引っ張って、どこかに連れ去ろうとしてるみたいだ。

……奴隷？ ……この国には奴隷制度があるのか。

「ほら、ちゃんと歩け」

「ひっ」

遠くからでよく見えないが、鞭の音がするから、おそらく、奴隷の体にでもうちつけたんだろう。

ひどいことするな、全く。俺だったら、あんなことしないのに……。ん？ それだと、奴隷を買うこと前提じゃないか？ ……いまは、考えないでおこう。……また鞭でうつか。……やめろ。

我慢しろ。飛び出したって、なんの解決にもならない。落ち着け。落ち着け。ふう。

「ちゃんとついてこないと、あとで、おしおきするぞ。そう、性的にな」

「っ。この……」

「おっと、反抗する気か？　なら、今犯ろつか？」
「……………」

そりゃあ、まあ、そんなこと言われたら、黙るしかないよな。俺も昔そんなことが……。

思い出しただけでも、吐き気がする。なんで、男の俺をやるうとするんだか。はあ。

……そういうことがあったからだろう。俺は、奴隷の子の服が破られたのを見て、怒り、男に飛び掛った。

その秒数、ざっと、一秒だろうか。飛びかかれた男はたまらずに、倒れ込んだ。

「痛い目を見る、下種^{げす}が。氷の吹雪よ、対象を凍らせろ！　アイスバーイット！」

- 前に腕を突き出し、足を地面に固定し、魔術を放つこれが基本でないと、反動で、吹き飛んでしまう。だけど、俺は、怒りでそれを忘れていて、やらなかった。だから、魔術の反動で、後ろへと吹き飛んだ。

「きゃっ。なに？　え？　ミコト？」
「は？」

後ろへ吹き飛んだ俺をうまくキャッチしてくれたのは、五時間前ぐらいに、ひっこくつきまとっていたあのメルファだった。……悪運が強いのか、弱いのか。わからないな。ったく。

- 別にメルファが嫌いなわけでもない。だけど、なんか、同じ臭いがする。だから、関わりたくないという気持ちがあるのかもしれない。あゝ、そういうえば、ミルどこ行っただ？　……あ、そうだった。

ミルは、さっき俺がいたところに置いてきたっけ。はは、もう年かな……。まだ、十五なのに。

「てめえ、何しやる！」

あゝ やっぱ反動で外したか。…… 男の右の建物が凍ってるからな。―― 吹雪は、自然界で起こる雪が荒々しく風で押され、それが、人には吹雪に見える。

、実際は、億を超える雪のつぶが、風の力に負け、そのまま、なされるがままに、なることで吹雪になっている。

だから、反動したせいで、小さな風が起こり、あらぬ方向に進んでしまった。ということか。

…… 頭痛い。なんで、こんなこと考えてるんだか。

怒りに任せて、突っかかってくる男を、見て、ため息をつきつつ、俺は、メルファの手（正確には枷）から離れ、魔術の詠唱を開始した。

「我、世界をまたにかける氷。絶対零度を持ちいて、敵をうちほろぼす。…… アインドウ！」

「っ！？ これ、は！ 俺のからだ、が、こ、お、る」

もうそのあとの言葉は続かなかった。なぜなら、男は全身隈なく凍っているからだ。

…… ふう。これでいいか。…… あとは、後ろでなにか思いつめているメルファをどうにかしないとな。

「あ……」

…… 言いたいことがあるならばいえばいいものを。なぜ、口をぱくぱくして、いるんだか。

はあ。

「あ、の。その……。ありがとう」

やつと言ったか。……まあ、お礼をいわせるために顔を険しくさせたわけじゃあない。ただ、こいつの口から言葉を聞きたかっただけだ。……だから、そんな目で見るなダステイス。わかってるんだからな。お前が俺の中で嫌な目で見ていることを。あとで、切れてやる。

「さて、行くか」

「え？　行くって？」

「何言ってるんだ？　そんなの、お前の両親のところに決まってるじゃないか」とメルファに言うと、メルファはなぜしっているの？　的な目で俺を見てきたので、こういつてやった。

「お前がさつきから、親を探している小鳥に見えたからだ」

「……う、ん。会いたい。あいたいよ。お母様とお父様に」
「んじゃ、まず、その拘束具を外さないと……。あ」

しまった。この拘束具鉄で出来てる。氷で固めたあと砕こうと思っただが、木じゃないし、出来る訳がない。……困った。

「（主……。【溝想】を使えば……。いや、なんでもない）」

睨めば（実際にではなく、気配）、誰でも話を終わらせる。これ、絶対。

はあ。にしても、どうするかなあ。……あ、そういえば、鍛冶屋に、鉄を切る風の魔術師がいたような気がする。そこに行ってみるか。

「あゝ そうだな。まずあ、その服をどうにかしないとな。……ほら、これでも着とけ」

「え？ いいの？ これミコトのじゃ……。ええええええ！ み、ミコトって、男だったの？ え？ え？」

男の服で、気づいたのかな？ ……俺の言動とかで早く男だって気づけよ。

全く、鈍感め。もしかして恋愛も鈍感だったりして？

「いくぞ。ほら」

「え、う、うん」

ひとりじゃあるけないだろうから（足についてる鉄球のせいで）俺は、メルファをお姫様抱っこして、表通りに出た（もちろん、落ちてる銀貨も拾って）

まず、外に出たとき、メルファは目を閉じた。まあ、あれだな。暗いところにいたから光がまぶしんだろう。俺もそうだ。だけど、目をつぶったら、なにかダメな気がして、踏んばった。

周りからいろんな視線を感じる中、顔を赤らめてるメルファをお姫様抱っこしているのは、恥ずかしい。けど、やらなきゃ、こいつの拘束具は外れない。見捨てるのは男として最悪だ。だから、やらないと。けど、やもうぱり恥ずかしい。俺も顔を赤らめながら、大通りを歩いて、鍛冶屋に向かうと、周りから、「か、かわいい」「抱きしめてえ」などと、気色が悪い声が聞こえてきたので、ひとにらみして、追い払った。

そしてようやく。鍛冶屋についた頃には、もう、精神がぼろぼろだった。……なんか、また、熱い視線を感じるような……。あ、鍛冶屋の兄ちゃん。……おまえもなのか。おまえもなのか！

ちくしょう！ みんなそうだ。俺を見ると、みんなずっと俺を見る。くそお。てめえら見てろよ。

いつか、俺は男らしくなつてやる。

俺を見てただろ、見てたダロ？ とにらみまくって、それを言いまくり、なんとか、鍛冶屋の兄ちゃんにただで、メルファの拘束具を切ってもらったあと、二人で、こそこそ、獣人の国を抜け出した（俺はいやなんだか、そうしても恩を返したいとかで、付いてくることになった）まあ、あれだ。……今日は平和だなあ

第四十一話、脱走？（後書き）

さーって、今日も元気な作者ですよ！ 今回は前回に続き、昆虫種魔物の図鑑を説明いたします。ではどうぞ？

名前、ドットランサー

種族、昆虫種

性別、オス、メス

ランク、A

説明

手に太いランスのような形状の武器を持っており、容姿は日本でいう、セミに近い。Aランクと言うこともあってか、気性が荒く、無差別に人を襲うことが多い。

波の傭兵では傷一つつくることができずに、刺されることが多い。

また、繁殖期には、手の武器が赤く変動することから、よく、魔物の亜種（だいぶ先に説明します）と間違えられることが多い。

イスの勇者 part 1 (前書き)

さて、今回は気分を変えて、だいぶ前本編で出てきた勇者について書きました。

続きもあるので(いつか)気長に待ってくださいな。

* イースの勇者* part 1

はるか昔、ミルナスタのとある村に、小さな小さな男の子が生まれました。

名を、イース。意味は、善意ある欠片^{かけら}。

生まれたとき、彼は、母親と父親の姿を見て、泣き出してしまいました。それもそのはず。

彼の母親と父親は、魔族だったのです。ですが、なぜか、彼には、尾と、角、翼がありませんでした。母親は、いつか生えてくるだろう。そう、考えていました。ですが、父親が密かに思っていた、-

- この子は、本当に私の息子なのだろうか？ という疑問が、彼が成長するに連れて、確信に変わりました。なんと、彼には、なんの特徴もなかったのです。- なんの特徴がないのは、人間か、竜人の証。これは、昔から各種族に言い伝えられていた事。そして、彼は、そのことが、ほかの人に知られていったとき、迫害されてしまいました。もちろん、生んだ母親と父親も一緒に。

- ねえ、どうして？ どうして、僕たちは、村を出るの？

彼が、そのことを毎日のように口にする、両親は、心が痛みました。

- そうだ、なぜ、私たちが村を出なければならないのだ。

と父親もそのことばかり、毎日考えるようになりました。

ある日、イースは、毎日日課にしていた、剣術を、木刀で、木相手に練習していると、近くから、大きな大きな雄叫び声が聞こえました。あまりの大きさに、イースは耳を押さえ、雄叫びがなり止むのを待ちました。しかし、いつまでたっても、雄叫びがなり止むこと

はありませんでした。

ダメだとわかっていても、厄介事に巻き込まれるのは、イースの悪い癖です。

今回もその通りになりました。進んだ先にいたのは、剣で貫かれた、小さな子供と、そのそばで泣いている大きな魔物でした。あまりの大きさにイースは足が竦^{すく}みましたが、なんとか押さえ、そのまま、魔物に近づきました。足音を聞き、魔物はイースの方を向きました。そのまま、魔物がイースをにらみ続けること数分。動いたのは、魔物の方でした、イースのもとまで来た魔物は、犬のように、イースの手を舐めたり、イースに擦り寄りました。

これは、イースの持っている力。【対話】です。【対話】は、名の通り、動物と話すということではありません。この力は、すべての動物の言うことを聞かせられるという、力なのです。

では、なぜ、【対話】とつけたのでしょうか？ その理由は、イースが生まれるまえ、ある男が、魔物を止めて、なにかつぶやいたあと、魔物を仲間にしたことが由来なのです。

その男のとおり、イースは、何かをつぶやき、大きな魔物を仲間にしました。

ですが、両親のもとに連れ帰るわけにはいきません。なので、イースは、しかたなく、子供の墓地を作ったあと、魔物を森に置いていました。悲しそうな表情ですが、仕方ありません。

- 魔物は、人と仲良くなつてはいけないんだ。

イースは、両親のもとに戻ったあと、しばらく、周りを見ていました。小さな森に囲まれた、ログハウス。近くには、川のせせらぎが聞こえる。そしてなにより、イースが毎日見ているものは、大人一人は入れるぐらいの洞窟でした。両親からは、絶対に入ってはいけない、と言われていたのですが、なにぶん、男は、冒険好き。なので、明日、入ってやる、という意気込みをしつつ、いつの間にか、

イースはログハウスの外で眠ってしまいました。

ここは、イースの精神世界。なにものにも属さない透明な色が辺り一面をつつみこんでいます。
まだ、少し眠いのか、イースは欠伸あくびをしたあと、周りを見渡しました。

- - 果てしなく続く、地平線。どこまでも続く地平線。これがイースが思ったことでした。

そのあと、しばらく、歩き回りましたが、何もありませんでした。
透明な道を歩いているので、元いた場所がわからなくなり、イースは困り果てました。

・・なぜ、こんなところにいるのだろう？

イスは疑問に思っただけで仕方ありませんでした。なぜ、人生で、一度経験するかしないかの精神世界にいるのか、それは、誰もしりゆることではないのです。

そのあと、透明な世界で、ずーっと、眠ったり、叫んでみたりとありとあらゆる行動をしましたが、何も起きませんでした。それもそのはず、精神世界は、外の世界とはかけ離れた空間。^{かくり}自身のなかにある別の世界。そのため、外とは隔離されているのです。

イスは何をしても、何も起きないと言うことを知ったあと、涙を流し始めました。

・・どうして、こんなところにいるの？ どうして？ 帰してよ、お母さんとお父さんのもとに。

その願いが通ったのか、虚空から、白い羽をもち、頭には大きなわっか、首からぶら下がっているのは、十字架という、いかにも天使みたいな人が降りてきました。

あまりのキレイさにイスは少しの間、その人を見つめていましたが、はっとなり、「君は誰？」と聞きました。返答は、「女神です」でした。イスは、なぜ、こんなところに女神がいるのか、わからずに、ただ、頭に？を浮かべることしかできませんでした。

話は少し戻り、ここは、イースが眠ったあとのログハウス。そこには、ティリ（紅茶）を優雅に飲んでいるイースの両親の姿がありました。イースは、まだ、森で訓練でもしてるのだろうと、とあまり心配していませんでした。ですが、そこから、ものすごい轟音が聞こえてきた時、二人は、紅茶が溢れることも気にせず、立ち上がり、外に出ました。

外にはイースが眠っているのですが、それに目もくれず、二人が見たのは、空中や、森に見える、大群の魔物でした。両親は、冷や汗が止まらず、そのせいか、先ほど喉の乾きを潤したはずなのに、喉が乾いていました。

- 逃げなければ、はやく、にげなければ。

母親を急かし、家にある大事なものを全て持ってこさせ、父親は、地面で寝ているイースをおぶい、母親と共に、森を抜けました。

森の外は地獄絵図でした。あたりかまわず、魔物がいて、近くにいた人を貪^{むさぼ}っていたり、地面を壊していたりしていました。両親は、さらに冷や汗が止まらず、魔物がない反対方向にいきました。ですが、気配に敏感な魔物がいるせいで、すぐさま囲まれてしまいました。

もうだめか。そう思ったとき、背中におぶさっているイースが光だし、父親から離れ、地面に降り立ち、そのまま、透明な髪と透明な

目になり、当たりにいる魔物をどんどん、消し始めました。

両親は、何がなんだか、わからずに、ただ、それを見守っていることしかできませんでした。

しばらく経つと、あたりには、もう、魔物がいませんでした。なぜ、イスがこんな力を持っているのかわからないですが、両親は心より喜びました。

・・・これで、村のやつらに見返しできると。

ですが、イスは、二人に目もくれず、そのまま、空間に穴を作り、どこかへ行ってしまいました。

* イースの勇者 * p a r t 1 (後書き)

さてさて、区切りがいいのか悪いのか、わかりませんが、とりあえず、終わりました。イースの精神世界のことになり人があるかもしれません、それはまた、いつ書きます。(だって、本編が進まないんだものw) ではでは、今回は違う話なので、あとがきはなしです。ではまたあゝ

***アナザーストーリー* 未来の世界（前書き）**

ん〜と、この話は見なくてもいいです。見たい方が見ればいいのですな。

あと、ネタバレも少しあるかも。苦手な方は、もどるボタンをおして戻ってください。あと、この話は、ずいぶん先の話のもう一つに世界なので、はじめはわからないでしょうが、更新する話をみていれば、だんだんとわかると思います。

アナザーストーリー 未来の世界

ここは、現在から、百年後の世界。かつて、勇者と呼ばれたミコト
「ロールスや、その仲間たちは死んだ世界。だが、魔女と呼ばれた
彼女は、今でもまだ、生きている。人は、彼女意外存在しない。か
わりに、世界には、魔物が溢^{あふ}れている。百年前、魔女と呼ばれた彼
女は、この世界に存在する魔物を消し去った。だが、現在、また、
魔物という輪廻が始まった。

未だに眠りにについている彼女をよそに、魔物たちは、どんどんと、
数を増やしていった。

それに続き、世界には、新たに、人と呼ばれる存在が生まれる。魔
物のことを知らない赤ん坊なので、彼ら（彼女ら）は恐怖という感
情を知らない。数年経っても、彼らは（彼女ら）は、魔物という存
在を知らなかった。

- 世界に無数存在する魔物をなぜ、彼ら（彼女ら）は知らないのか？ それは、【女神】と呼ばれる、今は存在しない神や天使が協力して作った新たな生命が、彼ら（彼女ら）を守っているから。

だが、【女神】も万能ではない。あと数年したら、【女神】の力は途切れてしまう。

そこで、【女神】が目を付けたのが、この世界に長く存在している魔女であつた。

しかし、未だに眠りにについている魔女を、脆い存在の【女神】が起こせるはずがない。

なので、【女神】は考えた。考えに悩み、考えついたのが、まだ、幼い彼ら（彼女ら）にこのことを伝え、彼女を起こしてもらつたということだった。

だが、【女神】が張っている結界の外に【魔女】がいるということが、【女神】を悩ませた。

- まだ弱い彼ら（彼女ら）を外の世界に出しては、すぐに、魔物の餌食^{えじき}になってしまう。

だが、そうするしか手立てはない。少しでも力になればと、【女神】は、彼ら（彼女ら）に力を与えた。

- ある男の子には【勇者の光】を。 - ある女の子には【戦乙女の光】を。そして、力が少なくなってきた【女神】が残った子に与えたのが、【魔術】という力だった。

この世界には、百年前のように、【魔術】という概念は存在しない。その理由は、人が居ないせいで、魔術師の子孫が残せないということともあつたが、一番の原因は、【魔術】を作ったとされる神が、居ないということだった。そのせいで、【魔力】や、【メルニムス】

という力が、消えた。

だから、【魔力】も、【メルニムス】ないこの世界では、【魔術】が使えない。

だが、【女神】は、神と天使が作った生命体。なので、力が伝えられている。（もちろん、限度はある）

力を与えたあと、彼ら（彼女ら）に【魔女】のことを伝えた【女神】は、これから起こることを予想しながら眠りについた。

そして、力を与えられた子供たちはというと、【女神】に伝えられたことを忠実に守るために、結界を抜け、魔物が溢れている世界に出た。

「ん」 【女神】 様の言うとおり、ここにはいっぱい魔物がいるね」

「怖いけど【女神】様のためだもんね」

「僕も」 怖い」 けど」 がんばる」

「私だって……。がんばるもん」

それぞれ、思いは違えど、目的は一緒。

- - 【魔女】 を起こす。

ただそれだけだった。

だが、【女神】は肝心なことを話していなかった。それは、【魔女】がどこにいるかということ。

これは、単に忘れていたということではなく、【女神】が彼らに与えた試練であった。

- - ただ目的を果たすだけでは、彼ら（彼女）は成長しません。だから私は、わざと【魔女】がいる場所を言わなかったのです。

これが、眠る前、【女神】が考えていたことでした。

旅をして一週間、彼ら（彼女ら）は、今、百年前、人間族の国ヒュリス）であった場所にいた。

寝ずに旅をしたのか、彼ら（彼女ら）は欠伸あくびが耐えない。やっとこさ、眠い目を開けて、人間族の国を見渡すと、そこには、やはり、魔物が散乱していた。

彼ら（彼女ら）は、眠い顔を真剣な顔にし、【勇者の光】の力を得た、少年は、虚空から“エクスカリバー”を取り出し、【戦乙女の光】を得た少女は、その背中にある小さな槍を構え、【魔術】の力を得た少年と少女は【魔導】を纏い、詠唱を開始した。（本来、魔術と魔導は、同時に使えないが、女神によって、枷を外された彼女と彼女は、同時に使うことができる）

まず、動いたのは、【勇者の光】を与えられた少年だった。

その白銀に輝く聖剣を頭上に構え、剣に光をまとうせると、それを、魔物の集団に放った。

「エクスブレイド！」

常人なら、失明してもおかしくないほどの光が魔物にぶつかったとき発生し、辺りをクレーターに変えた。

「ちえ、私もやりたかったのに」

そう漏らすのは、小さな槍を構えている戦乙女の少女。どれに続き、魔力をまもっていた二人も、不満を漏らし始めた。

「仕方ないだろ、僕のちからはすさざましいんだから」

自分でそれを言うのは、自慢に聞こえるが、まだ、子供の彼ら（彼女ら）に分かるはずがない。

魔物の集団を倒した少年は、聖剣を虚空に戻し、三人をなだめながら？ 人間族の国を見回るリーダーとなり、そのまま、不満を漏らし続けてる彼ら（彼女ら）を率いて、ヒュリスを見回ることにした。

そして、ここは、ところかわって、悪魔界。

神を倒した悪魔は、現在、魔獣を作りながら、ミルナスタに突如現れた四人組の少年少女を見ていた。

「なんだあ こいつらあ？」

「いままで居なかったのに」

そういうのも無理はないだろう、なぜなら、彼ら（彼女ら）は突然、ミルナスタに現れたのだから（もちろん、突然というのは、よくに言う、本来の突然という話ではない、結界から抜けたことで、世界に初めて現れたということになる）

悪魔たちは、いま、“魔の鏡”とよばれる最近作られた鏡を使ってミルナスタを見ている。

これは、下級悪魔でも見られるものであり、誰もが、毎日暇なときに見れる鏡なのである。

「悪魔王様に報告だあ」

「おいらもついていくよ、なんか楽しそうだし」

本来、下級悪魔が悪魔王に会えるはずがないのだが、今回は、重大なことなので会えることになっているようだ。

そして、そのことを知った悪魔王、ニルは、すぐさま、仕事を止め、ミルナスタに悪魔数匹を連れて、向い出した。

* 続く *

第四十二話、封印された記憶（前書き）

くあらずじく 空の旅をして、ドレルとリルは、巨人族の手前まで
来ていた。だが、魔物を触ったことで、魔物の集団に囲まれて……

第四十二話、封印された記憶

ドレル side

んゝ やっぱ、空はいい。なんかこう、澄んでいるというか、なんというか、とにかく気持ちがいい。そう、この風圧がなければ……

「ぎ、やあああ、る、ルーク！ 速度をおと、せ！」

「エ？ アア、ソウイエバ、コノスピードハ、ハヤカタカナ。ゴメンナサイ」（キュ？ キュキュ、キュキュキュキュ、キュキュキュキュキュ、キュキュキュツキュキュ。キュキュキュキュイ）

全く。こんなスピードで、飛んで、もし俺とこいつが落ちたらどうすんだか。……でも、この可愛い顔を見ると、やっぱ、ついつい許しちゃうんだよな。全く、愛らしいやつめ。

さて、こいつもそろそろ起きるだろうから、このマスクを付けておくか。んゝ、こいつの顔小さいから、俺のサイズじゃ入らないか。仕方ないな。

「ん、ここは……。へ？」

まったく、何が「へ？」なんだか。お前が勝手に突っかって、
“デビウススライム”に気絶させられたんだろ？。まずはお礼を言うべきだろ。

「ななな、なんで、私があんたの膝で寝てたのよ！」

「それは「きゃああああ！」はあ。だから言おうとしたのに」

立ち上がったこいつは、空の上ということを知らずに、もろに風の影響を受け、顔を押さえて座り込んだ。

……まあ、俺も最初はこんなだったから、まあ、わかるにはわかるが。

そのまま、顔を押さえ続けて、痛みが引いた頃に、こいつは、俺に向かって「馬鹿ああ！」とか言つて、つかかってきたので、かわして、落ちそうになったこいつを抱え込み、ルークの頭の方へ、突き飛ばした。少々乱暴な気がするが、仕方ない。これが俺の性分なんだからな。

……だから、睨むな。その目を見てると、頭が痛くなる。なぜだかわからないが、とにかく頭が痛い。

「ど、どうしたのよ。急に頭を押さえて。どこか痛いのか？」

……やっぱり、こいつは優しいな。赤の他人（少ししかたっていないからな）の俺に、こんな声をかけてくれるなんて。……いや、ダメだ。考えるな。そんなことを考えるな。

「大丈夫？」

「ああ」

全く。こいつといると、おかしくなる。忘れたと思われる思い出を思い出しそうで、頭が痛い。

「さて、ルーク」

「アイ」（キュイ）

「速度を緩めてくれ」

「ワカッタ」（キュッキュッキュウ）

そろそろ、バーム（巨人族の国）につくはずだ。そろそろ、準備を

しないとな。

マスクをとって、道具袋から赤い【アマリア】を取り出して、ルークの爪から大剣（ルークの爪にぶら下がり、そのまま、上に飛んで取った）を取り、背中に装備して、そのまま、【アマリア】を穴にはめて終わりだ。

「へえ〜 綺麗ねこれ」

「ん？ ああ、そうだな」

【アマリア】は銀で出来ているから、すこし輝きがあるのは当たり前だな。それに、火の精霊が入っているから、余計に輝いてる。女が綺麗だというのは当たり前だろうな。

「さて、そろそろ、バームにつく。おまえは……。いや、なんでもない」

こいつは、武器も防具なんにもないから、やることはないか。まったく、魔物に襲われたらどうするんだか……。って、俺の思いどうりになったじゃないか。くそ。

「へえ〜 珍しい鳥ねこれ」

「おいおい、触るなよ……。もう遅いか」

・・・この鳥は魔物。名は、“ベリーバード”。ランクはC。特徴は、その性質にある。

綺麗な羽を人に見せびらかし、近づくことで、その羽を触らせて、その羽にあるリン粉をまき散らし、仲間を呼ぶ。たしか自分ではリン粉をまき散らせないはずだ。ん〜、あれだ、あれ。

ん〜 あ、思い出した。リン粉は体温がないと触れても巻き散らないんだっけな。

ランクはCだが、その数で、Aランクにも劣らない。
はあ。やっかいなのを触ったな。……まったく。

「え？ なに？ なんか、いつはい来たよ」

「はあ。お前は何も知らないんだから。触るな」

少し、怒気を込めた声で、こいつに言うと、「ごめん」と丸くなって、ルークの頭の方へ引っ込んで、なにかつぶやき始めた。

ネガティブか？ ……いや、違うな。すこししか感じないが、魔力をまとつてるのか。

魔術でも使うのか……。なら、任せていいだろう。

「黄泉の国から参る亡霊を倒す光よ。目の前の敵をかき消せ。デウロウセイント！」

あいつが放った光は、天空に一度戻り、そのあと、雨のように“ベリバード”たちに降り注ぎ、詠唱の通りにかき消した。

……すごいな。さすが本当の魔術師だ。俺みたいに、【死菌】を増やさないと使えないことより、何倍も何十倍もいい。……なんで、俺は魔術がつかえないんだろうな。人間なのに。

まあ、こんなこと考えてる暇はないな。さて、残った“ベリバード”は、ルークにたおしてもらうか。

さて、竜と念話する回線をと。……よし。あとは頼むぞ、ルーク。

「（マカセテ）キュキュキュ」

- - ルークがブレスを放つことがわかるほどに、口から緑色の息を漏らしているのがわか。

それに呼吸の鼓動もわかる。

さて、行け。ルーク。

ブワアアアアアアアアア！

「……………」

あまりの威力に黙り込んだな、こいつ。前みたはずだと思うんだが、忘れたのか？

そりゃあ、風竜のブレスは燃やすことなく、切り裂くということだから、ほかの竜よりも、威力の程はわかりやすいがな。

「おい。終わったぞお」

「へ？ あ、うん」

さてと、邪魔されたが、もう、目の前にバーム（巨人族の国）見えるから。あとは、おとなしくしていい。……おかしいことするなよ？

ん　ここに来るのは久しぶりだな。前来たのは……。たしか、護衛クエストで、来た時か。

あんまり、巨人は好きじゃあないんだが、こいつ、なにか探してるようだから、仕方ないか。

ルークを国の手前に置いて、門番に通してもらい（少々いざこざがあったが）なかには入り、まず、宿屋を探すことにしたんだが。ななせ、野蛮な巨人族だ。俺たちを見たとなん、襲いかかつてきやがった。まあ、実力行使でだまらせたがな。あいつは、あまりいい気はしないような顔をしていたが、仕方ない。これがバームでのやり方だ。

そして、片言だが、倒した巨人の男に宿屋のことを聞き（しようしよう聞きずらかった）そのまま、宿屋に向かい、鍵を貰ったあと、部屋に入って（もちろん別々に）俺は、眠りについた。

「ドレルよ。このことは忘れてはならぬぞ」

「はい・お爺様」

これは、なんだ？ 夢か？ ……俺は知らない。こんな人知らない。
だれだ？

くっ。頭が割るようにいたい。なんだ？ 思い出そうとすると、そ
のぶんズキズキと痛む。

まるで、記憶が封印されているみたいに……

第四十二話、封印された記憶（後書き）

さあって、今回は久々の二話投稿です。一回目は訳が分からなかったと思いますが、こちらが、本編です。さて、今回は、前回（だいぶ前）に続き、昆虫種の魔物です。ではどうぞ。

名前、ミューラ

種類、昆虫種

性別、オス、メス

ランク、E

説明

日本でいう、ダンゴムシの容姿。

背中には羽を持っているが、退化しており、飛べずに、地面を這うことで、移動している。甲殻は柔らかく、錆びた剣でも貫けるほど。移動速度は遅く、人が歩く時よりも遅い。なので、初心者にはもってこいの魔物。だが、あまりにも弱いため、動物にも殺され、餌にされることから、年々、数が減っている。

第四十三話、契約（前書き）

くあらずじく 眠りから覚めたりルは、誰かに導かれるように、宿屋を出て、近くの森に入った。それが、運命を変えとも知らずに……

第四十三話、契約

リルside

目覚めろ、リル。

え？ なに？ 頭の中に声が聞こえる。

さあ、ディランドの森に来い。

ディランド？ そんな森はしら……。おかしい。たしかに知らないはずなのに、記憶の中にはある。
ありとあらゆる、森の情報がめまぐるしく私の頭の中で、暴れる。
だめ、これ以上は、頭がおかしくなる。やめて、記憶を引き出さないで。

さあ、くるのだ。我のもとに！

なん、で。足が動くのよ。こら、止まりなさい。止まれ！ でも、私が一生懸命力を込めても、動くのがとまらない。このままじゃ、あの声の主の所へ行ってしまう。それはダメ。なにか、終わるような気がする。

このままじゃ、歯車が狂う。そんなことが頭のなかでめまぐるしく周り、どうにか、できないか、と、出来の悪い頭で考えていると、いつの間にか、私は、宿屋の外に出ていた。

うそ、足の感覚がない。これじゃあ、動いたとしてもわからない。
なんでよ、なんで、勝手に動くのよ。
言う事聞きなさい、私の足！

「あ」

もう、そんな声しか出せない口は、そのあと、固く結ばれ、私が一生懸命口を開こうとしても、開かなかった。

ここが、ディランド。そう、ディランドだ。頭がそう理解している。広さは、私と……、三人が住んでいた森よりも小さい。が、そこには、豊富な草や、食べ物、綺麗な川があり、ドン以外の動物も、沢山住んでいる。そして、ディランドの森の奥には、“巫女の祠”（ほこら）と呼ばれる、いまでは、忘れ去られた、祠がある。

って、何勝手に頭で理解してるのよ！ 見ればわかるでしょ、この森のことを！ 朝にも関わらず、木々により、闇に包まれた森。これじゃあ、ランプか、火魔術、光魔術でも使わないと歩けないですよ！

なのに、なんで、足が動くのよ、もう！

あまりに暗くて、見えない目を、わずかに動かして、当たりを見ても、あるのは闇。見えるとしたら、木の面影ぐらいか。

……こっちは、“巫女の祠”へと続く道。それも、みちしるべなしで、向かっている。

……いったいどうしちゃったのよ、私。なんで、こんなことに……。あの声のせいよ……。

そう、そうだわ、あの声さえなければ、今頃、美味しい朝ごはんを食べれたのに……。それに、あいつ。

心配してるかな。……いや、あいつは心配なんてしない。そう、そうに違いない。

……こんなにも一人が寂しいなんて。……あいつの言葉ばかり、考えちゃう。

これが、孤独というもののなのね。……寂しい。けれど、足が勝手に動く。

しばらく、感覚がない足が勝手にうごき、暗い森の中を進んで行き、目の前に祠が見える場所まで進んだところで、体の自由が戻った。

「っ、は、あ、はあ。ほんとに、なんなのよ、もう！」

体の自由を確かめるために、暗い森でジャンプしたり、走ったりしたあと、誰でも見てしまうほどに、輝いている祠を見て、ため息をつきつつ、なにかわかるあるうと、祠へ歩を進めた。

……ただ、輝いているだけね。別途、変わったことないわね。……でも、なんで、光ってるのかしら？
気になるわね。

だけど、触ったのがまずかった。触ったとたん、光が神々（こうごう）しいほど輝き、私を光の中に連れ去った。

「っ、痛」

光のチューブみたいのところから、絞り出されるように、下に落ちていき、そのまま、尻餅をついた、私は、尻を押さえながら立ち上がり、辺りを見渡した。

まず、目に入ったのが、さっき目にした祠だった。一際目立つその祠に目を奪われ、そのまま、そこに歩を進めてみると、また、吸い込まれそうな気がしたので、少し距離を置き、座って、それを眺めた。

「なんか、見たことがあるのよねえ、これ。どこで見たかは、思い

出せないけど、たしかに、見た気がする」

「それはそうだろう。我は、お前と三百年前出会っている」

っ！？ 喋った。しゃべったよ、これ！ どんな仕組みしてるのかな？ あー、うずうずする。触りたい。

触ってみたい！

あーあ、負けちゃったよ、誘惑に。触っちゃった。……でも、後悔はしていない。

なぜか？ それは、この祠、もふもふしてるのよ！！！！

「おい、そんな目で我を見ながら、触るな！」

「でもさあ、もふもふしてるあなたが悪いのよ」

あゝ キュートエネルギーがチャージされる。しばらくチャージしてなかったから、貯まるわゝ

……さて、エネルギーを補給したし、真剣になるつか。

「で、あなたは、なぜ、私をここに呼んだの？」

「……近々、ミルナスタじは、滅びる。そう。悪魔によつて」

滅びる？ 悪魔？ ……何がなんだかわからない！ って、叫びたいけど、頭のなかにあんな光景をいれられるとちよつとねえ。

「わかったか？」

「うん。でもさ、戦った人がいたんでしょ？ なんで、滅びるの？」

そう。顔は見えなかったけど、悪魔に立ち向かう人たちが見えた。圧倒的な量の悪魔を、ある者は、凍らせて、ある者は、牙で。ある者は、大剣でなぎ払い、ある者は、長い剣？ で殲滅して、ある者は光りの魔術で。……でも、最後の一人は、なにもしていなかった。

なんでだろ？

「それは、お前が我を拒んだからだ」

「へ？ あなたを？ 私が？」

謎だらけだ。本当に。

「まあ、それは後に説明する。で、だ。お前には、我の力を受け入れてもらいたい」

「力？」

首を傾げたわたしを見て、祠は、その体？ を震わせた。

「これ、私？」

震わせた祠のなかには、小さな小さな私がいた。それも見たことがない服を着て。

「これが力を得たお前だ」

なんか、よくわからないけど、力を得たらこの姿になるんだ……。

別に、どっちでもいいけど、受け入れないと、未来が滅ぶんだよね……。じゃあ、受け入れよう。

話さなくても分かるかのように、祠は、私のもとへ歩いてきた。……か、可愛い。でも、今は我慢。

「汝、我を受け入れ、力を得るか？」

「……我は受け入れる。汝の力を」

昔から、契約に関しては、私は誰よりも知っている。そう、お爺様

よりも。

なぜなら、私は頭が悪い。だから、ひとつでも覚えようと、始めたのが、契約だ。

使い魔契約、悪魔契約、宗教契約、ギルド契約。もつとあるけど、今は考えないでおこう。

それよりも、契約の言葉を互いに紡いだあと、何か起こるのかな？

と期待していた私は、次の言葉で落胆らくたんした。「失敗だ」……なにこいつ。むかつくんだけど。せつかく期待してたのに、こいつは！もふもふ剥ぎ取ってやろうか！！　だけど、次の言葉で、私は剥ぎ取るのをやめた。

「失敗はしたが、ちゃんと受け継がれた」と。ふむふむ、なるほど。契約自体は失敗したけど、力は受け継がれたと、そういうことですか……。まあ、終わりよければ全て良しという言葉があるみたいに、これもそれなのかな？

「すまない。我は力を受け渡したため、もう、眠りにつく。あとは任せた。巫女、リルよ」

「え？　ち、ちよいおまちなさい。力はどうやって使ったあああああ！　……」

祠が光ったかと思うと、私は、暗い森にいた。……そうですか、そうなんですか。

……やっぱり、力なんて、いらない！　もう拒んでやる！

第四十三話、契約（後書き）

さあ、やってまいりました作者のミーナです。今回はすこしリルたんが暴れました。

すいやせん。……さて、前回に続き、今回も昆虫種の魔物の紹介です。

え？ しつこいんじゃないかって？ かつかつ。わかっておりませんな。

まだまだ続くよ！ 多いんだから昆虫種！ ……とまあ、冗談はそこまでにして。

次回からは違う種類を書いていくことにします。もちろん、昆虫種は最後ではありません。では、どうぞ。

名前、ミラージュバブーン

種類、昆虫種

性別、不明

ランク、S

説明

はるか北の、魔族が住んでいる国ダラバスの近くに、突然現れる摩訶不思議な、魔物。姿が見えないため、姿かたちはわからないが、おそらく、足が六本、手が八本、という、すがただと思われる。ちなみに、倒したことがある人物は、世界に七人確認されている。

第四十四話、平和（前書き）

くあらずじく　暗い森に置き去りにされたリルは、そのまま、そこで待とうとしたが、やはりというか、魔物に出会って……

第四十四話、平和

リルside

黒い空、黒い木、黒い空間。んゝ、黒が好きなら、大歓迎ね。……
はあ。これからどうしよう、歩いて戻るにしても、暗すぎて道がわから
ないし、魔術を使おうにも、なぜか、魔術が使えないし。

……これもぜんぶ、あのもふもふが悪いのよ！ むうゝ むふむふ
なんか嫌い。これから、嫌ってやる！

……さてと、これからどうしようか。んゝ やっぱ、朝まで待
つかあ……。って、いまが、朝じゃん！

いままで、忘れてたけど、朝じゃん！ あのもふもふのところであ
ぶん、三十分過ぎたから、いまは、朝の七時ね。……え？ それ
だと、この森、いつも暗いつてことになるよね？ ……そういえば、
聞いたことがある、世界のどこかには、暗黒の森という森があるこ
とを。……じゃあ、私がいるのは暗黒の森なのね。

はあ。まったく、か弱い乙女を置き去りにするなんて、あのもふも
ふ。いつか、懲らしめてやる。

勇気か、無謀かか、は、わからないけど、私は進んだ。目をよく凝
らさないと見えない、木の面影おもかげを見ながら。

だいぶ進んだところで、少し休憩した私は、改めて、この森を見た。
――闇のメルにムスを強調するような森。時々、獣のような鳴き声
がして、いつ、襲われてもおかしくない状態だ。

……こういうときに、ここに来たように、足が動けばいいのに。で
も、そんな、都合のいいことは起こらない。分かっているつもり。
でも、起こって欲しいという、考えもある。たとえ、あれが、もふ
もふによる、力のせいだったとしても。

……さて、休憩も終わりにして、歩きだしますか。

「気合で、抜ける……！」

あはは、こんなに叫んだの初めて。ちょっと楽しいかも。だけど、叫んだのがまずかった。

その声に反応して、暗くても見えるような、赤い目を持っている生物に私は、後ろから襲いかかれた。

「くっ、出ると思ったんだよね、魔物ぐらい。光y」

……まずい。魔術がなぜか、使えないことを忘れてた！ やばい、やばいよ、このままじゃ、殺される。なんとかしなきゃ。なにか、いい方法は……。

「ナコ！」

「……アミオヒ、フタドヒニウナキ？」

「サエジ」

「……サエキ。ニリビセミニキテチ」

ふう。危ない危ない。思い出してよかった。お爺様に昔教わらなかったら、いま死んでたかも。

「人に、言葉があるように、魔物にも言葉がある。今から教えるのは、魔物が使う、“魔漸語”だ」

「“魔漸語”？ お爺様。なんでそんなの知ってるの？」

「ああ、それはな……」

おっと、眠っちゃってたか。仕方ないよね、いろいろあつて、疲れ
たんだもの。

ふああ、ふかふかのベッドで寝たい。ああ、でも、このまま、眠り
たいそして、そのまま、いい夢を……。

見えるはずないよね。こんな硬い岩の上じゃ。

あのあと、魔物を“魔漸語”で追い払ったあと、たしか、私は、そ
のまま、睡魔に襲われて、近くにあった、岩の上で眠ったんだっけ。
硬いにもかかわらず、眠るとか、私、どんだけ、眠かったのよ。
さてと、もうすこし寝たら、歩き出そうかなあ。

……ん？ 明るい。これは夢？ 誰かの声が聞こえる。たぶん夢ね。
だって、森は暗いもの。明るいはずがないわ。

「おい、おきろ、おい！」

「へにゃ？」

あれ？ どこかで見覚えがある顔だなあ。般若のような、怖い顔。
でも、どこか、優しい。

「……あああああ！」

「うるさい。人を指さして叫ぶな」

「だ、だってさあ」

なんで、こんなところにあんたがいるのよ、と。声を上げて叫びた
かったけど、やめた。こんな、顔されちゃ、だれでも言えなくなる
わよ。

「本当に、お前は……。勝手に行動しやがって。心配したんだからな」

ん？ 心配？ こいつが？ だれを？ 私を？ はっ、ありえない。こいつが、心配なんて……。

って、ちよ、なに、かつぎ上げてんのよ、こらああ！

でも、なんか、嫌じゃない。これが、安心感。こいつに抱くのはしやくにさわるけど、まあ、いっか。

このまま、寝よつと。

「ん？ なんか、急におとなしくなった。……はあ。よく寝れるよな、こんな場所で。まあ、いいか。こいつも、大変だっただろうし、好きにさせてやるか」

side out

ドレル side

バーム（巨人族の国）についても、まだ、寝てるこいつにため息をついた俺は、まず、食料の買出しに向かった。こいつ、朝から何も食ってないだろうからな。すこし、いや、だいぶ遅いが、昼食にするか。

なんせ、こいつを探し出すために、朝飯も抜いて、昼飯も抜いたんだ。腹が減って仕方ない。

金は有り余ってる。いくらでも買えるが、今回は、栄養が付くものを買うか。ぶつ倒れたら、俺が看病しなきゃいけないからな。……

あ？ 何を思ったんだ、俺は？ 看病？ こいつを？ 俺が？ ……

…最後まで面倒を見ると言いたいのか、俺は。……仕方ない。助けた俺が悪いんだし、面倒見るか。

ハバビシ草（十薬^{どくだみ}）のサラダか。あれは少々苦いが、仕方ない、こいつのためだ。

目の前の階段に堂々とする店に、書いてあった食べ物を読み、道具袋から、銅貨五枚取り出した、俺は、巨人族の中では珍しい、女の^{それもハバア}前にそれを置いた。

「……マイドアリ。デハコレヲ」
「ああ」

さて、幸せそうにヨダレを垂らして、寝てるこいつに、無りやり、ねじ込むか。くく、どんな顔をするんだろうな。

「むぐ……！ んう！ んう！ んんんんん！……！！」

「分かった。分かったから、殴るな。悪かったから。ほら、これ飲め」

まったく、なんで喉を詰まらせるんだか。……あ、俺のせいか。

「んく、んく、ぷはあ。……で、あんた、私に何した？」

「いや、何もしてない」

「ナンダト？」

「すまない、片言で聞きづらい。もう一回言ってくれ」

「なにをしたああああ、おまえはあああああ！」

殴りかかってくるのは、わかった。だから、俺は、こいつの足に足をかけて、転ばせた。

転んだ先の未来は分かりきってる。そう、顔面を強打して……。つて、おい。転ぶ瞬間のまま、止まったぞ。ある意味すごいな。

「き・み・は、な・に・を・し・た・の・か・な？ 返答次第では、殴るよ」

「あゝ、今日も平和だなあ」

「天誅^{てんちゆう}うつうつうつうつ！」

まあ、これが、平和というものなんだろうな。……さて、もどるか、宿屋に。

side out

第四十四話、平和（後書き）

はーい、元気？ 作者のミーナだよ。はい、すいません、テンション高いですね。
すいません。

……さて、今回は、違う種類の魔物です。たのしんでください。

名前、ウィンマウス

種類、獣類種

性別、オス、メス

ランク、D

説明

風を操るネズミとして、昔から、ミルなスタに住んでいる魔物。普段は、おとなしく、森の水辺や、高野に住んでいる。だが、繁殖期になると、荒れだし、見境なしに人や動物を襲い始める。これは、食料を集めるため、オスが行う行動である。

第四十五話、太陽から来る魔物（前書き）

くあらずじく 一日、また一日と過ごす中で、リルはあることに気づく。そして、それを、ドレルに話そうか迷っている間に、外から轟音が聞こえてきて……

第四十五話、太陽から来る魔物

リ
ル
s
i
d
e

なぐんか、おかしんだよね、私。走っても息があんまり、切れなくなつたし、ジャンプすると、ありえないほどジャンプできるし。はあ、あのもふもふに出会つてからだ。ドレル（名前を知らないのはどうかと思つて、一昨日おととい聞いた）には、言おうか言わまいか、迷つてるんだけど、どうしたらいいかなあ。

やっぱ、話したほうがいいかな。……でもなあ、信じてくれないだろうなあ、もふもふ、に出会って、力を貰ったっていつても、訳が分からなくなるだけだと思うし。はあ、どうしよう。このまま、秘密にしようかなあ。でも、いつか、バレるだろうし。……うがぁー、どうしたらいいんだぁ。

ドゴオオオオオオオオン!!!!!!

へ？ いま、外からすごい音が聞こえたよね？ よね？ え？ え
？ なんて？

気になった私は、ドアを開け、外に出ようとした。だけど、隣の部屋からドレールも同じように出てきたのを見て、一緒に階段を降りて（不本意だけど）宿屋のドアを開けて外に出た。

「これは……。まずいな。もうじき、バーンがくるな」

外に出た第一声がこれだった。……“バーン”？ なにそれ？ 冷や汗が誰が見てもあふれるように出ているドレルに私は、バーンのことを聞き出した。

- - “バーン”とは、魔物の名前のことで、五年に一回、太陽から現れる魔物だそうだ。

そーですか、はー と、言いたい気分だったが、あまりにも顔つきが真剣なドレルを見て、私はそれをやめて、さらに続きがあるようなので、ドレルの隣に立ちつつ、続きを聞いた。

- - “バーン”は、ランクがAらしい。それならば、ドレルが勝てるんじゃない？ と、未だに冷や汗を掻いているドレルに言おうとしたけど、やめた。だって、少し震えてるんだもの、怖がっているやつに言う私ではないわ。……さて、続きを聞こうかしら。待つてくれてるみたいだし。

- - ランクはAなので、誰でも勝てると思われるが、それは間違いらしい。バーンは、一個体から、十個体まであつて、一個体がAらしい。そう、一番弱い一個体ですら、Aなのだ、十個体となれば、

SSランクを軽く超える。そして、今回くると予想されるのは、八個体らしい。これを予測するのは、“星渡り”と呼ばれる儀式を行なっている“シュガット教”らしい。……だとすると、ドレルは“シュガット教”に入ってるのかな？ ……まあ、いまは、いいか後で聞けばいいし。さてと、で、なに？ この国には、“バーン”を倒せる人がいないの？ ……だめじゃん。終わりじゃん。この国おわりじゃん。逃げないのかな？ 逃げれば、助かるかもしれないのに。

「リル。お前だけでも逃げろ。俺は“バーン”を食い止めてみる」

「……やだ。私は逃げないよ」

「リル！」

「言葉を強くしても無駄。そりゃあ、私だって、逃げたいよ。でもね、助けてくれたドレルを置いていくわけにはいかない。これは今決めたこと。だから、私は残る。反対でもダメ。私は、ここに残る」

思いを伝えた私は、反対されるだろうと思っていた。だけど、ドレルは、何も言わずに、前をむいて、“バーン”がくるのを、待った。……これは、いいってことかな？ ……それだけでもありがたいよ、私を認めてくれたんだね？ なら、私も頑張らなきゃ。もらった力は使えないけど、頑張る。なにか、何かできるはず。

さあ、来るなら来なさい。“バーン”。私たちが（巨人族の男たちも）迎え撃ってみせる！

そして、一時間後、だれかが、空を見たことから、“バーン”が来たということが分かった。

- - いままで、なんの変哲^{へんてつ}もなかった太陽は、徐々に黒く、澄^すんでいき、いくら視力が悪くても、見えるまでに黒く染まった。

……来たのね、“バーン”。……あれが、そう、なの？ い、いくらなんでも、でかすぎるでしょ。

太陽と見間違えたじゃない。こ、これを、倒すの？ や、やっぱ逃げればよかったかなあ、あはは。

……余計なことを考えるな私。今は、“バーン”を倒すことだけを考える。……ふう。少しは落ち着いた。

さて、あの巨大な“バーン”を倒すには……。水、かな？ 炎を象徴する魔物って、さつき、誰かが言ってたし。

ん、でも、水の魔術なんて使えないしなあ。私は、光魔術でも、撃とうかな。効かないだろうけど。

- - 近くに見えるのに遠くにいる。昔、お爺様が言っていた言葉。今まさに、その言葉が当てはまる。

そう、近くにいると思って、魔術を放つても、届かない。そう、“バーン”は遠くにいる。

それを、周りにいる人たちに大声で伝えたあと、私は、魔力の密度を増やした。効かないだろうけど、念のため。

- - 硬い鱗（ノリ）をもったドラゴンは無敵か？ …… 否、同じところを攻撃されれば、いつかは、脆もろくなる。だから、同じところを攻撃していれば、いつか、あの硬そうな“バーン”の皮膚も壊れる。だから、私は、なんどでも魔術を放つ。

さあ、早く来なさい。私たちが追い払ってあげるから。

来た。それを発したのは誰であつたかわからない。けど、そんな些さ細さいなことは誰も気にしない。

なぜなら、来たからだ。そう、来た。もう、目の前にいる。なぜ、ここまで来るまで、皆動かなかったか？ それは、みんな、その風貌に怯えたから。私だってそう。遠くでも大きかったけど、近くで見ると、またでかい。怯えるのは、仕方ない。逃げても仕方ない。でも、私は逃げない。戦うと決めたから。さあ、戦いの始まりね。

まず、動いたのは、やはりというか、ドレルだった。その背中に背負った大剣を抜くと共に、“バーン”に切りつけた。だけど、あまりの硬さに弾かれて、ドレルは、反動で少し後ろに下がった。舌打ちが聞こえる。だけど、どこか嬉しそう。さっきまでとは違って変わって、楽しそう。

そう、何かを見つけた時みたいな顔。……ニルやミコトもこんな感じになるのかな？

……男ってみんなそうよね、強い相手を見つけると、戦いたくなる。負けてもなんどもなんども立ち上がって、リベンジする。もう、みんな戦闘狂ね。バトルジャンキー

弾かれた大剣を歯が欠けるのも気にせずに、ドレルは、思い切り、“バーン”に振りかざした。

だけど、弾かれる。でも、ドレルはあきらめない。にやっとしたかと思うと、彼は、大剣の柄つかの、穴にある赤い球体を押した。私は、何をしてるんだろうと思うたけど、次に起こったことで、わかった。あれは、前聞いたことがある、【アマリア】と呼ばれる物だ。

押したあと、その球体は、赤く光って、大剣の歯の部分に燃え上がらせた。すごい、わね。

でも、あれは、火属性。効かないんじゃないの？ わかってる。ドレルが、あれしか持っていないことは。

その火属性が宿った大剣を、切り続けて少しだけ、欠けた皮膚に切りつけたドレルは、また、にやっとしたあと、そのまま、突き刺した。だけど、弾かれる。さっきから、こればかりが起きている。

もう、ドレルの大剣は、ぼろぼろ。歯が欠けて、切りつけることは困難。だから、ドレルは、突き刺そうとした、だけど、弾かれた。もう、限界ね、あの大剣。素人の私でもわかる。あれは、次、切ったら、折れる。それを分かっているはずなのに、ドレルは、また、切りつけた。

そして、大剣は、折れた。“バーン”のあまりの硬さに耐え切れず、大剣は折れた。でも、ドレルが頑張ったおかげで、“バーン”の皮膚は、肉が見えるほどまでに、削れていた。さて、ここからは、私たちの出番ね。幸い、巨人族の男たちは、逃げなかったみたいだし、なんとかできるでしょう。

さて、頑張りますか！

まず、私は、剥げた皮膚の場所を正確に知るため、近づいた。“バーン”の攻撃を、もふもふに出会う前はできなかった身体能力で、かわし、“バーン”の皮膚を眺めるように見た。そして、一箇所だけ、ピンクの肉が見えるところを知ったあと、そこに、光りの印を付けた。光るバツテンがついた“バーン”を見た巨人族の男たちは、そこに、向かって突っ込んだ。

- - ある者は、そこに行き着けずに、“バーン”の反撃を受けて、吹き飛ばされ、ある者は、たどり着くが、あまりのでかさに、怯えて座り込んでしまったようだ。もちろん、私も、付けた印に向かって、魔術を放った。でも、もう少しで当たるところで、回転して、弾かれる。

……これじゃあ、ジリ貧ね。いつまで経っても当たらない。……なにか、なにか、“バーン”を止める方法があれば。

「くっ、リル。光の魔術で、なにか動きを止められる魔術はないのか？」

「な、ないわよ。少なくとも、私が知る中では」

そう、ない。中級魔術までしか使えないから、わからないけど、少なくとも、初級と中級にはない。

……風なら、風で包んで、動きを止められるかもしれないけど、生憎にくここには、使えるものがない。

どうしよう。このままじゃ、こちらが負ける。そしたら、この国は滅ぶ。……なんとかしないと。

「風の魔術さえあれば……」

いつの間にかつぶやいていたこの言葉に、ドレルは、「俺は使える」と私に言った。

「なんだ、使えるのか、なら、早く使いなさいよ」

「……わかった」

あれ？ でも、ドレルの髪と瞳って、金色だよ。風魔術なんか、使えないはず。……ん？ あれ？ そもそも、金色の髪と瞳を持っているって、ありえない？ だって、金色を象徴とする魔術なんか、ない。

じゃあ、ドレルが使えるといったのは、うそ？ ……いや、ちがうわ、だって、ドレル、は、詠唱をしだしてるもの。

「荒ぶる風よ、ここに集い、目の前にいる敵を拘束せよ。チェインウインド！」

- 虚空から現れた風は、ドレルの目の前で、集まったあと、そのまま、“バーン”に突っ込んで、鎖の形になったあと、“バーン”をその鎖で拘束した。

やった。今なら、攻撃できる。

「みんな！ いまよ！」

私の声に反応して、みんなは、それぞれ、武器や岩を構え直して、いつ動き出してもおかしくない、“バーン”のピンクの肉に向かって、攻撃した。もちろん、私も。

ザシュ！ ザシュ！ ドウーン！ バシュ！ シュワアアア！

「ブオオオオオンンン！！！」

耳を劈くような、“バーン”の鳴き声がしばらく、バーム（巨人族の国）に響いたあと、“バーン”がひときしり、暴れたあと、地面に思い切り、倒れた。

「ヤ、ヤッタ。ヤッタゾオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

まあ、そうなるわよね。私はあんまり叫びたくないけど、気持ちわかるわ。ドレルも叫んでるはず。

「！？ ドレル！ どうしたのよ、その血！」

「……大丈夫だ。なんでもない。気にするな」

「気にしないわけないでしょ！　なんで、血が口から出てるのよ！　白状していいなさい！」

思い切り、ドレルの襟首をつかんで、尋問？　した私は、「苦しい」というドレルの言葉によって、自分が恥ずべきことをやっているのだと気づいて、やめた。

「さあ、やめてあげたから、白状しなさい」

「……まあ、秘密にしとくわけにもいかないし、お前には話してお
くか。実はな……」

第四十五話、太陽から来る魔物（後書き）

さあ、やってまいりした、ミーナです。今日は、少し興奮して長めの文章になってしまいました。申し訳ありません。さて、今回は、前回に続き、獣類種の魔物についてです。
ではどうぞお〜

名前、アインツキヤット

種類、獣類種

性別、オス、メス

ランク、F

説明

猫が魔物化した存在。通常の猫より、凶暴性が増した。攻撃方法は、ひっかくか、かみつくなので、初心者傭兵にしては倒しやすい魔物だが、これのボスの、アインツキヤットキングには、注意しなければならない。一度攻撃してしまうと、リンクして、アインツキヤットが数十匹よって来てしまう。なので、通常、初心者が、キングを倒すことはない。

第四十六話、幽霊（前書き）

くあらずじく バーンを倒したリルとドレル。そして、巨人族の男
たち。

余韻よいんに浸って、祭りやら、パーティーを開いている中、怪しい人物
が、バーンの死体の元に近づいて、それを、ドレルが目撃して……

第四十六話、幽霊

ドレル side

まったく。こいつらは……。人間となんの変わりがないじゃないかよ。酒を浴びるようにのんで、つまみをつ食って、キスして。……。最後のはどうかと思うが（みてて気持ちが悪い）まあ、嬉しいんだから、いいか。

だってよ、あの、“バーン”八個体を倒したんだぜ。喜ばない奴はいないだろうさ。もちろん、俺も例外じゃない。だが、騒ぎ立てるようなことはしない。俺は静かに、喜んでいる。そう、心の中で。

……。ん？ リルがいないぞ。さっきまで、隣で、酒をぐびぐび飲んでたのに。……。どこ行った？

辺りを見渡して、あいつを探す。すると、向こうのテーブルの上で、男たちに称えられて、腰に右手を置いて、左手で、酒をぐびぐびのんでるあいつの姿があった。

……。はあ。まったく、何やってるんだか、あいつは。いまどき、男でも一気飲みはしないぞ。

あ、俺に気づいて、寄ってきた。

「デヨレル」 やんたも、どびなさよ」 んく、んく、ぷはあ」

「酒臭い。近寄るな！ 俺の半径五エト（メートル）から離れろ！」

こいつには、あのあと、はぐらかして、けっきょく、なにも、話していない。

「んく、んく、ぷはあ。びやだね」 プフフ」 よいではにゃいか」

もう、耐えられん！　俺は、酒が大嫌いなんだ！　酒臭い女なんて、もっと嫌いだ！」

蛇のように、くねくねしながら、俺に近づいてくる、リルを、避けて、俺は、一旦、外に出た。

「……ふう。やっぱり、酒の臭いがしない、外はいい。自然が感じられる」

ルークも、今頃、俺と同じように、自然を感じてるだろうな。あいつは、俺によく似てるし。間違いない。

……本当に、俺たちは、“バーン”を倒したんだな。……今回は、リルや俺がいたからよかったが、もし、俺らが居なかったら、おそらく、この国は、滅んだだろうな。今回は、ここにきて正解だった。……さて、そろそろ、もどる、か？　……誰だ、あそこにいるのは俺は、よく、人から言われる竜目で、“バーン”の死体の近くにいる男をよく見た。

- 黒い髪に、おそらく黒い目。流れるような長髪の男は、俺に気づいたのか、にやり、としたあと、そのまま、“バーン”の体に手を突っ込んだ。

な！？　あんな、硬い皮膚を、貫通した。……それも素手で。俺は、あいつが、何をしているか、ということよりも、あの、硬い皮膚に手を突っ込んだあいつが気になって仕方なかった。プラチナの大剣でも切れなかった、“バーン”の皮膚を、あいつは、いとも簡単に貫いた。そればかりを考える。

- 男は、ひときしり、“バーン”の体をまさぐると、何かを見つけたのかしらないが、また、にやつ、としたあと、手を引き抜いた。効果音が聞こえるほどに、手を引き抜いたあとの、“バーン”の皮膚は、柔らかかそうになっていた。

……土魔術でも使ったのか？　……いや、それにしては、あいつ、なにも詠唱していなかった。

……だとすると、俺が知らない技か。……確かめるか。あいつの技を。

あいつの力を確認するため、俺は、あいつのもとに全速力で、近くに落ちていた小石を投げつけた。

おそらく、鳥が全速力で飛ぶぐらいの速さ。だが、小石は、黒い男に当たることはなく、男の前で、何かにはじかれたようにあらぬ方向に飛んだ。

ありえないと思った。だって、あいつは背を向けていたし、気づいてさえいなかった。……それなのに、なぜ。

「っ!？」

それは、いきなりだった。俺があいつを見ていると、なにか、寒気のような、それで、突き刺さるような、痛みが襲ってきた。……また、か。もう、何度目だ、これ。喉から鉄のような味の液体が出てきそうになるのを、抑えて、毎回、我慢する。だが、今日はダメだった。あまりの辛さに、赤い液体を吐き出してしまった。

「ごほ、かは。くつ、はあ、はあ」

意識が朦朧とする中、俺は、押さえていた手を見た。手には、血がべつとりと付いていて、それを見ると、今度は吐き気が襲ってきた。

「ぐつ、あ。くつ」

ここで、出すわけにはいかない。ここは、いま、祝の場所だ。こんなところで、俺があれを吐き出してしまったら、台無しになってしまふ気がする。だから、我慢だ。我慢。耐えろ、耐えるんだ俺。しばらく、息を止めて、苦しいのを我慢したのがよかった。なんとか、吐き気が治まった。

ふう。やれやれ。まったく。【死菌】はこれだからやなんだ。増えたあとの効果が強すぎる。

「は！？　そういえば、あいつは……」

そりゃあ、そうだよな。もう、いないか。……しっかし、あいつ。何やってたんだ？　“バーン”のなかに、何かあったのか、それとも、何かを入れたのか。んゝ、わかんね。ま、ほっとけばいいか。俺には関係ないしな。さてと、もどるか。酒臭いけど。

????side

あいつ。俺を見ていた。俺が見える奴は、そうそういない。なぜなら、俺は、幽霊だからだ。

それも、竜人の幽霊。普通のはやつに見える訳がない。だとすると、あいつは、陰陽師か、竜人だな。

陰陽師は、【日本】にしかないし、なにより、陰陽師なら、すぐに俺を成仏させたはずだ。

……だとすると、竜人、か。……だが、髪の色は金色だった。竜人の上位種の金竜の色を象徴する色だが、あいつが、金竜だという、可能性は低い。なぜならば、金竜は、はるか昔、五百年前に滅んだからだ。

一般には、竜人の髪と瞳は金色とされているが、あれは、間違いだ。竜人の髪の色や、瞳は、竜化したときの、竜の色で決まる。俺はもう、竜化できないが、闇竜がもつ、念力は使える。あいつは俺に向かって投げた石が違う方向に突然飛んだと思っているようだ、違う。あれは、俺が念力で、吹き飛ばしたんだ。

まあ、あいつが驚いた以上、あいつは、竜人という選択肢から外れた。おそらく、髪と瞳は、突然変異で出来たものだろう。……さて“バーン”からとれた心臓を使って、あいつを助ける薬をつくらなくては。

本当に今日はラッキーだ。なにせ、探し求めていた“バーン”を見つけたんだからな。

……これで、これで、あいつが救える。待ってろ、俺が薬を作っていま、もってってやるから。

幽霊なので、俺は、空を飛ぶことができる。この移動法は、非常に便利だ。なんせ、障害物がない。

だから、素早く移動できる。生きていた頃の記憶はないが、幽霊になって本当によかった。

まあ、食物や遊びなどはできないから毎日暇だけだな。でも、あいつに出会ってから、毎日が充実してる。だが、あいつは、二年前、病で死んだ。だから、俺は、“蘇生の薬”をつくる。禁じてられようが、幽霊の俺には関係ない。あいつを生き返らせるために、俺は、ここまで来たんだ。だから、はやくほかの素材を集めなくては。

……次に集めるのは、イクシオンの角、か。これは楽だな。飛ばすとするか。次は……。エンシェントドラゴン（古代竜）の翼。……これからやるか。確か、こいつは、樹海の奥深くにいるはずだ。さて、ひとつ飛びしますか。

第四十六話、幽霊（後書き）

あはは、どうしよう、キーボードのスタートボタンが壊れちゃった。

……まあ、使わないからいいんですけどね。

……さて、今回は前回に続き、獣類種の魔物です。さあ、どうぞ。

名前、ハブルスネーク

種類、獣類種

性別、オス、メス

ランク、E

説明

蛇が魔物化して、生まれた存在。本来の蛇とは違い、卵を産むのではなく、口から、赤ん坊を生んで、育てる。繁殖期意外は非常に臆病で、近くに人間がいるだけで、逃げ出してしまふ。だが、ランクはEと、そこそこ高い。その理由は、ハブルスネークがだす、フェロモンによって、人がおびき出されて、食べられるため。

第四十七話、巨大な悪魔（前書き）

くあらずじく 悪魔王ニルは、今日も新しい法律を作ったり、デスエナメルを集めていたが、その途中、巨大な悪魔に出会って……

第四十七話、巨大な悪魔

ニルside

「さあ、ニル様。今日も仕事をしてもらいますよ。まず、はじめに、三十個めの法律を作ってもらいます。よろしいですか？」

「ああ」

はあ。王というものは楽ではないな。毎日毎日、仕事だらけだ。……休みという日はないのか？

まあ、王なのだから仕方がないか。……さて、今回はどのような法律を作ろうか。

王が絶対の法律？ 否、それでは民衆の反乱を呼ぶ。ならば、民主主義の法律を作るか……。

いや、それでは、貴族や伯爵の反乱を呼びかねない。……むう。やはり難しいな。法律というものは。

既に作った三十の法律は、ミュークが作ったと言えるものだ。……やはり私には才能がないのか？

デスエナメルや村を回することは出来るのだが、政治ができない。これでは、貴族などに甘く見られてしまう。どうしかせねば。……さて、それは、とりあえず、村を回っているときにでも考えるとして次は【デスエナメル】だな。これは、楽なのだが、なんとも、魔物がかわいそうに見えてくる。精霊でもいいのだが、生憎あいにくほとんどの精霊は、精霊界にいるとのことだ。本当は精霊が一番【デスエナメル】が出やすいらしいが、まあ、いないなら仕方がない。さて、ミルなスタに降り立つとするか。

ミュークが、ゲートをくぐる私に何か声をかけようとしていたが、私はそれを無視して、ゲートをくぐった。

やはり、自然はいい。なぜか、懐かしく感じる。……さて、満喫したところで、手頃な魔物をさがすでしょう。

- ウィンマウスか。あれは「デスエナメル」が出る確率が低いからパスだな。

- ハブルススネーク。これもダメだ。【デスエナメル】があんまり出ない。

……やはり、この森には、デスエナメルが出やすい魔物はいないかならば、違つところに行くか。

空を飛び（羅術を使えばなんのことはない）気配が強いところを探して、一時間ぐらい経った頃だったか、私は、同胞の気配を、下の

洞窟に感じた。

……なぜ、この世界に悪魔がいるのだ。……そうか、召還魔術を、誰かが使って、呼び出し、そのまま、悪魔は願いを叶えたあと、なぜか、帰れずに、さまよって洞窟にたどりついたということだろうか。

私の役目は、下にいる悪魔を無事に、悪魔界に戻すということだろうな。“同胞は助けねばならない”。

これは、法律の三番目だ。それは、悪魔王でも例外ではない。……さて、行くか。

洞窟の入口に降り立った私は、まず、周りに生物がいないか確認した。これは、ゲートを作るとき、周りに生物がいるとそのせいで、

ゲードの行き先が変わるからだ。もちろん、悪魔は生物には分類されない。

……いないな。さて、同胞は、なかで何をしているのだろうか。何をしていても、連れてかえることは変わらないが、気になる。ここでないにしているのやら。物音は聞こえないし、なんの臭いもしない。

……寝ているのか？ いや、悪魔は眠らなくても生きていける。だから、眠る物好きはいないはず。

……まあ、寝ていてもそのまま、連れて帰るだけだな。

洞窟を進んでいくと、辺りはやはり、真っ暗だった。外の光を完全に遮断して、暗黒の闇を作っている。……ほう、ミュークなら飛んで喜ぶなこれは。私は黒は嫌いなのだが、まあ、我慢するでしょう。同胞を見つけるためだ。

悪魔は、闇の中でも目が見える。なので、私は光など使わなくても、前が見える。

迷路のように続く道をしばらく進んでいくと、広いところに出た。そして、周りに落ちていた本を手を拾うと、私は目を見開いた。これは……。悪魔召喚に使うとされている“魔道書”。なぜ、洞窟の奥にこんなものがあるのだ。……誰かが、持ち込んだとしか考えられない。だが、なぜこんなところに……。

ん？ あれは……。遠くに、なにか、黒いシルエットが見える。それも、ものすごく強大な。

あれから同胞の気配がするな。……しかしあんな巨大な悪魔は見たことがない。私もミュークも人ぐらいのサイズだし、なれるとしたら【羅術】しかない。……だが、王でもない悪魔が【羅術】を使える訳がない。

……だとすると生まれつき、体が大きいということか。……さて、考えても仕方がない。あいつを起こして、ゲートをくぐり、悪魔界

の戻らなければな。

そして、巨大な悪魔のもとにたどり着いた私は、近くで見るとこの大きさにびっくりした。

でかい。ただそれしか言えない。でかすぎる。これも当てはまる。

……こいつをどうやって起こそうか。

【羅術】は封印しているから使えない。……だとすると、魔術でもぶつけて起こすしかないな。

さて、悪魔は魔術の耐性を持っている。並大抵の魔術では通用しない。……上級魔術を使うか。

だが、それでは、この洞窟が壊れてしまいそうだ。……お、そうだ。風の魔術を使つて。

こいつを浮かせて、入口まで、運ぶというのはどうだ？ ……我ながらいい考えだ。これならば、できる。

念のため、詠唱をして、風の魔術を発動した私は、空気が、巨大な悪魔の下にたどり着くのを確認したあと、そのまま、入口に近いほうの、ところに走った。風に押されて、巨大な男が入口にたどり着くのを確認したあと、私はそれに続いて、洞窟に入口に向かった。

やはりというか、外に出た私は、あらためて、こいつのでかさに驚いた。ここまで、大きな生物は、魔物のドラゴン種ぐらいだ。それにこいつ。巨大なわりに、やせ型だ。ここまで、でかいと太っているようにも、見えるが、わかる奴にはわかる。こいつは、やせ型だ。……さて、余計なことは、もう終わりにして、こいつを、ゲートに押しこむか。

まだ、効果が続いている風の魔術を使って、即席のゲートに押し込んだ私は、それに続いて、ゲートに入った。

やはり、ゲートをくぐった、巨大な悪魔は、ミュークによって、小さくされた。こうなることは分かっていたが、なんとももったいない。この悪魔さえ、優しくれば、門番に適していたものを。まあ、こんな巨大な悪魔がいたら、民衆は驚くだろうがな。……さて、今日は疲れた。悪魔は普段寝ないが、寝ることにしよう。明日も仕事だ。めんどくさいが王の仕事だ。これは遂行^{すいこう}しなければな。

第四十七話、巨大な悪魔（後書き）

さて、更新が遅れてしまい申し訳ありません。実は、祖母が死んでしまったのです。

悲しいですが、いつかはこうなると予測しておりました。まあ、仕方がないことです。

人間はいつかは死ぬのですから。……さて、シリアスはここでおしまいにして、今回は、前回に続き、獣類種の魔物です。では……どうぞ

名前、ディラング

種類、獣類種

性別、オス

ランク、B

説明

この魔物を見たら、生き残れないとまで、言われた、日本でいう虎みたいな魔物。

非常に^{しめんどく}獰猛な正確で、非常に九角がいい鼻で獲物の臭いを感じ取り、そこに、俊足の足で向かい、獲物を狩ることから、別名、スピードハンターと言われている。

ランクはBだが、Aランクの魔物ぐらい、たやすく殺してしまう。

第四十八話、初代悪魔王（前書き）

くあらずじく 巨大な悪魔を悪魔界に送ったあと、ニルは、悪魔界で、その悪魔が目覚めるのを待ったが、一向に起きなかった。だが、その悪魔の耳にピアスがあることが分かって……

第四十八話、初代悪魔王

ニルside

ずいぶんとまあ、よく寝られるものだ。もう、五時間は経過したぞ。

……まさか、こいつ。死んでるのか？

……いや、息はある。だとすると……。ただ眠っているだけということになる。いままで、誰も気付かなかったのだから、おそらく、ここ最近に眠ったのではないのだろう。私が王に主任する前から……。

いや、ミュークが王になったときにでも眠ったのだろう。……寝すぎだ。眠りすぎてここまででつかなくなったのか？ ……いや、いくらなんでもあそこまで大きくはならないだろう。今は、私と同じくらいだから、あまり気にしていなかったが、元の姿になったら、この城の天井まで、立ち上がればかるがるたどり着くだろう。それほどまでにあれは大きかった。もし、肉弾戦にでもなろうなら、確実に私は負ける。

まあ、そんな機会はないだろうがな。……さて、こいつをどうやって起こそうか。ミュークに頼んでもいいが、王たる私が、部下に頼むのも、恥らしい。ならば、自力で起こすしかない。……だが。こいつに、魔術を放つても効かないし、物理も効かない……。どうしろというのだ。……なにか、弱点さえあれば。

ん？ あれは……。ピアス、か？ なぜ、あんなものが、あるのだ？

ピアスから禍々（まがまが）しいほどの魔力を感じた、私は、危険だと分かっている、近づいて、そのピアスに顔を近づけた。

「これは……。魔力の塊かたまりか？ だが、なぜ、こんなところに……」

私が疑問に思ったとたん、そのピアスは、私に反応するかのように、
禍々しく光だし、私を取り込もうと、吸い込んできた。

くっ、吸い込ま、れる！？　だ、めだ。逆らえない。く、お、おお。

目を開けると、写ったのは、果てしなく続く地平線だった。……なぜ、こんなところに私がいるのだ？
確か。ピアスに近づいて、それで……。

- - 取り込まれた。

……まず、第一に、ここがどこなのかを探るべきだな。- - 果てしなく続く、地平線。見覚えは、ない。

誰かの精神世界だろうか？　その誰かは、あの巨大だった悪魔だろ

うが、ここに当人がいないのでは、わからない。……第一、私は精神世界に来たことがない。あそこは、死に際や、精霊と契約することとで、初めて入れる。……ん？　だとすると、私は例外的なことでここに入ったのか？　……ふむ。よくわからないな。仕方ない、まずは、ここを出る方法を探そう。

だが……。果てしなく続く地平線を歩く、馬鹿な私ではない。まず、私がおこなつたのは、魔術が使えるかどうかだ。

「土よ！」

ズシャア

ふむ、魔術は使えるのか……。ならば、あるかわからないが、この世界の切れ目に魔術を放てば、あるいは……。

それにはまず、切れ目を探さねば。……だが、この広い世界を回るのは、あまりにも時間がかかる。

それに、もし、道を迷ったら、途方に暮れてしまう。それは避けねば。

さて、考えるのはここまでだ。まずは、壁がないか、確かめよう。結界というものには、壁がある。

ならば、この世界にもあるはずだ。精神世界は、主に結界で作られているのだから。

……ダメだ。ない。壁がない。どこを触ろうとしても空気を触ってしまう。これでは、ここから、でられない。……【羅術】があれば。いや、だめだ。あれは、万能すぎる。あれを使つては成長できない。

……どうするべきか。……誰もいないこの空間では、人を頼ることはできない。

- 困っているのか？
- 誰だ、私の頭に語りかけてくるのは。
- 我か？ 我は初代王だ。
- 初代？ 馬鹿な、ありえない。初代は死んだはずだ。
- だが現に我はお前に語りかけている。これが証明だ。
- ……だが、初代は、神々に殺されたはず。
- まあ、あの時、我は混乱した。そして、ありえない考えを思いついた。
- 罪悪感から、自ら、防御陣を解いた。というところだろうか。
- そう、あの時、我はそのことを考えてしまった。そして、解いたとたん神々の猛攻にあった。
- なら、なぜ、初代が私に語りかけている？
- ああ、それはな……。

side out

初代悪魔王 side

神々の猛攻にあった私は、もはや虫の息だった。だが、神々は、まだ私が生きていると知らずに、悪魔界から立ち去った。

「くっ、ごほ。な、なぜ、我はあんなことを……。ぐっ。我はどうしてしまったというのだ。あんなことを実行するなんて……」

しばらく、息を荒々しく吐きながら、我は上をむいた。そこには、我が住んでいる城がある。もちろん、妻や子供もいる。……我は、あいつらを守るのではなかったのか？　なぜ、こんなところで死体のように倒れている。……一瞬でも、あいつらをどうでもいいと思つと我は、恥ずべき存在だ。……だが、もう、この体では、立ち上がることもすらできない。テラ。ミューク。すまない。我はもう、ダメみたいだ。

だが、死んだ我を忘れないで欲しい。父さんは、死んでしまったが、心配しないで欲しい。神々は、もう、滅亡^{めつぼう}に追いやった。神がせめて来ることは、ここ何百年、ない。

ふう。もう、目が霞^{かす}んできた。手や足には力が入らない。もう、終わり、だな。

思い返せば、我は休むということをしなかった。毎日毎日、神々を殺していった。……我についてくるものはいたが、一部を除いて、死んでしまった。最初、我は、神々という存在を知ったとき、“神界”に、乗り込み、破壊したな、はは。あの時は、警備が手薄だっ

たため、なんとか出来たが、もし、あの時警備が万全だったら、我はここまで来れなかっただろう。……だが、生きるということも、もはや、これで、終わりだ。後悔、は、ない。あるとすれば、最後にせがれや妻の顔を見れなかったことだろう。さて、もう、眠くなってきた。悪魔は寝なくても生きていける。だが、死ぬときはこうも眠くなるのだな。……。

「……さ……ま。……さま！」

はっ！

「くっ、お前は？」

「はい、私は、ドリエルと申します。伯爵悪魔です。今宵は、あなた様を助けに来ました」

……そういえば、先程まで、力が入らなかった腕に力が入る。それに、全身から力がみなぎってくる。

これは……。なんだ？

「気になりますか？」

「当たり前だ。我の体はどうなったのだ？」

「はい、実は、あなた様の体はもう、手を付けられませんでした。

……ですが、転生ということはできます。今、あなた様は、魂です。体とは切り離された存在。ですから、力が入るのです」

「そうか……。ご苦労。で、このあと、我はどうなるのだ？」

「はい、あなた様にはこのあと、適正者が現れるまで、転生してもらいます」

「そうか……。よくやってくれた。次出会うとき、我はお前を側近にしてやろう」

「はっ。ありがたき幸せ」

む、体が光ってきた。これが、転生か……。ドリエルによると、適正者が現れるのは、百年後か二百年後らしい。……まあ、いいだろう。ここまでやってくれたんだ。文句はいえない。

「さあ、行つてらっしゃいませ。いつか会えることを願っています」
「ああ、そうだな」

そして、光が絶頂に達したとき、我は消えた。

side out

第四十八話、初代悪魔王（後書き）

うー、疲れた。最近肩こりがひどくて、キーボード打つのに、苦
勞しますw

さて、今回も前回に続き、獣類種の魔物です。……ではどうぞ。

名前、レイトル

種族、獣類種

性別、オス、メス

ランク、B

説明

四本足で立つ、狼が魔物化した存在。足は四本から六本に増えており、牙や、爪も狼より、鋭利になっている。獲物を見つけると、その鋭利な爪で引き裂いたあと、その鋭利な牙で硬いウロコを持っている生物でも貫き、肉を食らうという。その獰猛な正確から、別名、キラーと呼ばれている。

第四十九話、修行（前書き）

くあらずじく　話を聴き終えたニルは、ある疑問を抱く。それは、なぜ、自分に話しかけられるのか？　なぜ、力を貸してくれるのか？　というものだった。

第四十九話、修行

ニルside

（「と、いうことだ」）

……転生、か。神がいるのだからそれもあり得るだろうな。まあ、やりたいという気持ちはないが、見てみたい、という気持ちはある。……さて、大方わかったが、まだ、わからないことがある。

- -なぜ、私に話しかけるのだ？　ありえないだろう。転生をしたということなのだから、ほかの生物に移っているはず。……ありえない。いくら、初代悪魔王だとしても、限度がある。まあ、他の者が、【羅術】を使えば出来る可能性はあるが、【羅術】を使えるものは、私は抜かして、ミュークしかないはずだ。

だが、ミュークは、初代……。父親は、死んだと聞いているはずだ。死んだ者と接触など出来るはずがない。……だとするとなんだ？　まさか、初代は偶然私にたどり着いたということか？　……いや、いくらなんでも確立が低すぎる。その線は薄い。……本当にわからない。それに、まだ疑問はある。

- -なぜ、私に力を貸してくれるのか、だ。先の疑問のように、なぜ、私に話しかけるのか、という疑問のように、これも、同じようなことが当てはまる。なぜ、知りもしない赤の他人を助けるのか？　それが気になって仕方がない。もし、もしだ。私のことを知っていて、困っているから助けようなどと、思う人はいるのだろうか？　……否、赤の他人を助けるのは、よほどの、善人か、馬鹿が当てはまる。……初代は、おそらく後者だろうか。失礼だと思うが、そう、思っても仕方がない。話を聞く限り、初代は、善人という訳ではなさそうだ。だとすると、やはり、馬鹿、ということになる。……本当に失礼に当たるようだが、思わせてもらう。初代は馬鹿だ。

「（む、貴様。いま、失礼なことを考えなかったか？）」

「（いえ、そんなことは……）」

「（その沈黙はなんだ？ …… 本当に、失礼なことを考えなかっただろうな？）」

「（い、いえ、…… はい、考えました）」

怖い。姿が見えなくとも、その声で、怖さがわかる。思わず、本当のことを言ってしまったが、他に誰が、違うことができようか。…… 誰でも畏れて、真実を言ってしまうに違いない。これは確信だ。…… まだ、体が震えている。これが、初めて、上の存在を知ったときにかかる、震えか。

「どうした、体が震えているぞ」

「！？」

な、なぜ、姿も見えないというのに私のことがわかるのだ。…… いや、初代ならできて当たり前、か。

おそらく、私の姿が見えなくても、感じ取れる、ということか。ふむ。さすが初代だ。格が違う。

……これが、ミュークの父親。…… 本当に、ミュークが息子か？ という疑問を抱かずにはいけない。

それほどまでに、初代は、すごい。見えなくてもわかる。……さて、何か言おうか、それとも、このまま黙っているか。迷うな。ミュークなら前者を選ぶだろうが、生憎あいにく私は初代と話すのは初めてだ。緊張する。

「（緊張しているのか？ これぐらいのことです。情けない）」

「（いえ、ただ、あなたと話せることが嬉しいのです）」

もちろん、嘘だ。本当は吐いてしまいそうなほど緊張している。だが、現悪魔王の私が、ここで、それを悟られるわけにはいかない。だから、私は、あくまで冷静を装う。たぶん、初代は気づいているだろうが、あちらがそのことを話さない限り、私は冷静でいる。

「（……まあ、いいだろう。で、お前は、困っているのだろうか？）」

「（はい。実はここから出られないのです）」

「（……なぜ、ここに来たか、を話してくれ）」

私は、全て話した。洞窟で巨大な悪魔を発見して、悪魔界に連れてきたこと。そして、ミュークが彼を小さくしたこと。そして、私が彼を起こそうと、いろいろ試したこと。そして、彼の耳にあるピアスを発見して、そのまま、それに取り込まれたこと。全て話した。そして、初代はそれを聞いたあと少し考えたあと、私に色々と説明してくれた。

- - なんでも、あの悪魔は、初代の時代^{けいだい}のとき、初代の家来^{けらい}として働いていた悪魔だそうだ。

で、あの悪魔は、数百年の時を経て、あそこまで成長したらしい。名前は、ドラゴリスというらしい。彼の耳にあるピアスは、初代が渡した、“時空倉庫”になるピアスらしい。

さて、そうすると、私は、“時空倉庫”に取り込まれたことになるな。……むう。説明を聞く限り、外にいる彼が起きて、ピアスを使わない限り、私はでられないではないか。……はあ。全く。なぜ、ピアスは発動したのやら。大昔のものらしいから、誤って発動するのは仕方ないが、いくらなんでも、私を取り込まないでくれよ。はあ。

「（物は相談なのだが。貴様。ここで、修行する気はないか？）」

「（は？）」

「（まあ、別に強くなりたくないならいいのだが）」

――【羅術】を封印した私では、今、ミュークに劣るだろう。それに、神と戦うにしても、私は足でまといになりかねない。……強くなりた。神にも勝てる力を得たい。

「（して、どのような修行をすればいいのだ？）」

「（まあ、簡単だ。まずは二十四時間、座禅ざぜんを組んでもらう）」

座禅？ それで強くなるのか謎だが、まあ、初代が言うことだ、何かあるのだろう。

やることを決めた私は、初代の言うとおりに坐禅ざぜんを組んで、目を瞑つむった。

「（さて、我は貴様にあらゆる情報を送るとしよう）」

ん？ 今何か聞こえたような……。気のせいかな。

途中、挫け^{くじ}そうになった事もあったが、なんとか、私は二十四時間？（闇鏡（鏡に映る時間で見える）がないのでわからない）

「（まあ、よくやったな。褒めてやろう）」

「（で、何か変わったのか？）」

「（頭を探ってみる。変わっていることがある）」

……お、これは。これまで、ミルナスタや悪魔界で、起こった、出来事が全て、頭に中に入っている。
すごい。ただ、これしか言えない。まさか、ここまでの情報が……。

「（これを全てつぎ込むには、貴様が長時間集中する必要があるのだ）」

そうか、だから、坐禅を組んだのか。なるほど。……ん？ これはっ！？ まさか、こんなことが……。いや、これぐらいないとおかしい。だが、しかし。こんなことが……。

「（どうした？ まさか、あのことでも知ったか？）」

「（……………）」

「（まあ、驚くのは仕方ない。そう我は、――神の血が二分の一入っている）」

……それぐらいないと、初代の力の説明がつかないからな。あまり、

驚きはしない。さっきは少々驚いてしまったが、あれは仕方ない。
……さて、修行はこれでおしまいか？

「（さて、まだまだ修行はある。覚悟しておけ）」

さて、次はどんな修行なのやら、気になるな。

side out

ミュークside

ニルが居なくなつた。それを聞いたのは今から二時間まえだ。
……

くくつ。消えたかニル。

王に仕事から逃げたな。くくつ。これで、これで、我は王に戻る。くくくつ！ ははは！ ふはははははは！……！！！！！！

「ミューク様。ニル様はどこへ行ってしまったのでしょうか」

「知らん。知りたくもない。……ドリエル」

「はい、なんでしょうか」

「貴様は……。いや、なんでもない」

「？」

親父の側近だったこいつを、解雇する必要は、ないか。まあ、次ニルのことを話でもすれば、解雇するけどな。くくく。

さあて、民衆共を𦏧なぶって我を王にしてもらうか。くくく

side out

第四十九話、修行（後書き）

さて、ここで皆さんにお詫びを申し上げたいと思います。実は、5話の、*イースの勇者* part 2は、この話の後に書こうと思っていた話なのですが、予約投稿を間違えて、この話の前に投稿してしまいました。申し訳ありません。そして、度々申し訳ありませんが、今回のあとがきはなしです。書こうと思ったのですが、今日祖母の仏壇がやっと見つかったので、これから、埋葬してきます。みなさんには申し訳ありませんが、今回はナシとさせていただきます。では、また会いましょう。

* イースの勇者 * part 2 (前書き)

さ、さあて、今回は少し前に書いたイースの勇者PART2です。
正直、この話はかくのが疲れます(汗)ま、まあ、いいか。さて、
ではどうぞ。

* イースの勇者 * part 2

これは、イースが天使に出会った時のお話。

- 君は、誰？

イースは、目の前の女性のあまりの美貌に、すこしたじたじになりながら、問いをしました。

実はイース。両親から、天使は、悪いことをしたときに現れて、罰を与える、教えられてきたのです。

だから、イースは、内心、ときどきしていました。まさか、自分の前に現れるなんて、イースは思いもしませんでした。なぜ、イースが相手を天使だと認識してるのかというと、実は、ミルナスタでは、天使は、頭の上に輪っかを載せているからなのです。だから、イースも天使だとわかりましたが、なにせ、唐突ていっせつに現れた天使。誰でも、問いをかけたくありません。相手が天使だと分かり、満足するために、イースは問いをかけたのです。

そして、少し経ったあと、天使は、イースの問いに笑顔で答えました。

- 私は、天界より参りました、天使、と呼ばれる存在です

やっぱり。これが、今、イースが思っていることです。これから、どんな罰が待っているのだろう。

イースはただ、それだけを考えていました。

- 痛いのかな？ それとも、苦しいのかな？ まさか、痛みも感じないほどの罰……。

イスは、笑顔で自分を見てくる天使が、悪魔に見えてきました。誰が見てもわかるほど、イスの顔色は悪くなってきていました。天使は、突然、顔色が悪くなってきたイスを心配しましたが、声をかけようとしたとき、イスまた、問いをかけてきました。

- - どんな罰なんでしょうか？

いきなり訳の分からないことを聞かれたら、天使であろうとも、は？ という間抜けな声を出してしまいます。イスは、目をつぶり、どんな罰でもうける、と決心を決めていました。が、天使がやさしく、頭をなでると、次第にイスは、目を開けて、信じられないにも見るような目で天使を見ました。

- - 罰などありません。あなたは、善意ある人なのです。罰などあるわけがありません。

イスは、この言葉を聞いて、いい意味でのため息をつきました。天使は、それを見て、何か勘違いしてたんじゃないかな？ と思いました。が、あまりにも嬉しそうなイスを見て、のどに詰まらせました。

ここで、イスはひとつ疑問に思いました。

- - じゃあ、なぜ、僕の前に現れたの？

イスは、天使が他にやることなど、知らないのです、わかるはずがありませんが、歴史を調べている人ならわかるでしょう。- - はるか昔、戦争が絶えなかった頃、ひとりの、若く、善意ある少年に、天使と呼ばれる存在が力を与えました。名を、【勇者の光】。この力を受け取った少年は、しばらく力の使いかたを練習したあと、戦

争に出向きました。そして、その少年は、一人で、敵を滅亡に追い込みました。

そして、その少年は、そのあと、糸が切れたように、静かに、誰もいないところで、亡くなりました。

そう、いま、天使が現れた理由は、イースに力を与えるためなのです。

- - あなたに、力を与えるためにここにきました。

- - 力？

- - そう、力です。今から少し経ったあと、ここ、ミルナスタに、魔族が放つ、魔物の軍団が、攻めてきます。あなたには、与えた力で、その魔物の軍団を倒して欲しいのです。ですが、その力は、信頼できる仲間がいないと、一割しか発揮されません。ですから、仲間を作ってください。

そう、【勇者の光】は、単体では、騎士程度のちからしか発揮されない。その理由は、勇者は、仲間と共に旅をするもの。なので、神や天使は、それに基づき、【勇者の光】に枷をかけたのです。

- - 仲間がいないと、力が発揮されないように、と。

しばらく、イースは悩みました。

- - 僕にできるのかな？ でも、僕しかできないなら、やるしか…。

天使はひとつ忘れていた、と、慌てて、悩んでいるイースに声をかけて、説明をしました。

- - 勇者は、目的を果たしたあと、数日で、死にます。その理由で

すが。通常、人には、勇者の力を使いこなすことはできません。ですが、我々、天使や神が、プロテクトをかけることで、力の反動を防いでいます。

ですが、プロテクトは、目的を達したとき、壊れてしまいます。これは、目的を果たしたあと、その力を乱用させないために壊れるのです。そして、プロテクトが壊れたら、今まで防いできた反動が、すべて、自身の体に、来ます。ですので、人は、耐え切れず、死んでしまうのです。

悩みに悩んだあと、イースはある条件と共に、それを受け入れました。その条件というのは、僕が死んだあと、仲間に、恵みを与える

もちろん、天使や、神が人に力を貸すのは、あまりないことですが、今回は仕方なく、天使はそれを受け入れました。

- - では、力の受け渡しをします。私の十字架に手を置いてください。

- - こう？

イースは、女性に触ったことが、母親以外ありません。ですから、すこし赤面しながら、静かに触りました。

- - そうです。では、始めます。

急に、天使から声が聞こえなくなったイースは疑問に思い、天使の顔を見上げました。すると、そこには、手を合わせ、何かを祈っているような天使の姿が見えました。そのとき、イースは初めて、恋をしました。

一目惚れというものです。ですが、天使と人には天地がひっくり返っても、愛というものは、育はぐまれません。その理由は、人の寿命が

短いということもあるのですが、他に、天使には天界での仕事があるため、という理由もあります。まだ、九才なので、初恋は仕方ありませんが、天使に初恋してしまったのは、稀です。

静かに祈りを捧げている天使は、しばらく経ったあと、口を動かして始めました。イースは、聞き覚えのないu歌に混乱しましたが、静かにそれを聴き始めました。

ゼッテュ ムユ クォハ プット クデス ラトジ プル
Z T U M Y U K O H B U T K D S R T J P U R
テド ゼッテュ ブルク ヴィユ ヨキユア オユン タス
T E D Z T U P R K V Y U W Q A O U N T A S

聴いていて非常に心地いい歌に、イースは、ずっと聞いていたいと思いましたが、それは叶いません。

なぜなら、もう、歌が終わってしまったからです。少し名残惜しい気持ちもありましたが、イースは、目を開けた天使が、もう、いいですよ。と言ったので、慌てて、十字架から手を離しました。

- - さて、第一段階は終わりました。次は最終段階です。

- - ? もう、終わりじゃないの？

- - はい。実は、次が重要なのです。私に続いて、言葉を発してください。

イースはついていけるか心配でしたが、天使が笑顔でこちらを見てくると、安心して、集中できました。

- - では行きます。……我、混沌の世を救うために、天使から力をもらい受ける。その天使の名は、クレア。

力を継承し、力を得る者の名は、イース。これより、継承を始める。

……ヒュリィキルマ。

- - - - - 我、混沌の世を救うために、天使から力をもらい受ける。
その天使の名は、クレア。
力を継承し、力を得る者の名は、イス。これより、継承を始める。
……ヒュリイキルマ

互いに、目を合わせながら、言葉を紡いだのが、よかったのか、イスは間違えずに、言葉を発することができました。
そして、少し経ったあと、イスの体を光に包まれました。クレアですら、目を瞑って光を遮ろうとするほどの光です。普通の光ではありません。これが、【勇者の光】です。

そして、光が弱まり、クレアが目を開けると、イスの背中には、ひと振りの白く輝く大剣があり、体には、白く輝く防具。がありました。大剣の名は、レジェンドオブソード。防具の名は、レジェンドオブプロテクティブ。これらは、勇者になったとき、召喚される武具なのです。絶対に壊れず、絶対に錆びずに、絶対に切れて、絶対に守る。まさに、最強の武具。イスは剣士と認識されたようです。他に、レジェンドオブスタッフや、レジェンドオブマグリスなどがあり、これは、魔術師と認識されたときに召喚されます。

イスは最初、大剣を構えて振ってみたり、バク転してみたりと、いろいろやっていました。クレアが見ていることに気づき、赤面して、クレアのもとに向かいました。

- - おめでとうございます。これで、晴れて、あなた様は勇者になりました。本当におめでとうございます。

- - ありがとうございます。

- - さて……申しにくいことなのですが、……勇者になると記憶が一つ飛びます。これは、決定事項なので、変更できませんが……。よろしいでしょうか？

- - まあ、仕方ないよね。勇者になるならそれぐらいハンデがないと。

イスは笑っていますが、本当は、少し不安でした。何を忘れたのか、わからないからです。忘れてしまったのですから、それを思い出すことはできません。イスは何を忘れたのか、わからないまま、クレアが、帰るといふことなので、少し寂しいようですが、クレアが、中に浮かんで、上を目指すのを見送りました。

そして、しばらくたったあと、イスは精神世界から、下の世界に戻りました。

part 3 に続く

*** イースの勇者 * part 2 (後書き)**

ふう。疲れたあ。全く、なんで、こんなに疲れるのやら（汗）さあ、さて、どうだったでしょうか？ 至らない点もあると思いますが、それはそれで、感想に書いてくれればなおします。……最近、休みが無くて、辛いですが、頑張ります。みなさんも、熱中症には気を付けてください。では、また会いましょう。さようなら！

第五十話、再開（前書き）

くあらずじく 居なくなったセングクを探すため、最高教主は手掛かりを集めていた。

さがすうちに彼女は怪しい建物を見つけて、中に入った。そして、そこで見たものとは……

第五十話、再開

最高教主 side

……今日もセングクの手掛かり探した。三日前から私は居なくなつたセングクの手掛かりを探している。

私が眠っている時に居なくなつたと考えられることから、誰かが、セングクを見たと思つた。

まず、最初に聞きにいったのは、宿屋の受付員だ。あそこに私が眠つていたので、たぶん、セングクも来たのではないかと、思つた。だが、受付員によると、私が眠っている部屋にはセングクは来なかつたらしい。そこで、私は、言葉がおかしいと気がつき、受付員にさらに聞き出した。なんでも、セングクは、宿屋には来たらしい。だが、すぐに宿屋を出て、どこかへ向かつたらしい。そう、私を置いて。

それいらい、手掛かりは全くなかつた。外ならば、誰か、セングクを見たと思うのだが、返ってくるのは、「見ていない」これだけだ。皆、それを言うときは、酷く怯^{おび}ていた。様子がおかしい。

そう思つた私は、毎日、違う人からセングクのことを聞いている。誰かが、違うことを言ってくれるのを願つて。

いま、私は、宿屋から遠く離れたところにある建物の中にいる。来る途中、嫌な看板があつたが（入るな危険というやつだ）無視して、建物に入った。まず、目に入つたのが、大きなメディーサ（たしか、蛇の魔物だ）の像だつた。ここに住んでいる人は悪趣味だなと、思いつつ、私は、ランプがない、奥へと歩みを進めた。

……暗いな。だが、私は吸血鬼。素直に暗くて目が見えないなどとはざかない。血が滾^{たぎ}るのを感じながら、私は、もう慣れてきた、吸

血鬼になった。本来、吸血鬼族は、最初から吸血鬼だ。だが、特殊な私は、血を見たり、興奮しないと吸血鬼にはなれない。今回、私が行なったのは、憎むべき相手を考えて、怒りで興奮させる。ただ、これは、一時的な怒りなので、すぐに人間にもとに戻ってしまう。常時、吸血鬼になるには、いつも怒りという負の感情を抱かないといけない。もちろん、そんなことは、まだ、できない。もちろんやるつもりはない。

……さて、だいぶ進んだが、まだ、道しか見えないな。……む。あれは……。

目の前に、道ではない何かが見えてきたので、私は、すこし、警戒しつつ、そこへ歩みを進めた。

「……！ これは」

思わず口に出してしまうほど、驚いた物。それは、人が百人、いや、千人ぐらいが通れるほどの横穴だ。

……なぜ、こんなところに巨大な穴があるのだ？ 本来、ここには、壁があつたはずだ。遠くに見える穴の外側には、壁がある。……だとすると、この穴は、何かの力で、開けたということになる。

なぜ、こんな穴をつくる……。なにか目的があつて作ったとは思えない。行ってみるか……。

だが、危険がないとは、到底思えない。下を見る限り、下には底があると思われる。だが、もし、なかったら、上から落とされた食べ物のように、潰れてしまう。……阿保あほが。私は、センゴクを探してたのではないのか？ だったら、危険など二の次。覚悟を決めて、私は、穴に向かって、飛び降りた。

「っ
」

飛び降りた先にあつたのは、骸骨^{がいこつ}だった。鋭利な骨で、少し足を切つてしまった私は、もう切れてしまった吸血鬼化が、血を見たとなんまた始まるのを感じながら、周りを見た。

あるのは、骸骨、骸骨。そして、骸骨。……まさか。

「……やっぱりな。地面は全て骸骨で出来ている」

誰が、壁が全て骸骨で出来ていると思うだろうか？ 分かることはここを作ったのは趣味が悪いやつだと言えることだ。

……さて、向こうに光が見えるな。常人でも、わかるほどの光。よほど強い光じゃないと、あそこまで光はしない。だとすると、外につながっていると思われる。……さて、めばしいものはんあいもな

い。
もう、ここに、もう用はない。出るか。

燦々（さんさん）と降り注ぐ太陽を憎たらしく見たあと、私は、目の前にいる人物に声をかけた。

「センゴク」

少し、怒りに震えながら、声を強めにかけたが、反応がない。聴覚がいい、センゴクならば、ここまで大きい声に、すぐに反応するはずなのだが、反応がない。なぜか、長い刀を持っていないが、そこは気にしない。今は、センゴクをこちらに振り向かせることが先だ。

「センゴク」

センゴクの前に行き、声をかけようとしたとき、私は、言葉を失った。センゴクは、涙を流していたのだ。

あの、センゴクが。涙を流したまま、ずっと、立っている姿を見て、私は、心が痛くなった。

だからか、私は、もう、センゴクに何も声をかけることができなかった。今は、涙が枯れるまで泣けばいい。理由は後で聞く。だから、それまで、私の胸で泣け。そう、センゴクの耳元で、囁くと、センゴクは、糸が切れたように私に倒れ込み、私胸の中で大声で、泣き始めた。

私はただ、センゴクの頭をなでることしかできなかった。

三十分ぐらいたった頃だったか、私は、いつの間にか眠っていたセンゴクを近くにある、ベンチに座らせたあと、色々考えた。

- -あのセンゴクを泣かせたのは、どんな理由なのだろうか？
- -なぜ、こんなところにセンゴクがいるのか？
- -なぜ、長刀を持っていないのか？
- -なぜ、センゴクは居なくなったのか？

いろいろ考えたが、分かることはひとつもない。今は、ただ、センゴクが目覚めますまで、センゴクを見守ればいい。……私も眠るとするかな。ここ最近、眠っていなかったからな。安心したら、睡魔が襲ってきた。……センゴク。また居なくならないよな？ また、黙っていかないでくれよ。私と一緒に、SSSランクの魔物をたおすのдар？ だから、居なくならないでくれよ。

「明日、ちゃんと居なくなった理由を話してくれ。じゃないと、怒るからな」

もう、だめ、だ。眠、い。最高教主トッブリスのとき以来だ。ここまで眠くなつたのは。あの時は、毎日仕事だったから、四日後とかに、睡魔が襲ってきた。今回は、それだ。眠くて仕方がない。

そして、私は、いつの間にか、センゴクの手を握って、眠ってしまった。絶対に、手を離さないと決めて……

side out

?????side

ん、今日はどこを探そうかなあ。残っているのは、ダラバス（魔族の国）とか、ナムダ（エルフの国）なんだけど、あそこは、行けそうにないんだよねえ。海があるという理由もあるけど、あそこは、差別がひどいからね。人間の私が行っただけで殺されそう。うー、ぶるぶる。……最近、旅の途中に、妙に強い魔物とか倒したけど、それぐらいしか、出来事はないし。ん、これからどうしようかなあ。

他に行っていない国に行くのもいいけど、飽きたし。本当にどうしようかなあ。

ん、食べ物巡りとかもいいけど、あれは太るし。魔物を倒すのもいいけど、あれは、骨が折れる。

……そうだ、仲間を探そう。旅を道連れっていうし。……うん。それがいい！ さあ、決めたからには、探さないとなあ、んゝまず、男の子を探そうかな。かわいい子がいいなあ。どこかにいないかなあ。

んゝ ムール（妖精の国）に、いるかもしれないなあ。……よし、行きますか。二回目だけだね。

side out

第五十話、再開（後書き）

更新が結構長く止まってしまい、申し訳ありません。実は、かくかくしかじかで。

え？ わからない？ ……ま、まあ、いいでしょう。さて、今回は、魔物図鑑の三ページ目、鳥類種について書こうと思います。気分を変えて、ね？
では、どうぞ、

名前、クックドゥ

種類、鳥類種

性別、オス、メス

ランク、D

説明

ミルナスタ全土の空で見かける、一般的な魔物。非常に温厚で、人を襲うことはめったにない。温厚だが、ひとたび、怒り出すと、ランクCの傭兵でも倒すことはできない。

これは、身に宿している子を守るために、火事場力を発揮するため、だと、研究のレポートに書かれている。

第五十一話、混沌魔術（前書き）

くあらずじく センゴクは昔の夢を見ていた。思い出したくない過去。だが、理不尽にもセンゴクはそれを夢に見てしまった。そして、夢を見終わったあと、起きるが、やぢ屋に帰るまでの記憶がなくて……

第五十一話、混沌魔術

センゴク side

「お兄ちゃん 抱っこ」

「はは、仕方ないな。秋房は。あきふさほら、これでいいか？」

「うん！」

これは……。夢、か？ ……確か、“星渡り”の日のことだったな。
あの時は、まだ、私は、そこまで強くなかった。強くなれたのは…
…。あの日、私の仲間が殺されてからだ。

「お兄ちゃん。あれ、なに？」

「ん？ ……！？ あれ、は！ っ！？ 逃げろ、秋房！」

だが、あの時、秋房は逃げられずに、目の前に迫った黒い男に驚搦
みにされて、そのまま、握りつぶされた。私が強ければ。私がもつ
と早く気づければ。そう、なんども、思った。だが、時は理不尽に
進む。

秋房を殺した男は、次に、私を無視して、他の子供たちを殺そうと、
村へ向かった。もちろん、私は奴を追いかけた。だが、あまりのプ
レッシャーに、私は、足がすくんで、途中で、止まってしまった。

「くっ、うご、け！」

確か、あの時、私は足を思い切り殴りつけて、動かしたような気がする。
そして、そのあと、私は、黒い男を追いかけた。だが、すで
に遅かった。村の中には、火が放たれていたんだ。

「あ、あ」

呆然^{ぼうぜん}と立ち竦^{すく}んで、呻^{うめ}き声しか出せなかった私は、自分が情けなくなり、涙を流した。だが、涙を流したところで、火は消えない。分かっていたつもりだった。だが、あの時の私はまだ未熟。そんなこと、わかるはずがない。

「なんで、なんで、こんなことに」

燃え盛る火を見て、私は、そう漏らした。分かっているつもりだった。【セントール人】は、忌^いみ嫌われていることを。あまりの強さのせいで、歴史から抹消された種族。恨んでいる種族も少なくない。だから、今回の犯人も恨みを抱えている奴が行なったことだ。あの時はそこまで考えなかったが、今ならわかる。あの炎を放ったのは、【セントール人】に恨みがある者だと。

それにしても……。思い出したくない夢を見るのは、ストレスになるな。早く目が覚めて欲しい。

私は、逃げた。炎からも、あいつらからも。全てから逃げた。これが夢なんじゃないかと、なんとも思った。だけど、これは夢じゃない。本当に起きた出来事なんだ。山を越え、川を越え、私は、【日本】から遠く離れた、国。獣人族の国へとたどり着いた。そこで私は、逃げたことを後悔して、悔やんだ。だが、もう、戻れない。道がわからないのだ。適当に走ったから、道を覚えていない。樹海の森に迷わなかっただけでもラッキーだった。

毎日が苦痛だった。生きていることが苦しかった。けど、死んではいけない。そんな方程式が私のなかでは成り立っていた。これは、キリにたどり着いたとき悩みに悩んで考えたことなのだが、これは、今でも成り立っている。そう、まだ、あいつらが生きていると信じて。

毎日を過ごすうちに私は、ギルドに通い。依頼を貼り付けることを始めた。

傭兵としてではなく。私はクライアント（依頼人）して、ギルドに通っている。気前のいい、ギルドマスターにいろいろ聞いたりして毎日を、あいつらを探すために費やした。

だが、一週間、二週間、三週間経っても、あいつらのことは微塵もわからなかった。

だが、一年ぐらい経った頃、ある手掛かりを見つけた。それは、竜人族の国に黒い炎を操る少年が見つかったというものだった。私は、

それを聞いたとき、すぐさま、トリムに旅立とうとした。
だが、傭兵でもない私には、到底、旅をする金がない。一時は断念しようかと思ったが、ギルドマスターに、「君、傭兵になれば？」という提案により、私は傭兵になることを決めた。

「……はっ!？」

今のは、全て、夢、なのか……。嫌な夢を見たな。ん？ 右手が暖かい。なんだ？

「んゝ やめろ、私の仕事をとるなあ」

……なぜ、この子がこんなところに？ いや、それよりも、なぜ、私はこんなところにいるのだ？

確か、私は、気前のいいご老人の店で、村雨を直してもらったあと、そのまま……。ん？ そのまま、私はどうしたのだ？ ……むう。あれから記憶がない。宿屋に帰ろうとしたのは確かなのだが、そこから思い出せない。なにをしていたんだろうか。……この子がここにいるということは、一緒にいたか、この子が付いてきたということになるが、思い出せない。一体何があったのだ。……ん？ さつきから違和感があると思っていたが、村雨がない。だが、鞘だけはある。……？ 一体私は何をしていたのだ？

疑問に思うことはたくさんあるが、今はとにかく、村へ帰らないと。

「くくく、さあ、仕事を返せ！」

「……はあ。帰るぞ、君」

そういえば、この子の名前をまだ、聞いてなかったな。この子は、私の名前は知っているのに、私は、この子の名前を知らない。今まで、よく、それで通っていたな。はは。……まあ、あとで聞けばいいか。

今はとにかく、帰ることが先だな。

?????side

くくく。今回は成功だ。あの忌々（いまいま）しい【セントール人】を操ることができた。

まだ、未完成だが、この魔術を使えば、あいつを操って、兵器として扱うことさえできる。今回は、あいつの刀を奪ってみたが、もう、これはいらない。捨てるか、売るかするか。……さて、もうすぐ、俺の、相棒が来る。それまで、この部屋でも綺麗にしとくかな。……いや、やめた。そんなこと、俺の性分にあってない。俺は、荒々しい性格なんだ。自分で言うのもなんだがな。……さて、来るまで、この魔術の研究でもするか。失敗すると、命に関わるが、まあ、気にしないでいいだろう。俺が失敗することなど、ありえないのだから。くくく。

「さあて、まずは、このネズミを使って」

「チュウウウウウウー!!!」

「黙れ」

ブシャアアアア

ちつ。思わず、殺しちまったじゃねえか。仕方ねえ。次は、鳴き声

がうるさくない……。って、そんな生物居ねえじゃねえか！ くそつ。だったら。人間でも使うか。

「よお。元気かあ？ これから、お前を実験台にするからなあ。覚悟してろよお」

「んー、んー！？」

やっぱり人間が一番だな。口に物でも詰めればすぐにおとなしくなる。くくく。

「さて、……俺の力よ、さあ、膨らみ、脳を乗っ取れ！」

「んんんん！？？？」

……成功だな。さて、どうするかなあ。まずは、首を360度回してもらうか。

「やれ」

「……………」

メキメキと骨が折れる音がするが、まあ、気にしない。そりゃあ、人間が首を限界を超えて回したら、折れるだろうよ。まあ、どうでもいいが。

さて、次は……。お、ちょうどいい所に相棒が来たな。試してみるか。

「かかれ」

「……………」

「お前……。そんなに、俺の顔が見たいのか？ なら、見せてやるうか？ ほら、ほら！」

やっべ。少しやりすぎた。今回はここまでにしとくか。

「散れ、【混沌】！」

まあ、【混沌魔術】は使えば使っほど強くなるから、もっとつかってもいいが、それをやると、魔術協会に目を付けられかねない。今日はここまでだな。

side out

第五十一話、混沌魔術（後書き）

……すいません。今回はキャラが増えました。本当にすいません。こいつらはずいぶん前から予定していた奴らなので仕方ないですが、前の話で出た、霊は、単に思いつきで書いたやつです。まあ、消すわけにもいかないので、いれませんがねw。

さて、今回は前回に続き、鳥類種の第二段です。さあ、どうぞ。

名前、デラスト

種類、鳥類種

性別、オス、メス

ランク、C

説明

別名、鳴鳥めいちょうと呼ばれる。その理由は、ほかの魔物の鳴き声をまねして、呼ぶことからつけられた。ランクはCだが、強い魔物を呼ぶことが多いので、傭兵ランクCでは、勝てるかわからない。主に、森の中に住んでいることが多いが、たまに、洞窟にすみかを移すことがある。

第五十二話、夢（前書き）

くあらずじく　メルファとともに旅をしたミコトと眠っているミル。
その途中、宿屋があったので三人は休むことにした。そして、一日
が終わる頃、ミコトは夢をみて……

第五十二話、夢

ミコトside

「はあ、はあ。くつ。ミル。リル。みんな……」

俺の周りには、血を流し、倒れている仲間がいる。どれもみんな、俺の大切な家族みたいなものだ。

だから、俺は、こいつらを守る。幸い、まだ息はある。早く医師に見せれば助かるだろう。

……さて。

「ニル！」

「……お前を見ると頭が痛くなる。やはりあの時殺しておくべきだったか……。それに、お前らのせいで我の部下が皆死んだではないか。……まあ、どうでもいいが、駒が減るのはあまり気分が良くない。^{かたき}敵でも取らせてもらおう」

……こいつはニルだ。み間違えるはずがない。だが、今のこいつはどこか違う。なにかに乗っ取られているような感じがする。それに、いまのこいつは、髪の色と瞳の色が違う。ダスティスと同じような色だ。

……おそらく、精霊か何かが乗り移っているんだろうな。……それに、今戦うとしたら、間違いなく、俺は負ける。傷だらけの俺と、無傷のニル。どちらが負けるのは、分かりきっている。……だが、今ここで、俺が逃げれば、この世は、間違いなく滅^{ほろ}される。……それに、今逃げたらこいつらは、死んでしまう。そんなのはゴメンだ。
- - 大事な仲間を殺されるわけにはいかない！

やるしかないんだ。やるしか……

「ほお。そんなにこやつらが大事か……。よからう。殺してやろう」
「！？ させるか！ 求めるは氷雷！ ムデウス！」

氷の最高上級魔法。それが、ムデウス。【勇者】になってから使えるようになった魔法だ。だが、あまりの威力に弱点がある。それは、一度放つたら、術者は、三十秒動けなるというものだ。

「くっ」

「ふむ。やはり【勇者】ということだけはあ。悪魔ですら使えない魔法を使うとはな。……やはりあの時殺しておけばよかったな」

俺の魔術をいとも簡単によけたニルは、そのまま、立っている高台に座った。

「残念だったな。生憎あいにくお前に殺される義理はないんでね。倒させてもらう」

ニルと俺ががしゃべっている間に三十秒たった。動ける。さて、あいつには生半可なまはんかな、魔術は効かない。だとすると残っているのは、やはり、あれか。……だが、あれを使うと俺は闇に染まってしまう。そうすれば、勝てるかもしれないが、そのあと、俺はどうなるのか、わからない……

「何を考えている」

「！？」

な！？ こいつ。一瞬で俺の目前まで来やがった。何を使ったかは知らないが、このままだとまずい。

いくら【勇者】でも、近距離から攻撃されたら、死ぬ。

「ぐ、ああ」

「ふっ、このまま、絞め殺すか」

息が、息ができない。なんて力だ。【勇者】じゃなかったら、とつ
くに首の骨が折れてる。

「が、あ」

「さあ、どうする、このまま死ぬか？ それとも、我の部下になる
か？」

部下、だと？ …… ふざけるな。そんなのになる訳がない。俺は、
俺は、こいつらと一緒にただ、過ごしたいだけだ。だから、襲って
くる奴は迎え撃つ。

「はっ、い、や、だね」

「そうか……。ならば仕方がない。ここで死ぬがよい」

「ぐあ、あああ」

「ぐあああああああ！！！」

……夢、なのか？ 全てが夢、だったのか？ ……はは、嫌な夢を見たな。まさか、ニルが敵なんて、ありえないだろう。……ふう。さて、嫌な夢なんか忘れて、今日はパーっと……。って、俺酒飲めないじゃん。

……はあ。まあ、いいか。さて、外の空気でも吸いに行くか。

んー やっぱ、朝の空気はいい。なんか、こう、スーッとして気持ちがいい。このまま、眠りたいな。

「……………」

あの夢が、正夢まゆめだとしたら、遠くない未来で、俺たちは、ニルと戦うことになるのか。

あまり、よく見えなかったが、あそこには、起きているミルもいた。他には、知らない奴もいたが、まあ、正夢ならいつか会おうんだろ。うな。……さて、そろそろ、もどるか。冷えて風邪ひいたらいけないしな。

考えるのは後だ。

「おい。なんだよこれ」

「ん？ これ？ これはねえ。むふふふ」

「なんだ気持ち悪い。それはいいからその手にある食べ物をごどこで買ったか教えろ」

「うふふ。これはね。さつき、気前のいいお兄さんから貰ったの」

気前のいいお兄さん、ねえ。怪しい男じゃないかよ、それ。……はあ。全く。

「ん？ なに？ その手は？」

「それを返しに行く。ただでもらうわけにはいかないからな」

それに猛反対して、犬のように毛並みを逆立てて、威嚇するメルファ。……はあ。俺がノックもせず、入ったときにやれよ、そういうのは。全く。

なんとか、メルファを納得させて（お話した）食物を全部、どこかにいる怪しい男に届けるため、手にもった俺は、まず、メルファからその男の特徴を聞いた。なんでも、その男は、左頬に×印の傷跡があるらしい。

他には、茶色の髪と茶色い瞳だったことらしい。……はあ。全く。余計なことをしてくれるな。

俺が全部返さなければいけないじゃないかよ。まあ、別に返さなくてもいいが、何となくいやなんだよなあ。

宿屋の受付員に聞いたところ、×印の傷跡がある男は、105号室にいるらしい。ふむ。受付の隣にある部屋だな。受付員から合鍵をもらい、その部屋の鍵穴に突っ込んで開けると、なかからなんとも美味しそうな臭いが漂ってきた。これは……。ミユル（チーズ）の

臭いか？

……だがなぜ、ミユルの臭いが。よく見ると、奥のカーテンの裏に人影が見れてとれた。

「おゝい」

「おゝ 可愛い子ちゃん。僕になんの用だい？」

「この食料を返しに来たんだが」

「ワオ。それはさっき可愛い子犬ちゃんにあげた食料じゃないか。どうして君が？」

んゝ 悪いから返しに来たといえ、なんなく終わる気がするが、それだとなんか嫌な予感がする。

「一緒に食べるかい？」とか。絶対いいそう。それだと困るんだよなあ。もし、食べでもしたら、メルファから何を言われるか。最善の答えを言わないとな。

「……………」

「……………」

「……………あのゝ、実はこの食料、ただでもらうわけにはいけないので、お金を払いに来たのですが」

「んゝ そんなことかい？ それなら、ただでいいよ。可愛い子ちゃんには、ただであげる」

やつぱり、こいつ。俺のことを女と認識してやがる。くっそ。またか。またなのか！ なんて、俺はいつも女に間違われるんだ！ ちくしょう！

「ねえ、一緒に食べるかい？」

げっ。さっき思ってたこと本当にいいやがった。だが、断る！

「いえ、い。まはお腹がすいてないので。では、失礼します」

「あ、かわいい子ちゃん。また来てね」

もう来ねえよ。阿保^{あほ}が。絶対に来ない。俺を女と間違える奴とは絶対に合わない。これ絶対。
さて、そろそろ、旅の仕度をするか。

「あゝ 外はいいわねゝ なんか空気が澄^すんでるといっかなんとい
うか」

お前もわかるか、この気持ちか。……んゝ 気持ちいい。これはい

い。宿もいいが、やっぱり外だな。
さて、食物はあるし、次の目的地、バーム（巨人族の国）に向かうか。あそこは最近魔物に襲撃されたとか聞いたが、今は大丈夫みたいだから心配ない。そこに、あいつらがいるかもしれないのだから、いくしかないよな。

第五十二話、夢（後書き）

今回は世界に五匹しかいないとされている鳥類種の魔物です。ではどうぞ。

名前、ミラージュバード

種類、鳥類種

性別、?????

ランク、SSS

説明

ミルナスタの秘境にすみかを持つ、魔物。ランクに恥じない力と圧倒的な大きさで、敵を魅了する。だが、名前のとおり、この魔物は見えない。なので、風魔術でないと、見つけることができない。別名、不可視の鳥。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1310t/>

邪神を宿す男

2011年9月22日01時39分発行